# いわてのお寺さん

## 北上・花巻とその周辺

# 発刊にあたって

株式会社　テレビ岩手
代表取締役社長　中野士朗

「お寺さ～ん　何となく懐しい響きですね。お寺の庭を遊び回った幼いころ……大方の人が、こんな思い出をお持ちではないでしょうか。」

今から二十七年前出版した『いわてのお寺さん』の「あとがき」です。

今ではどうでしょう。お寺の風景も世につれ、随分とうつろいでしまいました。

そういえば、めっきり子どもの姿が消えてしまいました。

お寺からも、門前からも、街角からも……代りに肩をすぼめた彷徨(さまよ)びとの影が、境内に見られるようになりました。

遊びのお寺から、学びの寺。そして今、癒(いや)しの寺。

杉木立に蝉時雨、時のたっぷりしみ込んだ境内は黄昏の瞑想をゆっくり、ゆっくり解きほぐしてくれます。

癒しの時代は、お寺さん出番の時代であります。

〝花は無心にして蝶を招き、蝶は無心にして花尋ぬ〟は、良寛の言葉です。

この言葉を噛みしめながら、遠き故郷のお寺を、今しみじみと懐かしんでおります。

普段何気なく通り過ぎているお寺でも、足を踏み入れると、それぞれに歴史があり、由緒があり、様々な人間模様があります。

若い人たちがこの本を手に、寺町界隈を訪ね歩く光景を思い浮かべ、二十七年ぶりに最新版を出版することにしました。

この一冊が、みなさまにとって新しい発見や出逢いとなりますようう願っております。

平成十五年三月

# いわてのお寺さん〈北上・花巻とその周辺〉もくじ


■発刊にあたって……2

■寺院の歴史……9
極楽寺文化とゆかりの古代寺院……10
修験宗の名残り今に伝える寺院……14
聖塚の発見と一遍ゆかりの寺院……18
和賀氏と家臣ゆかりの中世寺院……22
稗貫氏と家臣ゆかりの中世寺院……28
南部氏と家臣ゆかりの近世寺院……32
布教の行脚で定着の浄土系寺院……36
近隣の住職が開山した禅系寺院……40
小領主や町人寄進開基した寺院……44
大正時代以降新願に開山の寺院……48

■寺院の紹介……51
［北上市］二九ヵ寺
正覚院（しょうかくいん）……54
萬福寺（まんぷくじ）……56
光明院（こうみょういん）……58
歓喜院（かんぎいん）……60
如意輪寺（にょいりんじ）……62
安楽寺（あんらくじ）……64
極楽寺（ごくらくじ）……66
遍照寺（へんじょうじ）……68
正行寺（しょうぎょうじ）……70
光林寺（こうりんじ）……72
西念寺（さいねんじ）……74
通来寺（つうらいじ）……76
選択寺（せんじゃくじ）……78
洞泉寺（どうせんじ）……80
宗賢寺（そうけんじ）……82
宝積寺（ほうしゃくじ）……84
萬蔵寺（ばんぞうじ）……86
妙桃寺（みょうとうじ）……88
正覚寺（しょうかくじ）……90
正蔵寺（しょうぞうじ）……92
永明寺（ようめいじ）……94
染黒寺（ぜんこくじ）……96
永昌寺（えいしょうじ）……98
称名寺（しょうみょうじ）……100

正洞寺（しょうどうじ）……102
泉徳寺（せんとくじ）……104
慶昌寺（けいしょうじ）……106
全明寺（ぜんみょうじ）……108
妙宗寺（みょうしゅうじ）……110
【東和町】一三ヵ寺
毘沙門堂（びしゃもんどう）……112
真行寺（しんぎょうじ）……114
信泉寺（しんせんじ）……116
成沢寺（じょうたくじ）……118
浄珠院（じょうしゅいん）……120
浄光寺（じょうこうじ）……122
福蔵寺（ふくぞうじ）……124
常泉寺（じょうせんじ）……126
凌雲寺（りょううんじ）……128
興禅院（こうぜんいん）……130
瀧沢寺（りゅうたくじ）……132
本妙寺（ほんみょうじ）……134
実成寺（じつじょうじ）……136
【湯田町】一ヵ寺
南昌寺（なんしょうじ）……138
【沢内村】三ヵ寺
浄円寺（じょうえんじ）……140
碧祥寺（へきしょうじ）……142
玉泉寺（ぎょくせんじ）……144
【花巻市】三一ヵ寺
清水寺（きよみずでら）……146
延命寺（えんめいじ）……148
遍照院（へんじょういん）……150
不動寺（ふどうじ）……152
自性院（じしょういん）……154
松庵寺（しょうあんじ）……156
広隆寺（こうりゅうじ）……158
勝行院（しょうぎょういん）……160
光徳寺（こうとくじ）……162
専念寺（せんねんじ）……164
延妙寺（えんみょうじ）……166
順覚寺（じゅんかくじ）……168
円徳寺（えんとくじ）……170
妙円寺（みょうえんじ）……172
安浄寺（あんじょうじ）……174
常楽寺（じょうらくじ）……176
長久寺（ちょうきゅうじ）……178
将軍寺（しょうぐんじ）……180
東光寺（とうこうじ）……182
昌欲寺（しょうかんじ）……184
地蔵寺（じぞうじ）……186
円城寺（えんじょうじ）……188

瑞興寺（ずいこうじ）……190
宗清寺（そうせいじ）……192
円通寺（えんつうじ）……194
雄山寺（ゆうざんじ）……196
歓喜寺（かんきじ）……198
松山寺（しょうざんじ）……200
宝昌寺（ほうしょうじ）……202
身照寺（しんしょうじ）……204
法王寺（ほうおうじ）……206
［石島谷町］一三ヵ寺
長谷寺（ちょうこくじ）……208
松林寺（しょうりんじ）……210
光勝寺（こうしょうじ）……212
島谷寺（ちょうこくじ）……214
長澤寺（ちょうぜんじ）……216
観音寺（かんのんじ）……218
長楽寺（ちょうらくじ）……220
正法寺（しょうぼうじ）……222
光林寺（こうりんじ）……224
超勝院（ちょうしょういん）……226
広済寺（こうさいじ）……228
大興寺（だいこうじ）……230
金剛寺（こんごうじ）……232
新仙寺（しんせんじ）……234
［大迫町］七ヵ寺
法寿院（ほうじゅいん）……236
到岸寺（とうがんじ）……238
妙琳寺（みょうりんじ）……240
浄円寺（じょうえんじ）……242
宗通寺（そうつうじ）……244
中興寺（ちゅうこうじ）……246
桂林寺（けいりんじ）……248
■寺院に伝わる伝説・文芸……251
■寺院が守る芸能・人材……263
■寺院に残る巨木・名木……273
■寺院に伝承の有形文化財……283
■観音様巡り……293
奥羽三十三所観音霊場……294
当国三十三所観音霊場……296
江刺三十三所観音霊場……297
☆仏様さまざま①②③④……47　50　227　250
☆編集を終えて……298
☆参考図書……299

題字揮毫　中野　十朗
装　幀　臼澤　秀世

# 宗門・宗派別寺院の目次


【天台系寺院】

▼天台宗
歓喜院（北上市）……60

▼天台寺門宗
清水寺（花巻市）……146
長谷寺（石鳥谷町）……208
松林寺（石鳥谷町）……210

▼本山修験宗
正覚院（北上市）……54
萬福寺（北上市）……56
光明院（北上市）……58
延命寺（花巻市）……148
法寿院（大迫町）……236

【真言系寺院】

▼真言宗醍醐派
毘沙門堂（東和町）……112

▼真言宗国分寺派
遍照院（花巻市）……150

▼真言宗智山派
如意輪寺（北上市）……62
安楽寺（北上市）……64
薬楽寺（北上市）……66
不動寺（花巻市）……152
自性院（花巻市）……154

▼真言宗豊山派
遍照寺（北上市）……68
光勝寺（石鳥谷町）……212

【浄土系寺院】

▼浄土宗
正行寺（北上市）……70
松庵寺（花巻市）……156
広隆寺（花巻市）……158
勝行院（花巻市）……160
鳥谷寺（石鳥谷町）……214
到彼寺（大迫町）……238

▼浄土真宗本願寺派
光林寺（北上市）……72
浄円寺（沢内村）……140
光徳寺（花巻市）……162
専念寺（花巻市）……164
延妙寺（花巻市）……166

▼真宗大谷派
西念寺（北上市）……74
通来寺（北上市）……76
真行寺（東和町）……114
信泉寺（東和町）……116
碧祥寺（沢内村）……142
順覚寺（花巻市）……168
円徳寺（花巻市）……170
妙円寺（花巻市）……172
安浄寺（花巻市）……174
長善寺（石鳥谷町）……216
観音寺（石鳥谷町）……218
長楽寺（石鳥谷町）……220

正法寺（石鳥谷町）……222
妙泉寺（大迫町）……240
浄円寺（大迫町）……242
宗通寺（大迫町）……244

▼真宗高田派
選択寺（北上市）……78

▼時宗
成沢寺（東和町）……118
常楽寺（花巻市）……176
光林寺（石鳥谷町）……224

【禅系寺院】

▼臨済宗妙心寺派
洞泉寺（北上市）……80
長久寺（花巻市）……178

▼曹洞宗
宗賢寺（北上市）……82
宝積寺（北上市）……84
萬歳寺（北上市）……86
妙桃寺（北上市）……88
正覚寺（北上市）……90
正蔵寺（北上市）……92
永明寺（北上市）……94
栄昌寺（北上市）……96
永昌寺（北上市）……98
称名寺（北上市）……100
正洞寺（北上市）……102
泉徳寺（北上市）……104
慶昌寺（北上市）……106
全明寺（北上市）……108
浄珠院（東和町）……120
浄光寺（東和町）……122
福蔵寺（東和町）……124
常泉寺（東和町）……126
凌雲寺（東和町）……128
興禅院（東和町）……130
瀧沢寺（東和町）……132
南昌寺（湯田町）……138
玉泉寺（沢内村）……141
将軍寺（花巻市）……180
東光寺（花巻市）……182
昌歓寺（花巻市）……184
地蔵寺（花巻市）……186
円城寺（花巻市）……188
瑞興寺（花巻市）……190
宗青寺（花巻市）……192
円通寺（花巻市）……194
雄山寺（花巻市）……196
歓喜寺（花巻市）……198
松山寺（花巻市）……200
宝昌寺（花巻市）……202
広済寺（石鳥谷町）……228
大興寺（石鳥谷町）……230
金剛寺（石鳥谷町）……232
新仙寺（石鳥谷町）……234
中興寺（大迫町）……246
桂林寺（大迫町）……248

【日蓮系寺院】

▼日蓮宗
本妙寺（東和町）……134
実成寺（東和町）……136
身照寺（花巻市）……204

▼日蓮正宗
法王寺（花巻市）……206

▼法華経信行会
妙宗寺（北上市）……110

# 北上・花巻地方の寺院の歴史

北上・花巻地方に、何時仏教が伝えられたのか、それは定かではありません。八世紀から九世紀にかけて、大和朝廷による蝦夷地の支配が進み、坂上田村麻呂が延暦二十一年（八〇二）に胆沢城を築き、併せて民心安定のために各地に寺院を建てたのが初めてではないかと考えられています。この地方で最古の仏像を持つ水沢市の黒石寺には、本尊薬師如来の胎内銘に貞観四年（八六二）とあります。

今回の寺院調査では、最も古い寺院は北上市の極楽寺で嘉祥二年（八五〇）慈覚大師円仁の開山とあります。これと同じ開山伝説を持つ寺は、北上市の萬蔵寺・正覚寺・染黒寺です。また花巻市の自性院には貞観二年（八六〇）に真言の行人運了が開山したと伝承があります。以来この地域には山岳信仰の修験宗が広まり、その後源氏の御家人和賀氏や稗貫氏の支配が確立、各地に寺院が数多く建てられました。そして南部氏の領地となり、花巻城を核として各宗門各宗派の寺院が、それぞれの地で活躍することになります。

これら全寺院を極楽寺・修験宗・聖塚・和賀氏・稗貫氏・南部氏など歴史的に十項目に区分してまとめてみました。

# 極楽寺文化とゆかりの古代寺院

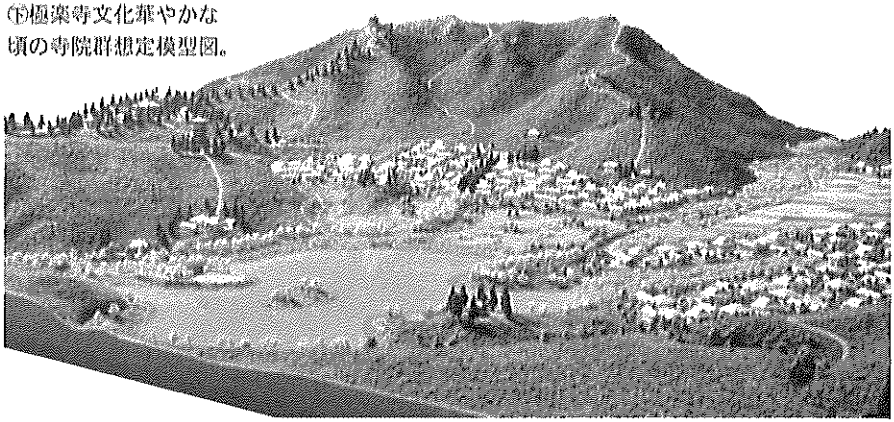
## 岩手県内最古の極楽寺
## 二百余年前と同じ情景

北上・花巻地方で最も古い寺院、というより岩手県内最古のお寺が北上市の極楽寺（66頁）です。もとより現在の本堂は昭和五五年（一九八〇）に、司東真雄前住職によって真言宗寺院として再興されましたが、開山の歴史は古く九世紀半ばに遡ります。

江戸時代の民俗学者菅江真澄が、天明八年（一七八八）に極楽寺を祀る国見山に登り、その見聞記を『委波低廼夜麻』に書いています。

「国見山極楽寺の前を左に杉の茂るけわしい山道を登り、胎内潜りという岩の下をかがんで通った。岩の上は円仁大師（慈覚大師）が護摩や読経したので座禅石という。（中略）横たわっている梯子を登ると、そびえ立つ岩の上に、柱をつき立てた二間四面の堂がある。高々と北上川に臨んで作ってあるので、生い茂った大きな柱などの梢に立ったようで誠に危なげである。安置されている観世音は円仁が作られたもので、ここの国の人はたいそう崇めまつっている。（後略）」

今から二二五年前の記録とほぼ同じ情景が現在も残っています。ただ残念なことに、この紀行文にある二間四面のお堂は野火で焼失、現在はコンクリート製の展望台に代わりました。この



(下)極楽寺文化華やかな頃の寺院群想定模型図。

山頂にあったお堂は、天台宗の高僧慈覚大師が建てた大悲閣で、十一面観音を祀ったと伝えています。

山頂から一望する内門岡集落は、四方を山に囲まれその中に三六の堂塔をはじめ東谷四百坊、西谷三百坊という大霊場が営まれていました。それは恰も蓮華の花に囲まれていたようだったと伝えています。

「北は口吸森、西は三錦ヶ岳、男岡女岡、牛王坂（岩脇山）、宝塔山には八幡社・大日堂があり、南には高森山の社がある。東に釈迦堂、その南に毘沙門天、岩入り観音、別れ山、屏風岩、どっこ水などあり…（後略）」

当時の村人が詩らしげに菅江に語ったといわれます。江戸時代の記録の風景は、現在でも殆どそのまま残っているのです。そして発掘調査が進んで堂宇の所在が判明した分、この記述が現実味を増してきました。

第一次発掘調査が行われたのが昭和三八年（一九六三）で、その後同三九年、四〇年と延べ五年間にわたって調査が行われた結果、宝塔山に五重塔跡、極楽寺山に方三間堂跡、そのほか伝釈迦堂跡、七間堂跡など六棟の堂跡を発掘し礎石を確認しています。

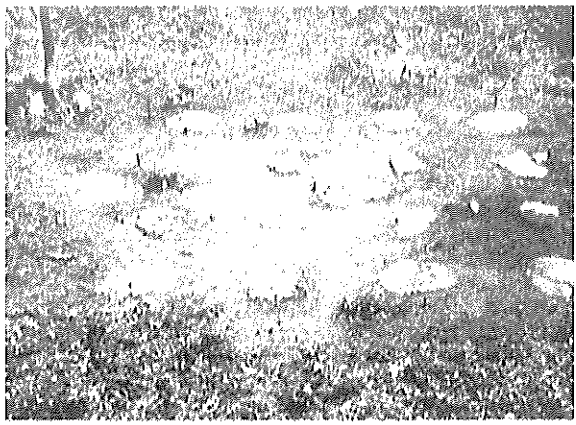
また最近では、さらに時代の古さを求めて発掘地の掘り下げを行った結果、より古い堂跡を発見するなどの成果をあげています。

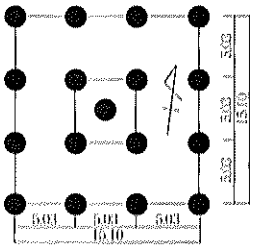
## 発掘成果と歴史の検証
## 平安初期の準国営の寺

このような発掘成果によって、極楽寺の全容が次第に明らかにされていますが、この古代寺院が果たして歴史書に記録が残る、国営に準ずる寺である「定額寺」であったかどうか、それが未だ結論が出ていないために、国の文化財への指定はお預けの状態です。

極楽寺の前住職司東真雄和尚は、歴史家としても知られ、この周辺から数

㊨現在までに六棟の塔跡を発掘した。そのうち五重塔跡。






塔跡模式図（単位現尺）

多くの歴史遺産を発掘しました。

この極楽寺跡についても、古代の歴史書である『文徳実録』に記録されている『陸奥国極楽寺』の最有力の擬定地と『岩手史学研究』第一号（昭和二…年九月）に発表しています。

その理由として五点を上げています。

、、ここは胆沢鎮守府の鬼門に当たり当時の国道『東海道』筋に当たっていた。佐倉河の八幡宮（水沢市）に残っている古地図にも国見山が示され、鬼門に当たる。平安期の王城鎮護の思想の中に鬼門へ神仏を祈る思想があった。

、、縁起に『鎮居寺』の文字がある。これはジョウカクジと読み、定額寺の音仮借字を用いた文字である。

、、『文徳実録』と『類聚国史』の天安元年六月の条に『陸奥国に在る極楽寺を定額寺とし、油燈分並びに修理料として稲田十町千束を給す』の文があるが、当時の陸奥国鎮守府の中に、平安期の遺構を持つ極楽寺の名のある寺院は、この寺以外には全く見あたらない。

四、国見山周辺から発掘された屋根瓦の破片は、多賀城、国分寺、胆沢城と同じ蓮弁くずれの平安初期のものに間違いなく、ほかに開元通宝や当時のものと思われる大釘などが出土している。

五、地方の伝説として、西行法師の巡拝が伝わっている。

西行法師は中尊寺や円隆寺（毛越寺金堂）より古い格式の名刹であった極楽寺へ参拝したことは、容易に考えられることである。

以上のように五点をあげて、極楽寺を平安初期の定額寺に擬定するという論文を司東住職は終戦直後に発表して話題を広げました。その後の発掘が進んで次々とその事実を裏付ける礎石や遺物が発掘され、現在ではそれを支持する意見が多くなっています。

かつて天台宗寺院を示す染黒寺古卒塔婆。

本山修験宗　萬福寺
真言宗醍醐派　毘沙門堂
真言宗智山派　如意輪寺
真言宗智山派　安楽寺
真言宗智山派　極楽寺
真言宗智山派　自性院
真言宗豊山派　光勝寺
曹洞宗　萬蔵寺
曹洞宗　正覚寺
曹洞宗　染黒寺

## 時代の流れに翻弄の寺
## 繁栄語る数々の堂塔跡

当時の極楽寺の寺域は広く、この地方の拠点的な大寺でしたが、それが次第に荒廃し、特に慶長二（一六〇三）の野火によって多くの堂舎を焼失し、仙台藩の伊達氏の援助にもかかわらず復興できなかったと伝えられています。そのために、かつての学頭坊が国見山極楽寺、仁之坊が岩谷山如意輪寺、上台坊が上台山安楽寺となり、一山は三寺に分割されて、天台僧が経営する寺院から真言宗寺院に変わりました。一方、明治初年の神仏分離令によって国見山山頂の大悲閣は三峰神社、山麓の毘沙門堂は吹越神社と改められ、また大正七年（一九一八）には両社合わせて国見山神社となり現在に至っています。国見山神社山道に仙台・代藩主忠宗が植栽したと伝える樹齢三百年以上の杉並木は、戦時中の供木により十数本残すのみとなっています。

現在の極楽寺（66頁）は、明治二九年（一八九六）の大野火で全滅。八十四年後に本堂が再建されています。また安楽寺（64頁）は承久の変で敗れて流罪となった河野通信が預けられた寺です。如意輪寺（62頁）は仙台藩の家臣中目候の菩提寺となり、また明治時代には釈迦堂にあった釈迦一尊が移されています。山麓の立花にある萬福寺（56頁）は廃仏毀釈の嵐を神社に名称を変えて逃れ古仏を残しましたが、古くは極楽寺の北谷を守る寺院でした。

慈覚大師開基の伝説を持つ古代寺院は、極楽寺のほかに北上市には萬蔵寺（86頁）、正覚寺（90頁）、染黒寺（96頁）があり、東和町には成島毘沙門堂（112頁）、石鳥谷町の光勝寺（212頁）がそれで、それぞれ地域で最古の開山の寺院です。花巻市では九世紀後半に、真言宗の僧侶が開基したと伝える自性院（151頁）が最も古い寺院です。

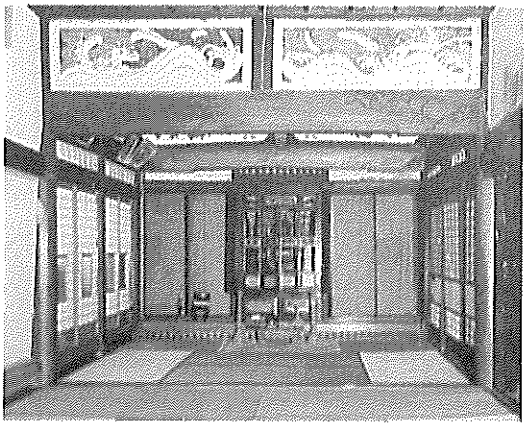
# 修験宗の名残り
# 今に伝える寺院

## 山岳信仰と密教が合体
## 里修験者が布教を拡大

修験道とは、日本古来の山岳信仰と真言・天台の密教とが結合した宗教といわれています。その修験者（山伏）は呪術や祈祷をもって人々と深く接してきました。従ってその根底には日本民族の山岳崇拝があり、その起源は山神の霊媒者達と山岳で呪術的修法を行った仏教徒との交流にあると考えられています。開祖が大和（奈良県）葛城山の役行者（役小角）といわれます。

平安時代の密教は、奈良仏教に批判的で、山岳に寺院を構えて修業の意義を解きました。山岳修法者もこれらの寺院に寄宿するようになりますが、得度（正式の僧になる）できず、半僧半俗の姿で僧侶の奉仕者として位置づけられました。やがてこれら修験者の集団が形成され、天台宗系では京都の聖護院を根拠とする本山派、また真言宗系では醍醐寺の三宝院を根拠に集結する当山派が生まれます。また別派として九州で勢力を振ったのが英彦山の彦山派、東北では出羽三山に拠る羽黒派がありました。

このように修験道は、原始的な山岳信仰と仏教、中でも密教が基調をなし神道の要素と呪術の発達した陰陽道の要素を取り入れた仏教的な宗教として発展しました。



㊨山伏が修行を積んだ修験道場北上市の多聞院伊沢家住宅が平成２年に国の重要文化財に指定。㊧内部には社寺特有の虹梁や円柱などがある。

山伏の法印は山岳のみに留まらず、世俗の世界、里人と山岳との仲介者としての役割を担うことになり、中世には熊野三山参詣の先達（道案内人）などとして活躍し、江戸時代には多くの山伏が村々に定着しました。

里に住みついた修験者を里修験と呼び、村々の社堂の別当となり道場を持って祈祷を行うほか、村の有識者として相談役となり、寺子屋を開き、神楽など芸能を伝承。また病気治療、安産、火伏せ、雨乞いなど、社会的にも文化的にも大きな影響を与えました。

## 南部藩内支配の白光坊

### 一明院が花北を纏める

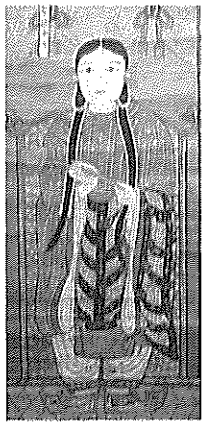
このように江戸時代に各地に定着した修験道は、南部藩の場合は本山派と羽黒派が勢力を占め、領内の山伏数は天和三年（一六八三）七九七人、元文四年（一七三九）八九六人、享和三年（一八〇三）八八七人です。当時の村数平均では、一ヵ村当たりほぼ一・四人の山伏がいたことになります。

これらの藩内修験者を統轄したのが盛岡の一方北白光坊でした。白光坊は巌鷲山大権現、神明宮の別当として、百石を給され、本山派修験寺院五三の末院をもち、三四の羽黒派修験を支配していました。この修験総録としての白光坊の下に、各地域ごとに「年行事」という役職を置き、その数は十人でした。和賀・稗貫両郡の年行事には、花巻の一明院が当たりました。

一明院は花巻城内三社（弁財天・稲荷社・八幡宮）の別当金剛院の子孫の一明快尊が、京都の本山若王寺門主から賜わった称号で、一明院のあった場所は現在の花巻市吹張町の西裏附近と考えられています。

年行事職の権限は大きく、霞（修験者が支配する地域）場の配分、僧籍の認可など、配下の修験者の経済基盤はもとより人事権も掌握していました。

㈲羽黒派の北上市薬王院に伝承の孝養太子画像。㈱神楽面の数々。



㈱東北を中心に普及した修験道羽黒派を開いた能除大師の尊像。

そのために年行事と配下の修験寺院とのいざこざも多く発生しています。元禄・四年（一七〇一）には和賀郡山口村（現北上市）和光院との間で、霞場を巡って争論が起き、翌年和光院は追放、一明院は年行事の職を解かれます。そして清水寺（146頁）一〇世道安秀元が一明院大法院として年行事職を引き継ぎました。

以来明和年間（一七六四～七二）清水寺一三世海運まで四代にわたり一明院大法院は続きますが、その後年行事職を返上。再び金剛院系の一明院に年行事職が引き継がれます。ところが嘉永五年（一八五二）再び一明院排斥事件が起こり四年にわたり争われます。

その結果、訴えられた金剛院系一明院は年行事取り上げ蟄居、また本山岩手寺まで直訴を行った万法院（現花巻市）は青森県脇野沢村へ重追放、和光院・成就院（現北上市）は野田村と青森県むつ市へ遠追放、教法院（現花巻市）は宮古市へ中追放されました。

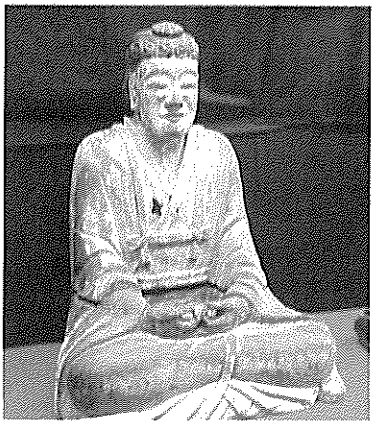
その後、和賀・稗貫両郡には年行事職は置かず、盛岡の自光坊が直接支配して明治維新を迎えました。

なお、伊達藩では領内を本山派が二分し、北半部は末院約七百という良覚院が総括しています。

## 明治政府が修験宗廃止
## 神職転向や還俗し帰農

明治維新は修験道にとって大きな転換期となります。それは日本の神々は仏教の仏や菩薩が姿を変えて現われたとする神仏習合・本地垂迹説が、天皇を天照皇大神の子孫とし、神の権威で権力の確立を図ろうとする新政府にとって相容れない思想でした。そのために新政府は「神仏分離」を強行、明治五年（一八七二）九月、修験宗は廃止されることになりました。

修験者は境内などにあった神社を興して神職に転向したり、あるいは還俗



㉖北上・花巻地方を席巻した修験道は、本山派が最も多い。北上市の伍大院開基像。

天台寺門宗　清水寺
天台寺門宗　長谷寺
天台寺門宗　松林寺
本山修験宗　正覚院
本山修験宗　光明院
本山修験宗　延命寺
本山修験宗　法寿院

して帰農した者もいました。還俗しない者は天台宗か真言宗のいずれかに帰属させられることになったのです。

## 殆どが神社として再生
## 一部が密教寺院に復帰

坂上田村麻呂開山と伝える清水寺は天台寺門宗として法灯を守りました。また清水寺より早く開山した石鳥谷町長谷寺（208頁）の場合、一時廃寺となり、境内には来斗利沢神社が建てられましたが、寺院復興の気運強く、胆丹村（現釜石市）の廃寺同様の寺の寺籍を移転して改名し、天台寺門宗として復興しています。

九世紀後半に創建された修験道寺院に石鳥谷町松林寺（210頁）があり、現在は子安地蔵尊として信仰を集めています。仏像や古文書など文化財が数多く、かつては境内地が東西九百m、南北五四〇mで附属する寺院や坊舎が数多く建っていたといいます。

七世紀前後、和賀・稗貫地方における里修験者の活躍はすばらしく、最盛期には九十ヵ寺を超える法院が営まれていました。最も多いのは本山派で羽黒派がそれに次ぎ、当山派は数寺あったに過ぎません。

しかし明治の修験宗の廃止で、殆どが神社として再生し、あるいは還俗して、ひっそりと社堂や文化財を守ってきた法院もありました。

戦後の修験道復活で、本山修験宗として再出発したのは大道町法寿院（236頁）、北上市の光明院（58頁）と正覚院（54頁）、それに花巻市延命寺（148頁）があります。それぞれ祈願寺として細々と営まれているのが実状です。

なお戦後法院として復活しないものの羽黒派修験資料が数多く残している北上市多門院は国指定文化財となり、また藤王院には県指定の画像一幅など数多くの資料、本山派だった伍大院にも仏像や文書が保存されています。

# 聖塚の発見と一遍ゆかりの寺院

## 北上市で発見した聖塚
## 時宗開祖一遍祖父の墓

北上市稲瀬町に「聖塚」と呼ぶ岩手県指定史跡があります。これは承久の変に敗れ、流刑され悲運の生涯を遂げた水軍の将河野通信の墳墓で、時宗の開祖一遍上人の祖父にあたります。

この墳墓が発見されたのは新しく、昭和四〇年（一九六五）のことです。当時真言宗智山派安楽寺住職で歴史家の司東真雄和尚が、二十数年来探し求めていた墳墓を偶然にも自分の寺有地内で発見したのでした。

「聖塚」の名称は、集落の人達は誰でも知っていました。またそこに至る道を「聖道」と呼び、近くには「聖沢溜池」「聖沢田」、の名称も残っていましたが、墓地を確定するまでには至っていませんでした。ところが周辺の開田事業による耕地整理により、山林の緊急伐採が行われたところ、濠を巡らした土円丁塚が現われました。

これが、国宝の「一遍聖絵」に描かれている風景と一致し、河野通信の墓と特定されました。「聖塚」の名称は、一遍上人以来時宗の数多くの聖達がこの地を訪れお参りしていたため、墓地に至る道を「聖道」と呼ぶなど名付けられたものと考えられています。

また北上市安楽寺（61頁）に保存されている寛文一〇年（一六七〇）銘の

㊦聖塚は上円下方墳で、下方の一辺が十㍍。時宗の開祖一遍上人がこの墳墓で供養を行ったのは、今から七百余年前の初冬のことである。一面に覆われたススキを刈り、二一人の時衆により追善供養する。その時の念仏ススキ念仏を平成2年に再現している。

鰐口に『隠岐院観世音別当安楽寺』とあるのも、隠岐に流された後鳥羽上皇を慕う河野通信の信仰を示すものであり、聖塚発見の手掛りとなりました。

この場所探しの基本となった『一遍聖絵』は、一遍上人の一番弟子である弟の聖戒が撰述し、正安元年（一二九九）一遍没後十年の祥月命日に完成した絵巻物です。絵師は法眼円伊で、自然風景描写にすぐれた絵師でした。

## 敗者通信が江刺に流刑
## 縁の地に時宗寺院開山

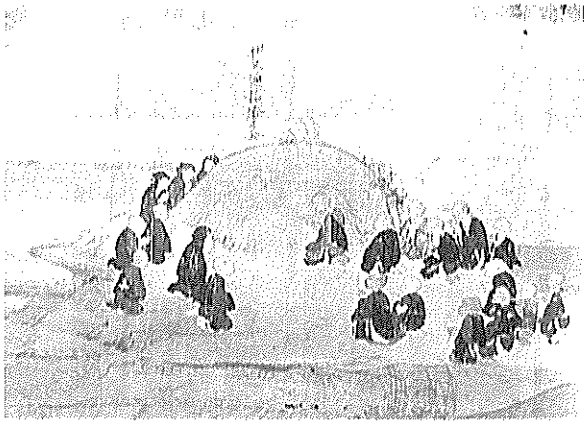
一遍の先祖河野氏は伊豫国（愛媛県）を中心に活躍した中世の豪族で、源頼朝の挙兵に呼応し平家と戦い数々の戦果を上げています。中でも河野水軍の活躍は有名で全国に知られました。

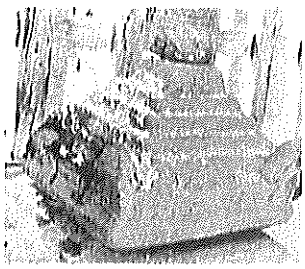
しかし河野一族の運命を一転させたのは承久の変でした。この戦いに河野一族は上皇方と幕府方に分かれて戦いました。河野氏の総師通信は、その子通政や通末と共に上皇方として戦い、敗れて所領の殆どを没収され流刑や幽閉に処せられました。

しかし通信の第二夫人北条政子の妹谷の子である通久は、幕府方について戦いました。その戦功によって伊豫国を与えられ、かろうじて河野一族の命脈を保つことができます。その後代の河野通有は、弘安の役で蒙古軍を破ったことは歴史上に有名です。

承久の変の敗者河野通信は奥州江刺の地に流刑されました。それが極楽寺（66頁）であり、その墓地が「聖塚」と呼ばれていたのでした。一方、通信の庶子通俊やその子通重は、承久の変に直接関係なしというので、改めて幕府から領地を安堵されています。

一遍上人は幼名を松寿丸といい、父の命により一二歳で出家しています。父の通広も承久の変のときには出家していて、難を逃れたのではないかと考えられています。





㈰一遍の一番弟子聖戒が撰述した『一遍上人絵伝』第5巻第3段に描かれている聖塚。
㈫光林寺にある寺林城主河野通重の墓は、県内最古の墓。

北国の地頭河野通重と南の修行僧・遍は奇しくも永久の変を逃れた従兄弟同士だったわけでした。

## 時宗の教えは踊り念仏 ススキ念仏を創始する

比叡山で天台宗を学び、筑前国（福岡県）大宰府において聖達の門下生として十二年間修行した・遍は、身命を山野に捨て居住を風雲にまかせて、できるだけ多くの人々に仏道修行の縁を結ぶために旅に出たのでした。

そのとき、遍二八歳、以来十六年間西は九州大隅半島・壱岐・対馬や四国各地を巡り、また東北地方は祖父河野通信の墓を祀る江刺郡まで足をのばしました。・遍の信仰の境地は、ひたすら六字名号を唱えることで往生できるという他力易行の教えで、庶民階級に歓迎されました。しかもその念仏は、

跳ねば跳ね　踊らば踊れ　春駒の
法の道をば　知る人ぞ知る

という歌にあるように、市聖空也上人を先師と仰ぐ、踊躍歓喜の念仏であったから、その狂騒的・恍惚的興奮は下層民たちにとくに喜ばれたといいます。

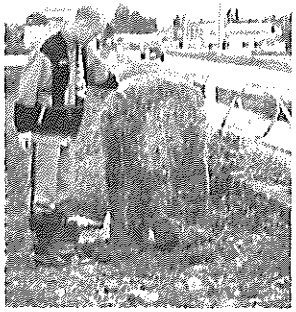
いわゆる六時念仏衆＝時衆＝と呼ばれる庶民グループができ、その熱烈な信仰基盤の上に立って、建治元年（一二七五）時衆（時宗と呼ぶのは室町以降）が創始されました。

・遍が祖父の墓地に詣でたのはその五年後のことです。・遍以下一二名が円堤を回んでひたすら念仏を唱えましたが、それが時宗の二大念仏の一つといわれる「ススキ念仏」です。

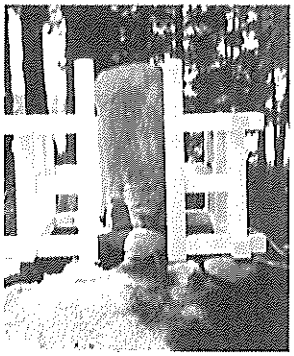
弘安二年（一二七九）初冬、・遍四二歳のときで、駱るにまかせた原野を切り払い、枯れたススキのなびく円い墳墓を巡って祖霊鎮魂の供養を行ったのでした。その時詠んだ歌に、

はかなしな　しばし屍の朽ちぬほど
野原の土はよそに見えけり

これまでは、野原の土はよそごとに見



㊦歴代遊行上人が歩いた道筋には時宗供養碑が建てている。



㊤遊行七代託何上人が入寂した跡に祀る北上市の上人塚。

真言宗智山派　安楽寺
真言宗智山派　極楽寺
時宗　成沢寺
時宗　常楽寺
時宗　光林寺

ていたと述懐し、ここにきて初めて何も思うことはなくなったと、捨て聖の心境を語ったのでした。

## 河野一族開基の光林寺
## 歴代遊行聖が奥州巡錫

祖父の墓に供養の回向をした翌年、一遍はすでに帰依して一遍に随行していた順道（石島谷寺林城主の次男河野通次）の里に向い、城主河野通重の念仏堂通覚院で別時念仏を行い越年しました。そして城主もその妻も一遍の教えに帰依し、順道が開基となって光林寺（221頁）を建てました。

光林寺を後にした一遍十人一行は、江刺から一関、薄衣を経て北上川に沿い多賀城を目指し南へ向ったと考えられています。その道筋には記念の石塔婆が、遊行一代となる遍阿弥陀仏真教上人によって建てられています。

岩手県内には現在時宗寺院が十ヵ寺ありますが、その殆どが一遍の遊行の道筋にあるのもうなづけます。光林寺に次いで、その二十二年後の乾元元年（一三〇二）に花巻市の常楽寺（176頁）が稗貫氏の重臣根子和泉守によって開山しました。またその約百年後の応永七年（一四〇〇）に開山したのが、東和町の成沢寺（188頁）です。

時宗本山清浄光寺を相模国藤沢（現藤沢市）に開いた遊行四代呑海上人をはじめ歴代上人は、聖塚など一遍ゆかりの遺跡を訪ねています。七代託何上人は奥州を遊行中、紫波郡の高田（現矢巾町）で腹痛を起し、延文三年（一三五八）二子村現北上市で亡くなりました。ゆかりの地を藤沢と改名し、後年に遊行上人堂を建てています。

また遊行二五代尊恵上人は巡錫中に花巻市西光寺を開き、弟子の覚阿をここに留め初代としました。その後も遊行上人の奥州巡錫は続き、光林寺が拠点となっています。その光林寺から四五代尊遍上人が誕生しています。

# 和賀氏と家臣

# ゆかりの中世寺院

## 中世史解明に鬼柳文書

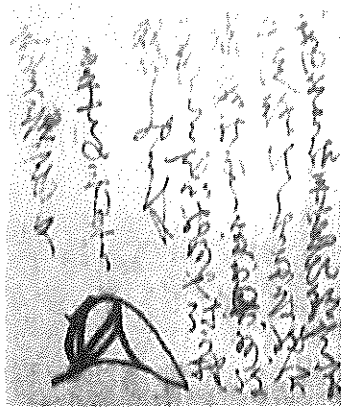
### 平姓和賀氏新たに登場

敗者は歴史上から抹殺されるのは世の常であり、とくに古代や中世においてはその傾向が著しく、数少ない資料の中から類推する以外にありません。北上・花巻地方の中世史を知る場合、当時この地方を支配していた豪族、和賀氏や稗貫氏の事蹟の評価が大切ですが、両豪族共に豊臣秀吉によって滅ぼされ、約四百年にわたるこの地方の動きは殆ど消されてしまいました。

ところが幸い昭和七年（一九三二）に膨大な古文書『鬼柳文書』が発見されて、岩手県の中世史が次第に解明されてきています。この古文書は全部で九一通、そのうち中世文書として鎌倉時代が二通、南北朝時代四七通、室町時代一二通ありました。

この文書は和賀氏の一族鬼柳氏の子孫が保存していたもので、従来想像されていたこの地方の中世史が大きく書き替えられています。その最大のものは和賀氏のルーツです。和賀氏は従来源氏の流れをくむ氏族と考えられてきました。ところが古文書によると、和賀氏は関白藤原一門を祖とする中條氏の流れをくむ名族であり、その先祖となる刈田義季の長子義行が初めて和賀姓を名乗ったとあります。いわゆる和賀氏は平姓の流れをくむ一族であるこ

㊦敗者和賀氏の歴史は、数少ない資料のため想像の域を脱しなかったが、『鬼柳文書』九十一通が発見され、解明が大きく進んだ。鎌倉時代三通、南北朝時代47通、室町時代十三通という、稀に見る中世資料の発見であった。



# 平姓和賀氏系図

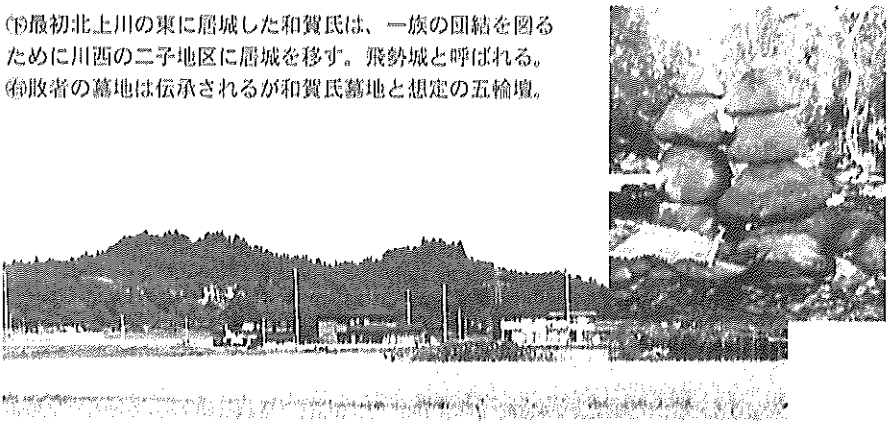
㊦和賀氏は関白藤原一門を祖とする中條氏の流れをくむ名族で、苅田義季の子義行が、初めて和賀姓を名乗った。その後二代目に須々孫氏、三代目に鬼柳氏が分かれたと苅田系の系図は語っている。稗貫氏とは親類である。

とが判ったのでした。

中條成尋の次子義季は、現在の宮城県苅田郡の地頭となり苅田姓を名乗りますが、その子義行が平泉を滅ぼした源頼朝によって和賀郡の地頭となり、和賀姓を名乗ったと考えられているのです。なお苅田義季の兄中條家長は、隣接する稗貫郡の祖といわれます。

このように鬼柳文書の発見で、和賀氏は「平姓」の苅田氏を祖としており、少なくとも南北朝時代までは「平姓和賀氏」であって、従来から伝えられてきた「源姓和賀氏」系図はどんな意味を持っているのか謎となっています。

従って和賀氏ゆかりの寺院の中で、源姓和賀氏の開基伝説を持つ北上市の遍照寺（68頁）、永明寺（94頁）、正洞寺（102頁）は、その和賀氏との関わりについて、さらに再調査を行う必要に迫られたといえるでしょう。



㈼最初北上川の東に居城した和賀氏は、一族の団結を図るために川西の二子地区に居城を移す。飛勢城と呼ばれる。
㈽敗者の墓地は伝承されるが和賀氏墓地と想定の五輪塔。

## 一族相争う南北朝時代
## 最盛期は七万石の領地

『鬼柳文書』によると初代和賀義行が子供達に譲った土地を詳細に記した文書を残しています。また南北朝時代に、一族が南朝側と北朝側に分かれて戦ったことも判りました。

このように群雄割拠の戦国時代に、和賀氏は領地問題で同族間の私闘をくり返しています。和賀宗家と一族である須々孫氏との争いが永享七年（一四三五）から翌年にかけて行われ、須々孫氏には黒沢尻氏と稗貫氏が加勢。形勢不利となった和賀宗家は南部氏に助けを求め、さらにその後葛西氏や大崎探題も加わって戦火は周辺に大きく拡大しています。結局は稗貫氏が南部氏の配下になることでこの争乱は決着しますが、この戦いに介入した南部氏の真のねらいは、南に勢力を伸ばすことにあったといわれています。

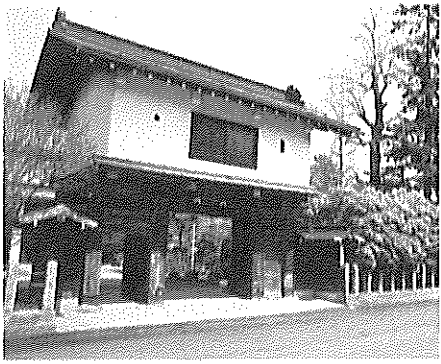
この大乱終結を機に、和賀宗家は本城を更木から二子へ移しました。それと時を同じくして和賀氏の祈願寺である遍照寺と菩提寺の永明寺も更木から二子の現在地に移っています。

飛勢城と呼ばれた二子の本城は、変革期の中で一族の団結をもたらす拠点の城であり、また大乱の相手であった一族の須々孫氏を隷孫氏と改姓して家臣団に編入して北上川西岸の支配の強化を図りました。

大名となった和賀氏は、大崎探題に参上したときの座席が残されていますが、稗貫氏と共に上席に位置していて格式の高さを物語っています。領地もこの頃から拡大「永禄元年（一五五八）御検地事」という『小田島家記録』には稗貫郡や胆沢郡の一部も含め七万石を領したと記録しています。

当時の領地は不確定の要素があり、近世に伊達領に含まれた胆沢郡内にも相去（現北上市）、西根（現金ケ崎町）

㈲秀吉により滅亡した和賀氏は、伊達氏の支援を得て再興に立ち上がる。その時の総大将和賀忠親は後に自刃して果てる。



㈱和賀氏滅亡により廃城となった飛勢城の大手門は花巻城に移され、円城寺門となる。

稲瀬・岩谷堂（現江刺市）などにも、和賀氏ゆかりの城館があったことが知られています。

この和賀氏の全盛期に、各地に和賀氏家臣の菩提寺が開山しています。煤孫氏の菩提寺は、北上市の慶昌寺（106頁）、鹿本氏は花巻市の将軍寺（180頁）、同じく東光寺（182頁）は、唐丹崎家の先祖斎藤氏が開きました。また、稗貫氏の家臣団に名を連ねていた小山田氏は、後に和賀氏の配下となってその菩提寺は東和町の瀧沢寺（132頁）と伝えています。そのほか胆沢郡に含められていた北上市相去の洞泉寺（80頁）も、和賀一族相去宏芸守の家臣千田修理の開基と伝えています。

## 秀吉により領地を没収
## 一揆起こすが敗退する

混乱をきわめた戦国時代も、秀吉の天下統一によって、時代は大きく変わろうとしていました。秀吉は天正一八年（一五九〇）全国統一の総仕上げとして、関東最大の勢力を誇った小田原北条氏を攻撃することになり、全国の諸大名に参陣の命令を出しました。参陣しない大名には領土権を没収するという厳しい命令でした。

ところが北上川流域の奥州勢は、葛西氏・大崎氏・和賀氏・稗貫氏ともに参陣せず、南部氏のみが前田利家を通じて参陣しました。伊達氏も遅れて参陣する有様でした。

和賀氏では小田原参陣を巡り、出兵を主張する鬼柳宗家の相去清三郎と黒岩城家老昆主佐の不参加論と激論が交されたと伝えています。結局、和賀氏は中央の情勢に疎く、政治的動向に対する戦略的判断を誤ったのですが、伊達氏と南部氏の領土的策謀がそれに加わったとも考えられています。

秀吉の命による奥州仕置の軍によって和賀宗家最後の領主和賀義忠は城を追われますが、そのときの総大将は秀

仙台市の郊外、国分尼寺に和賀忠親の主従はひっそりと眠っている。岩崎城での戦いで南部氏に敗れた忠親は、山伏の妙楽院と共に伊達領に逃れるが、和賀一揆の真相の露見を恐れた伊達政宗によって、忠親主従は殺害されたと多くの記録は伝えている。忠親の子は伊達が庇護して、松山に領地を与えている。

次であり、その名代は浅野弾正長吉でした。ところが仕置の軍が去ったあと守備隊に対する反感もあって各地で一揆が発生。和賀郡内では旧領主和賀義忠を中心に稗貫の旧領主と連合して城を奪回しますが、その喜びも束の間でした。翌年の奥州再仕置によって義忠は秋田へ逃亡途中、和賀仙人（現北上市）で命を落としています。

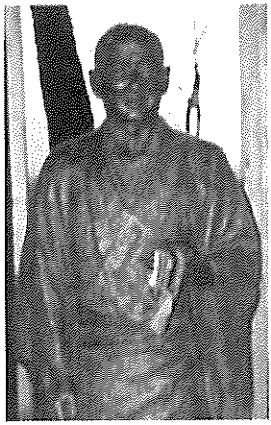
和賀郡内から和賀一族は一掃され、飛勢城下の北上川川端にあった等提寺の正行寺（70頁）も領内から追われました。そして伊達領となった江刺郡の水押地区（現北上市）に落ち延びて、細々と寺を構えたのでした。元正行寺跡の北上川川端には樹齢約六百年の銀杏が残り、当時をしのばせます。

## 伊達の支援で再び一揆
## 敗北し完全に南部領化

和賀義忠の子又二郎と又四郎は秋田に逃れましたが、慶長二年（一五九八）秀吉の死によって国内情勢は再び大きく動きました。二年後の慶長五年に天下分け目の関ヶ原の戦いが起こり、その間隙を縫って和賀氏再興を願う一揆が起こったのでした。

総大将は又四郎こと和賀忠親であり旧和賀氏や旧稗貫氏の家臣がこれに呼応して立ち、二子飛勢城を奪回しました。そして新領主南部氏の郡代北松斎が守る鳥谷ヶ崎城を陥落までもう一歩の所まで攻めながら、南部利直の軍によって敗れてしまいます。

この和賀一揆には、領地に野心をもつ伊達氏のおもわくもあって、伊達の重臣白石氏の支援を受けました。その大将として活躍するのが白石氏の家臣鈴木将監重信です。南部利直に追われ、岩崎城に籠城した一揆勢に糧米を送るため百五十騎ほどで夏油川を渡ろうとしたとき、待ち伏せの南部勢の大軍と乱戦になり白石勢は敗れました。こうして和賀の一揆は失敗に終わり和賀忠



㈱和賀氏庇護のもと真宗を布教した是信房。

真言宗豊山派　遍照寺
浄　土　宗　正行寺
浄土真宗本願寺派　光林寺
真宗大谷派　真行寺
真宗大谷派　安浄寺
真宗大谷派　正法寺
臨済宗妙心寺派　洞泉寺
曹　洞　宗　永明寺
曹　洞　宗　正洞寺
曹　洞　宗　慶昌寺
曹　洞　宗　瀧沢寺
曹　洞　宗　将軍寺
曹　洞　宗　東光寺

親王従は伊達領内に逃亡しました。

しかし事件の真相露見を恐れた伊達政宗によって、忠親王従は殺害されたと多くの記録は伝えています。その後飛勢城は壊され、大手門が花巻城の搦手門に移されました。

## 是信房と共に真宗布教
## 和賀門徒領内に広がる

東北の北部地方に親鸞聖人の教えを広めるために、高弟是信房が和賀の地を訪れたのは寛喜二年（一二三〇）といわれます。和賀郡笹間村（現花巻市）の一つ柏に青水山寛喜院（一説には清浄院とも伝えます）と名付けた粗末な小屋を作り、田二手刈をもらい一向宗（浄土真宗の別名）の教えを広めました。正嘉二年（一二五八）に八七歳の生涯を閉じています。

是信房の教えを受けた弟子達は次第に増加し、この地方の信者は和賀門徒と呼ばれました。

信仰の厚い和賀氏一族は領内の各地に寺院を建立、最盛期には五十ヵ寺の一向宗寺院があったと伝えています。現在営まれている寺院は、一族の多田弾正輝正が延徳二年（一四九〇）に花巻の湯口に安浄寺（124頁）を建てました。また明応七年（一四九八）には和賀義治の家臣小原清八が小山田村（現東和町）に一宇を建立します。そして正法寺（222頁）の寺号を頂き、延宝五年（一六七七）に、現在地の八重畑村（現石鳥谷町）に移転しました。

同じく和賀義治の家臣熊谷新助が弘治五年（一五五九）四七歳のとき発心し、翌年小山田村（現東和町）に真行寺（124頁）を建てています。

そのほか岩崎城主だった和賀主馬守の家臣武田玄賀が岩崎村（現北上市）の坂水に光林寺（72頁）を建てたのは永正二年（一五〇五）頃のことだろうと考えられています。是信房の影響の大きさを感じさせられます。

# 稗貫氏と家臣

# ゆかりの中世寺院

## 伝承少ない稗貫氏史料
## 稗貫郡を二氏で統治か

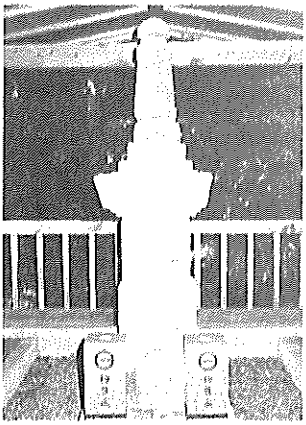
戦国時代の末期には稗貫郡内の殆ど全土を領地としていたと考えられている稗貫氏は、天下統一を目指す豊臣秀吉に対する対応を誤り、領土の座を追われたのは天正一八年（一五九〇）のことです。敗者の歴史は消される運命にあるのは和賀氏と同様であり、稗貫氏の事績を伝える資料は全くといっていいほど残っていません。

ただ江戸時代の文筆家、花巻の松井道円がまとめた『和賀稗貫郷村志』に、稗貫氏の出自や花巻城・瑞興寺の記事の中にある程度記されてるだけでした。しかし『岩手県中世文書』が出版され、その中の『遠野南部文書』から稗貫氏は藤原姓の流れをくむ中條氏がその先祖であることが判りました。その原資料と考えられるのが、和賀氏の歴史を解明した『鬼柳文書』です。

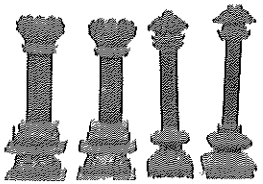
鎌倉幕府から稗貫の地を何時拝領したかは判っていませんが、現在一般的に考えられているのは、南北朝時代の稗貫郡内には、複数の稗貫氏が互いに領地を分ちあい、稗貫氏を名乗っていたということです。それは出羽守一族であり、大和守一族でした。

稗貫の地を拝領したのは、畠山次郎重忠、常陸次郎為重、中條藤次家長の三人で、畠山は郡内の鳥谷ヶ崎や大瀬川、

㋐常陸系稗貫氏の六代目当主となった俊行は、河野通次の嫡子で光林寺に葬られた。



㋑永徳元年（1381）に開山した石鳥谷町大興寺は、稗貫氏の菩提を弔って宝篋印塔を祀る。㋒大興寺に六柱が祀られる。位牌四柱だが、位牌と過去帳が一致するのはニ二代政直のみで、他は後世に追慕した墓。



大迫、八重畑地方を、常陸は鼻牧、萬丁目地方を、中條は根子、瀬川、太田地方をそれぞれ押領しています。この三家が、南北朝時代に入っても、家に統一されることなく郡内を統治していました。しかし宮山は押領を受けながら源氏に滅ぼされて、一族が消滅してしまいます。従って常陸の大和守一族と中條の出羽守一族だけが残って稗貫地方を統治していたのです。

## 一族南北に分かれ抗争
## 中條系稗貫氏が滅びる

南北朝期の初め頃までは、常陸系と中條系の稗貫氏は存続していたと考えられています。そのうち常陸系稗貫氏の六代目の当主に、光林寺（221頁）を開いた河野通次の嫡子俊行が迎え入れられています。延暦一年（一三〇九）に没して光林寺に葬られました。

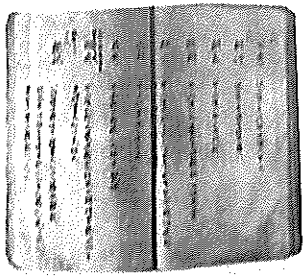
ところで、一人の天皇で対立した南北朝時代、南朝は後醍醐天皇を立て、北朝は光厳天皇を立てて半世紀にわたり争いが続きました。武家もそれぞれの側につき対立し、一族でも分裂する様相を呈するようになりました。

稗貫氏は最初のうちは両家とも南朝方につきますが、中條系稗貫氏の当主中條時長は暦応元年（一三四〇）北朝方に転向、隣接する和賀氏も一族が南朝と北朝に分かれて、血で血を争う戦いへと発展しました。

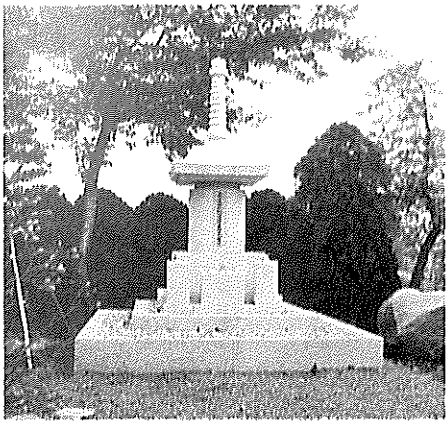
南朝側は北畠顕信将軍を総大将に、南部氏・滴石氏・河村氏といった奥州の領主を従えた大軍で、斯波・和賀・稗貫出羽守一族を攻めました。そして結果は北朝側が全滅してしまいます。

この戦いで中條系稗貫氏は滅び、所領地は命脈を保った常陸系稗貫氏に編入されました。以来稗貫領内は常陸系のみで統治されることになりました。

南北朝時代は、最終的に北朝勝利によって国家が統一されますが、稗貫郡の場合も結果的には一人の領主という



㊤稗貫氏一二代広隆の名をとり命名した広隆寺に残る「広隆寺旧記」は、稗貫氏の治世を記録している貴重な文書。稗貫氏にゆかりの者が江戸期に書く。



㊦常陸系の稗貫氏一二代領主広隆の供養塔。

変則状態から救われ、以来稗貫郡は常陸系稗貫氏単独支配となりました。

## 全部を掌握した常陸系居城を鳥谷ヶ崎に移す

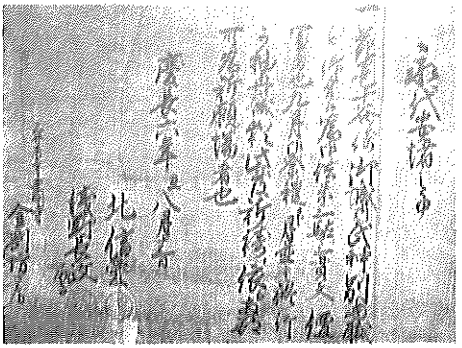
石鳥谷町大興寺（230頁）は、稗貫氏歴代の菩提寺と伝えられ、稗貫氏六柱の墓地が祀られています。常陸系稗貫氏の歴代領主のうち、一一代目遠基は永和二年（一三七六）に亡くなり葬られますが、寺院はその五年後の永徳元年（一三八一）に開山しています。遠基は左中将陸奥守と称し、稗貫氏中興の祖と崇められました。

稗貫氏が何故大興寺を菩提寺としたか、それは明らかではありませんが、稗貫氏が大瀬川の館（場所不明）に住んでいた時代に近隣の寺院として定めたものと考えられています。この寺は曹洞宗開祖道元禅師から七世の法脈を継ぐ伽山開本禅師が開山しています。

稗貫氏が本城を十八ヶ城や鳥谷ヶ崎城など花巻に移すに及んで、菩提寺も瑞興寺（190頁）に変えたものなのか、この寺の家紋は稗貫氏の家紋「丸に太・つり引き」を用いています。この寺院は応永四年（一三九七）に、名刹正法寺の三世虎渓良乳大和尚が開山しています。この寺には戦死した一三代三河守広門が葬られたなど、郡史料は残っているものの、度重なる火災によって古い記録の殆どが失われました。

瑞興寺が鳥谷ヶ崎城の本丸にあった頃、二ノ丸には円城寺（188頁）がありました。また二ノ丸にも洞雲寺という寺があって、瑞興寺より四年も前に建てたと伝えています。この寺院は寛正年間（一四六〇～六六）現宮城県加美郡宮崎町の鳥屋ヶ崎に移転したと現地では伝えていますが、肝心の花巻ではこの事実は殆ど知られていません。

稗貫氏一一代領主少将大和守広隆は、浄土念仏に熱心でしたが病に倒れ亡くなりました。その死を悲しみ浄土宗寺



㊤奥州仕置軍の浅野長吉(後に長政)が与えた領地の安堵状が、光徳寺や光林寺に残っている。

浄土宗　広隆寺
真宗大谷派　妙琳寺
時宗　光林寺
曹洞宗　昌欲寺
曹洞宗　円城寺
曹洞宗　瑞興寺
曹洞宗　円通寺
曹洞宗　広済寺
曹洞宗　大興寺
曹洞宗　中興寺
曹洞宗　桂林寺

院を建立、領主の名をつけたのが広隆寺（158頁）です。この寺には稗貫氏の故事を伝える「広隆寺旧記」が伝えられています。

稗貫氏はその後二代政直まで続き、その娘於二に和賀一族の広忠を養子に迎え二代としました。ところが時代は秀吉の奥州仕置となり、稗貫氏はこの代で滅亡しました。

最後の領主広忠亡きあと、未亡人の於二は新領主の南部信直の妻となり稗貫氏再興を願いますが、信直は関ヶ原の戦いの前年に突然没し、その夢は消えてしまいます。なお、政直・広忠・於二は大興寺に葬られました。

## 各地に曹洞宗寺院建立
## 近世以降則には悲劇も

稗貫氏と関わり深い寺院には古利の昌欲寺（181頁）があります。応永三年（一三九六）の開山の寺ですが、稗貫氏の重臣根子大和守が堂宇を寄進して立派な寺院に生まれかわっています。

稗貫氏の家臣二丁目氏は本姓が伊藤氏で、通称獅子ヶ鼻と呼ばれる台地の上に二丁目城を築きました。城の周辺には仲町・反町などの町場地名が残り、そこに円通寺（191頁）があります。二丁目氏の菩提寺は実相寺ですが今は廃寺となっています。

石鳥谷町の広済寺（228頁）は猪鼻氏が大檀那となった寺で、寺名は猪鼻氏の名前広済からとっています。同じく家臣の大迫氏が開基した大迫町桂林寺（218頁）は、大迫氏が奥州仕置に反撥して一揆を起し一族は四散しました。

また大迫町の妙琳寺（240頁）には開山にまつわる秘話が伝えられています。衣更着郷の領主木皿縫掃部は亀ヶ森図書に滅ぼされ、一帯は亀ヶ森氏の領地になりました。それを悲しみ木皿縫氏の妻が尼僧となり妙琳寺を開いたのでした。この地方の領主亀ヶ森氏の菩提寺が中興寺（246頁）です。

# 南部氏と家臣
# ゆかりの近世寺院

## 傍系の信直が領主の座
## 小田原参陣した南部氏

南部氏の傍系に生まれながら、二六代領主の座を得た南部信直（一五六二）は、戦国の世の混乱期を乗り切り南部氏を東北有数の大名にのし上げました。南部氏中興の祖と呼ばれています。

南部氏が二戸城に居城していた室町時代、二四代晴政に男子がなく養嗣子に迎えたのが従弟の信直でした。しかしその後晴政に男子が生まれ、後継者を巡って晴政と信直が対立、一族も二分して争いになりました。その後永禄六年（一五六三）晴政が死去、二五代を二二歳で継いだ晴継も在任わずか一年で亡くなり、信直が二六代を継ぐことになりました。

所領の安堵を求めて上京しますが、信長の死で挫折、その後政権を掌握した豊臣秀吉の許に天正一五年（一五八七）春、使者を送って成功し、前田利家によって南部の大守であること、所領も安堵するよう近く伏見に向う意向であることなどの保証を得ました。

信直の外交面における協力者は、北左衛門佐信愛であり、内政面では、八戸薩摩守政栄だったなどと伝えています。一方反対派は後に九戸の乱を起こす九戸左近将監政実などで、天正一九年（一五九一）にすべて処刑されて、領内の秩序は安定しました。

第二十六代大膳大夫信直肖像
政令子高信之偏男也晴継家
平世阿上寿五十五歳画事

㉖二六代南部藩主信直。二四代晴政に男子がなく晴政の従弟信直を養嗣子に迎えた。しかし後に晴政に男子が生まれ、後継ぎを巡り晴政と対立、一族も二分して争った。その後晴政が死去、二五代を継いだ晴継も在任わずか一年で亡くなり、信直が二六代を継ぐ。反対派の九戸政実を秀吉の支援を受け鎮定。先祖伝来の南下政策を進め、盛岡に築城を開始する。慶長四年五四歳で死去する。南部藩の中興の祖といわれている。

## 浅野長吉先陣で仕置軍 境警護に花巻郡代置く

秀吉の天下統一による奥州仕置軍は秀次を総大将に蒲生氏郷・石田三成・浅野長政（長吉）・木村吉清・大谷吉継の軍、それに相馬・伊達・南部の軍も加わって数万の強大な勢力でした。先陣を受けた浅野長政は、平泉から和賀稗貫と平定、その際与えた古文書が、花巻市の光徳寺（162頁）と石島谷町光林寺（224頁）に保存されています。

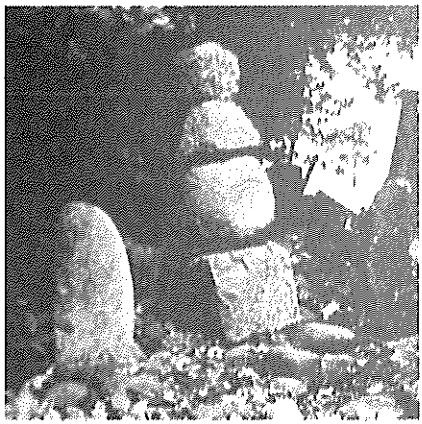
天正一九年（一五九一）秀吉は南部氏に斯波・稗貫・和賀の三郡を与えました。そして奥州仕置軍の浅野長政は帰るに際して信直に対し、島谷ヶ崎城は重要な地点であり、智勇兼備の人物をもって郡代とするよう勧め、その適材は北松斎（信愛）の次男秀愛であると推薦します。信直は直ちに北秀愛に和賀・稗貫八千石を与えて花巻郡代とし、このとき花巻城と改称しました。

豊臣政権下で所領十郡で十万石を与えられた南部信直は、その子利直を伴い小田原参陣し陣中で元服させています。そして不来方（盛岡）に居城構築を企て、慶長二年（一五九七）より本格的に上木上事に着手しています。

しかし信直はその二年後に亡くなり利直が後を継ぎました。そのとき利直は二七歳でした。その翌年の慶長五年（一六〇〇）の大阪方と徳川方の合戦には、徳川方に味方し五千人を引き連れ出羽に参陣しています。

しかしその間隙を縫って起こったのが和賀忠親の一揆でした。利直は急ぎ引き返して翌六年春に鎮定。これによって盛岡南部氏は近代大名としてその強固な基礎を確立したのでした。

この和賀・稗貫花巻城の危機に駆けつけたのが広隆寺（158頁）の門前に住む松子と浦子の二人の娘であり、また松庵寺（156頁）の住職とそこに止宿していた二人の洋軽浪人でした。広隆寺



⑭葛西氏家臣だった柏山明助を信直が岩崎城代にするが、利直により毒殺。その墓地。

⑮二代花巻城郡代の北信愛は花巻開町の父。

には「松子の墓」が祀られており、松庵寺の「松」の一字は北松斎から許されて付けたものといわれます。

利直は伊達領との国境警備のため岩崎城を改修、その城代に柏山伊勢守明助を起用しています。柏山氏は葛西氏の家臣で所領を失っていましたが、信直は一族の柏山明助を客分に取り立てていて、和賀・稗貫定の功績によって重臣の一人に登用したのでした。

## 唯一の花巻城主に政直
## 利直の柏山氏排除陰謀

花巻城代の北秀愛は、九戸の乱での負傷がもとで慶長二年（一五九八）若い命を絶ち、その遺領を秀愛の父信愛（松斎）が受けて郡代となりました。

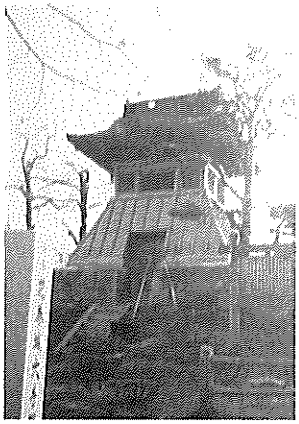
そして慶長一八年（一六一三）まで十五年間、花巻の街づくりに大きな功績を残し亡くなっています。九一歳とも九二歳とも伝えられています。信直利直の二代に仕えた南部氏の大功労者である北家も、男子の後継ぎがなくお家断絶してしまいました。

北松斎が花巻郡代在任中にその菩提寺としたのが雄山寺（196頁）です。松斎には男子四人の子供がいて、愛一・秀愛・直継はそれぞれ一家をなし、四男の愛邦を家督にしようとしていましたが、津軽との戦いで、わずか六歳で戦死しました。その菩提を弔うために愛邦の諡号にちなみ陽光山雄山寺と号し開基となっています。

一方この頃、和賀氏を滅ぼした功績で更木村（現北上市）に領地を拝領した家臣の桜庭氏は、永昌寺（98頁）を建立しています。

北松斎亡きあと、利直は二男彦九郎政直を花巻城城主として二万石を与えました。花巻城に城主が置かれたのはこのときだけです。しかし、寛永元年（一六二四）に城主政直が花巻城において急逝。二六歳の若さでした。

このとき岩崎城代の柏山明助も同時



㈱時を告げる鐘楼は、花巻城の唯一の遺構。

浄土宗　松庵寺
浄土宗　広隆寺
浄土真宗本願寺派　光徳寺
真宗大谷派　順覚寺
時宗　光林寺
臨済宗妙心寺派　長久寺
曹洞宗　永昌寺
曹洞宗　全明寺
曹洞宗　宗青寺
曹洞宗　雄山寺
曹洞宗　広済寺
曹洞宗　新仙寺
日蓮宗　実成寺
日蓮宗　身照寺

に死亡していますが、これについて南部氏の歴史書『南部史要』には次のように書いています。「北松斎の推選により岩崎城代となった伯山明助は、伊達政宗と通ずる疑いがあった。それを除こうと考えていた領主利直は、江戸に向うときに花巻城に立ち寄って明助と謁見。ところがその日花巻城主政直が急死、明助も多量の血を吐いて死にました。これは利直が仕組んだ毒殺で城主政直もその犠牲になった」と。

その政直の菩提を弔うために建てたのが宗青寺（102頁）でした。

## 各地に開基の南部家臣
## 日蓮に帰依した領主も

花巻城主南部政直の死後は、再び郡代を置くようになり、それには千石にも満たない家臣が任命されています。延宝八年（一六八〇）赴任の郡代四戸金左衛門のとき南部氏の遥拝所として長久寺（178頁）を建立しています。

家臣が開基した寺院に石鳥谷町新仙寺（231頁）があり、内堀氏が開きました。花巻市順覚寺（168頁）を開基した藤枝義宗も元南部藩士でした。また稗貫一族の猪鼻氏が開いた石鳥谷町広済寺（228頁）は、後に南部北家の遥拝所として守られています。

南部藩にとって財政維持に欠くことのできない開田事業として北上・花巻地方の藩営開田に取り組み、その中心人物奥寺八左衛門に協力し成功させたのが北上市の全明寺（108頁）四世仏弘祖哲和尚でした。

日蓮に帰依した南部の領主もおります。南部氏が甲州（山梨県）から奥州に下って四代目政光が八戸に開基した身照寺（204頁）を戦後花巻市に移し中興開基となったのが遠野南部氏三六代目実主人でした。文政年間（一八一八～三〇）には遠野南部藩士鈴木儀兵衛が法華経に帰依し仏門に入り東和町の実成寺（136頁）を開いています。

# 布教の行脚で
# 定着の浄土系寺院

## 国内最大は浄土系寺院
## 岩手県内では禅系寺院

文化庁がまとめた『宗教年鑑』によりますと、日本における仏教寺院は約七万七千ヵ寺あります。その中で最も多いのが浄土系寺院で約三万ヵ寺、全体の三九㌫を占めています。

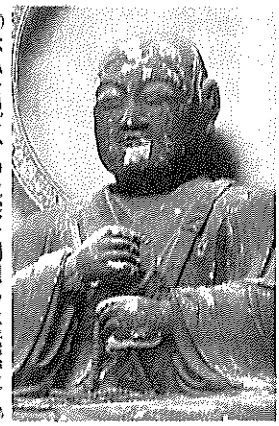
浄土系寺院には法然上人が宗祖の浄土宗、親鸞聖人が宗祖の浄土真宗、それに一遍上人の時宗と良忍上人の融通念仏宗が含まれていますが、その約七割を占めているのが浄土真宗寺院で、約一万一千ヵ寺となっています。

また浄土真宗最大の宗派は西本願寺が本山の浄土真宗本願寺派で、約一万の寺院があります。東本願寺が本山の真宗大谷派は約八千八百ヵ寺であり、この二宗派で九一㌫を占めています。

岩手県内では禅系が多く全体の半数以上を占め、臨済宗一九ヵ寺、曹洞宗二ヵ寺を除くすべてが、曹洞宗寺院です。浄土系は一一ヵ寺でわずかに八㌫を占めるに過ぎません。

しかし北上・花巻地方は浄土系寺院の普及率は高く一一ヵ寺で一二㌫、その半数は東本願寺を本山とする真宗大谷派寺院で、六ヵ寺あります。

古代における仏教は天皇や貴族たちのものでしたが、武士を含めた庶民の社会的勢力が大きくなるにつれ、仏教を信仰したいと望む人々が多くなり、



㊤念仏を説き、浄土宗を開祖した法然上人。

㊦浄土真宗の開祖親鸞聖人とその妻恵信尼。

それに応えたのが法然・親鸞・一遍・日蓮たちでした。一方、武士たちは中国直輸入の禅宗を積極的に取り入れます。これらの仏教は鎌倉新仏教といわれ、日本の宗教改革ともいえる、大きな宗教の変革期でした。

## 念仏を説いた法然上人
## 教えを発展させた親鸞

法然は長承二年（一一三三）美作国（岡山県）で武士の子に生まれ、出家して比叡山延暦寺で修行します。一八歳で隠遁生活に入り、四三歳のとき唐（中国）の浄土教の高僧善導が著わした『観無量寿経疏』に出会います。それは「どんなときでもひたすら念仏を唱え続ければ、必ず阿弥陀仏に救われて極楽浄土へ行ける」という考えで、それを専修念仏といいました。

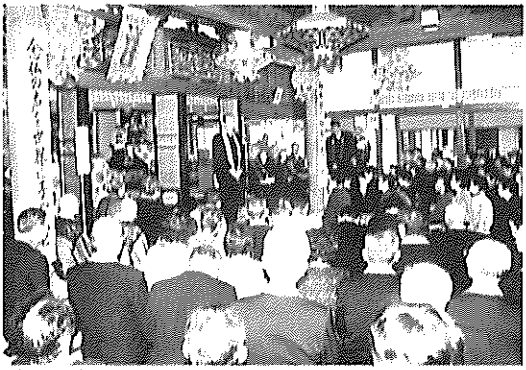
法然は穏やかな物腰と争いを好まない温和な性格でしたが、門弟たちが行った積極的な布教活動で人気を呼びます。そのため既成仏教側は危険視し、承元元年（一二〇七）法然七四歳のとき四国へ流されました。そのとき門弟の親鸞は越後に流されています。

親鸞は承安三年（一一七三）京都の中級貴族に生まれ、九歳のとき出家し延暦寺で二十年間修行、法然の弟子となって専修念仏を学びます。しかし従来の僧侶のように独身が正しいとはせず、夫婦生活という普通の暮らしの中に仏の教えを生かそうとしました。

親鸞の妻となった恵信尼は、越後の豪族の娘で、妻であり母であり夫と同様に念仏に生きた女性でした。

法然が「ひたすら念仏」を説いたのに対し、親鸞の教えは「阿弥陀如来の限りなく広く大きい救いの力を信じたそのとき、阿弥陀如来によって救われる」とするものでした。いわば「信心の信仰」ということもできます。

また従来の仏教では、悟りを得て救われるためには、戒律を守って清い行



㊨浄土真宗の寺院ではつねに信者と語り合う集会を持っている。写真は高僧から説教を聞く延妙寺の信者。

㊧六字名号や仏画を信仰の対象にして、真宗の信者を広めたマイリノホトケの信仰。

いが必要だとされました。ところが例えば漁師が生活のため魚を殺すように、一般庶民は同じようなことをつねに行っています。これではいつまでたっても救われないことになります。

そこで親鸞は「これは前世からの約束事であり、苦しみながらも生活の中で悪行を犯さねばならない悪人こそ、阿弥陀如来が救おうとされている本当の対象である」と説いたのでした。

これが「悪人正機説」で、ここに庶民が平常の生活の中で救われる道が開かれたのでした。

## 真宗の基本となる経典
## 独自の民間信仰を布教

浄土系信仰のよりどころとなる経典は『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の浄土三部経です。法然は三経は相互に関係する経典で、平等に扱うものと考えましたが、善導への崇敬の念から門弟の中に『観無量寿経』重視の傾向が強まります。一方浄土真宗では、三経一致を説きながらも『無量寿経』を真実の経典とし、他の二経を方便の経と見たのです。また『阿弥陀経』を重視したのが時宗でした。

親鸞の高弟二四人の一人に是信房がいます。源宗房といい、承久の変に敗れて常陸に逃れそこの稲田で親鸞の弟子になりました。寛喜二年（一二三〇）に師の命により奥州に下り、和賀の方塩一の柏（現花巻市）を拠点に、二七年間布教に努め、和賀門徒という大宗教勢力を築きました。

また和賀・稗貫・江刺各郡の庶民の間に普及した「マイリノホトケ」信仰は、浄土真宗を布教する手段として広められたものでした。是信房やその弟子たちは信仰すべき対象として、「六字名号」や、仏画の『阿弥陀仏』『釈迦如来』『善導太子』などを与えたのが始まりと伝えます。毎年十月に集会を持つため「十月ホトケ」とか『黒仏』とも

浄土真宗本願寺派浄円寺
浄土真宗本願寺派光徳寺
浄土真宗本願寺派専念寺
浄土真宗本願寺派延妙寺
真宗大谷派通来寺
真宗大谷派信泉寺
真宗大谷派碧祥寺
真宗大谷派順覚寺
真宗大谷派円徳寺
真宗大谷派妙円寺
真宗大谷派長滝寺
真宗大谷派観音寺
真宗大谷派浄円寺
真宗大谷派長楽寺
真宗大谷派宗通寺
真宗高田派選択寺

呼ばれ生活に深く根ざしました。

## 諸国を行脚する宗教者 各地に寺院を建立する

浄土真宗は真宗十派と呼ばれていますが、親鸞聖人の墓所の影堂から発展した本願寺が教団組織を拡大するまでは、高田の専修寺が総本山の地位にあったといいます。現在は江戸時代に東西に分かれた本願寺が中心となり、西本願寺が西日本中心の寺院で構成された浄土真宗本願寺派となり、また東本願寺が東日本を中心とする真宗大谷派の本山となっています。

従って県内の浄土真宗寺院では、真宗大谷派が圧倒的に多く四八ヵ寺、浄土真宗本願寺派が一八ヵ寺です。また北上・花巻地方では前者が一六、後者が六ヵ寺で、これ以外の寺院では県内唯一の真宗高田派として北上市選択寺（78頁）があります。

浄土真宗の寺院は、地方の豪族や長者などの寄進により開山するのは少なく、親鸞聖人の教えに傾倒し浄土真宗に帰依した宗教者が諸国行脚して布教のために定着し開山しています。

花巻市の妙円寺（172頁）は、一二世紀後半に、滋賀県の行者が開山の天台宗寺院を改宗しました。領主の座を捨て一三世紀半ばに開山した石鳥谷町長楽寺（220頁）。花巻市円徳寺（170頁）と、石鳥谷町長滝寺（216頁）は、五世紀半ばの十年間に武士出身の行者が相次いで開山しています。一六世紀には石鳥谷町観音寺（218頁）北上市通来寺（176頁）東和町信泉寺（116頁）大迫町浄円寺（242頁）。一七世紀は沢内村碧祥寺（112頁）大迫町宗通寺（241頁）花巻市順覚寺（168頁）がそれぞれ開山。いずれも真宗大谷派です。浄土真宗本願寺派は花巻市光徳寺（162頁）が一二世紀、延妙寺（166頁）は一四世紀、沢内村浄円寺（140頁）と花巻市専念寺（161頁）はいずれも一七世紀の開山です。

# 近隣の住職が開山した禅宗寺院

## 武士社会に広まる禅宗
## 県内では中世から普及

岩手県内の全市町村にくまなく建てられているのは曹洞宗寺院だけです。その数は、六ヵ寺で、県内全寺院数の五〇皆に当たります。全国的に見ても曹洞宗は、単一の本山を持つ宗門として全国一の寺院数を誇っています。

ちなみに県内の宗門宗派を見ますと曹洞宗の次が天台宗の五六ヵ寺で、これは平泉の寺院群が中心となっています。それに次ぐのが浄土真宗の真宗大谷派四八ヵ寺、真言宗智山派三四ヵ寺、日蓮宗……ヵ寺と続きます。

新仏教としてさまざまな宗門宗派が生まれた鎌倉時代は、正に日本の宗教改革の時代でした。既存の奈良仏教や密教が上級階級の仏教だっただけに、信仰を求める一般庶民や武士の要求に応える宗門宗派が望まれたのです。

そして一般庶民に広い支持を集めたのが、誰でも簡単に極楽往生できると説いた法然・親鸞・一遍・日蓮が確立した仏教であり、一方新しい支配階級となった武士たちは、自力の修行が第一と説いた禅宗を信仰。それは実力主義の武士の心を捉えたのでした。

禅宗には栄西によって中国から日本に伝えられた臨済宗があります。また栄西の六十年後に生まれた道元は、中国で長期間の座禅修行を行い、四二歳

㊤禅で単独宗門を確立した臨済宗開祖栄西。

㊦栄西が開き武家によって繁栄した建仁寺。

で永平寺を開山して、禅を教義とする曹洞宗を開きました。後の、七世紀に開かれた禅宗が黄檗宗です。

## 禅を独立の宗門に確立
## 栄西の教えを道元開く

「禅」はもともと仏教の修行方法の一つですが、それをもとに独立した宗門を確立したのが臨済宗でした。永治元年（一一四一）備中国（岡山県）に生まれた栄西は、比叡山に学び、七歳で中国に渡り禅の修行をします。この禅をもって日本の仏教を改革しようとしました。従って天台宗の教えや密教を否定しようとしたのではなく、修行の中での禅を重要視したのでした。

臨済宗はその本尊を特定していません。また、僧堂における座禅の方法は、壁を背にして行う「人宗参禅」が特徴で、老師と直接対決し公案（絶対的真理、簡単には悟りを得る手段）を解いて悟りを開くという修行です。これらのやりとりは当事者以外は秘密のうちに行われますが、この口伝方法は様々な伝統芸能にも影響をあたえました。

栄西の死後その系譜は後を絶ち、その後の渡来僧によって十四派が生まれました。岩手県内には妙心寺派の寺院が二九ヵ寺あって、北上・花巻地方では南部藩主の遥拝所として花巻市の長久寺（128頁）、また伊達藩主の遥拝所は、北上市の洞泉寺（80頁）です。

栄西は「禅」を修行の一つとして重視し手段であったのに対し、禅のみを強調して教えたのが道元でした。これを「純粋禅」と呼んでいます。

道元は正治二年（一二〇〇）京都の貴族に生まれましたが、両親を早く失い、三歳で比叡山で出家しました。その天台宗では「人間が生まれたときから仏としての能力がある」と教えているのに、何故修行を説くのかという疑問を持ち中国へ渡ります。

そして座禅修行を会得して帰国、厳

㊧東北地方の曹洞宗本山として栄えた正法寺。

㊨栄西の教えを基に曹洞宗を開山した道元。

しい禅修行を説きました。道元の禅の特色の第一は「只管打座」です。座禅は悟りを得るための手段ではない。ひたすら座禅修行すること以外に悟りはないと教えました。また第二の教えの「修証一如」というのは、壁に向い座禅する姿こそ悟りそのものであると説き、座禅とそれ以外の修行方法を一緒にやることを否定しました。この教えを『正法眼蔵』に著わしましたが、最高の哲学書といわれます。

曹洞宗には宗祖と呼ぶ方が二人おります。二人は永平寺を開いた道元禅師であり、その方を高祖と呼び、総持寺（元石川県にあった）を開山した瑩山禅師を太祖と呼んでいます。教義なくして宗門は成り立たず、教団なくして宗門はあり得ないということから、曹洞宗では道元禅師を「教義の祖」とし、瑩山禅師は「教団の祖」であるとして二人を「両祖」と仰いでいます。

曹洞宗の本尊は、仏教を開祖した釈迦如来であり、宗門での本尊呼名は、『南無釈迦牟尼仏』とお唱えします。

## 東北本山正法寺の開山
## 曹洞宗布教の拠点築く

東北地方に曹洞宗が定着するのは、正平二年（一三四八）無底良韶禅師が江刺（現水沢市）に正法寺を建ててからでした。これは本山総持寺の開山から七年後のことです。そして元和元年（一六一五）に宗門法度が定まるまでは、越前の永平寺、能登の総持寺と並んで曹洞宗第三の本山でした。

五〇万の境内に七堂伽藍が完備していましたが、現在では数度の火災で、山門・本堂・開山堂・僧堂など二棟を残すに過ぎません。しかし、本堂は間口が三八・七㍍、奥行二六・五㍍、高さ二七・九㍍で、その屋根は日本一のかやぶき屋根です。

平成二年にはこれらの堂宇のうち本堂・総門（山門）及び庫裡が国の重要

臨済宗妙心寺派　洞泉寺
臨済宗妙心寺派　長久寺
曹洞宗　宗賢寺
曹洞宗　龍沢寺
曹洞宗　宝積寺
曹洞宗　萬蔵寺
曹洞宗　妙桃寺
曹洞宗　正覚寺
曹洞宗　正蔵寺
曹洞宗　永明寺
曹洞宗　永昌寺
曹洞宗　染黒寺
曹洞宗　泉徳寺
曹洞宗　慶昌寺
曹洞宗　金明寺
曹洞宗　浄珠院
曹洞宗　浄光寺
曹洞宗　福蔵寺
曹洞宗　常泉寺

曹洞宗　凌雲寺
曹洞宗　興禅院
曹洞宗　龍沢寺
曹洞宗　玉泉寺
曹洞宗　将軍寺
曹洞宗　東光寺
曹洞宗　昌歓寺
曹洞宗　円城寺
曹洞宗　瑞興寺
曹洞宗　宗清寺
曹洞宗　雄山寺
曹洞宗　歓喜寺
曹洞宗　松山寺
曹洞宗　宝昌寺
曹洞宗　大興寺
曹洞宗　金剛寺
曹洞宗　新仙寺
曹洞宗　中興寺
曹洞宗　桂林寺

文化財に指定。境内には樹齢千二百年の姥杉をはじめ、古杉や老松が茂っていて正法寺愛島の森として県の環境緑地保全地域に指定されています。

## 布教開拓した近隣住職
## 全県下に曹洞宗が定着

この正法寺の僧が北上や花巻地方に曹洞宗寺院を開山しました。慶安元年（一六四八）、二世月泉良印の弟子徹叟弘道が萬蔵寺（86頁）を、正法寺開山の十二年後のことです。二世虎渓良乳は応永二年（一三九六）に昌歓寺（181頁）、翌年、瑞興寺（190頁）を開山。

曹洞宗寺院は、一部に遠方からの行脚僧の開山もありますが、殆どは近隣寺からの開山です。永徳六年（一三八一）開山の大興寺（230頁）は、二世が新仙寺（231頁）、二世が金剛寺（232頁）と中興寺（216頁）を開山。昌歓寺、〇世は歓喜寺（198頁）と玉泉寺（164頁）。瑞興寺は二世が松山寺（200頁）、〇世が正蔵寺（92頁）、二世が宝昌寺（202頁）と永昌寺（98頁）を開山。正覚寺（90頁）は五世が染黒寺（96頁）六世が永明寺（94頁）と将軍寺（180頁）、〇世が妙桃寺（88頁）を開山。また凌雲寺（128頁）の四世は常泉寺（126頁）五世が福蔵寺（124頁）。雄山寺（196頁）の二世が宗清寺（102頁）五世が円城寺（188頁）。永明寺三世が浄光寺（122頁）四世が東光寺（182頁）と浄珠院（120頁）。浄光寺二世は龍沢寺（132頁）と興禅院（130頁）をそれぞれ開山しました。

その他の県内寺院では、水沢市大林寺が宗賢寺（82頁）、金ヶ崎町永徳寺が金明寺（108頁）、江刺市の瑞徳寺が泉徳寺（104頁）、正源寺が慶昌寺（106頁）、光明寺が宝積寺（84頁）を開山。

また県外では埼玉県蓮光寺が桂林寺（248頁）、青森県法光寺が弥名寺（100頁）、福島県龍台寺が凌雲寺（128頁）です。そのほか正洞寺（102頁）円通寺（194頁）広済寺（228頁）は開山寺院不明です。

# 小領主や町人
# 寄進開基した寺院

## 行脚僧が活躍の戦国期
## 競い合う曹洞宗と真宗

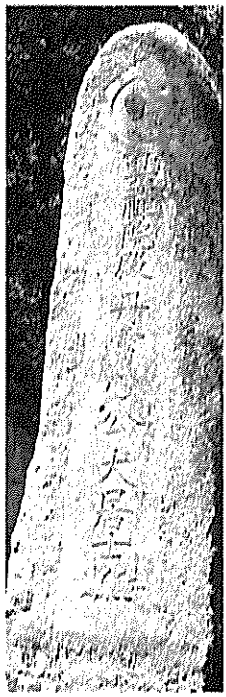
仏教が北上・花巻地方の庶民の間に広がりをみせてくるのは、武士による統治が確立する中世以降で、北上地方は和賀氏が、花巻地方は稗貫氏が中心となって治めていた時代でした。

鎌倉新仏教が起こり、庶民の間では浄土系仏教が、武士社会には禅系仏教が普及し、一三世紀には諸国行脚の修行僧が、早くもみちのくの地を訪れて庵を建てています。

しかし盛んに建てられるのは、後に曹洞宗の本山となる正法寺が江刺（現水沢市）に開山、その寺を拠点に各地に曹洞宗寺院を建てるようになってからでした。曹洞宗の寺院の多くは領主が開基となり、さらにその寺が未開地の布教に乗り出すという風算式の広がりを見せたのでした。

南北朝時代から室町時代へ、そして戦乱の激しくなる一五～一六世紀にかけて、諸国行脚をする浄土真宗の修行僧が各地に定住、土地の有力者の援助を得て寺を建てるようになります。

北上・花巻地方の仏教は、曹洞宗と浄土真宗の二大宗門が中心となって普及することになります。そしてそれに加えて既存宗門の極楽寺（66頁）を中心とした真言宗、光林寺（221頁）を中心とした時宗などが加わって、庶民の



㊤葛西氏が滅び南部氏の家臣となった江刺氏は、伊達領との領境警護に当たり興禅院を開いた。その二代重隆の墓地を興禅院に祀る。

㊦御本陣が置かれた宿場町黒沢尻(現北上市)に近江商人が商売をやるために定着するが、その一人井筒屋の三代目孫兵衛は、甲州(山梨県)から宗教者を連れてきて、浄土真宗の寺院西念寺を開いた。井筒屋孫兵衛の墓。

間に仏教が定着したのでした。

## 混乱する社会救う仏教
## 弱小領主も寺院を開基

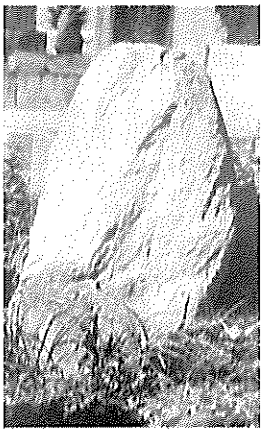
これらの寺院は宗教者によって開山されるものの、立地する土地や建物の建築資金の調達は容易なことではありません。そこで領主や土地の有力者がその寺の大檀那となって資金を出し、開基者となったのです。

ところが有力な領主のほかにも、弱小領主や下級武士、あるいは一般庶民が資金を出し合って信仰を守っている例も数多く見られます。

まず武士の場合ですが、北上市の宝積寺(84頁)の開山は古く、暦応年間(一三三八～四二)に天台宗として開かれました。曹洞宗に改宗するのは、八世紀の初めで、極本田館主の子孫の肝入が開基しています。花巻市の地蔵寺(186頁)を開基した清水市右衛門祐光は、豪商清水甚兵衛の義父ですが元は武士でした。また、上口内村(現北上市)の領主古内氏が宗賢寺(82頁)を開基しています。

中世から近世に入る混乱期に、葛西氏の一族だった江刺氏は、葛西氏の滅亡後南部氏に乞われてその家臣になります。かつての岩谷堂城主である江刺兵庫頭重恒は、南部信直から千五百石の知行を得て伊達領との境の警護に当たりました。そして現在の東和町に浄光寺(122頁)を開きます。重恒の死後、その子江刺兵庫助重隆は新堀城(石鳥谷町)に入り、同じく東和町に興禅院(130頁)を開いています。

また重隆の子の江刺長作隆直の代の慶長七年(一六〇二)には、上沢城



(南部藩の御用達として巨富の富を得た清水甚兵衛は信仰心厚く、勝行院の地蔵寺・順覚寺・妙円寺などに寄進。地蔵寺の甚兵衛の墓。

浄土宗　勝行院
浄土宗　鳥谷寺
浄土宗　到岸寺
真宗大谷派　西念寺
真宗大谷派　順覚寺
真宗大谷派　妙円寺
曹洞宗　宝積寺
曹洞宗　賢寿寺
曹洞宗　称名寺
曹洞宗　浄珠院
曹洞宗　浄光寺
曹洞宗　興禅院
曹洞宗　地蔵寺

（東和町）が築城されて、その城主になります。以来二代続き、その後土沢城は廃城となりました。

大迫町の浄土宗到岸寺（238頁）は、相馬領（福島県）鹿島出身の僧が、奥州巡錫し開山しています。

## 富を信仰に捧げる町人
## 仲間同士で寺院開山も

町人が開いた寺院では、東和町浄珠院（120頁）が、江州屋の川村采女と大黒屋の小原民部によって開基。土沢城が構築された翌年のことです。また花巻市の浄土宗勝行院（160頁）は、豪商の清水甚兵衛が、土地を寄進して建立、その本尊阿弥陀如来坐像も清水の寄進によるものでした。鎌倉時代の作で、花巻市内の寺院が伝える唯一の国指定の重要文化財です。

清水甚兵衛は、後に南部藩の藩営鉱山となる水沢鉱山（北上市）を開いたといわれ、藩の御用達として巨万の富を得て天下の山師と称されました。信仰心も厚く、勝行院のほかに曹洞宗の地蔵寺（186頁）の地蔵堂を建立、また真宗大谷派の順覚寺（168頁）は、開創から堂宇建立まで大檀越として協力しています。同じ宗派の妙円寺（172頁）にも寄進しており、熱烈な念仏信者だったと伝えています。

北上市の曹洞宗称名寺（100頁）は、町内に寺院も庵室もなく葬送に不便だとして、時の寺社奉行竹村三郎兵衛が中心となり、それに佐藤典右衛門・石川伊兵衛・高橋道順・菊池忠兵衛の四人の町人が加わり草庵を建てたのがはじまりです。たまたま秋田から諸国行脚で訪れた旅の僧浄運を懇請して留め浄土宗寺院を開山しました。この寺院は戦後に曹洞宗に改宗します。

石鳥谷町の浄土宗鳥谷寺（214頁）は、橘清兵衛が開基。北上市の真宗大谷派西念寺（74頁）は、近江商人の上筒屋孫兵衛が開基した寺院です。

# 仏様さまざま ①

## 釈迦如来

如来というのは、真理を究めて悟りを開いた仏様をいいます。釈迦というのはインドのカピラ国の周辺に住んでいた種族名ですが、一般に仏教を開いた方を御釈迦様と呼んでいます。本名をゴータマ・シッタールタといい、インドとネパール国境のルンビニー出身の王族でした。

伝統的なバラモンの教えを批判し各地で修行、三五歳で悟りを開きました。以後生きる苦しみから脱して絶対自由の境地（涅槃）に至る道を説き、多くの弟子を育て八〇歳で没しました。曹洞宗では釈迦牟尼仏を本尊としますが、牟尼とは梵語で智者を意味しますから、釈迦牟尼とは「釈迦種族の中の智恵のある偉い先生」で、今は仏陀と呼びます。

## 大日如来

宇宙の真理、大きな仏の知恵を象徴するのが毘盧舎那如来です。これは奈良の大仏様で知られますが、この仏様を密教的に変名したのが、大日如来です。この仏様には金剛界大日と胎蔵界大日の二つがあって、金剛界大日は智恵を、胎蔵界大日は理を授ける仏様です。密教にとっては最高の仏様です。

## 薬師如来

薬師様は、病苦から人々を救う仏様で、浄瑠璃国の教主です。薬師様の台座に草花の文様があるのは、浄瑠璃国にある大薬草園を意味しています。平安時代以降の薬師様の印相は右手の薬指を少し前に出し、左手には薬壺を載せるものが多いです。この仏様を本尊とするのは、天台宗寺院に見られます。

## 阿弥陀如来

阿弥陀如来は、無量寿如来ともいわれ、四八の誓願をなしとげて極楽浄土を建国した教主です。自分を信ずるすべての人を極楽浄土に往生させるという仏様でもあります。

平安中期以降、末法の時代に入ったとして、人々が不安感をもつようになり、来世に救いを求めて阿弥陀信仰が広がりました。阿弥陀様の極楽浄土には九品という九区分があり、阿弥陀様は印相でそれを表わしています。天台宗・浄土宗・浄土真宗・時宗などの本尊に見られます。

# 大正時代以降
# 祈願に開山の寺院

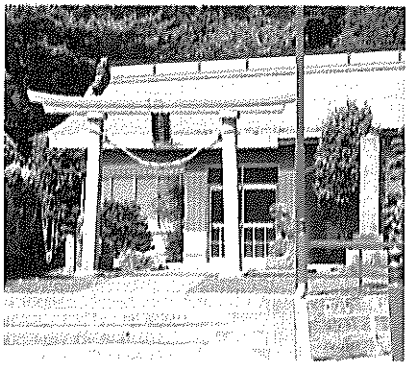
## 廃寺を救う新宗門宗派
## 寺院の空白地へ建立も

仏教寺院は江戸時代に集落の隅々にまで立地されましたので、現代になってからの開山は少なく、北上・花巻地方では八ヵ寺だけです。その中で寺院の空白地となっていた場所に立地したのは、ヵ寺のみで、祈願寺が多いのもその特徴といえます。

花巻市の遍照院（150頁）は、大正二年（一九一三）真言宗寺院として再出発しています。それ以前は自薬院といい、修験宗寺院でしたが明治の宗教改革で天台宗となりその後廃寺となりました。その寺院を受け継ぐ形で、遍照院には数多くの仏像が伝えられています。現在真言宗国分寺派に所属していますが、同派に所属する北上市の寺院は現在活動していませんので、県内では同派唯一の祈願寺です。

大正六年（一九一七）開山の東和町本妙寺（134頁）は、北上・花巻地方における日蓮宗の布教拠点として、本山孝勝寺貫主が訪れています。祈願寺であり、歴代住職により祈願の尊像が祀られています。それは蔵から発見された「白龍・黒龍大権現」であったり、川底から発見の「木仏像」、あるいは由緒ある「第八十二番観音」です。

花巻市の真言宗智山派不動寺（152頁）は、真言行者が断食し水垢離修行をし



㊤浄土真宗の正しい教えの布教に選択寺を開山。境内に修行した熊野権現を建立。

天台宗 歓喜院
真言宗豊山派 遍照院
真言宗智山派 不動寺
真宗高田派 選択寺
曹洞宗 南昌寺
日蓮宗 本妙寺
日蓮正宗 法王寺
法華経信行会 妙宗寺

て仏道に励んでいるうちに信者が集まり、寺院の建立となった寺です。

曹洞宗南昌寺（138頁）は、寺院密門の地湯田町に昭和三年（一九二八）開山したもので、七十数年後の今年、念願の本堂が完成、寺院の形態を整えることができました。

## 戦後の心の乱れを救済
## 祈願寺中心に八寺開山

戦後の混乱が未だいえぬ昭和二十一年（一九四八）「本化信行道場」の看板を掲げて布教した北上市の法華経信行会の妙宗寺（110頁）は、中世に日蓮宗を中心に祭政一致を徹底した御前法華が生まれた岡山県出身の住職が開きました。宮沢賢治が信仰し、彼の思想的基盤となった国柱会の創設者田中智学の教えを基にした宗門です。

京都に本願寺ができる前、浄土真宗をとりまとめた専修寺を本山とする真宗高田派は、県内唯一の寺院として昭和二七年（一九五七）北上市に選択寺（78頁）を開山しました。境内には東北地方では珍しい親鸞聖人の御絵伝堂が祀られています。また、守護神として祀っている熊野大権現社は、開基した住職が、二十数回にわたり熊野山に参詣し修行したことから、その分社を境内地に祀ったものです。

昭和五七年（一九八二）北上市に開山した歓喜院（60頁）は、天台宗陸奥教区内の百ヵ寺目の寺院です。この寺院の開山には、現住職の菩薩に充ちた人生が隠されています。若い頃看護婦で農家に嫁入りしますが、家庭内に病人が多く、ある日観音様を夢に見て、念発起信仰の道に入りました。

日蓮正宗の北上・花巻地方における布教の拠点として、花巻市内に法王寺（206頁）が昭和六一年（一九八六）開山しました。現在、この地方における日蓮正宗唯一の寺院であり、信徒は年々増加しています。

# 仏様 さまざま ②

## ■観世音菩薩

菩薩は、わが身を犠牲にして衆生を救ってくれる仏様です。菩薩の中でも特に人々に親しまれているのが観世音菩薩、つまり観音様です。

この仏様は救世というのが看板で慈善事業家という所です。観音様には六観音という兄弟、三十三観音という分身があります。聖観音＝地獄道、千手観音＝餓鬼道、馬頭観音＝畜生道、十一面観音＝修羅道、准胝観音＝人間道、如意輪観音＝天上道、以上を六観音といいます。

三十三観音には魚屋のように魚籃を持つもの、遊戯三昧のものもあります。

この仏様ほど現在主義で、人間と親密な仏様は少ないです。御慈悲がいっぱいで絶対的愛の仏様です。

## ■地蔵菩薩

物ごとに忍耐強く、動かざること大地のようだというので地蔵菩薩といいます。道ばたに石地蔵を立てるとき六地蔵を常としますが、これは観音様に六観音があると同じです。

地蔵信仰は中国には見られず、天台や真言の僧が考え出した仏であるといわれます。

## ■吉祥天

吉祥天は、中国の訳で摩訶室利といい、功徳天とも呼んでいます。容貌は天女の中で最もよいですが、初めは母の鬼子母神に似てお転婆娘でしたが、釈尊に感化されました。福徳を支配している仏様です。

## ■文殊菩薩・普賢菩薩

智恵を授ける文殊菩薩と理性の普賢菩薩は、共に釈迦如来の脇侍として釈迦三尊を構成しています。

## ■弁才天

弁天様の普通の姿は、美女の顔で宝冠をかむり左手に琵琶を抱き右手で弾いています。ご利益は名誉、福徳、弁舌、智恵、記憶、音楽などの仏様といわれます。

## ■四天王

仏様を守る従者で、東方は持国天、西方が広目天、南方は増長天、北方が多聞天です。四人は兄弟のように四方で仏を守っています。

# 北上・花巻地方の寺院の紹介

今回の北上・花巻地方の寺院調査は、岩手県の総務学事課が調査した「岩手県宗教法人名簿」（平成七年現在）を基本にして行いました。それによりますと、一市四町一村における寺院総数は一五ヵ寺ありましたが、実態のないもの、住職不在のもの、宗教上の理由によるものなど八ヵ寺が調査不能であり、実質的に九七ヵ寺を調査しました。

調査できなかった寺院は、北上市では貴徳院（本山修験宗）、大師院（真言宗国分寺派）、開証寺（浄土真宗本願寺派）、観音寺（高野山真言宗）の四ヵ寺、花巻市の常光寺（真言宗御室派）、昌光寺（真言宗智山派）、西光寺（時宗）、薬説寺（日蓮正宗）の四ヵ寺です。

市町村別では花巻市が最も多く一一ヵ寺、北上市一九ヵ寺、石鳥谷町と東和町が各一一ヵ寺、大迫町七ヵ寺、沢内村一ヵ寺、湯田町一ヵ寺です。宗門・宗派別には曹洞宗が最大で四一ヵ寺、続いて真宗大谷派一七ヵ寺、浄土宗六ヵ寺、真言宗智山派・本山修験宗・浄土真宗本願寺派が各五ヵ寺、天台寺門宗・時宗・日蓮宗が各三ヵ寺、臨済宗妙心寺派が二ヵ寺、天台宗・真言宗醍醐派・真言宗国分寺派・日蓮正宗・法華経信行会が一ヵ寺です。

# 北上・花巻地方の寺院　宗門・宗派別の内訳

北上・花巻地方の寺院を市町村別、宗門・宗派別に分類しますとつぎのようになっています。

**☆花巻市内の寺院（三一カ寺）**

【天台系】▼天台寺門宗　一カ寺
▼本山修験宗　一カ寺
【真言系】▼真言宗国分寺派　一カ寺
▼真言宗智山派　二カ寺
【浄土系】▼浄土宗　二カ寺
▼浄土真宗本願寺派　二カ寺
▼真宗大谷派　四カ寺
▼時　宗　一カ寺
【禅　系】▼臨済宗妙心寺派　一カ寺
▼曹洞宗　一二カ寺
【日蓮系】▼日蓮宗　一カ寺
▼日蓮正宗　一カ寺

**☆北上市内の寺院（二九カ寺）**

【天台系】▼天台宗　一カ寺
▼本山修験宗　二カ寺
【真言系】▼真言宗智山派　二カ寺
▼真言宗豊山派　一カ寺
【浄土系】▼浄土宗　一カ寺
▼浄土真宗本願寺派　一カ寺
▼真宗大谷派　三カ寺
【禅　系】▼臨済宗妙心寺派　一カ寺
▼曹洞宗　四カ寺
【日蓮系】▼法華経信行会　一カ寺

**☆石鳥谷町内の寺院（一三カ寺）**

【天台系】▼天台寺門宗　二カ寺
【真言系】▼真言宗豊山派　一カ寺
【浄土系】▼浄土宗　一カ寺
▼真宗大谷派　四カ寺
▼時　宗　四カ寺
【禅　系】▼曹洞宗　四カ寺

**☆東和町内の寺院（一三カ寺）**

【真言系】▼真言宗醍醐派　一カ寺
【浄土系】▼真宗大谷派　三カ寺
【禅　系】▼曹洞宗　七カ寺
【日蓮系】▼日蓮宗　二カ寺

**☆大迫町内の寺院（七カ寺）**

【天台系】▼本山修験宗　一カ寺
【浄土系】▼浄土宗　一カ寺
▼真宗大谷派　三カ寺
【禅　系】▼曹洞宗　二カ寺

**☆沢内村内の寺院（三カ寺）**

【浄土系】▼浄土真宗本願寺派　一カ寺
▼真宗大谷派　一カ寺
【禅　系】▼曹洞宗　一カ寺

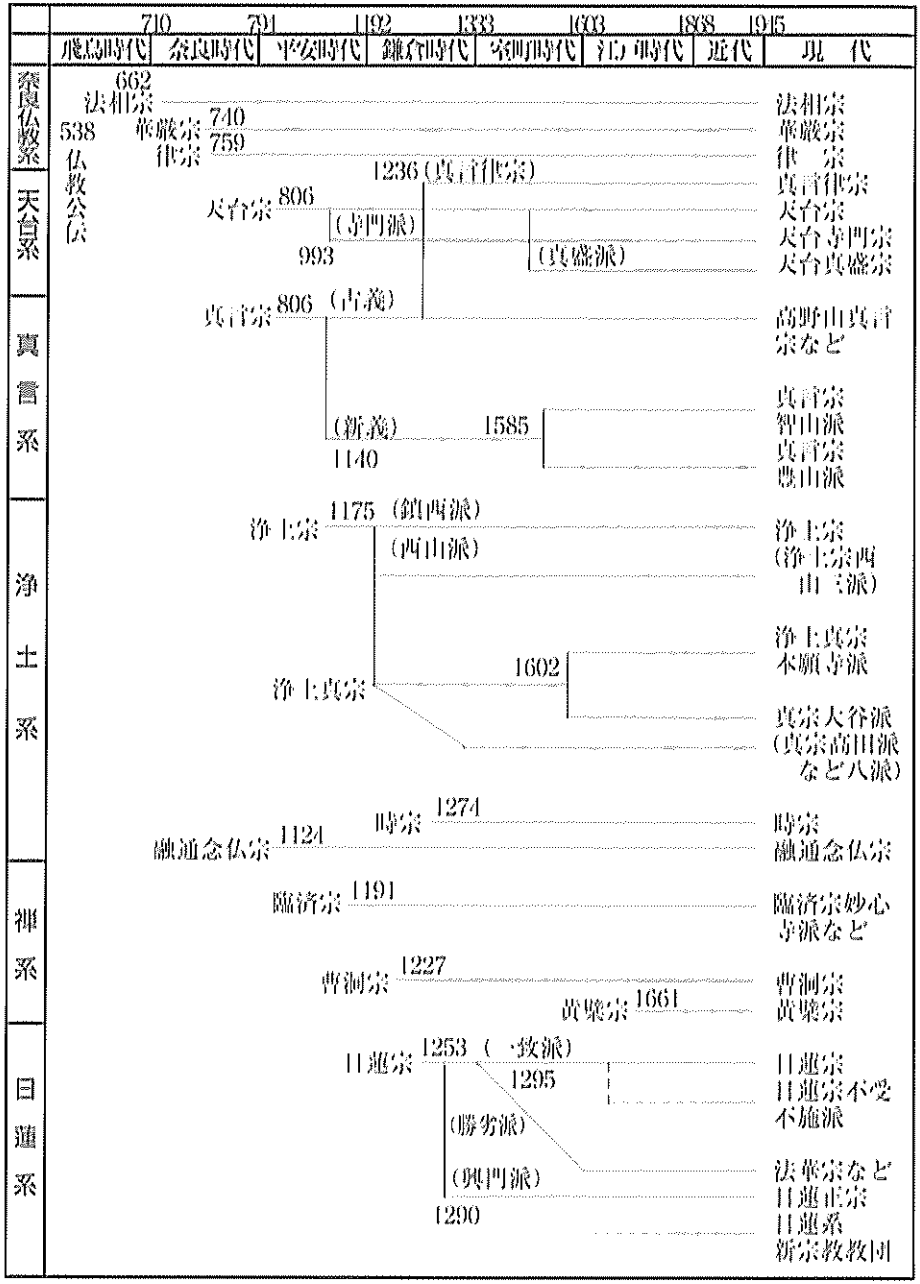
**☆湯田町内の寺院（一カ寺）**

【禅　系】▼曹洞宗　一カ寺

なお石鳥谷町の時宗寺院超勝院は、光林寺境内にあった八つの塔頭の一つのため光林寺に含め調査しました。

# 日本の仏教の流れ図

『宗教年鑑』(平成9年版・文化庁編)より



# 蝦夷との古代ロマン誘う修験の寺

## 松峰山 正覚院 本山修験宗

◆北上市東木山二九・一四五・一
◆電話（〇一九七）六六・三五七八
◆住職（第一六世） 千田定季

北上市の市街地から北東へ、県道北上東和線を車で行くと、二子町を通り北上川に架かる昭和橋を渡ると更木町に入ります。その中心部を通る東北新幹線のガードをくぐり、間もなく現県道と旧道との分岐点がありますが、旧道側に入って数分の所の山手側に正覚寺の古い堂が祀られています。

周辺はうっそうと雑木林に囲まれ、背後に旅籠山を控え、正覚院を祀るあたりを道地洞（童子洞）と読んでいました。今は訪れる人とてありませんが旅籠山一帯は人力で築いたと思われる基壇が山の四方に残されて、古代における宗教根拠地を思わせます。

この周辺を大竹集落と呼んでいますが、伝説によりますと、この地域に蝦夷の首長悪路王の弟大竹丸が住んでいて大和朝廷に抵抗していました。

その征伐に坂上田村麻呂が向かいますが、家臣の田原阿波守兼光が大竹山の頂上に陣し、麓の旅籠山にいる大竹丸の陣に矢を射たところ、大竹丸は右手でそれを受け留め、大地に投げて城に入ったといいます。

やがて田村麻呂は大竹丸を討ち取りますが、その弔いにこの地にお寺を建てたと伝えています。

その後大同二年（八〇七）東北地方を巡錫した慈覚大師が将軍寺とし、沢山に僧坊を置きました。その僧坊の一つで、将軍寺の麓にあった無名の庵を正保二年（一六四六）に寿栄秀山法師が再興して、聖護院末寺の正覚院としたと伝えます。そして明治五年（一八七二）に再び天台宗に戻りました。

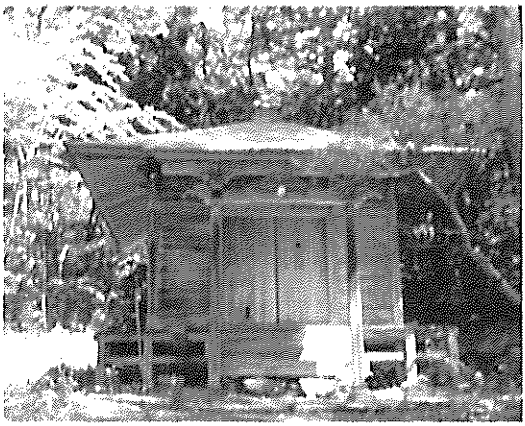
大正五年（一九一六）の周辺集落内の火災で類焼、仏像等の重宝の殆どは焼失してしまいましたが、本堂内にあった鎌倉時代作といわれる銅製の蔵王権現像や御守に用いたと考えられる青銅製の小像延命地蔵、平安時代のカワラケなどが残っています。

また地蔵堂の本尊子安地蔵尊は江戸時代作の木彫ですが、彩色された美しい仏像です。正覚院は、四世千田寿山、五世千田春孝と二代に亘って修行した住職が継ぎ、現在はその子千田定春が六世を守っています。

## 山中に巨大な古代寺院
## 大竹廃寺との関連期待

昭和四〇年～四一年（一九六五～六六）に岩手県文化財専門委員の板橋源氏と同司東真雄氏が旅籠山の発掘調査を行いました。

その結果、伽藍が五間（約一五㍍）、梁間四間（約一四㍍）の南西する堂の跡であることが判りました。大きな礎石と共に、土師器破片や古鉄や釘と共に鉄の喚鐘が発見されました。鉄の喚鐘は口径一・一㍍、高さ一四㌢、厚さ一・五㌢できわめて珍しく、今まで知られているものは全国で五例に過ぎないといいます。長野県や高知県の寺院に保存されている五点で、それに新たに大竹廃寺の喚鐘が加わりました。これは一〇世紀頃と考えられ県指定文化財です。



山腹を削り人工造成した平坦地に建てられたこれだけ規模の大きい古代寺院は岩手県内で初めてといわれ、この寺を中心に四方傾斜地が段々に削られていて、そこには僧坊など堂宇が建っていたと推定されています。

またこの地域を道寺洞と呼んでいますが、北上市内にはこのほかに道地や道地田の地名が残っています。岩手町・方井にも道寺沢があります。

当時の陸奥国の奥地開拓には、「道の寺」として宿舎を提供したのではないかと考えられています。正覚院は当時はこのように重要な寺だったと想定されています。

㊤今は山中にひっそり建つがかつては重要な寺。
㊦類焼免れた銅製の蔵王権現像は鎌倉時代の作。

# 極楽寺北谷と想定される古代寺院

## 福壽山 萬福寺 毘沙門堂

■北上市立花一六・一〇五
■電話（〇一九七）六四・七三〇三
■宗旨 修験宗 本山
■管理者 菅原康隆

北上市最大の観光地展勝地は、一般的には北上川に沿った桜並木を中心に桜の名所として知られ、シーズンには数十万の観光客が訪れています。ところが展勝地の公園範囲は、この桜並木は入口部分で北上山地内に奥深く広がっており、その面積はおよそ二百万平方㍍にも及んでいます。園地内には縄文時代のストーンサークルや、〇世紀の仏教遺跡、江戸時代の藩境塚など歴史遺産が数多く、また市立博物館・みちのく民俗村・サトウハチロー記念館など公共や民間が経営する資料館などが営まれて、いわば自然・歴史・文化の宝庫といえる地域です。

その一角、最北端の地に萬福寺毘沙門堂があります。寺内には国指定・市指定の仏像を中心とした数多くの歴史遺産が保存されていて、北上地方の古代から近世に至る歴史を知る上で欠くことのできない遺産です。

本堂内に納めていた慶安五年（一六五二）「半上棟札」の裏面に当寺の由緒が細かに刻まれています。それによりますと、嘉祥三年（八五〇）に慈覚大師が開山した助回山萬福寺であり、地域民の厚い信仰を集めていたお寺であることが判ります。

また、一説によりますと、現在の北上市稲瀬町の国見山一帯で栄えた古代寺院極楽寺は、寺域が広く東谷・西谷・北谷の地域にそれぞれ傘下の寺院を抱える山岳仏教の大寺院でした。それは天安元年（八五七）大和朝廷が営む官寺に準ずる寺と定めた寺院でした。

## 神社で廃仏から逃れる 国指定三体など文化財

助回山萬福寺は、その北谷にあった寺で、北谷にあった数多くの寺々を総括した寺ではなかったかと考えられています。度重なる野火や戦火で、極楽寺は殆ど灰燼に帰しますが、幸い北谷

の一隅で独立した森にあったため難を免れました。中世は和賀氏、近世は新渡戸氏の所領として保護され、また京都聖護院系列の天台修験の寺院として営まれてきました。名称も大徳院と変え、今はない本堂には不動明王を祀り、里修験者として布教していました。毘沙門堂はその附属堂宇であり、この建物は文政四年（一八二一）に再建を知らせる棟札が残っています。

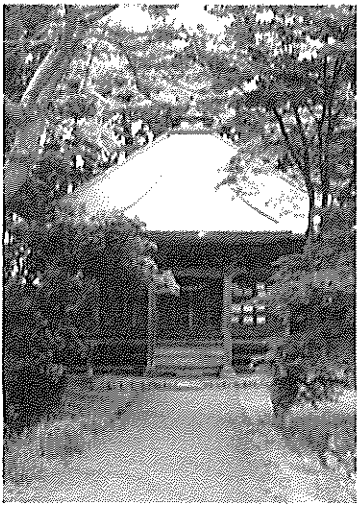
その後明治の廃仏毀釈の嵐を逃れるため、毘沙門堂を杉富神社と名称を替えて仏像を守りました。現在もここの屋号を「杉堂」と呼んでいます。

修験宗の復活と共に福寿山萬福寺と改め、修行道場は失われたものの毘沙門堂とその内陣の仏像はすべて守られました。その中で代表的仏像は、毘沙門堂の本尊「木造毘沙門天立像」であり、またその守護仏「木造持国天立像」「木造増長天立像」の合わせて三体は、いずれも平安時代作で昭和四年（一九二九）に国宝、文化財法改正により昭和二五年（一九五〇）に国の重要文化財に指定されています。

そのほかの仏像に一一世紀作と考えられる木造毘沙門天立像の小像、鎌倉期の檀光童子立像があって、いずれも北上市指定の文化財です。また奉納された扁額や絵馬も数多く、江戸の祐筆家佐文山筆「毘沙門堂」額のほかに、新渡戸氏が奉納した絵馬に「竹虎図」など六点。更に北上川舟運に関する資料として、文化五年（一八〇八）奉納の「艫絵馬」、そのほか江戸時代の句額なども保存されています。

㋑極楽寺一山の北谷と堂宇と考えられ平安時代の仏像など数多くの寺宝が伝承する。国指定文化財の毘沙門天立像。

㋒廃仏毀釈から逃れるため杉富神社と一時名称を替えたが戦後萬福寺に戻る。



# 宗教改革の難を逃れた修験の寺院

## 薬王山 光明院 本山修験宗

◆北上市和賀町後藤一三一四三
◆電話（〇一九七）七三一七八三五
◆住職（第二一世） 長嶺良輔

JR北上線藤根駅から北へ約四キロ、また県道南笹間・黒沢尻線を北西へ向かい、花巻市南笹間から南へ数百メートルの所がかつての後藤村（現北上市）の最東端で、村域はそこから西へ細長く奥羽山麓まで広がっています。光明院は最東端の道筋に営まれていて山門が目につき、通称坊様と呼ばれています。

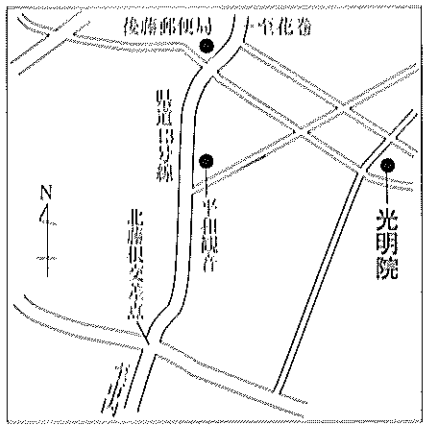
かつて境内周辺は、老杉や常緑樹の巨木に囲まれ閑静な所でしたが、戦時中の供木によって、現在は老木は殆どなくなり、周囲は見渡す限りの田園地帯となりました。

当院は神変大菩薩（役の行者）を宗祖と仰ぐ修験の寺です。開祖の記録は残っていないので詳細は判っていませんが、先々代開祖由緒世代書によりますと、当院は大峰本山修験宗で、西京聖護院宮御門跡の末とあります。

寛永六年（一六二〇）七月、一世栄山法源法印のときに法性院の院号を賜ったとあります。その当時の寺院は、南笹間村（現花巻市）の赤坂にあったと伝え、その場所には「薬師畑」という地名が残っています。

安永元年（一七七二）、四世峰覚源隆法印の代に、現在地に移転して、寺を建立、光明院と改称しました。

幸い明治の宗教改革にも難を逃れ、戦後も続きましたが、昭和三一年（一九五六）一月火災によって焼失。本尊薬師如来はじめ阿弥陀如来、不動明王…像のみが助かりました。




昭和三七年（一九六二）仮本堂として再建。本尊は秘仏とし、前置きの薬師如来坐像を平成一〇年仏師佐藤瑞王に依頼し奉納しました。現在新本堂を計画中で、明年九月落慶の予定です。

寺宝には本尊薬師如来、不動明王のほか室町時代作と伝える北上市指定文化財の銅造薬師如来懸仏があります。

また守護仏の金銅仏として地蔵菩薩像と宇賀神像があり、平成一四年には

仏師佐久間渓雲に依頼して役の行者像も奉納しました。

現在正月から三月にかけて春祈祷を行い、諸神諸仏の供養の加持祈祷、また四月八日には本尊薬師如来を祀る年行事が行われて参詣者が絶えません。

## 困難な開田事業に協力努めた囚人人夫の教化

延宝七年（一六七九）に、南部藩命により奥寺八左衛門定恒が開田事業を行うとき、上堰・下堰・後藤堰の掘削作業に囚人を人足として使役したいと藩主南部重信公に願い出ました。

その工事は難工事で、十五年を費やしました。そして完成と同時に、使役した囚人は罪を免じられて、新堰から水の揚る各自の好きな場所に土着して田畑を開いたと伝えます。

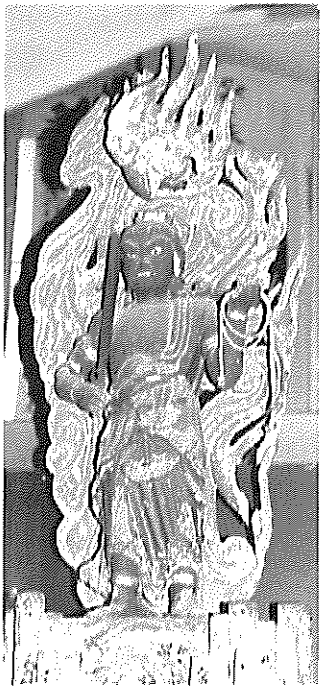
ところが元々囚人のため、気性は荒く鞭だけでは使役の管理は難しく、そこで徳の高い僧侶に依頼して民心を安定させることになりました。その役割を担ったのが、当院・一世の法源法印だったといいます。奥寺氏を助けて囚人の教化に努め、工事の成功に大きく貢献しました。

法源法印は修験修行のため入峰し、そして得た知恵や行法を巡錫していた途中でもあり、説法教化に当たり民心の安定に寄与するところが大きかったと伝えております。

当時のこの地方は、一面の荒野で、狐や狸、狼などが横行する所だったといいます。法源法印は錫杖を構え、小刀を携し法螺貝を吹いて山野や人家を巡り、病に伏せる者があればこれを見舞い、仕事を怠っている者には働く喜びをうえました。

㊤明治の宗教改革から逃れたが、昭和31年の火災で本堂を焼失、同37年建立の仮本堂。山門から望む。

㊦薬師如来と共に本尊の不動明王。



# 苦難の人生体験から寺の建立発願

## 妙法山 歓喜院 天台宗

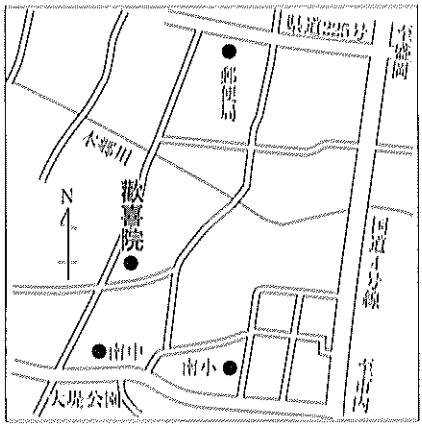
◆北上市下鬼柳一七・二六・四
◆電話〈〇一九七〉六七・二四二二
ファックス六七・二四二二
◆住職〈第一世〉 髙橋妙齋

北上市の南側大堤地域には、旧南部領と旧伊達領の境が東西に走っていてこの境を中心に南北の地域は異なる生活文化圏を形づくっていました。現在は同じ市域に含まれていますが、今なお小学校の学区編成などに領境による区分が生きています。

その領境近く旧伊達領内に南小学校と南中学校がありますが、南中学校にほぼ隣接する旧南部領内に歓喜院の真新しい堂宇が並んでいます。

この寺院建立には、現住職の苦難に充ちた人生の生活体験が大きく関わっています。大正一五年（一九二六）北上市江釣子に生まれた現住職は、若い頃看護婦として病人の看護に当たっていました。そして同市鬼柳町の農家に嫁入りしますが、家庭内では病人が相継ぎました。昭和三八年（一九六三）の秋のある日、観音様を夢に見て、信仰の道に入ることになります。御経を買い求め自己流で読経にふけっているうちに、友人や周囲の人人の病気や悩みの相談を受けるようになりました。

またある時から幾度となく「比叡の山に登れ」とのお告げがあり、昭和四八年（一九七三）八月、発願発起して比叡山に登り修行、出家得度しました。その後も修行や授戒を重ね、昭和五二年（一九七八）に伝法大阿闍梨の位を授けられます。そして翌年には広学竪義を修めました。




昭和五七年（一九八二）八月に非法人「歓喜院」を設立、鬼柳町ノ木の自宅を増改築して布教や祈願・祈祷につとめました。この間、西宮市の円満寺住職森園法瑞和尚には大変なお世話をいただいております。

### 陸奥教区での百ヵ寺目 関東圏にも多くの信者

信者も多くなり自宅では手狭となり寺院建立の強い要望がありまして、新

寺建立を思い立ちました。幸い現住職が所有していた六千平方㍍ほどの雑木林が、南中学校周辺にあってそこに建立することになりました。

昭和五七年（一九八二）一一月、不動堂が完成、一年後の同五九年（一九八四）には五月に本堂、九月に東庫裡と相継いで完成しました。私財を投じまた故森園法瑞和尚並びに中尊寺諸堂の住職、信徒等の多大の協力を得まして、昭和六〇年（一九八五）四月二八日に、天台宗寺院として堂宇が完成しました。そしてこの年に歓喜院は宗教法人になりました。

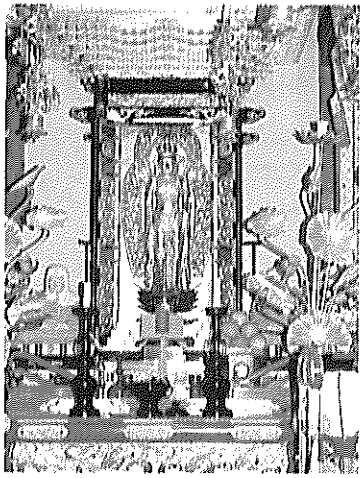
この新しい寺院は、青葉・岩手・宮城二県で構成する天台宗陸奥教区（現在の宗務所は中尊寺内にある）における百ヵ寺目の寺院となりました。

妙法山歓喜院の開山、落慶法要並びに第一世妙齋住職の晋山式は、本山比叡山延暦寺の叡南覚範大僧正の大導師のもとに執り行われました。

昭和六一年（一九八六）には三十三観音霊場が完成、翌年には西庫裡が完成しました。また平成元年には山門が完成し、その後も数々の堂宇を建立して現在に至っています。

当院は檀家を持たない祈願寺で、本堂に十一面観世音菩薩を本尊とし、脇に天台大師・伝教大師を祀り、本堂西側に阿弥陀如来等を祀っています。

現在信者は市内のほかに盛岡市から水沢市まで各地、釜石市、仙台市、関東地方にも多く、春と秋の大法要には多くの僧や信者がお参りします。また法要は副住職の瑞海和尚が主に行い、兄弟四人のうち三人までが僧籍を持ち天台宗の布教に努めています。



(右)俗世において苦難の人生を体験した現住職が、観音様を夢に見て信仰の道に入ることになった。その有難い仏様十一面観音菩薩が御本尊である。

(上)落境に隣接の南部領内に開山した歓喜院本堂。

# 華やかな極楽寺の文化を伝える寺

## 巌谷山 如意輪寺（いわやさん にょいりんじ）

◆北上市稲瀬町内門岡六八
◆電話（〇一九七）六四・七八六〇
◆住職（中興第一八世）菊地英覚

真言宗智山派

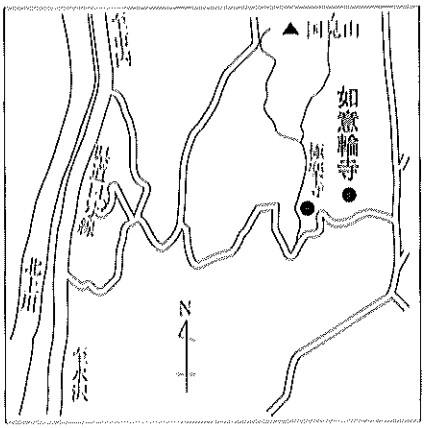
北上川に架かる珊瑚橋を渡り、県道北上・一関線を五㌔ほど走ると、北上市稲瀬町の中心部前田集落の三叉路に至ります。ここから東へ二㌔ほど北上山地内に入ると、四方山に囲まれた盆地内に内門岡集落があります。この周辺一帯が古代寺院極楽寺が境内地としていた地域で、その寺院跡の礎石が境内地から発掘されています。

如意輪寺は、数多い極楽寺の塔頭の中の中畑坊が独立して寺院となったものであり、寺院内には古代からの優れた仏像が安置されております。

天安元年（八五七）大和朝廷から準官寺として指定された極楽寺には、別当坊・北之坊・東之坊・大井坊・学頭坊など二十六の塔頭があったと伝えられています。そのうち如意輪寺が建っている場所には、これら坊舎の中心をなす中畑坊があったと伝えられ、当時では金堂に匹敵する重要な堂宇ではなかったかと考えられています。

そこに応永五年（一三九八）に性空僧都が寺院を再興しました。また一説には大平山と呼ぶ近郊の山の麓にあった如意輪坊を移したとも伝えます。

寛永一七年（一六四〇）、伊達藩の一家で重臣だった中目長次が江刺郡上門岡村（現北上市）に封じられたとき、如意輪寺と改めて中目侯の菩提寺となり、仙台の龍宝寺末寺となりました。しかし間もなく山火事で類焼し寺宝や古記録も失いましたが、幸い本尊の如意輪観音は難を逃れたと伝えています。しかし、最近の発掘では火事の跡が出てこないともいいます。




いずれ本堂棟札に元禄八年（一六九五）広栄法印の代に大檀那伊達綱村で再建したとありますから、現在の本堂はそれ以来火災に遭っていないことになります。当寺は昭和一九年（一九五四）から同二〇年まで寺子屋となっていましたが、中興一七世菊地英良僧正か

ら専任住職となりました。

## 宗様式もつ釈迦三尊像
## 極楽寺の繁栄偲ぶ仏様

当寺から五〇㍍ほど離れた場所に、現在県指定史跡になっている釈迦堂があります。そのお堂の本尊であった釈迦三尊像が、明治時代に如意輪寺に移されました。

説法釈迦如来坐像を中心に、右側には獅子に乗った文殊菩薩、左側には象に乗った普賢菩薩が安置されています。いずれも鎌倉時代初期の作で、宋の彫刻様式をもつ優れた仏像です。

宋様式の仏像は関東以北ではこの仏像以外に全くなく、しかも説法の姿をしている釈迦如来を中心とした文殊・普賢の釈迦三尊像は、同一人の作ではないかと考えられる優秀な作品です。一説には運慶作とも伝えられ、岩手県の指定文化財です。

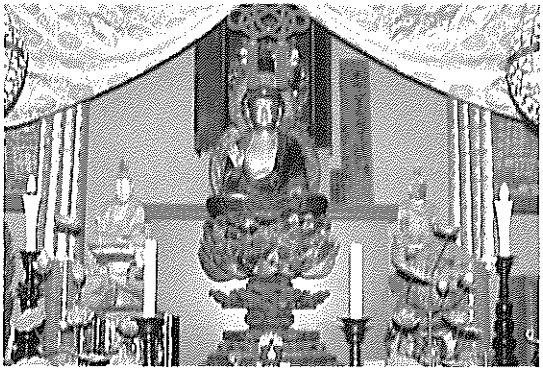
釈迦如来坐像は仏身座高・・・〇㌢総高・・五七㌢、・・・世の作です。右側の脇侍の文殊菩薩像は、ともに総高七・㌢で、釈迦如来像と同じく・・・世紀の作品です。なお普賢菩薩の胎内に本彫の長足五輪塔が祀られていて、これは岩手県最古のものです。

なお、このほか北上市指定の文化財に本尊の如意輪観音（総高五・㌢、・・五世紀作）、薬師堂境内の仮神（高八・㌢、・四世紀前期）があります。

霊場札所として江刺・十・番札所では第・番が国見山極楽寺ですが、郡内を巡り極楽寺と・五〇㌔離れた如意輪寺が・十八番札所です。そのほか新江刺八十八番札所では十九番、また陸中十・・佛では・番札所となっています。

㈩如意輪観音を御本尊に元禄８年(1695)に建立の本堂。

㈫鎌倉初期の釈迦三尊像は宋様式を持つ数少ない彫刻。



# 極楽寺の一坊で河野通信流刑の寺

## 上台山 安楽寺（うわだいさん あんらくじ）

真言宗智山派

◆北上市和賀町上鬼柳一〇五
◆電話（〇一九七）六五・〇七一六
ファックス六五・〇八一三
◆住職（四代目）　司東遺雄

岩手県内最古の寺院極楽寺・山二十六坊の一つであったところに、安楽寺の草創があり、慈覚大師の開山を伝説としています。

極楽寺が準官寺として盛んであったころ、西方安楽の弥陀として阿弥陀如来を本尊とした安楽坊という庵があったと伝えています。

永久二年（一一一四）の永久の変で、上皇方の将だった河野通信が敗れて江刺の地に流され、極楽寺に預けられました。そのときここの坊舎に庵を建て「隠岐院」と称し、後鳥羽上皇の護持仏の十一面観音を祀していました。

そして河野通信は、二年後の貞応二年（一二二三）五月・九日、六九歳で生涯を閉じます。

その亡骸を埋葬した「聖塚」は、国宝の「一遍聖絵」に描かれていましたが、その場所がどこなのか特定されずに数百年間を経てきました。

ところが安楽寺の先代の住職であり歴史学者でもあった司東真雄氏が、寺有地内にその擬定地を発見。昭和四〇年、一九六五六月四日それが間違いなく聖塚であることが確定しました。

司東真雄氏は宗教者として真言宗智山派の大僧正となり、また歴史学者としては宮城県史や北上市史の編さんに数多くの功績を残されています。平成六年八九歳で遷化されました。

安楽寺の寺略を年代的に調べますと

延喜六年（九〇六）から安楽坊が置かれ、その後十一代を経て仁治元年（一二四〇）に出羽国月山寺の空音が中興します。そして、十五代続きました。

江戸時代に入って、上台坊の伝賢が、安楽坊・上台坊・隠岐院の三つの堂宇を合体させて、上台山隠岐院安楽寺と寺号を公称しました。

その後伊達氏の御朱印寺となり、一貫五百文（一五石）の寺領を与えられました。江戸時代は京都の醍醐三宝院

の末寺となりましたが、明治に入ってから京都の智積院の末寺に代わり、真言宗智山派の寺院となっています。

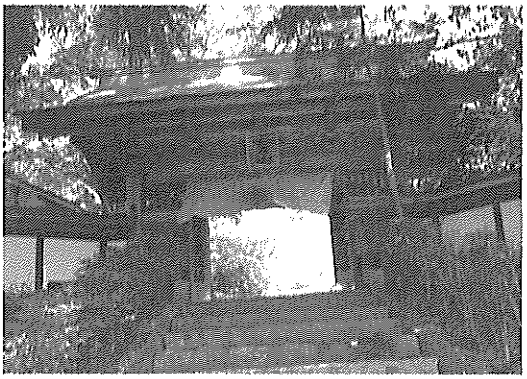
戦時中に梵鐘が軍需品として供出され、鐘楼堂だけがさびしく残っていましたが、集落有志や檀信徒の協力によって復興、朝夕の梵鐘が響くようになりました。

聖塚の発見によって、全国各地から河野通信をしのんで参詣客が多くなっていますが、また江剛二十三観音霊場の第二九番札所として近隣からのお参りも多くなっています。

## 祈祷寺から菩提の寺へ
## お盆には門岡念仏剣舞

密教寺院の場合、他の宗派に比べて檀信徒が少ないのが実状ですが、安楽寺では新しく墓地を区画して申し込みを受け付けるなどの努力が実って、前住職時代の檀家の二倍以上に及ぶ約二百戸の信者がお寺を支えています。

年間行事としては、元旦の祈願会、春と秋の彼岸会、お盆の施餓鬼会などが行われますが、なかでも施餓鬼会では、地元に伝承の唯一の民俗芸能である門岡念仏剣舞の奉納が恒例の行事となっています。このほか四国八十八ヵ所巡礼や七五三祈願会、また年越しには除夜の鐘と夢灯りが行われます。



## ■「聖塚」発見の秘話

歴史家でもあった前住職司東真雄氏は、「聖塚」の発見に二十数年の年月を費やしています。聖塚の名称は集落の人達は誰でも知っていましたが、その場所を特定できなかったのです。ところが昭和三九年、土地改良区の開田事業が行われることになり周辺の山林を伐採したところ、「聖絵」に似た風景を発見、それが聖塚と確定しました。

㊤寺有地内に河野通信の墓を発見し話題高まった寺。
㊦流刑された河野通信の念持仏だった隠岐院観音像。

# 岩手県内最古の歴史を誇る定額寺

## 国見山 極楽寺（くにみさん ごくらくじ）

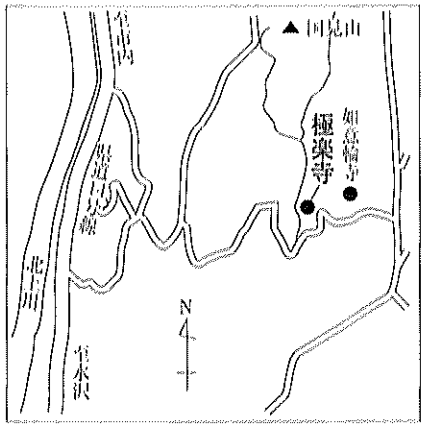
真言宗智山派

◆北上市稲瀬町内門岡三〇
◆電話（〇一九七）六五〇七一六
ファックス六五〇八一三
◆住職（世代不明）司東道雄
安楽寺兼務住職

東北有数の桜の名所『展勝地』は、北上川に沿い二㌔にわたるソメイヨシノの桜並木で知られますが、実はこの桜並木は展勝地の入口部分で、中核をなす部分は北上山地内にあります。ここにはシロヤマザクラやベニヤマザクラなど数多くの種類の桜が、表千本・裏千本・奥千本の地域に植栽され、見事に春の季節を演出しています。

この展勝地の奥千本に当たる地域に極楽寺が祀られています。岩手県内で最も歴史が古く、しかも高い格式を持った寺院でした。そもそもこのお寺は大和朝廷が東北地方を治めるために延暦二一年（八〇二）坂上田村麻呂に築かせた胆沢城の真北十㌔の地点に、東北計略の宗教根拠地として慈覚大師が建てた寺院です。胆沢城築城から五十二年後のことでした。

この寺院を国営の寺に準ずる資格の『定額寺』に指定すると文徳天皇から勅命がでています。それだけ重要な寺院であり、住職は勅命で下向したといわれます。ご本尊は阿弥陀如来で、本堂前には浄土庭園が築かれました。池の中島は八葉蓮台を表わし座主坊があり、大池の回りの峰々にはそれぞれ神仏が祭祀されました。西谷・東谷・北谷に二十六坊七百堂宇があったと伝えられています。中腹には一丈八尺（約六㍍）の兜跋毘沙門天、独古峰には十一面観音が安置され、また五重塔もありました。そのような当時の繁栄を物語る極楽寺・山の復元模型が、現在市立博物館で見ることができます。




延喜年間（九〇一～二三）、文治五年（一一八九）、慶長八年（一六〇三）と度重なる野火により全山が焼けてしまいます。その都度復興されますが、江戸時代の慶安二年（一六四九）には幕府の命令で伊達氏が復興しました。

この寺院は元禄二年（一六九〇）までは宗派に所属しない山寺といい、

独立した本山でした。住職は奈良・比叡山・高野山等で学んだ僧正が携わったのです。そしてその年の○月○日から真言宗に所属することになり、京都智積院の末寺となりました。

## 明治時代の野火で壊滅 昭和の本堂を復興する

明治○九年（○八九六）○月四日の大野火で、山が全滅しました。現在わずかに残っている遺物は、平安時代の「龍頭」や「錫杖頭」で、いずれも国指定の文化財です。また鎌倉末期の石塔婆八基もあり、県の指定文化財です。さらに極楽寺遺跡の発掘も進み、すでに五重塔跡・方七間堂跡・阿弥陀堂跡などが発掘され、これらは現在県指定史跡ですが、近い将来国の指定になることが約束されています。

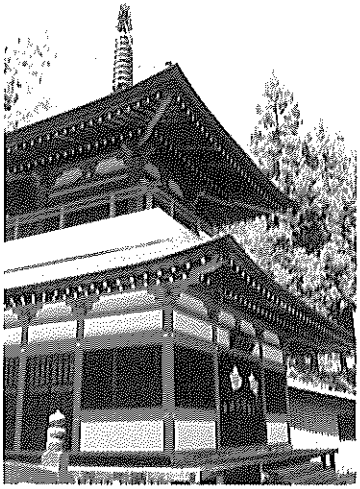
このように由緒ある古代寺院を復興させようと、昭和五五年（○九八○）には、本堂「無量寿堂」や鐘楼などを再建、真言宗寺院として新たな信者を集めています。またこの周辺は観光地としても知られ海抜○五○㍍の独古峰は国見山と呼ばれて○六○度の眺望がすばらしく、レクリエーションや○十○観音巡りに訪れます。

## ■西行法師の歌碑

文治○年（○○八七）、平泉の秀衡を訪れた西行法師が極楽寺を訪ね、

みちのくの　門岡山のはとどすい
なせのわたり　かけてなくらん

と詠んだと伝えられ、独古峰への登り口の岩に歌碑が残されています。



㉘昭和55年（1980）に、昭和の真言宗の本堂として無量寿堂を再建した。そして新たな極楽寺の信者を集める。

㉙極楽寺境内六角堂に祀る十一面観音像は江刺三十三番札所の第一番。

# 廃仏の嵐にゆれた和賀氏の祈願所

## 金剛山（こんごうさん）遍照寺（へんじょうじ）

◆北上市二子町第四九六
◆電話（〇一九八）六六・二六六五
◆住職（四世）久米真亮

真言宗豊山派

JR東北本線村崎野駅から東へ一・二㌔、北上駅から北へ県道北上・東和線を六㌔、北上市二子町の中心部街並みの西側に遍照寺があります。ここは、市立公園飛勢城跡の麓に当たります。

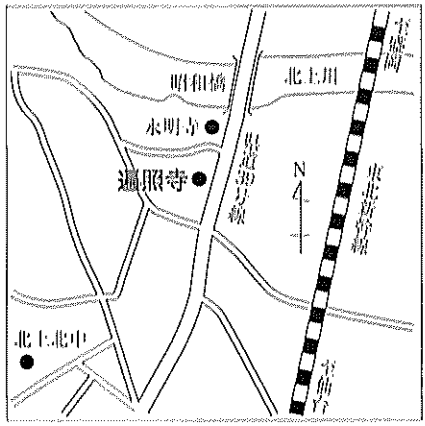
建暦二年（一二一二）、和賀氏の祖源忠明が亡父忠頼の遺領を将軍源実朝より拝領、和賀郡更木村（現北上市）の梅ヶ沢に築城居住しました。

そのとき同村の中宿に真言宗の一寺を建立し、新山寺と号して和賀氏一家の守護仏である慈覚大師作の不動明王を本尊としたと伝えられています。その仏像は、現在の本尊の胎内に秘仏として安置されています。

その後和賀氏が二子村（現北上市）の飛勢ヶ森に城を移すと同時に、森の北側にある坊館という所に新山寺を移転し、寺号も正法寺と改めました。そして和賀氏の祈祷所となり、また和賀氏の守護神である白鳥神社の別当職もかねていました。

天正一八年（一五九〇）、豊臣秀吉が小田原城を攻めるとき、当主の義忠が幼少のため参加しなかったことで、飛勢城は豊臣方に攻められ滅ぼされます。そのとき、正法寺も兵火にかかって焼失、そのために開基等の資料は一切失ってしまいました。

南部藩の領地となった寛永年間（一六二四～四四）、現在地に太宗庵と呼ぶ庵を建てました。そして高野山遍照光院より「遍照寺」の寺号と、「金剛山」の山号を賜りその末寺となりますが、南部領内の真言宗寺院は、すべて盛岡の永福寺の末寺となることになり、そして更に花巻地区内の寺院は花巻の八幡寺末寺となりました。




### 諸仏像は償却や盗難に有志の強い要望で再興

天明年間（一七八一～八九）～文化年間（一八〇四～一八）の頃、本堂より

出火し、寺宝や記録類は再び焼失してしまいます。中興・一世子音法印の代ですが、このとき子音法印は火中に飛び込み本尊のみを火災から守ったと伝えております。子音法印は直ちに再建に取り組み、古い民家を改良して仮本堂とし布教に努めました。再建は江戸時代末期と考えられていますが、これも資料は残っていません。

それはすさまじかった明治の廃仏毀釈の嵐によるものと考えられています。寺院に祀られていた仏像は捨てられ焼かれ、また檀家が持ち去ったものもあったといわれます。

従って資料も失った現在、どんな仏像が寺院に祀られていたのかさえも判らない状態となっています。

しかし幸いなことに、持ち去るに及ばないと思った仏像なのか、寺院前に植栽の伽羅木の下に十数点の木彫の小仏像が捨てられていました。十王像ではないかと考えられ、今後の調査を待たねばなりませんが、現在本堂内に大切に祀られています。

明治・五年（一八八二）檀家石志の強い要望によって寺院の再興が決まりました。昭和四〇年（一九六五）には本堂をトタンに葺き替え、また同五八年（一九八三）には銅板葺きに改装、扉裡も新築し面目を一新しています。

当寺から去った檀家も戻ってきており、また近くにあった浄土真宗寺院が笹間村（現花巻市）に移転し、その檀家が入信するなど祈願寺から菩提寺に変わってきているのが実状です。

本堂前の伽羅木は、和賀氏滅亡の際の兵火を逃れ、その上に本尊不動明王が立っていたとの由緒ある名木です。

㈭和賀氏の祈願所も領主が南部氏との交替でその座を失い、明治の廃仏毀釈で廃寺に追い込まれるが再興。

㈮仏像は焼かれたり盗まれたりしたが、持ち去るに及ばないと思ったのか寺院前に捨てられていた小仏像。

# 領地追われ伊達領立地の和賀の寺

## 千壽山 正行寺 浄土宗

◆北上市口内町字中野八七
◆電話（〇一九七）六九・二四三二
◆住職（第二九世） 昆野大樹
刊岸寺兼務住職

北上市口内町を東西に貫通する国道一〇七号線のほぼ中央にある飛集落から左折すると、間もなく水抑集落に至ります。ここは南部領と接する伊達領最北端で、かつては領境警護のために御番所が置かれていました。その御番所跡の近く東側の方向にこじんまりとたたずんでいる正行寺が見えます。

檀家も少なく訪れる人とてない小さな寺院ですが、実は中世の豪族和賀氏とゆかりの深い由緒ある寺で、支配者が南部氏に代わり領内から追われて隣接する伊達領内に入り、細々と寺を構えたのでした。

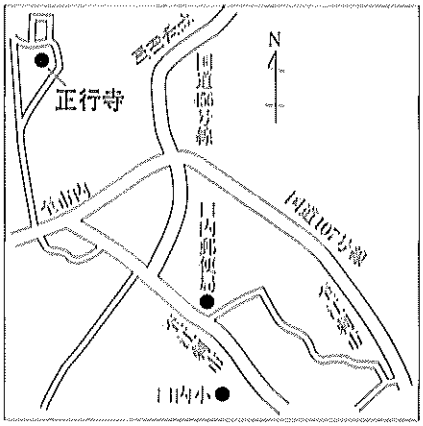
正行寺が開山したのは和賀氏の居城飛勢城下の一子村（現北上市）川端集落で、寺院が建てられた場所には現在民家が建っています。そこには正行寺跡の地名が残り、しかも境内だった一角には樹齢八百年という銀杏の巨木が、乳木を垂れて寺離の歴史を語り伝えています。弘法大師が植樹したという伝説が残る巨木です。

豊臣秀吉の奥州仕置によって領地を失うことになった和賀氏は、天正一八年（一五九〇）南部勢らとの戦いで遂に飛勢城が落城、自らも戦死して滅亡しました。和賀氏の菩提寺であった正行寺も同じ運命を辿ることになったと考えられます。

伝えによりますと、和賀義忠の家臣であった斎藤九郎右衛門が、和賀の旧領地で伊達領となった水抑村（現北上市）に帰り供養しました。斎藤氏はこの地に就農して、止市姓に変え菊を守ったといいます。

水抑集落の周辺は、かつて和賀氏の勢力が及んでいた地域で、家臣の中には水抑半人の名前も出てきます。

ですから伊達領になったとはいえ土地の人々はもとより、和賀氏に好意を持っていた伊達氏からも供養の寺を建てることを黙認されたのではないかと



考えられます。いずれにしても、和賀氏ゆかりの寺院が伊達領内に移転したのでした。

## 今に残る和賀主従の墓
## 再建途上に類焼の悲運

戦火に遭いまた野火による類焼で、資料は全く残っていません。寺伝によると永応二年（一六五三）に良源上人が浄土宗に改宗して以来現在に至っていること。また移転後最初に建立した場所は、現在地より東側のひと山越えた所にあったと伝えます。

また寺有地内に和賀墓と呼んでいた五輪塔や宝篋印塔があって、前者は鎌倉時代、後者は室町時代のものです。これを祀っている五輪塚は大きさが、○m円形で、周囲には二重の堀のような痕跡が残っていました。

これが和賀氏主従の墓であることは家臣の子孫といわれる辻市家に伝承の文書によって判りました。

正行寺初代からの住職は全く判っていませんが、二六世には菅野勇淳上人がおり、また、七世中興上人尾野秀賢は、大正八年（一九一九）から翌年にかけて正行寺を新築し復興しました。

そして、八世秀徳豊軒は、大道の到岸寺や名古屋の建中寺で修行の後、昭和二二年（一九四七）に住職を継ぎ同二七年（一九五二）には現在地に仮本堂兼庫裡を新築して移転しました。

ところが昭和六〇年（一九八五）七月の野火によって類焼してしまいました。その火災で本尊阿弥陀如来坐像など二体の仏像を失いました。

阿弥陀如来は総高六六㎝の一四世紀の作品で、温和な表情の貴重な仏像でした。本堂は檀信徒の協力で昭和六二年（一九八八）落慶しますが、庫裡の建立は今後の課題です。

㈦再建途上の昭和60年に類焼、新築された本堂。
㈧和賀墓と呼び和賀氏主従墓地と判った五輪塔。

# 是信房に帰依し和賀氏家臣が開山

## 玄賀山 光林寺（げんがさん こうりんじ）

浄土真宗本願寺派

◆北上市和賀町長沼七・七三

◆電話（〇一九七）七三―五〇八三
ファクス七三―五〇八三

◆住職（第一八世）岩岡智志

北上市の中心部から国道一〇七号線を西へ向かい、JR藤根駅の近くの藤根十文字から南へ徒歩十分ほどの所に光林寺はあります。

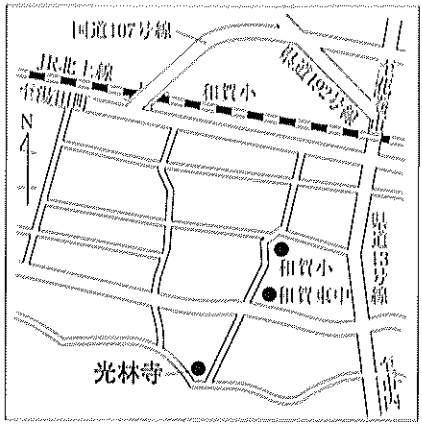
当寺の寺伝によれば、最初に寺院を開いた場所は和賀郡岩崎村（現北上市）坂水で、岩崎城主和賀主馬守政親の家臣武田玄賀が開基しました。

玄賀はあるとき是信房のいる青水山の御坊に詣で、その教導を受け発心して出家しました。そして浄智の法号を賜わり、草庵を建立して玄賀山と称しました。時に玄賀、三〇歳でした。

開山した時期は判っていませんが、開基の釋浄智が天文一八年（一五四九）正月に、七四歳で入寂していますので、開山は永正二年（一五〇五）の頃だろうと考えられています。

二世浄空、三世子専まで法脈を継ぎましたが、和賀氏が慶長六年（一六〇一）に滅びると共に、子専も当寺を退院しました。そして暫くの間、無住の時代が続くことになります。

その頃、武田従三位大膳大夫基綱の三男民部之輔友則の子友綱は、常陸国（茨城県）に居住していましたが、織田信長の石山合戦の際に加勢のため馳せ参じて戦いました。そのとき法の威徳を感じ顕如上人に帰依し、浄隆の法号を賜わります。そして、宇を建立、二人の子供を育て、その名を浄専と定信と号しました。




浄専は奥州の旧跡を尋ねて行脚の途中、武田玄賀の名跡である当庵に宿泊します。浄専、二〇歳でしたが、縁りの寺が荒廃している様子を見て歎き、再建の志を立てました。

そして京に上り、万治三年（一六六〇）御本尊と寺号光林寺を拝領しました。四世を継いだ浄専は寛文六年（一六六六）五六歳で亡くなります。

五世玄了の代に、御本尊の木造阿弥陀如来像を本寺西本願寺より拝領して

おります。また、正徳元年（一七一一）六世智玄の代に、開創の地岩崎村（現北上市）坂水から長沼村（現北上市）朴ノ木前に寺院が移転しました。

それは度重なる洪水の被害によるもので、享保二年（一七一八）七月二六日に二回目の洪水に遭い、翌二七日には現在地に再び本堂を移転することになったと伝えています。

## 洪水により記録類紛失
## 廃寺林養寺仏像も保存

その後、七世智教、八世智誠と続き、九世智善の代の文化五年（一八〇八）八月二六日に、本堂の再建を終えています。しかし、古い記録類は洪水によって流されたものなのか、全く残っていません。また過去帳も江戸時代末期が最も古いものです。

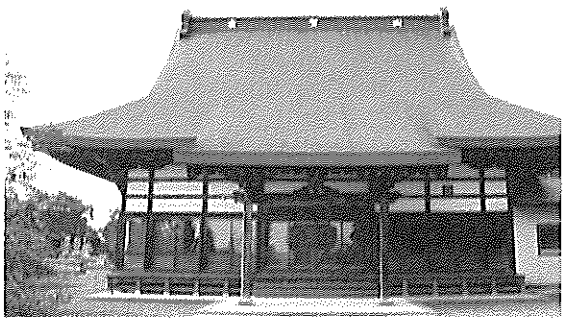
昭和四二年（一九六七）、本堂屋根葺えのとき棟札を発見、それには南部大膳大夫の寄進した材木五十本など、関係奉行の名前が記されています。

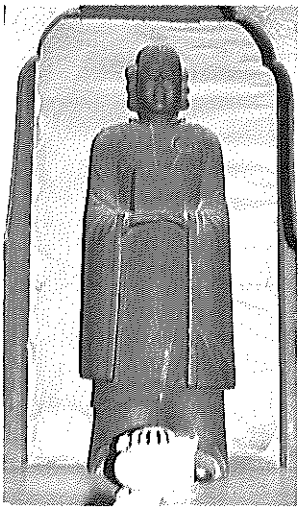
明治二三年（一八九〇）、十世智誠の代に梵鐘堂を建立しましたが、梵鐘は戦時中の供出でなくなり、鐘楼も撤去して今はありません。

寺宝には御本尊の木造阿弥陀如来像（文七五寸）のほか、木造聖徳太子像（文八五寸、持幌太子）もあります。

これは長沼地内にあったとされる万海山林養寺に安置されていたもので、この寺が廃寺になったために光林寺に移されました。林養寺跡地といわれる場所には、現在見真大師碑など真宗関連の石碑が保存されています。

そのほか、現住職の四代前の坊守が嫁いでくるとき乗ってきたという駕籠が、本堂内に保存されています。





㊤屋根改修の際棟札発見し文化5年再建と判る本堂。

㊦光林寺の近郊にあった万海山林養寺が廃寺になり、そこに安置されていた、木造聖徳太子像を保存する。

# 明治に開山した近江商人建立の寺

## 石森山 西念寺（せきしんざん さいねんじ）

真宗大谷派

◆北上市花園町二・五・五〇
◆電話（〇一九七）六四・〇九五三
ファックス六四・〇九五三
◆住職（第三世） 今西由眞

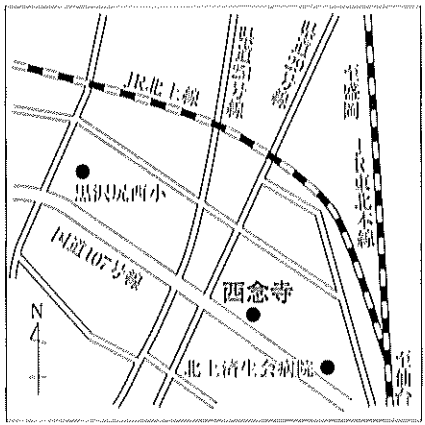
JR北上駅から北西へ徒歩一〇分、北上市中心部の一角で、寺町としてかつては花屋町と呼ばれた通りの道沿いに、周囲六百の銀杏の巨木が目につきます。ここに西念寺があります。

近江商人だった井筒屋三代目の孫兵衛は、甲州（山梨県）高嶋生まれの永田吉十郎を連れて、奥州黒沢尻村（現北上市）に移ってきます。永田吉十郎の前歴は判りませんが、墓石によりますと、法名釋教心とあり安永九年（一七八〇）に没しています。姓がありますから武士だったのかも知れません。

寛保元年（一七四一）、城戸家から土地の寄進を受け、井筒屋孫兵衛が現在地に道場を建て、当初は天台宗でした。後に浄土真宗に改宗し、盛岡の本誓寺の出所（出張所）となりました。従って正式の住職を置く必要を認められないまま明治を迎えました。

明治三四年（一九〇一）釋山松が初代住職に任じられ、浄土真宗の西念寺として出発することになりました。

釋山松は富山県射水郡池田村（現氷見市）にあった天和二年（一六八二）開山の善林寺一三世住職でした。本山東本願寺一二世厳如上人のお伴をして北海道開拓に檀信徒と共に渡りました。そして旭川を中心に教化に専念しましたが、不幸にも衝心性脚気という病気にかかり、軍医による開腹手術でかろうじて一命を取り止めました。




このまま北海道に留まれば生命の危険があると医師の勧めで南下を決意、船により最初に上陸した宮子県下閉伊郡宮古町（現宮古市）に、自ら住職を勤めた善林寺をこの地に移籍して、一宇を建立しました。

### 一代で二カ寺再興する
### 残念な戦後の本堂焼失

やがて土野沢秀教務所長の命により和賀郡黒沢尻村（現北上市）の西念寺

兼務住職となり専念布教しました。

代の間に、ヵ寺を再興した功績は凡俗の及ぶところではありません。その初代釋由訟は昭和五年（一九三〇）一二月一八日、西念寺において生涯を終えました。

当寺は真宗大谷派に属し、本尊は慈覚大師作と伝えられた阿弥陀如来像でしたが、昭和三八年（一九六三）の不慮の火災によって灰燼に帰してしまいました。四年後の昭和四二年（一九六七）本堂は再建されています。

寺宝としては、本堂左右の間の襖絵で、巨匠鶴田五郎画伯による仏陀伽耶の現況と山西省石窟の石仏を墨絵で模写したものです。鶴田画伯は揮毫後三ヵ月目で再起不能の病にかかり、この作品は絶筆となりました。

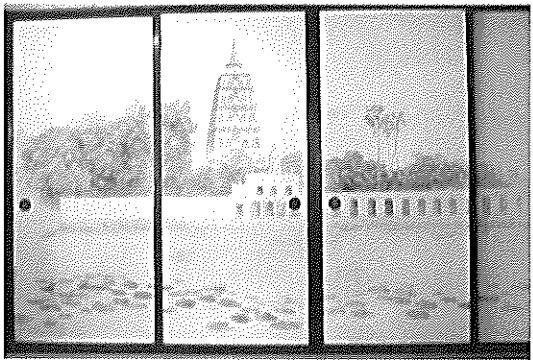
昭和四八年（一九七三）には、檀家の草野広克氏から本願寺八代目の蓮如上人筆になる「六字名号」の寄進を受け寺宝として大切に守っています。

本寺の附属事業として、仏教精神を子供の頃から身につけさせたいと念願し、昭和二九年（一九五四）から幼稚園を開設し、双葉幼稚園として仏教保育を取り入れた幼児教育に取り組んでいます。昭和五二年（一九七七）には学校法人双葉学園として認可を受けました。現在は一代目の園長今西界雄が中心となり運営しています。

当寺は火災によって、残念ながら仏像をはじめ古い記録類を失ってしまいましたが、境内にそびえる銀杏の巨木は幸い焼失を免れ、寺の歴史を語り伝えております。昭和四八年（一九七三）北上市の保存樹木第六号として指定されました。

㊤昭和38年の火災で焼失した本堂を同42年に再建する。

㊦巨匠鶴田五郎画伯が襖絵として描いた「仏陀伽耶の現況」と「山西省石窟の石仏」で本堂左右の間にある。



# 小さく貧しくとも人々に支えられ

## 月光山 通來寺

真宗大谷派

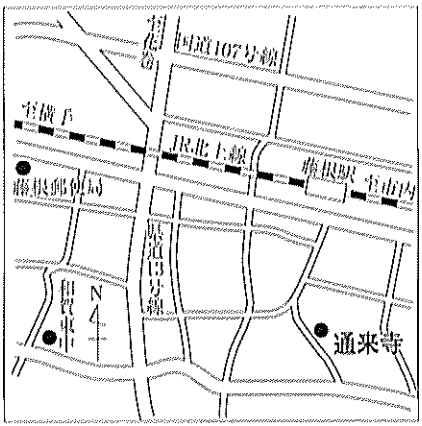
◆北上市下江釣子一一一三八
◆電話（〇一九七）七三一七五五八
ファックス七三一七九三〇
◆住職（第一八世） 清谷和男

北上市の中心部から JR 北上線に沿って東西に通ずる国道一〇七号線を西へ、藤根駅前の附近から南へ左折しますと間もなく通來寺があります。ここは江釣子地域の最西端で、かつては純農村として田園が広がっていましたが、近年都市化が進み寺院周辺にも住宅が立ち並ぶようになりました。

七世円叶が記録した当寺の由緒書によりますと、開基は善空で、大永二年（一五二二）に本願寺第九代実如上人から阿弥陀如来本尊・幅を賜わって江釣子村（現北上市）に至り、善空坊と称する草庵を建立したことにはじまります。善空は権力者とのつながりを持つことなく、本当に生きるとは何かを求めてこの地を布教の根拠地と定めたものと思われます。

当時の草庵は下江釣子地区の堺田集落にありましたが、和賀川に近かったため、度々水害に見舞われました。そこで、度にわたって寺を移したと伝えられます。従ってこの間に寺宝や過去帳、あるいは寺の沿革を記した記録などが失われてしまいました。

中でも、〇世と、一世に関する記録は全く残されておらず、寺院としての活動も空白ではなかったかと想像されています。現在の場所に移転したのは昭和二二年（一九四八）、七世清谷有信のときです。キャサリン台風により再度の水害により寺院の再建に迫られていたとはいえ、六十戸足らずの檀家で本堂・庫裡の移転改築事業をなしえたのは、有縁門徒の熱意と地域内有志の懇志によるものであります。




## 自覚の仏道の道求めて
## 年三回親鸞教室を開催

浄土真宗寺院の本堂には、中央に御本尊阿弥陀如来像を安置し、その横には宗祖親鸞聖人の御絵像が掲げられています。そのほか中興の祖蓮如上人像、

親鸞の求道の道標となった七高僧像の掛軸が並列されています。

俗に高僧といいますと、修行を積んだいわゆる倫理的に理想の人、あるいは俗にまみれない人などを想像しますが、親鸞の出遭った高僧方は、迷い苦悩し、赤裸々な人間の姿を見つめてこられました。そして人間の愚かさに目をさましていかれた正に自覚の仏道を歩んでこられた方達です。

その求道的歴史との出会いとでもいうような親鸞を「宗祖」としています。「仏事」はその親鸞の生きざまに教えられるというもので、「報恩講」は毎年欠かさず勤められております。

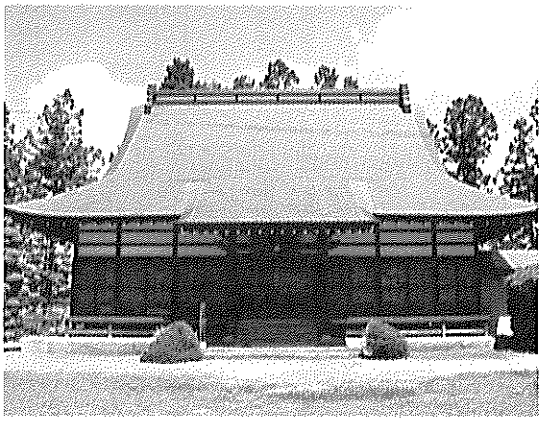
親鸞は鎌倉時代、すでに時代社会を「五濁悪時群生海」（生信念仏偈）と課題にされ、人々は時代社会の濁りに染まって、その染まった人間がまた時代社会をつくっていくという、流転の実相を明らかにされています。

現代という時代は、文明文化を誇り、より以上高度のものを追求しようと飽くことなく努力してきました。そしてその結果どうなったかといいますと、このままでは地球は破滅してしまうのではないかとさえ思われる方向に、向かっていると思うのです。

あらためて、人間とは何かが問われております。

今、世界的な情報の一端を目にするにあたり、原点に帰るといったらいいのか、人間とは何か、宗教とは何かということが、自他共に求められている時代であることを思います。

現在、毎月・六日の午後一時半からの定例開法会と、年に二回の親鸞教室が開かれております。



㈲中央に御本尊阿弥陀如来を安置し、その横に宗祖や中興の祖、七高僧を配列する真宗寺院。

㈱度々の水害移転で現在地に定着は昭和33年。

# 真宗の正しい教え布教に戦後開山

## 霊鷲山 選択寺

真宗高田派

◆北上市和賀町横川目七ノ一五八
◆電話（〇一九七）七二ノ二〇四二
◆住職（第二世）　髙名興隆

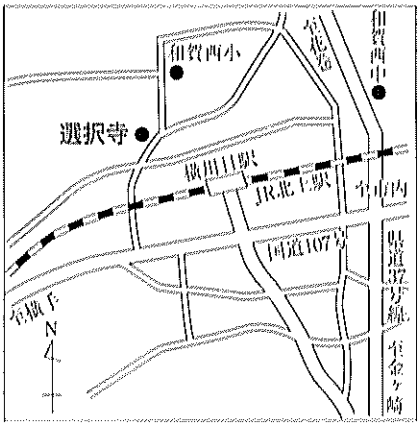
JR北上線横川目駅の北西に位置し国道一〇七号線横川目集落から北へ、北上線の踏切りを越えるとすぐの所に選択寺はあります。境内を貫いて通っている市道に隣接して、市立和賀西小学校が建っています。

当寺は昭和二七年（一九五二）に開山しました。三重県津市にある専修寺を本山とする浄土真宗高田派で、県内では数少ない宗派の一つです。

開基住職は高名興仁師で、青森県今別町の正行寺で修行されました。昭和一〇年（一九三五）頃、初めて花巻市の光徳寺で教えを開かれ、花巻市の鍋倉矢沢、北上市の更木・相去・村崎野などで説法をしています。この地方は親鸞聖人の高弟和賀是信坊が真宗の教えを広めた地域ですが、是信坊亡き後その教えは次第に薄れ、異教の教えにたよってこれを聖人の教えとして信じている有様でした。これを御内法といい表面は禅宗なのです。しかも真宗寺院の布教師はいるものの、その改善に努力する者が少ない状態でした。

そこで興仁師はこれを救済しようと決心し、熱心に正しい教えを説法して廻りました。初めは誹謗する者が多く反対の悲に立つ憂き目を見る有様でしたが、遂には正法に勝ち難く、今や信徒は北海道から九州まで数十万、特に北陸の福井県に多くの信者がおります。そして終戦を縁として、正法宣布のために選択寺を建立しました。

興仁師八〇歳の高齢となったのを機に、信徒一同協力して昭和五〇年（一九七五）に師の銅像を造立、本堂の向かい側に開基堂を建立して納めています。師は昭和五四年（一九七九）九月八二歳で亡くなりました。




### 聖人の正法に御絵伝堂
### 境内に熊野大権現祀る

境内には東北地方では珍しい御絵伝

堂が祀られています。本願寺聖人御伝絵、すなわち「御伝鈔」の中にある御絵伝二十枚を縦二尺（九〇㌢）横六尺（一・八㍍）の大絵画にして寄進されたものです。寄進者は信者の東京都練馬区石神井台に住む和田智吉夫人で、御絵伝堂いっぱいに飾られています。

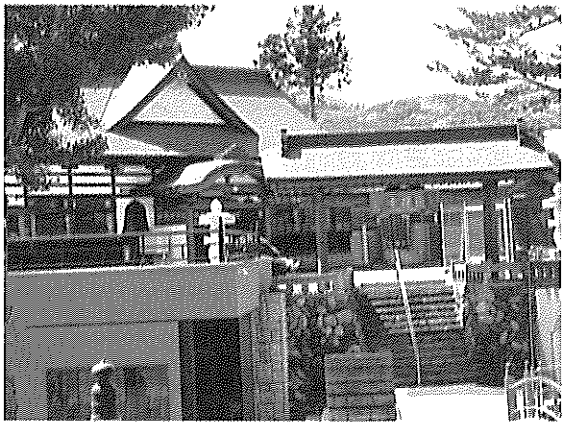
念仏成仏これ真宗といい、他宗派と全く異なる他力信心をもって浄土往生の正因であると宗祖親鸞聖人が定め、教行信証の四法をもって正法の規範とされています。しかし世は末法となり、五濁の波荒くして正法を忘れて邪義が続出しました。

そこで本願寺二代目の覚如上人は、本願寺聖人伝絵二巻を作製されました。これを俗に御伝鈔と呼んでいます。また八代目蓮如上人は御文章をつくって破邪顕正をされています。しかし御伝鈔は報恩講に一回拝読するだけで、単なる聖人の一代記と心得ている信者が多く、また御文章は朝夕拝読してもその意味する所の理解ができず、「南無阿弥陀仏」の六字名号の意味を尋ねる者も少なくなりました。

そのために真宗は衰え、念仏地に堕ちようとしていることを憂い、当寺開基の興仁師は離解で顧みられなかった御伝鈔に取り組み、善男善女に説き聞かせて正法を流布されたのです。

なお、境内に守護神として熊野大権現社を祀っています。真宗では珍しい社ですが、開基の興仁師が二十数回にわたり熊野由に参詣を行って、その大権現の分社を建てたものです。

熊野の神様は、念仏守護の神様であり、その神への報恩と念仏行者の安穏を願っての建立でした。



㈭真宗の正法を布教するため昭和27年開山した選択寺。

㈬親鸞聖人の一代記「御伝鈔」の中にある絵を大絵画にして20枚寄進。それを御絵伝堂に納め布教。

# 和賀氏家臣開基の伊達藩主祈願寺

## 瑞雲山 洞泉寺（ずいうんざん どうせんじ）

臨済宗妙心寺派

◆北上市相去町寺前沢二一
◆電話（〇一九七）六七・四七六六　ファックス六七・一五五〇
◆住職（第一八世）千枝祐航

国道四号線北上バイパスを車で南進、和賀川に架かるわが大橋を渡って坂道を登りきった高台の右手前方、小高い丘の上に立つ鐘楼堂が見えます。北上市の中心部から十分ほどの距離にある洞泉寺は、伊達領の藩主の祈願寺として営まれてきました。

天台宗と真言宗、二つの密教の後に全国的に普及した禅宗のうち臨済宗は、近世の領主の信仰を集めた宗派で、南部領内では最南端の花巻に長久寺が祈願寺として置かれ、また伊達領内では最北端の相去に置かれたのです。従って洞泉寺は、伊達藩の香華所とも呼ばれてきました。

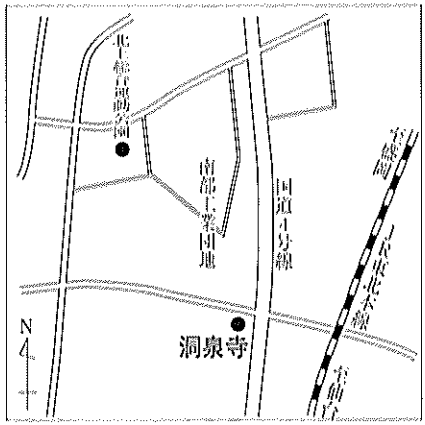
当寺の縁起によりますと、その昔瑞雲山長泉寺という寺が、寺沢と呼ばれる地名の場所にあったと伝えています。それが天正年間（一五七三～九二）に廃寺となりますが、そこに和賀氏の一族相去安芸守の家臣千田修理が、慶長一七年（一六一二）に新たに開基したというのです。

開山には、胆沢郡塩釜村（現水沢市）の増長寺二世松屋玄貞和尚を迎えました。そのときから臨済宗玉浦派（後に妙心寺派となる）瑞雲山洞泉寺と寺名を改め再興しています。

当寺が建っている場所は、相去安芸守が居城した中世の鶴野館跡の麓になっています。相去安芸守は和賀氏の一族で、中世には和賀氏の勢力がここ胆沢郡まで及び、最南端は西根村（現金ケ崎町）と考えられています。

従って豊臣秀吉の奥州仕置の後に、和賀郡は南部領、胆沢郡が伊達領となりましたが、実際の和賀氏の勢力は胆沢郡にも及んでいたため、伊達領内にも和賀氏関連の遺跡が数多く残っています。洞泉寺が建っている鶴野館跡もその一つというわけです。

当寺の本堂は文化元年（一八〇四）二月野火によって焼失、再建する際に



現在地の寺前沢に移りました。以前の場所は寺後沢にあったと伝えます。

## 近郊廃寺の仏像も祀る信仰集める鶏森観音堂

当寺の本尊は延命地蔵尊ですが、当寺にはそのほかに廃寺となった寺や僧侶の隠居所から移された仏像が祀られています。

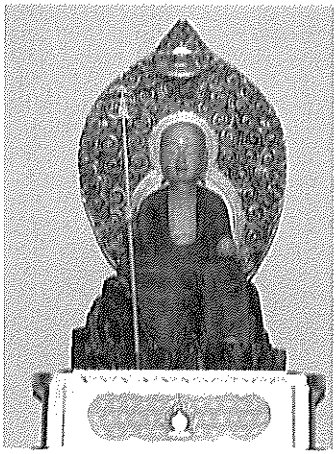
その仏像は、当寺の近くにあった無量庵と沢田庵、また丁切にあった阿弥陀堂や説教寺として営まれていた庵などに祀られていたもので、阿弥陀如来像や子育て地蔵として信仰を集めている松林地蔵などです。現在は立派に補修されて本堂内に祀られております。

嘉永元年（一八四八）寄進の梵鐘は供出、昭和四九年（一九七四）檀信徒の寄進を受け鐘楼堂を建立しました。

寺宝には、一世の代、嘉永年間（一八四八～五四）寄進の大般若経六百巻をはじめ、釈迦涅槃図は一・八m×一・六mの巨大な軸物であり、また極彩色の十六善神、最近のものでは佐久間自雲作の聖観音像が位牌堂に祀られています。

また境内には、鶏森観音堂が祀られており、毎年九月一七日が祭典日です。戦後のすさんだ世相を憂い、心のよりどころにしようと水沢市吉城の大儀寺の住職が発起人となって、昭和二六年（一九五一）に昭和三三ヵ所観世音霊場を設けました。そのとき当寺は第十番霊場と定められたのです。

昭和六二年（一九八七）待望の花園会館が完成しました。百五畳の大広間に会議室が二つある大きな施設です。また平成一一年度着工の本堂はじめ庫裡、観音堂、鎮守などすべての堂宇は平成一二年に落成しました。



㊤一昨年本堂・観音堂などすべての堂宇新築落成。

㊦本尊延命地蔵尊。ほかに阿弥陀如来などがある。

# 伊達領浮牛城城主が開基した花寺

## 徳林山 宗賢寺

曹洞宗

◆北上市口内町久田一二七
◆電話（〇一九七）六九・二〇三六
◆住職（第二六世） 伊藤誠僧

北上市中心部から国道一〇七号線を東へ、北上川を渡り峠を越えると口内町に入ります。宿場を通り抜け江刺市に向かう国道四五六号を数百㍍行くと、右側に宗賢寺が見えます。ここまでの距離およそ十㌔です。

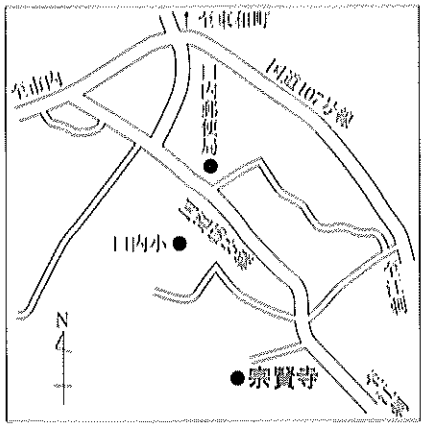
かつては老杉や老松に覆われていたと伝えますが、現在は周辺がすべて耕地となり、道沿いの大木の根がわずかに当時をしのばせてくれます。

宗賢寺の開山は『江刺郡誌』によりますと、応仁二年（一四六八）とありますが、慶長四年（一五九六）に現在の水沢駅前にある大林寺・一世宗国陽卯和尚の開山というのが正しいようです。当時土口内村（現北上市）の領主だった古内氏や中島氏、またその家中の菩提寺であったと伝えています。

由緒や沿革については記録が全く残っていませんが、寺伝によると当時の領主古内伊賀義実がこの寺を開基したといい、その墓地が広い境内の一角にある「十石」と呼ばれる清水の湧くそばに祀られています。

口内地域には葛西氏が統治していた時代から浮牛城が置かれており、天正一三年（一五八五）から六ヵ年にわたり初代の口内帯刀が城主となっています。その後伊達領となり、二代瀬上淡路、三代小梁川修理、四代藤田宇兵衛と続き、五代目に田手肥前高實が正保二年（一六四六）から十二年間統治しています。その田手肥前には実子がないため伊達忠宗の八男宗房を養子に迎えました。その子が後に伊達藩の五代藩主吉村となっています。

このように家柄の高い城主を迎えていた浮牛城六代に、万治二年（一六五九）古内志摩義如を迎えました。ところが伊達騒動に巻き込まれたため国家老として仙台に残り、弟の義運が城代となります。開基の古内伊賀義実は、城主志摩義如の父に当たります。



## 手の込んだ本堂内陣彫刻

## 十石の泉に開基の墓地

当寺は最初現在の開山堂の裏に建てられたと考えられ、最も古い過去帳は二世虎岑源龍が元禄九年（一六九六）に書き伸えたもので、義応元年からとなっていますが、その年号は見当たりません。開基の古内伊賀義実の墓には、承応元年（一六五二）○月、七日没とありますから、義応元年＝承応元年の間違いかも知れません。

現在の本堂は、九世真雲全慶が天保年間（一八三〇～四四）に建立したと伝えますが、本堂内陣の格天井と欄間は嘉永六年（一八五三）一月に寄進されたと記されています。その欄間の彫刻は手の込んだ花で飾られて美しく、鬼の花寺と呼ばれました。

また、人前の僧になると転住して行った僧が十六人もいて、そのため出世寺ともいわれます。

当寺の広い境内には、権現を祀る愛宕神社と天神を祀る菅原神社があっていずれも寺の守護神になっています。

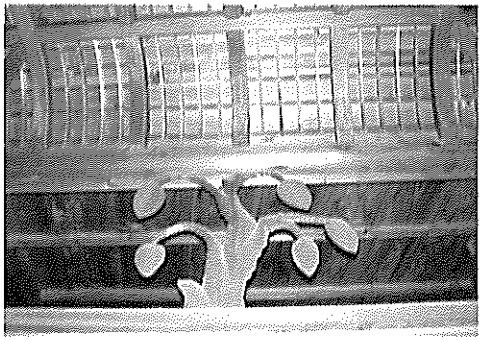
なお、開山堂と位牌堂両棟は、五世禅高の代に建立されました。

## ■「十石」の泉の伝説

お寺から数十石離れた山かげに、周囲十石、深さ一石位の小さな泉があって涸れることがなく「十石」と呼んでいます。八幡太郎義家が安倍貞任を追ってこの地に来たとき、旱天続きで困っていたが、義家が弓のはずで岩を突き清水が噴き出し、一日に十石も出ました。また、説には貞任が馬に飲ませるため矢尻で突き、清水がふき出したとも伝えられています。

⑭天保年間に建立されたと伝えられる現在の本堂。

⑮本堂内陣の格天井と欄間は嘉永６年に寄進された見事な彫刻で、須弥壇と共に花寺にふさわしい。



# 江戸俳諧文化を育てた中世の古寺

## 洞龍山 寶積寺

曹洞宗

◆北上市口内町四ヶ森一八三
◆電話（〇一九七）六九・二九〇八
◆住職（第二九世） 藤村浩禅

北上市の中心部から国道一〇七号線を東へ向かい、北上川に架かる日高見橋を渡るとやがて峠を越え口内地域に入ります。間もなく極木田バス停があり、そこから右折して約一・五㌔の右側山の中腹に宝積寺があります。

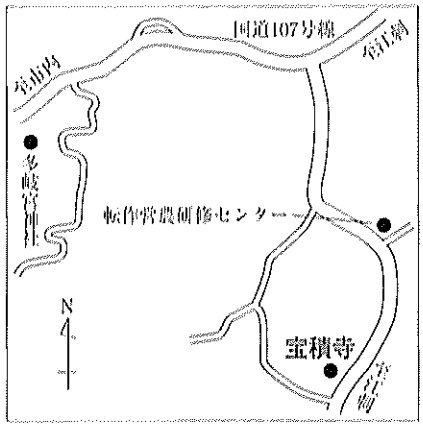
寺の向かい側の小高い丘は、中世の極木田館の跡地であり、寺院のある四ヶ森（国ヶ護）という地名からすると、当時は軍略上重要な役割をもっていた寺院であったと考えられます。

宝積寺に関する由緒は寺伝による以外ありませんが、暦応年間（一三三八～四二）に、極木田館主の菩提寺として開かれた天台宗寺院ではないかと想定されています。

その後天正一八年（一五九〇）に正法寺輪住四九代、江刺の光明寺二世の芳山宗梅が曹洞宗寺院として再興しました。開基は極木田館主の及川美濃守太郎左衛門秀盛と伝えています。

時代は中世から近世に移り、この地域が伊達領となって、浮牛城に中島氏が入部した頃の正徳二年（一七一二）極木田村肝入及川胤孟が、正法寺正住二七世輪住・四二代智夢梅天を招いて当寺を復興したと記録されています。

しかし正法寺正住二七世輪住・四二代は海寧良安であり、智夢梅天の名は、正法寺の『当寺輪番住持職之時代之来入牌之御入数記之』にもまた『当山出世帳』にも見あたりませんので、今後の資料研究が必要です。




明治二六年（一九〇三）に火災に遭い、本堂・庫裡のすべてが焼失、山緒書・過去帳・什物等を失いました。また住職の二六世・宗隆山もこのとき亡くなっています。持ち出したのは御本尊釈迦牟尼仏、涅槃像掛図、紺紙金泥法華経のみで、焼け跡から殿鐘一つが無残な姿を表わしたといいます。

現在の本堂は二七世祖參泰源の大誓願のもと、遠く釜石方面まで托鉢に出

かけ、大正三年（一九一四）に復興されたものです。

## 伊達領内の句集に掲載　住職が中心に普及する

胆沢郡白山（現前沢町）の大肝入鈴木常雄は歌人であり俳人でもあって、伊達藩主吉村公や江戸の民俗学者菅江真澄も訪れている名家です。文人墨客の交流が多く、鈴木家に保存の『水峯集』という俳諧誌の安永八年（一七七九）七月二日の項に、「桝木田村宝積寺住持素皐」の名前が出ていて、住職が俳諧をやったことが判ります。

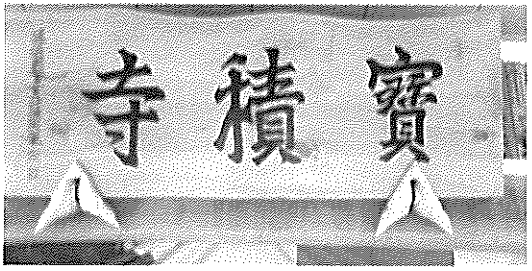
この素皐はどの住職なのかは判りませんが、江内浮生城城主中島氏の家臣らと俳諧連中を組織していたとみえ、その水峯集の中に「江内」として、東子・蟻声・亀石・東石・衡石・妙石・折糸・花東・古石・武石・鳥石など俳名の句も出てきます。また桝木田に喜柳という人もいますが、恐らく当時の肝入ではないかと考えられています。

今から二百年以上も前に、江内の桝木田の山奥に俳諧文化の華を咲かせたその中心人物として活躍したのは、宝積寺の住職でした。

現住二九世賢哲浩禅は、花巻の一般家庭に生まれながら、五歳のときから黒沢尻町（現北上市）の東黒寺で修行その後、時俗世に戻ったものの、昭和四八年（一九七三）に前住の鉄崖全峯のもとで再び修行。昭和五五年（一九八〇）住職辞令を拝受した異才です。その間正法寺で二回修行しました。

当寺の寺名額は、大本山総持寺副貫首石橋洞龍禅師の揮毫で、昭和六二年（一九八七）に奉納されました。

㈱中世の桝木田館主が開基したと伝えられ威厳を保つ宝積寺。




㈱本山総持寺副貫首石橋洞龍禅師筆の寺名額を昭和62年奉納。

# 曹洞宗に転宗した古代からの霊山

## 金峰山 萬藏寺

曹洞宗

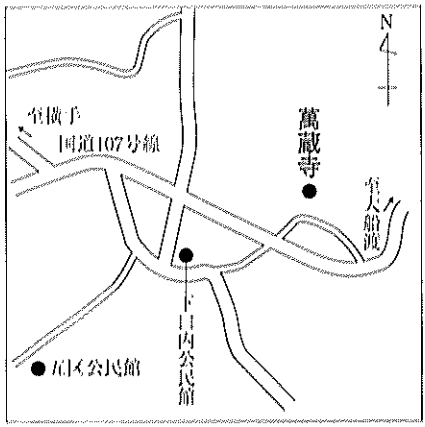
◆北上市口内町金峰山四四
◆電話（〇一九七）六九・二六五五
◆住職（第二五世） 小野憲邦

国道一〇七号線を東へ向かい、北上市口内町の最東端に近い急な坂道の途中から左手に豪壮な山門を持つ寺院が見えます。ここが萬藏寺で、寺院の北側に連なる山々をはじめ、帯が寺有地となっており、その広さ二百町歩（二百㌶）といわれる広大な面積です。寺の歴史は古く、嘉祥二年（八五〇）に慈覚大師が東北地方を巡錫した際に開基したという伝説が伝わります。

北上市内には同様の慈覚大師開基の由緒をもつ古刹は、国見山薬師寺と黒岩の白山廃寺、川岸の染黒寺、鬼柳の正覚寺があって、かつては天台宗寺院でした。慈覚大師は僧名を円仁といい、天台宗開祖伝教大師最澄の弟子です。円仁は東北地方には来ていませんので、実際に訪れたのは円仁の弟子安恵ではないかと考えられています。

いずれ寺伝では、慈覚大師が薬師如来を本尊として金峰山萬藏寺を建て、阿古耶の谷々へ七観音を祀ったと伝えております。奈良県の吉野山から大峰山にかけての峰々を金峰山と呼び、この地域が古代からの霊山であることから、この山号の由来となったものと考えられています。

萬藏寺の裏山は金峰山（……㍍）で別名、阿古耶と呼びますが、その岩山は平安中期に吉野系修験者の修行道場でした。現在でも独鈷水・銀杏・笹掛け石・龍の背渡り岩・剣ヶ峯など名跡が伝えられています。



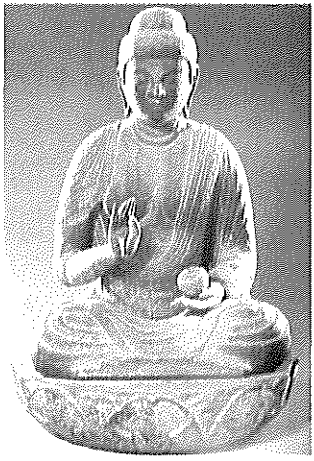

平安時代の萬藏寺は奥六郡を支配していた安倍氏の援助で仏像を作り堂宇を創建したと考えられています。そして前九年と後三年の両役を経て平泉藤原氏の時代にも庇護を受けますが、平泉が滅んで鎌倉武士団がこの地方を統治するようになり、密教は次第に衰えて新興の禅宗（曹洞宗・臨済宗）が勢力を拡大するようになり、転宗する寺院が多くなりました。

# 九体の仏像が県の指定
# 北海道に開山した前住

萬蔵寺が曹洞宗となるのは、寺伝によりますと康安元年（一三六一）江刺黒石（現水沢市）の正法寺の徹翁弘道禅師であると伝えています。徹翁禅師は正法寺二代月泉良印禅師の四十四人の弟子の一人で、正重寺・光明寺（いずれも江刺市）、大円寺（川井村）を開山したと伝えています。

再興された本堂は天和年間（一六八一～八三）に火災で焼失、そして元文三年（一七三八）に再建されたとありこれが現本堂です。再建までの五十年余は仮本堂だったと思われます。

元禄一四年（一七〇一）に牛頭天王社建立、享保一三年（一七二八）に観音堂を造営したのに続いて本堂の建築でした。なお山門は、嘉永四年（一八五一）に建てています。



(上)元文3年(一七三八)に再建された現在の本堂。
(右)本尊の薬師如来は一一世紀作で県指定文化財。

現存している仏像など寺宝は数多く御本尊の木造薬師如来坐像は、カヤ材の一木造り鈍彫り、一一世紀の作で岩手県指定文化財です。ほかに県指定木造男神像（青年相）一一世紀）など九体の仏像があり、北上市指定は一体です。一つの寺に九体もの県指定文化財を保存しているのは平泉を除けば萬蔵寺以外にありません。

庫裡は大正一三年（一九二四）に再建、五十年前に本堂を茅葺きに替えました。平成八年には庫裡を新築し、開山堂は今年完成します。

当寺前住一四世邦顕和尚は、宮城県古川市の宮光寺で生まれ、実父の縁で北海道へ布教を行いました。そして昭和五一年（一九七八）札幌市東区伍珠町に大真山峯光寺を開山しました。平成八年に権大教師に補任されています。萬蔵寺は、長男憲邦和尚に一五世住職をゆずりました。

# 新住宅地に移転し檀信徒増加の寺

## 常盤山 妙桃寺

曹洞宗

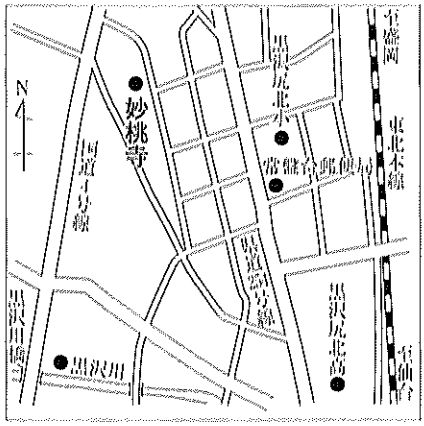
◆北上市常盤台四-三一
◆電話（〇一九七）六三-二五八五
ファックス六三-三八二
◆住職（第八世） 平賀雅裕

北上市中心部から国道を北上すると、小高い丘の上に人家が密集している地域があります。ここ一帯を常盤台と呼びますが、この地域約十万坪（三三万平方㍍）は、かつて軍需工場国産軽銀㈱が立地した地域でした。戦後工場用地から住宅団地に変わり、新しい街が誕生しましたが、その最北端で道路西側に妙桃寺があります。

交通の便がきわめてよく、主要バス路線で堤ケ丘バス停から徒歩四分、自然の松木立に囲まれ、境内地約二㌶の広大な地に堂宇が建っています。

当寺の寺伝によりますと、開山は鬼柳村（現北上市）正覚寺、〇世徳翁智禅大和尚であり、開基は竹村二郎兵衛とあります。また明治二一年（一八九九）に同じく正覚寺二〇世大然道林大和尚の代に、寺名を妙桃寺と改めたと伝えています。この間の住職の消息は殆ど判っていませんが、五世塚禅道器和尚の非凡な教えは、多くの檀信徒の帰依する所となり、草庵の修復も行われました。それ以外約二百年間、庵寺はそのままの姿で守られてきたと考えられています。

開創当時は人家の乏しい畑地に建てられていましたが、時代の進展により隣接の商店街新穀町周辺が繁華街に変わって、七世祖明和尚の代に境内地は極度に狭まり堂宇も殆ど修復の余地ないまで老朽化してしまいました。




ある日、七世祖明が夢の中で奇妙なことに遭遇します。息苦しさに目を覚ました和尚は、何か引かれる衝動に駆られて庭に飛び出すと、古く丸いお墓が目に入りました。翌朝その墓の地面を掘り起こしますと、中に庵主様の御影が納められているのを見つけました。それは江戸時代のもので、その頃すでに寺が存在していたことが判ったのです。このできごとは寺の縁起として以来語り伝えられています。

## 狭隘な境内と都市計画 軍需工場跡地への移転

北上市では昭和四五年（一九七〇）に開催の岩手国体を前に中心商店街の都市計画事業を実施することになり、その計画に準拠して寺院及び墓地の移転を行うことになりました。新しい霊園計画を立案したのは昭和三四年（一九五九）のことです。

元軍需工場の跡地である常盤台地域が昭和三〇年（一九五五）に全面的に住宅地として造成されたのを機会に、この地を移転候補地として檀信徒と協議、また行政側との交渉も行ってきました。幸い檀信徒の理解と協力により浄財寄進が行われ、また移転補償費を含めて本堂・庫裡が新開地常盤台に完成、また墓地も全面的に移転するという未曾有の大事業を完成させました。

昭和四六年（一九七一）九月、大本山永平寺より貫首佐藤泰舜猊下を招請して、落慶法脈公室行いました。

新開地の常盤台には、和賀川の湯田ダム水没者など新しく世帯を持つ住宅が多く、また隣接の飯豊村（現北上市）には寺院がなかったこともあって、檀信徒は年々増加しております。

境内には元衆議院議員で、一代で県内最大の建設業者となった高田弥市翁の顕彰碑「無一文」があります。また自然石に刻まれた「行徳五訓」「永平泰禅九十四箇」と記す「行和之碑」も建てられています。

高祖道元禅師を父、太祖瑩山禅師を母と仰いでいる現住職雅裕和尚は、曹洞宗宗務庁で、出版部の編集長を務めた後に当寺に着任しています。

(上)市街地から元軍需工場跡地の新開地常盤台に移転。

(下)繁華街立地の頃は夢にも思わなかった広大な境内。

# 中世に開山し各地に曹洞宗を布教

## 傳法山（でんぽうざん） 正覺寺（しょうかくじ） 曹洞宗

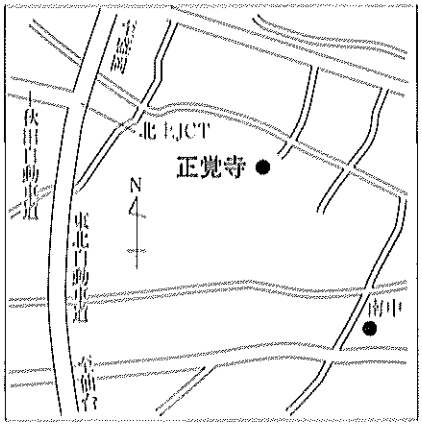
◆北上市上鬼柳五-二三-二二
◆電話（〇一九七）六七-四一七〇
ファックス六七-四一七〇
◆住職（第二三世） 池田道雄

国道四号線北上市鬼柳町の交差点から西へ、県道北上・和賀線を数分行くと満屋集落の道路沿いに石造りの立派な寺の門柱が見えます。そこから南へ二百㍍ほどの丘陵の麓に正覚寺が長い歴史を伝えてきました。

曹洞宗では北上地方で最も古い伝統を持っている正覚寺ですが、江戸時代の火災によって資料の殆どを失い、今では寺伝による以外は判りません。

北上地方の古刹といえば、稲瀬町にある県内最古の極楽寺・山関連の寺院などがありますが、この時代草創のお寺は慈覚大師開基の伝説を伝えており、正覚寺も同じく慈覚大師の開基と伝えられ、かつては天台宗寺院でした。現存の曹洞宗寺院で同種の伝承を持っているお寺は、川岸の薬黒寺と口内町の萬蔵寺の二ヵ寺だけです。

正覚寺が曹洞宗として開山するのは寛正二年（一四六一）、湖海中珊禅師によるものでした。中珊禅師は明徳元年（一三九〇）四月八日、源氏の流れをくむ子爵として生まれました。応永四年（一三九七）八歳で出家、比叡山に上り剃髪して僧となりました。能演法師に師事し、その後京都の建仁寺や仏陀寺、霊雲寺などで学び、さらに中国に渡り杭州臨安府（現中国浙江省の省都）万寿寺の虎岩淨伏和尚に学んでいます。帰国後は霊樹山霊雲寺の第四世となりました。




寛正二年（一四六一）に野州（栃木県）の大守斎藤氏の勧請によって瑞応山洞福院を開創、翌年奥州に下って鬼柳の村里に錫をとめ、一宇を建立したのが正覚寺で、法を正しく伝える意味から山号を伝法山と称したといいます。本寺を新潟県村上市の霊樹山霊雲寺としているのは、中珊禅師が第四世として修行した寺だからです。

中珊禅師が開山した頃は、この地方は源氏ゆかりの豪族和賀氏が統治して

いました。なかでも鬼柳村（現北上市）は和賀氏の有力な支族鬼柳氏の支配地であり、鬼柳氏が和賀郡の総領職となったのは応永八年（一四〇一）のことですから、和賀氏の支配地内における鬼柳氏の勢力が強力な頃に正覚寺は開山しています。由来には鬼柳氏との関わりは全く記されていませんが、中興禅師の源氏ゆかりといい、当時の時代背景から考えて和賀一族の菩提寺として深いつながりが想定されます。

## 数少ない座禅堂ある寺
## 青少年の研修に力注ぐ

その後、正覚寺四世雪江東湖は宮城県の福現寺を開山、五世性岸文省は川岸の染黒寺と二子の永明寺（永明寺寺伝では六世開山とする）を開山。そして六世深谷是泉は花巻市の将軍寺を開山しました。また、〇世徳翁智禅は常盤台の妙桃寺を開いています。

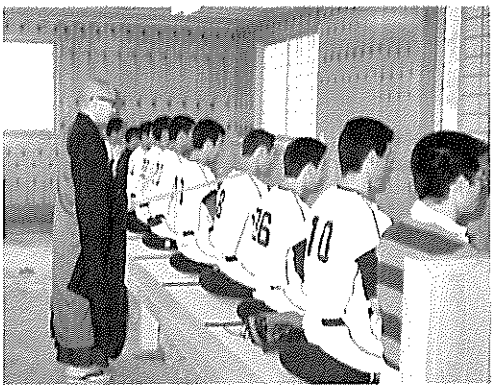
川岸の染黒寺の開山は永正元年（一五〇四）とありますから、和賀氏の全盛期に正覚寺はこの地方の宗教拠点としての役割を果したと考えられます。

当寺は元禄年間（一六八八～一七〇三）、〇世徳翁智禅の代に、本堂から出火し全焼、その後再建され改築、増築を行い、今日に至っています。また座禅堂のある数少ない寺として知られ、戦時中には東京方面から約二十人が疎開、座禅堂に起居しました。

さらに国鉄の北上ヤード建設に伴う墓地移転の補償金を基に檀信徒の協力を得て、昭和五〇年（一九七五）に青少年研修館を新築、近郊の小中学生を対象に、毎週土日や夏休みに座禅や法話などで心身の鍛練を行っています。なお庫裡は昭和六一年（一九八六）に新築しています。

㊨和賀氏の全盛期に地方の宗教拠点となった本堂。

㊩県内には数少ない座禅堂のある寺として知られ、土・日曜、夏休みには大人も子供も座禅に訪れる。



# 学校教育など地域住民と共に歩む寺

## 高龍山 正藏寺

曹洞宗

◆北上市立花三―一五
◆電話（〇一九七）六四―六五五六
◆住職（第一七世）渡辺昇光

北上市の市街地から北上川に架かる名橋ゲルバー式の珊瑚橋を渡りますと、立花地域の集落が広がります。その橋のすぐ近く中才集落に正藏寺が営まれています。

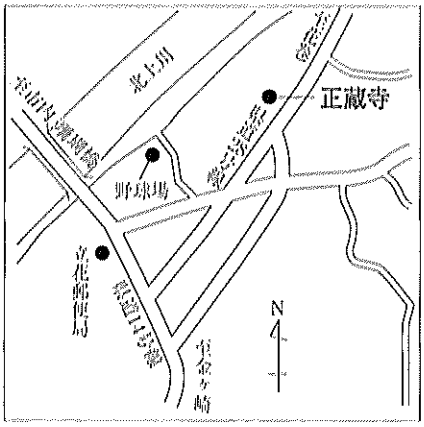
立花地域には、正藏寺の姉妹寺と伝えられる万福寺毘沙門堂や立花古城と呼ぶ謎の高舘城跡、また十三塔提塚など古代から中世にかけての歴史遺産が伝わっていますが、寺との関わりについては全く判っていません。川岸の衆黒寺と共に、宿舎を提供する川寺ではなかったかと考えられています。

寺伝によりますと、開山は花巻の瑞興寺、〇世宮庵寿悦和尚と伝えていますが、何時の時代か判っていません。寿悦和尚の示寂は慶長三年（一五九八）正月ですから、それ以前の開山であることは確かです。それ以後、享保二年（一七一八）に二世龍巌光皓の入寂まで記録は全く残っていません。五世隠州智泉は中興と呼ばれ、寺院の大改修を行ったと伝えています。

その後、六世から一一世までの住職は花巻の円通寺、盛岡の祇陀寺などから住職が入山しており、また一二世足山玉映和尚は再中興ですが、事蹟については不明です。その頃の寺院は地域民の集会施設でもあったようです。

明治五年（一八七二）に全国に学制が布かれ、翌六年には正藏寺を校舎に立花学校が開校しました。教師は一四世千外玄志和尚で俗名を山崎玄志といいました。『岩手県教育資料』によりますと、『第一八中学区立花村四十九番小学　下等教師　山崎玄志』とあります。山崎氏は晋山式ののち渡辺姓を名乗り、明治八年（一八七四）まで初代教師を勤めました。当時の小学校は上等と下等に分かれており、下等教師は下等小学校で教える教師でした。

北上川が近く子供達は勉強より舟遊びや雑魚取りが楽しく、また危険も多



いということで、山手側の塩釜集落に学校移転したと考えられています。

## 明治の川岸火災で類焼 地域ぐるみで寺を再興

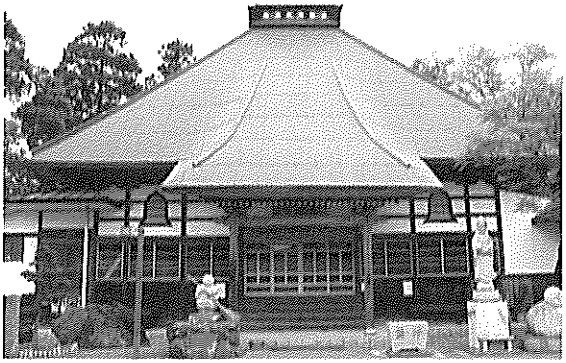
北上川は江戸時代から舟運が盛んで対岸の川岸には南部藩最大の河川港が築かれ、艪や小繰など百数十艘の船で賑わいました。立花側にも船着場があって船頭など船に関わる人々が数多くおりました。明治に入ってからもそれが続き、明治二十年（一八八七）鉄道が盛岡まで開通、交通手段が陸上に代わって舟運は衰退します。

それに追い討ちをかけたのが翌二四年（一八九一）の川岸の大火でした。五月・八日中川岸から出火、強風にあおられて川岸地域で八十八戸、北上川に繋留中の船十数艘、そして更に北上川を越え、立花地域の妻ノ木と館集落に飛び火して延焼、四十五戸を類焼したと記録されています。

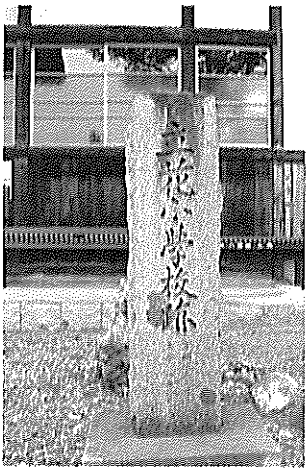
これによって正蔵寺の本堂はじめ堂宇や寺宝、資料などすべてを失いました。当時の正蔵寺の檀家は貧しく、復興は容易ではありませんでした。

明治二六年（一八九三）頃に、現在の北上市和賀町から民家を買い求め、仮の本堂とします。そして、大正二年（一九一四）、五世の志勇文覚の代に、檀頭軽石小一郎、副檀頭阿部恒定両氏の協力を得て、立花の菅原万五郎棟梁の献身的努力によって、再建することができました。

仮本堂は庫裡として使用されていましたが、平成二年には檀信徒の協力によって、会館を兼ねた新しい庫裡が完成しています。なお、正蔵寺守護神として早池峰神社を祀り、本堂裏には古木が茂っています。



(b)明治24年の川岸大火後、二十数年ぶりで本堂再興。



(a)地域民の集会施設として学校校舎として活用する。

# 和賀氏と共に寺を移転した菩提寺

## 梅澤山（ばいたくさん） 永明寺（ようめいじ） 曹洞宗

◆北上市二子町坊館二二七
◆電話（〇一九七）六六―一四三三
ファックス六六―一四五〇
◆住職（第二九世） 上野善庸

北上市の市街地から北東へ、県道北上東和線を車で行くと北上川に架かる昭和橋のすぐ手前左側に永明寺があります。ここは中世の豪族和賀氏が居城した飛勢城跡の麓で、永明寺は和賀氏の菩提寺として祀られてきました。

中世にこの地方の強力な豪族として北は稗貫郡から南は胆沢郡に至る広大な領地を持った和賀氏ですが、豊臣秀吉による奥州仕置によって約四百年にわたる一族の歴史を閉じています。

そして旧領はその殆どが南部領地になり、一部が伊達領となって和賀氏はこの地方から全く姿を消してしまいました。敗者の歴史は残らず、古文書はもとより関連する遺跡や遺物も失われましたが、昭和七年（一九……）に発見された中世文書『鬼柳文書』九・通が、和賀氏の生い立ちや活躍の跡を知る貴重な文献となっています。

この古文書によりますと、和賀氏は遠く関白藤原氏一門を祖とする『平姓』の子孫であり、伝承されてきた清和源氏を祖とする『源姓』との関わりは判っていないのが実情です。しかしここでは、永明寺の寺伝として伝えられている由緒を紹介します。

建久九年（一一九八）秋、源頼朝の子忠頼が奥州下向のおり胆沢郷（現奥州市）で病に倒れ小田島平右衛門方に寄宿、そしてその家の娘との間に忠明が生まれました。建暦二年（一……）忠明・五歳のときに和賀郡の領主となり、更木村（現北上市）の梅ヶ沢に館をかまえます。

そのとき城主武部太夫忠明が開基となり、春叟良富大和尚が開山となって天台宗の草庵を開き、菩提寺としたのが永明寺のはじまりと伝えます。その六年後の建保六年（一……八）、城主忠明が北上川の対岸、二子の飛勢ヶ森に居城を移して、飛勢ヶ城を築きました。そして城の真下の御台方屋敷に寺を移

転し庇護したのです。

## 火災から守った三尺坊神社と共に火防祭祀る

それからおよそ二百年後に現在地に移築、鬼柳村（現北上市）正覚寺六世深谷是泉和尚を開山として曹洞宗に改宗しました。そして本尊を釈迦牟尼仏とし、また山号を梅ヶ沢城にちなんで梅沢山と号しています。

現在の本堂は、弘化三年（一八四六）当寺・四世宣孝の代に再建。そして昭和四〇年（一九六五）屋根を茅葺きからトタン葺きに変えています。また平成二年には位牌堂を改築しました。

曹洞宗の寺院の場合、寺の鎮守は三尺坊大権現または豊川稲荷を祀ることになっています。永明寺には明治一五年（一八八二）当寺・六世天外和尚が静岡県の秋葉本殿可睡斎四七世西有穆山禅師より御分体を勧請した可睡三尺坊大権現があります。

昭和一八年（一九四三）春、寺の門前の十五軒が火災となり、寺も危くなり御尊像を避難しようとした所、急に風向きが変わり類焼をまぬがれました。霊験あらたなる大権現への信仰が一層高まり、毎年旧暦一月八日の春の火防祭には御尊像を奉安し、秋葉神社と共に盛大に行われています。

## 「鐙ヶ渕」の伝説

当寺の北側直下は北上川が深く渕となっています。飛勢城落城のとき鐙を投げ捨てたといわれ、また一説には大鐘を投げ込んだともいいます。蒼碧凄愴の感のある景観です。永明寺渕とも呼んでいます。

◎弘化3年（1846）再建以来火災から守っている本堂。

◎寺の東側を流れる北上川の鐙ヶ渕には伝説が伝わる。

# 北上川で川施餓鬼供養続け数百年

## 和賀山 梁黒寺 曹洞宗

◆北上市川岸三丁目二四・五八
◆電話（〇一九七）六四・一九四〇
　ファックス　六四・一九四〇
◆住職（第二六世）　中田芳文

月遅れのお盆の一六日、僧侶の読経が流れる北上川の川面を静かに流れる灯篭の明かり。数百年の間変わることなく続いてきた川施餓鬼供養は、梁黒寺が導師を勤めて行われてきました。

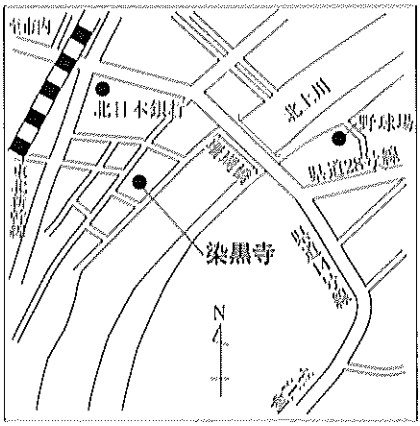
北上川の川畔に営まれてきたこの寺院は、古くは川寺として道行く人々に宿舎を提供したと伝えられています。そして北上川舟運の基地として繁栄した川岸港に住む船頭達の心の支えでもありました。

そもそもこのお寺が開かれたのは古く、仁寿二年（八五二）慈覚大師により天台宗の寺院として開かれました。当時の本尊は天竺鋳造の金赤銅観世音といわれ、慈覚大師真筆の経石もあったと伝えられています。

下って康平五年（一〇六二）九月、四日、源氏の大将源頼義がこの地方を支配していた安倍貞任の弟黒沢尻五郎正任の館を攻めたとき、お寺が館に近かったため戦乱によって大破します。そして戦後、源頼義が諸堂を復興、観世音を安置しました。

以後盛衰をくり返しながらも、正和二年（一三一三）八月には花園院御后が再興、それを物語る石碑が現在も保存されております。山門をくぐると、そのすぐ左手に建っている古石卒塔婆がそれで、梵字の「バン」の字が書かれており、黒沢尻館の館主であった安倍一族を供養する塔婆ではなかったかと考えられています。

その後嘉吉年間（一四四一～四四）に再び諸堂が焼失、住む僧もなくただ観音像が草庵に祀られているだけでした。そして天台宗禅国寺はここに断絶することになります。




### 天台宗を曹洞宗に改宗 寺の繁栄と北上川舟運

六十数年の時を経て、鬼柳村（現北上市）の正覚寺五世文竹和尚が復興を

思い立ち、寺の造営を始めたのが永正元年（一五〇四）のことです。そして本尊を釈迦牟尼仏とし、宗派が曹洞宗に変わり、お寺の名称は呼び方が同じでも文字を染黒寺と改めました。

江戸時代に入り、南部氏の支配下となったこの地域は、伊達領との境の港として正保二年（一六四五）川岸港が開かれ南部藩の御蔵が置かれました。

船頭衆が住み、また北上川舟運を通じて人や物資の交流が多くなって檀信徒の帰依も篤く、寺院の果す役割も強まりました。

街の発展は災害と裏腹で、明治六年（一八七三）一〇月二日、二世味道和尚の代に本堂を焼失しました。再建は二世芳和尚の代で、本堂・衆寮・山門・庫裡・鐘楼など七堂伽藍のほかに、土蔵までも立ち並んだ立派な寺院に復興しました。

ところが明治二七年（一八九〇）、再び川岸の大火に見舞われ、当時の土申書によると、七棟をすべて焼失したと記しています。焼跡に立った芳和尚は再興を発願、檀信徒の絶大な協力で十年後の明治三七年に本堂を再建、その後昭和二六年、五世直文和尚が本堂屋根及び庫裡を改築しました。

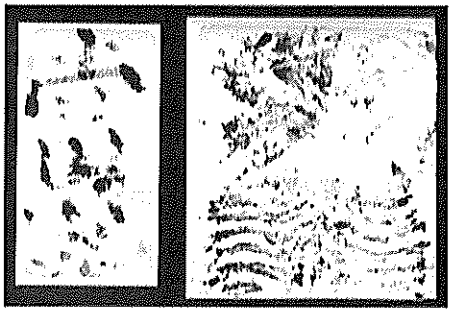
㊤明治時代に二度の火災に見舞われ本堂が再建されている。以後川岸の自衛消防は強力になる。

## ■カッパの手形

今から二百年ほど前当寺・四世大器和尚が、厩のなかにうずくまっているカッパを見つけました。

和尚は人間に絶対悪いことをするなとわび状を書かせ手形を押させ、カッパを北上川に放してやりました。そのカッパの手形が現在に伝わり、寺宝として大切に保存されています。

㊦北上川にまつわる伝説も数多く残っており、その伝説の一つ「カッパの手形」を保存する。



# 南部氏家臣の開基で神興を祀る寺

## 花岩山（かがんざん） 永昌寺（えいしょうじ）

曹洞宗

◆北上市更木三二・一〇五
◆電話（〇一九七）六六・四二四〇
ファックス六六・五〇四四
◆住職（第二四世）海野義清

国道一〇七号線を東へ、北上川に架かる日高見橋を渡り終えると直ぐ下に北上川に沿って走る県道花巻・北上線があります。これを北へ向かって約一㎞進みますと、右手に中世和賀氏が居城した極ヶ沢館跡があります。

県道からやや坂道を登ると、深い緑の樹木に囲まれた境内が見え、太鼓橋を渡り樹齢百余年の名木シダレカツラを右に山門をくぐりますと、正面に豪壮な永昌寺本堂の屋根が見えます。

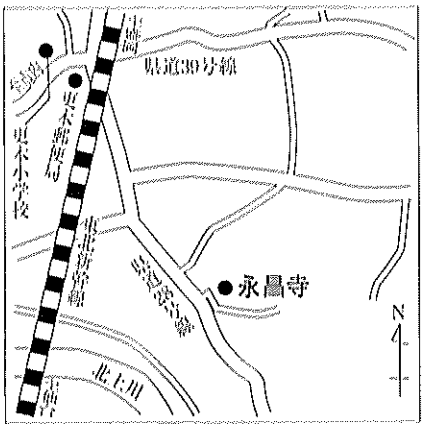
本堂の裏には今なお豊富に水を湛える古池、苔むした庭石、山から注ぐ自然の水など、境内全体が古色蒼然としていてしっとりと落ち着きを感じさせてくれる環境です。

当寺の由緒や沿革については寺伝による以外にありませんが、開基は南部藩家老だった桜庭安房守光康であると伝えています。

慶長元年（一五九六）、この地方を支配していた和賀氏を滅ぼした南部氏は、藩主南部利直が桜庭光康に新領地として更木村（現北上市）の百石と、二十五条衣の袈裟を与えます。

そこで桜庭はかつて和賀氏が居城した極ヶ沢館の麓（現在の永昌寺山門下）に寺院を建てることになり、花巻の瑞興寺、二世陽山天朔和尚を迎え入れ、堂宇を建立して開山としました。

この地域は地質的に花崗石が多いところから山号を「花岩山」とし、また人類古今の理想である永遠の平和を意味するものとして、寺号を「永昌寺」としたといわれます。因みに開基桜庭光康の法号は「永昌院殿花岩永慈居士」となっています。




## 珍しい寺中心の火防祭 今では地域の春の祭典

当寺は開創後に二回火災に遭い、伝来の二十五条の袈裟をはじめ貴重な寺宝、記録等すべて焼失してしまいまし

た。このような火災に一度と遭遇しないようにと願いを込めて、寺院が中心となって火防祭を実施し、現在も続けております。

当寺一世南浦東薫和尚の代に更木村（現北上市）が大火に見舞われました。そこで現在の静岡県に祀られている可睡斎（かすいさい）より一尺坊の分体、火の神を当寺に鎮座させるため秋葉堂を建てました。そして毎年四月八日に、秋葉講中が中心となって全町を挙げた春の祭りとして行うようになりました。

数百年の風雪に耐えてきた秋葉威徳大士を祀る神輿を先頭に、各集落ごとに幹をこらした山車、また地元に伝わる手踊り等、思い思いに仮装をこらし、笛や太鼓の音に合わせて全町を巡り火災消除はもとより無病息災、五穀豊穣、交通安全を祈願しています。

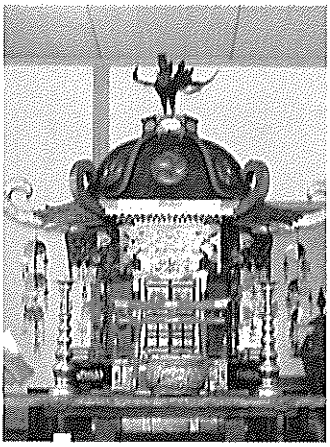
全国数多い寺院の中でも、神輿が寺院から出るのは珍しく、北上市内ではもとよりこの寺院だけで、県内でも聞くことはありません。祭典日は地元民の希望で、十数年前から四月の第二日曜日に変更しています。

当寺も現住職が着任する前二十年間ほど無住時代が続きました。専任住職となり本堂の屋根を葺き替えトタンに葺き替え観音堂も新築しました。平成八年には庫裡も新築しています。

裏山に大日堂と呼ぶ社がありますが記録もなく今後の調査が待たれます。

寺宝は焼失し殆どありませんが、数百年の歴史を持つ秋葉威徳大士の神輿が貴重な遺物で、最近では高村光雲作の聖観音像もあります。

開山当時からあったと考えられている「ネズコ」と呼ぶヒノキ科の巨木は、樹周二・六m、樹高二〇mで、全国でも珍しい樹木です。



(b)樹木や豊富な水など自然環境に恵まれた本堂。
(a)数百年の風雪に耐え抜く秋葉威徳大士の神輿。

## 宿場町に五人の有志で建てた寺院

# 一圓山 稱名寺（いちえんざん しょうみょうじ）

曹洞宗

◆北上市花園町二-五-二二
◆電話（〇一九七）六三-二五三四
ファックス六三-二五三四
◆住職（第四世） 膝舘光明

北上市の市街地、通称花屋町と呼んでいる寺町通りの一角に、鉄筋コンクリート造りの立派な寺院が見えます。これが曹洞宗の称名寺です。

当寺に伝わる文書に、由来や開山についてくわしく記録されています。それは寛政七年（一七九五）糀屋（こうじや）佐七が書いた『東堡山来記（とうほうざんらいき）』によるものですが、寺院建立に至った経緯をつぎのように書いています。

黒沢尻村（現北上市）の本町内には寺院は一寺に及ばず、庵室もなく葬送儀のときには大変不便だったことから当時の寺社奉行竹村三郎兵衛の心付けをもって建てることになりました。

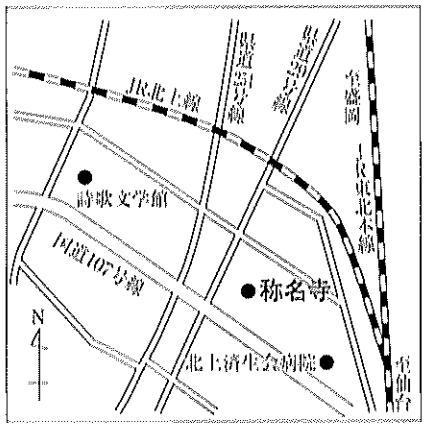
本町佐藤典右衛門の墓所の空地に草庵を建てる相談がまとまり、竹村三郎兵衛と佐藤典右衛門に石川伊兵衛、高橋道順、菊池忠兵衛が加わり、有志五人によって草庵を建て、門前に記念樹として杉を植えたとあります。

そして、秋田領六合（現六郷町）生まれの浄運という旅の僧を庵主として貞享四年（一六八七）に開山しています。浄運は俗名を久保田清四郎といい疫病により妻子に死別し、その菩提を弔うため剃髪し、名を浄運と改めて諸国行脚の旅に出ます。その帰国の途中黒沢尻の馬継所に宿泊しているところに、その人柄を見込んだ檀信徒が訪れ庵主になるよう勧めたと伝えます。

草庵と庵主が整ったものの御本尊がありませんでした。ところがたまたま道心という者が草庵に宿泊を乞い、同人は阿弥陀如来一体を奉安して本国へ帰る所であることを知りました。

そこで世話人五人が相談してその仏像を当庵に安置したいと交渉、代価金三両で譲り受けることになりました。道心は宅悪を寄進し帰国しました。

草庵・本尊仏も整ったので、花巻の浄土宗寺院広隆寺の末寺にして頂くことになります。世話人を代表して菊池



患兵衛が広隆寺に趣きお願いしましたところ、広隆寺住職はことのほか喜び、その庵に対して、円山弥名院という由号と寺号をなえました。

## 浄土宗を曹洞宗に改宗
## 総檀信徒の協議で決定

以来浄土宗の弥名院として寺院を運営してきましたが、明治二九年（一八九六）当院・九世諦親和尚が、花巻の安浄寺より転住。以来その息子諦念・諦学・諦泉二兄弟が継住して堂宇の復興修築に努め、また墓地の整備等に尽力しました。

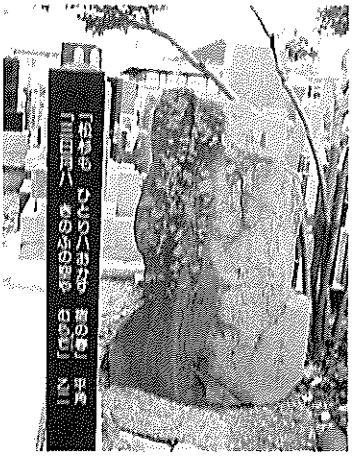
諦泉和尚の代に護持会を組織、そして檀徒総代護持委員及び総檀信徒の協議によって、昭和二七年（一九五二）宗教法人曹洞宗包括法人弥名寺として浄土宗より曹洞宗に改宗しました。

本寺は青森県名久井（現名川町）の法光寺と定め、開山は法光寺二四世天由昇光大和尚となりました。そして二世は祖道諦学和尚を勧請し、諦泉和尚は三世中興月洞泉和尚となりました。

現本堂及び庫裡は、平成元年に新築しました。寺宝としては正徳五年（一七一五）黒沢尻の鍵屋伊八郎が仕入れの際に上京し、金二十二切で購入したといわれる「十王会図」十幅を有志十五人によって奇進されています。

境内には江戸時代末期の俳人で、奥州俳壇四天王の一人と称された宮城県白石の「岩間乙二」と盛岡の「平野平角」合作の句碑が建っています。「松杉もひとりハおかす宿の春」平角「二日月ハきのふの空やむら芒」乙二

この句碑は貞雅「平野屋長七」への追悼句として建立されました。




㈱平成元年線鉄筋コンクリート造で新築の本堂。

㈱境内には奥州俳壇四天王の一人の句碑がある。

# 和賀氏先祖の開山悲話が伝わる寺

## 源花山 正洞寺 曹洞宗

◆北上市黒岩一八・四五
◆電話〈〇一九七〉六五・〇七七二
ファックス六四・一四〇二
◆住職（第二四世） 熊谷忠興

北上市を南北に貫流する北上川の東部地域は北上山脈が併行し、その山合や麓に数多くの集落があります。この山に沿い古代の国道東海道が走っていて、沿線には由緒ある古代寺院遺跡が数多く発掘されています。

正洞寺が置かれているのは、北上川東部地域の北寄り黒岩地区で、この周辺には平安時代後期の巨大寺院白山寺が営まれていました。そして鎌倉時代に入り、この地方を支配した和賀氏の最初の本拠地「岩崎城」が置かれたのもこの黒岩地区でした。

天正一八年（一五九〇）、和賀氏が豊臣秀吉によって領地を没収された後に、和賀の家臣簡治部助が和賀氏の生い立ちについて化巻城代に答えた控えが残っています。

それによると、和賀氏の先祖は源満仲で、その子美子代丸（美丈丸）は、父の勘当を受けて摂津国多田の里（現在兵庫県川西市）の正洞寺に隠されますが、後に奥州へ下り和賀に住みつきました。そして、寺を建立します。

これにはつぎのような悲話が隠されています。満仲の二男美丈丸（後の満賢）は、父の命に背き怒りを買い、家老の藤原伸光に美丈丸の首を取るよう命じます。しかし伸光は幼い美丈丸を殺すにしのびず、わが子幸寿丸の首を身代わりに差し出しました。

出家した美丈丸は修行中、大川の里と呼ばれていた黒岩に辿りつき、水を飲もうと池をのぞき込んだところ、身代わりの幸寿丸の顔が、池に映りました。美丈丸はこれを憂い、その地に寺を建立し供養したというお話です。

このような伝説のもとに黒岩の湯ノ巣に幸寿丸を祀る天台宗の小堂寺が建てられました。そして建保五年（一二一七）に飛勢城が築かれてから和賀氏の菩提寺となりました。

天正一八年（一五九〇）飛勢城が落

城、和賀氏が没落し寺も戦火で焼失します。そして、年後の文禄元年（一五九二）に現在地に再建されたのを機会に曹洞宗になり寺名も正洞寺と改称されました。かつての寺跡は、現在でも「郷寺」という地名が残っています。

## 本堂屋根に菊の御紋章
## 初代二所ノ関の墓祀る

その後、文化…年（一八〇六）に本堂を改築、また同五年（一八〇八）には山門を新築しました。なお開山堂に祀っている幸寿丸像は、天保四年（一八…）四世秀林の代に奉納したと記されています。

本堂は昭和四…年（一九六六）に屋根の大改修を行い現在に至っていますが、屋根には代々菊の紋を使用していますが、これは美丈丸が皇室の流れをくむためと伝えています。

この本堂は更に平成四年に、屋根を銅板葺きに改修しました。そのほか位牌堂は、昭和五〇年（一九七五）に新築しています。

境内の一角に大相撲二所ノ関部屋を創設した初代二所ノ関軍右衛門が祀られています。宝暦…年（一七六…）黒岩力内で小田島勝之丞の子として生まれ、南部藩の抱え力士となり錦木塚

右衛門を名乗りました。

初土俵は…歳というやや遅い出発でしたが、寛政…年（一七九〇）に大幕。翌年…代将軍家斉の上覧相撲で雷電灘之助を「うきぞり」という妙手で破り、その名をあげました。

最高位の大関に上りつめ、文化…年（一八〇六）に二所ノ関軍右衛門に改め翌年引退、二所ノ関部屋を創設しました。後に朋の四賀峰東吉が入門、大関となっています。

㊤開山の美丈丸が皇室の流れをくむと伝えられそのため、本堂屋根に菊の御紋章がついている。

㊦開山堂に祀っている身代わりで死んだ幸寿丸。

# 泉の豊かな和賀の古城をしのぶ寺

## 福壽山 泉徳寺

曹洞宗

◆北上市和賀町岩崎二二一五六
◆電話（〇一九七）七二一六三九〇
◆住職（第二三世）高屋瑛経

北上駅からバスで一〇分、岩崎橋で下車し、徒歩七分ほど南に向かいますと、傾斜の緩い石段が見えます。この石段を登りつめた所に大正時代に建築された山門があって、その右手に泉徳寺の本堂が見えます。寺院は、一般的に山門と本堂とは一直線の参道で結ばれていますが、このお寺の場合は山門から山内の参道を大きく右へ曲がり本堂は死角になっています。

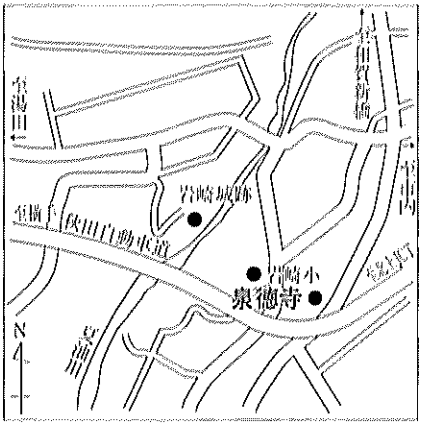
この寺院の由来記によりますと、備前国（岡山県）児島の高僧道心坊が、庵を結び「高徳庵」と名付けたのが始まりと伝えています。

開山したのは文禄二年（一五九四）当時の伊達領江刺郡角掛村（現江刺市）の瑞徳寺六世闡叟良芝和尚がお堂を建立しました。

その後慶長元年（一五九六）に曹洞宗「専徳寺」となりますが、四世千岳梵秋和尚の代に火災で本堂を焼失。直ちに現在地の高台に寺を復興したという記録が残っています。この場所は境内の各所から泉が湧き出ているために寺名を「泉徳寺」と改めたと伝えています。泉は未だにあって、本堂前の池には泉から水が引かれて境内の景観を保っております。

和賀町岩崎は、中世和賀氏の居城のあった所です。その本丸のあった跡の麓には、奥羽山脈を源とする夏油川の清流が流れていて、その周囲には豊かな田園が広がっています。今では和賀氏の興亡をかけた戦乱の跡をしのぶことはできませんが、お寺の伝承によりますと、和賀氏の家臣が檀徒の中心であったといいます。

やがてこの地が南部領内に組み込まれ、お寺も曹洞宗となって和賀氏との関わりは、この地に長年伝承されてきた民俗芸能鬼剣舞によってしのぶことができるのみです。現在山門への石段入口には鬼剣舞の供養碑が祀られ、踊



組によって毎年お盆には念仏回向をあげています。

## 開田・植林・茶栽培等住職に多い農業推進者

本堂は現在地に再建以来二百有余年を経ていますが、代々の住職は終年住職の座について寺を守ってきました。従って開山から数えて現在…世というのも珍しいことです。

住職には農業や林業、あるいは養蚕業を兼ねた異色の住職も多くおりました。特に開田事業に対しては、数多くの住職が力を入れ、史実として残っている開田事業を推進した住職は、四世梵秋、七世本中、八世喚中、九世法甚、の各和尚の名が出てきます。この開田事業を積極的に進めることによって、寺の経済を支えてきました。

また林業には、七世本中から…世蜜禅大和尚に至るまで代々、杉や松の植林事業を推進し、林業の基盤を築きました。中でも…世禅学和尚は、そのほかに養蚕や茶の製造まで手を広げといわれています。

禅学和尚の場合は、寺の経済を維持するばかりでなく、岩崎地域の一帯の農民に養蚕事業を広めました。現在でも当時植栽した桑の木や茶の木などが境内に残っていて、これらは泉徳寺の住職として、あるいは地域の指導者としての苦労があったことをしのばせてくれる遺産です。なお泉徳寺は、新…十…ヵ所観音巡りの寺、第…番目の札所となっています。

㋑境内から泉が湧くことから命名された「泉徳寺」の本堂。
㋒民俗芸能鬼剣舞の元祖「岩崎鬼剣舞」の念仏供養碑。

# 和賀氏と家臣に深い関わりある寺院

## 法幢山 慶昌寺

曹洞宗

◆北上市和賀町横川目八一二〇八
◆電話（〇一九七）七二二五〇四二
◆住職（第二二世）高田孝二

奥羽山脈を源に北上市を東西に貫流する和賀川、また秘湯として知られる夏油温泉から流れてくる夏油川、この二つの川が合流する附近の段丘の突端に、中世の館跡岩崎城跡があります。ここから西方和賀川沿いの神積沼に煤孫地域の山村が拓け、その豊かな田園地帯の中に慶昌寺があります。

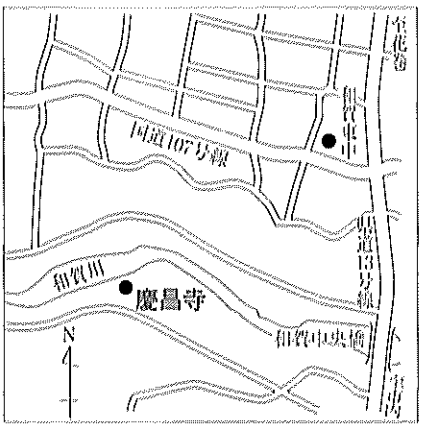
かつて旧暦七月・六日には、近郷から檀信徒が集まり「慶昌寺詣」として賑やかな一日でした。日中には近在に伝承する雛子剣舞が奉納され、夕刻からは露天商が並び賑わいは夜更けまで及びました。花巻市太田の「清水祭り」と並び称されたものでした。しかし戦後、十年代末から急速に姿を消して、現在は往時を懐かしむ檀信徒から、復活の声も出ています。

当寺の沿革については、延享二年（一七四六）、二世・乗龍音和尚が記した『慶昌寺縁山記』及び『世代譜』による寺伝で伝えられています。

それによりますと、開創は建武年間（一三三四～三八）の頃、鎌倉建長寺の蘇山和尚が隠居して和賀氏を二子の飛勢城に訪ねますが、やがて流俗をきらって煤孫村（現北上市）の長田の庄に小庵を結び、法幢庵と号しました。長田の庄は現在地より東側の地で、附近に「寺村」の屋号が残っています。

永禄二年（一五五九）に、三照村（現江刺市）の正源寺五世・碩道換和尚が当地を訪れ、すでに廃寺になっていた法幢庵を復興し、法幢山慶昌寺と号して開山となりました。

開創時から和賀氏と深い関わりを持ち、一族の煤孫氏を開基家としています。和賀氏が南部氏に敗れた慶長六年（一六〇一）以後は、近在の農民や帰農した旧和賀氏家臣の菩提寺として維持されてきました。また煤孫氏が西和賀地方にも勢力を及ぼしていたこともあって湯田町や沢内村にも檀家が多く、



特に鉱山で賑わった時期には慶昌寺別院を置いたこともありました。

## NHK除夜の鐘で放送
## 毎年本堂で神楽を公演

寛文一〇年（一六七〇）五世天辰文堯の代に堂宇を改築の際に、長田の庄より数百m離れた北西の現在地に移転し七堂を完備したと伝えています。

明治三〇年（一八九七）禅堂から出火し、主要な堂宇を全焼してしまいました。翌三一年（一八九八）に本堂は再建されますが、以後一八世大道孝順、一九世蘭庭孝道、二〇世博法孝学に至る三代七十年間、寺檀協力して復興に当たり今日に及んでいます。

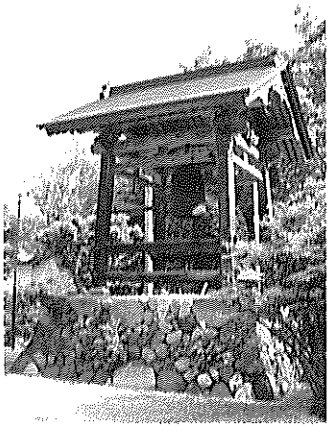
昭和三〇年代後半に庫裡を改築、また本堂の屋根は戦後何度か改修しましたが、平成六年には銅板葺きとして現在に至っています。

境内にある鐘楼堂から、昭和五一年（一九七六）の除夜の鐘がNHKから放送されました。この鐘楼堂は文化三年（一八〇六）、三世蔵海遠珠が願主となり、開基媒孫重右衛門功徳主により大梵鐘を寄進、鐘楼堂を建立しました。以来この地方の名鐘として山野に時の鐘を響かせました。しかし昭和一七年（一九四二）太平洋戦争により軍事特別調達として供出しました。

現在の梵鐘は、昭和三八年（一九六三）仙人入当の小田島万吉氏が功徳主となり寄進されたもので、二〇世博法孝学の代です。

なお媒孫地域に伝承している大乗神楽は、仏教との関わりが深いことから慶昌寺本堂を会場に毎年冬期間、旧正月公演として一般に公開しています。

(上)一四世紀からの長い伝統を継いできた慶昌寺。



(右)昭和51年のNHK除夜の鐘で放送した鐘楼堂。

# 開田事業に貢献した高僧開山の寺

## 日月山 全明寺（にちげつざん ぜんみょうじ）

曹洞宗

◆北上市下江釣子（六・一七八
◆電話（〇一九七）七七・二二〇四
◆住職（第二八世）小笠原徹宗

国道一〇七号線を西へ向かうと、最初の地域が北上市江釣子地域です。その西端近くで左折し南へ約百mの所に全明寺があります。周辺は東西に和賀川河岸段丘が連なり、清水の湧き出る清水の里として知られています。

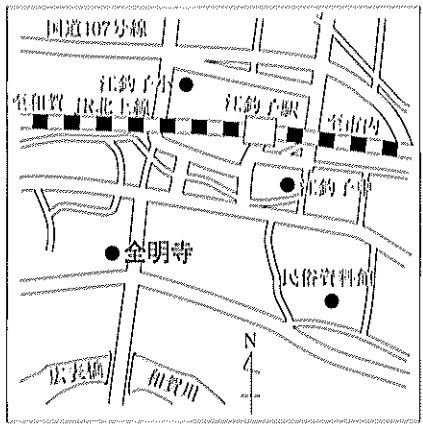
当寺の沿革を記録する文書類は、全明寺三世と一〇世の代に数度の火災に遭ったと伝え失われていますが、五世仏眼大梓が記した『村崎野村神明山縁起』などによって知ることができます。それによると、全明寺は天文一一年（一五五二）に、東北の古刹胆沢郡水沢村（現金ヶ崎町）の永徳寺七世為円洋輪和尚が開山しました。

永徳寺は本山総持寺二世峨山紹碩大和尚の二十五哲の一人道叟道愛和尚が開山した寺院で、その兄弟子である無底良韶和尚は、黒石村（現水沢市）に東北大本山といわれる正法寺を開山したという由緒ある寺です。

全明寺は最初山号を釣江山と称していましたが、延宝六年（一六七八）に日月山と改めました。これは鎮守である天照大神に因んでの命名だったといわれます。その鎮守は、実は寺院開山前から同寺境内にあった社で、延宝七年（一六七九）に全明寺境内に本宮が建立され、大日如来像を御神体として安置しました。

ちなみにこの神社の新宮は、北上市村崎野にある現在の天照御祖神社（通称・伊勢神宮）です。かつては神事祭礼のとき、神輿が全明寺本宮から村崎野新宮に渡御しました。そして別当である全明寺住職は、必ず領主から賜わった裳の紋が刺繍された裃袴を着用したといいます。

このように神仏が一体となって、地域との信仰を深めていったのは、寛文五年（一六六五）に十五の許可が出た南部藩藩営開田事業であり、その中心人物奥寺八左衛門と全明寺四世仏弘祖

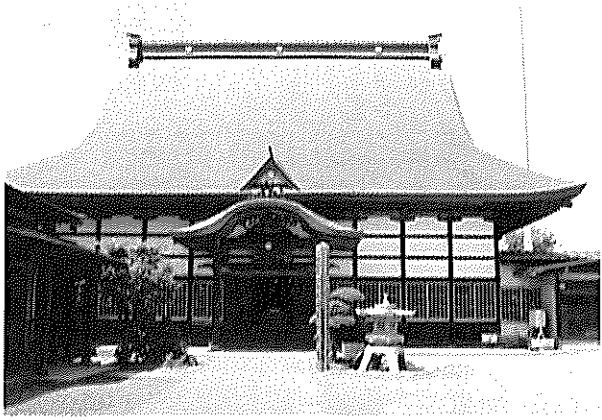


悟和尚との関わりからです。

## 神仏一体での加持祈祷
## 境内に残る神社の痕跡

四世仏弘祖哲は、別名大迦和尚とも呼ばれ、南部藩主奥寺定恒こと通称八左衛を助けて奥寺堰開発のために努力しました。人力のみで達成できなかった大事業を、神仏の加持祈祷により稲荷権現の神通力を借りて堰の難点とされた測量の基点を悟り、十五年間の歳月を費やして完成しました。金明寺はその功労者として南部藩主から、その地区で水の恩恵を受ける者はみな金明寺檀家と定められ、寺門は益々繁栄したと伝えられています。

大迦和尚は奥寺八左衛門と兄弟だったともいわれたことからも、二人の関係の深さを推し測ることができます。そして時の将軍家から大迦和尚に「葵の御紋」入り袈裟が贈られています。



境内に祀っていた天照皇大神宮の本宮は現在は跡かたもなくなり、杉の古木の切り株だけが残っていて、社が何時廃れたのか判っていません。しかし南部藩から賜わった祭祀料が、廃藩置県後の明治四年（一八七一）まで続いたといいますから、恐らく明治の宗教改革で境内の社は廃され、御神体大日如来は金明寺本尊（秘仏）として守られることになったと考えられます。

寺宝には北上市指定文化財の「金明寺板碑」（鎌倉末期）をはじめ、長さ一四・六㌢、幅一・八㌢の大供養追善歌額。また本宮境内にあった樹齢数百年と思われる杉の切株（一・一㍍、×一・四㍍）も含まれます。

平成七年に、本堂と開山堂を大改修しています。また今年は、開山四百五十年に当たります。

㊤奥寺堰受益者は金明寺の檀家になるよう南部藩から藩命が下されるほど開田に貢献の本堂。

㊦本尊大日如来（秘仏）はかつて神社の本尊。

# 国柱会創設の田中智学が信仰の道

## 晴龍山 妙宗寺

### 法華経信行会

◆北上市常盤台一―一九
◆電話（〇一九七）六二―二八二六
◆住職（第二世）　松田妙仁

北上市の中心部本通りを北へ、JR北上線踏切りを渡ると右手の小高い丘に見える黒沢尻北高校校舎の下に、桜や松の古木に囲まれて妙宗寺があります。当初閑静な環境に包まれていましたが、時代の変転と共に住宅が密集し、国道・〇七号線の切り替え道路も完成して周辺は一変しました。

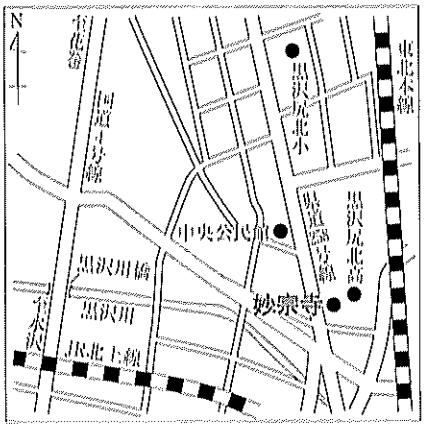
当寺は昭和……年（一九四八）……月、前住職松田龍入上人が開山しました。本堂に『本化信行道場』の額を掲げていて、寺院というより修行道場の方がふさわしい寺です。開山の前年には金ヶ崎町に妙教寺を開きました。

寺の歴史は浅いのですが、日蓮の中心教義久遠実成の釈迦牟尼仏や聖祖日蓮大聖人の教化を信奉することはもとより、遥くは日蓮宗教学の礎学の人、田中智学や由川智応の教えにふれて、僧俗一体となった『上求菩提、下化衆生』の信行に精進している寺です。

田中智学は日蓮系の宗教団体・国柱会の創設者です。生涯日蓮主義信仰に生きた宮沢賢治は、大正……〇年（一九……）に上京して、数ヶ月間この国柱会で奉仕活動をしていますが、創設者の田中智学と個人的に面談したことはないと考えられています。

田中智学は日蓮教学理解のために、日刊仏教新聞を創刊しますが、その社長が後に法華経研究で日本初の博士号を受けた由川智応です。また田中智学は『本化摂折論』を出版しますが、日蓮教学研究発表として十項目にわたる読書計画を推めました。その十番目の『妙行正軌』を暗誦して書いたと思われる内容が賢治の『雨ニモマケズ手帳』の至る所にでてきます。

宮沢賢治はこのように難しい仏書を青年時代に読み、理解して日蓮の教えに傾倒して行ったものと考えられています。昭和八年（一九……）九月……日賢治は……七歳で亡くなりますが、国



桂会から「真金院不日賢善男子」の法名を授与されています。

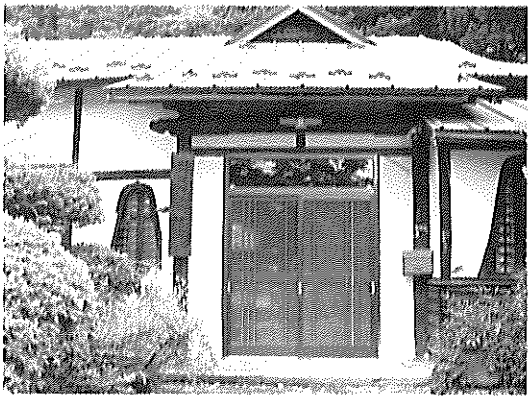
## 開基の祖は岡山の名門 城主として法華を普及

ところで開山の松田龍大上人は青森県弘前市に生まれですが、先祖は岡山県出身で中世の城主でした。遠く藤原鎌足を祖とする名門の松田氏は、備前国（岡山県）内の各地で城主としてその名を高めています。一方松田氏は外護の武将（日蓮宗を守る大壇那）と自ら信じて祭政一致を徹底しました。これが備前法華が生まれた由来です。

松田氏は後に滅亡し、その子孫は東北と四国に逃れたといいますが、日蓮の教えはこの地方に現在も広がっています。中でも松田氏が居城の金川（現岡山県御津町）の城下には日蓮宗不受不施派の本山妙国寺が、また鹿瀬（現岡山県御津町）には日蓮宗不受不施講門派の本山本覚寺があって、いかに日蓮宗が広まっているか判ります。

当寺には寺宝である御本尊大曼陀羅が一幅あります。一幅は日奥上人が元和元年（一六一五）五月二八日に書かれた御真筆であり、もう一幅が一宅島に流罪になられた本妙院の日珠上人御真筆のものです。このほかに仏舎利も祀られております。北上市一子町高屋にいたという伝説の長者が、本山永平寺に多大の寄附を行った際に下げ渡されたもので、それを昭和一桁代に檀家から寄進されています。

当寺には現在檀家が一千軒ほどですが、すべて「一塔合安大霊廟」に奉安し供養しています。この霊廟は田中智学先生が考えられました。



㈲信仰の道を教えた田中智学が考案した霊廟をもとに、境内の高台に「一塔合安大霊廟」を建立したが、ここにはすべての檀家の霊が眠っている。

㈱寺院というより修行道場の名がふさわしい本堂。

# 木造で日本一の毘沙門天像を祀る

# 毘沙門堂（びしゃもんどう）

## 真言宗醍醐派

◆和賀郡東和町北成島五区
◆電話（〇一九八）四二―二三九二
ファックス（四二―二三九二）
◆代表役員　青木愛橘

JR北上駅、北上インター、花巻インターよりそれぞれ車で三十分、JR新花巻駅から車で十五分の所に、木造では日本一の毘沙門天を祀る毘沙門堂があります。

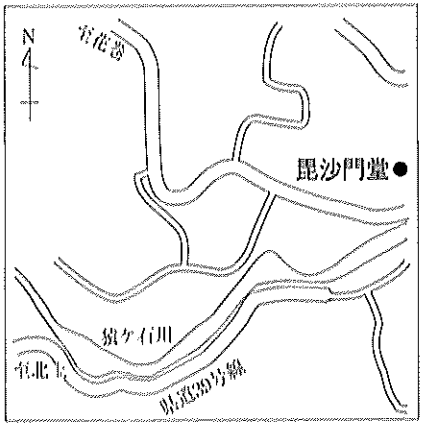
和賀郡東和町北成島に古代から営まれてきた毘沙門堂は、熊野山成嶋寺（なるしまでら）を別当寺として、その境内に祀られました。現在阿弥陀堂、熊野神社などの堂宇があります。境内いっぱいが樹齢数百年と思われる老杉に覆われ、寺院の歴史の古さを感じさせます。

毘沙門堂の開基は、伝承では嘉祥二年（八五〇）慈覚大師の草創とあり、また、坂上田村麻呂が征夷大将軍に任じられ、東北の蝦夷鎮撫の守護神として毘沙門天を祀ったとも伝えます。しかし現在歴史的に解明されているのは、阿弥陀堂にあったと伝える県指定文化財、阿弥陀如来像の胎内銘の祈願文に承徳二年（一〇九七）とあるのが最も古いとされます。

岩手県の北上川周辺では水沢市黒石寺に祀られている薬師如来坐像の真観四年（八六二）、同じく伝慈覚大師坐像の永承二年（一〇四七）の墨書銘についで三番目に古い銘文です。平泉文化の先駆をなす仏像といえます。

これらの仏像を安置していた毘沙門堂は、中世以降は真言宗の成嶋寺が管理していました。現在の建物は延宝元年（一六七三）に修理をした記録が残っていますが、各部の仕上げや建築手法などから室町時代後期の建立と考えられ、平成二年に国の重要文化財に指定されています。

また昭和四二年（一九六七）参道工事中に発見出土した土管は、上代の水道でわが国でも最も古い水道遺跡の一つであることが判りました。境内から二五〇基に及ぶ水源まで、内面が布目の土管約百七十本が発掘されています。全国では地下埋没水道が十七例数えら



れていますが、うち土管使用が六例、他は木樋と管の併用で、ここのようにすべてが土管という例はありません。昭和四七年（一九七二）文化庁認定の文化財に指定されています。

## 数多い平安時代の仏像 国指定や県指定文化財

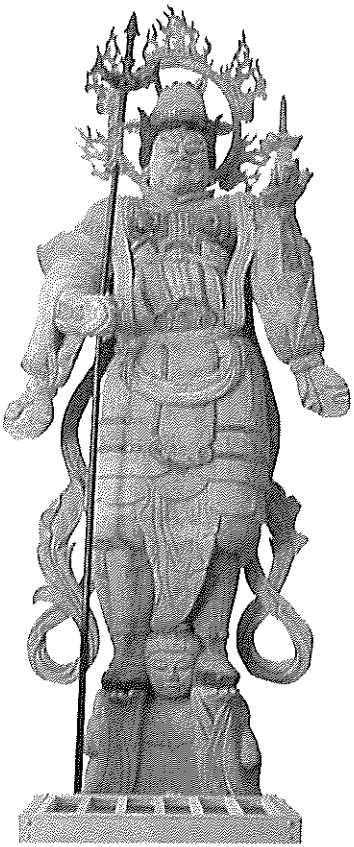
毘沙門堂内にあった仏像はすべて収蔵庫に保管され、一般観覧ができますがその代表的な仏像は「鬼(き)original毘沙門天立像」です。丈六仏（約四・七二㍍）で槻の一木造の仏像としては国内唯一といわれます。活気あふれる名大作で、平安時代中期の作と見られています。大正九年（一九二〇）に国宝に指定、法改正によって昭和二五年（一九五〇）国の重要文化財になりました。

この仏像と同時に国指定となった仏像に「吉祥(きっしょう)天立像」と「二鬼坐像」があります。吉祥天立像は五尺八寸（約一・七六㍍）で、頭に透かし彫りの象頭の冠をいただき、槻の木目が顔の面や胸の部分に表れている平安初期の作品です。二鬼坐像は尼藍婆(にらんば)・毘藍婆(びらんば)といい、毘沙門天の脇侍(わきじ)仏です。

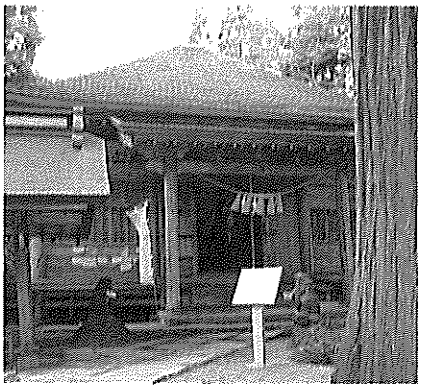
県指定の「阿弥陀如来立像」は平安後期の作品ですが、頭部に江戸中期享保年間に後補の記録があります。

## ■「毘沙門天と味噌」の伝説

かつてひそかな民間信仰として毘沙門天の軀に味噌を塗って祈願をしたといいます。宮沢賢治はその情景を見て詩作「アナロナビクナビ」にはじまる作品を残しました。境内にはその作品を刻んだ詩碑が立てられています。



㊨慈覚大師や坂上田村麻呂との縁りの伝説が残る高さ約５㍍の木造毘沙門天。
㊦かつて成嶋寺の塔中だった毘沙門堂。



# 和賀氏の家臣が発心し開基した寺

## 熊谷山 眞行寺（くまがいさん しんぎょうじ）

真宗大谷派

◆和賀郡東和町北小山田七区三二二
◆電話（〇一九八）四二―三八一〇
ファックス四二―三八一〇
◆住職（第三世）今西教映

国道四五六号線石鳥谷町五大堂から東へ向うと、間もなく東和町へ入りますが、東和町の最北端、石鳥谷町と隣接しているのが北小山田集落です。その道路沿いの小高い丘の上に熊谷山真行寺があって、西南に水田地帯が広がる典型的な農村地帯です。

真行寺は、中世にこの地方を支配した和賀氏・〇代和賀薩摩守義治の家臣である熊谷新助が開基した寺院と伝えております。

熊谷新助は永正六年（一五〇九）山城国（京都）多賀の生まれとありますが、何時どのようにして和賀氏の家臣となったか明らかではありません。

弘治五年（一五五九）四七歳のとき に発心し、本願寺・・代門跡顕如上人に帰依して得度し、剃髪して釈真行と法名を賜りました。そして、翌弘治・年（一五五六）に小山田村（現東和町）果子田に庵寺を建立して、真行坊と号しました。元亀・年（一五七・）六・歳で亡くなっています。

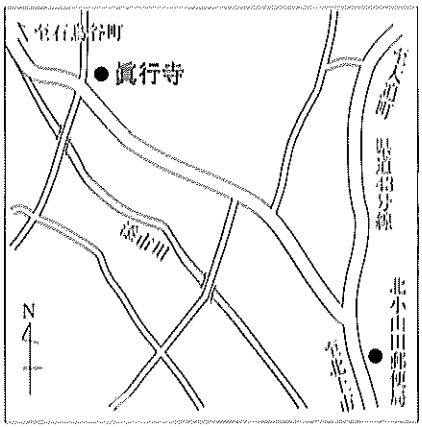
その後文禄元年（一五九・）第・世釈常法の代、本願寺の末寺となり、寺号の熊谷山真行寺を賜りました。

慶長元年（一五九六）第五世釈唯教が、現在地の新山地区を弘通の勝地として堂宇を移転しました。

以来火災に遭うこともなく、約四百年にわたる歴史をこの地で刻んできました。本堂前の銀杏の古木は、本堂と共に歩んできた歴史の証言者です。

歴代住職の中で、円徳寺（花巻市藤木）から入寺したのは四世唯願、・・世雲龍、・六世海印。・九世秀孝は永林寺（宮守村）、また、・〇世珠映は、昭和・五年（一九五〇）西念寺（北上市）より入寺しています。

本堂の茅葺き屋根にトタン掛けしたのは戦後で、平成六年にはカノコ建ての上谷の腐触が激しく大改修を行っています。また庫裡は昭和六・年（一九



八八）に新築、いずれも二世光映の代に行われました。

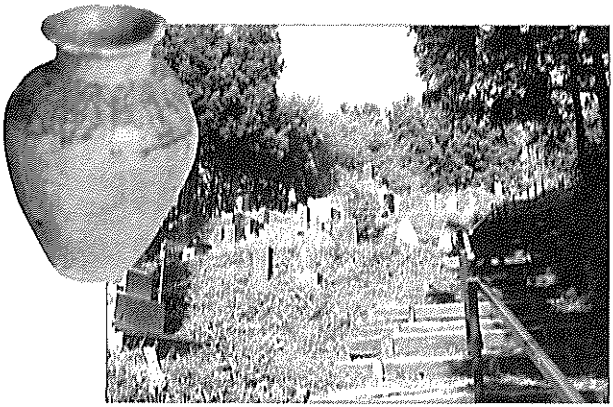
## 裏山の墓地から壷発掘
## 中世上期と想定の経塚

寺宝には開基釈真行の護身仏と伝わる本像阿弥陀如来坐像があります。また真享四年（一六八七）に下付された親鸞聖人御絵像と蓮如上人御絵像の各一軸。明和九年（一七七二）下付の七高僧御絵像と聖徳太子御絵像各一軸。これらはいずれも本寿寺（盛岡市）から下付されています。

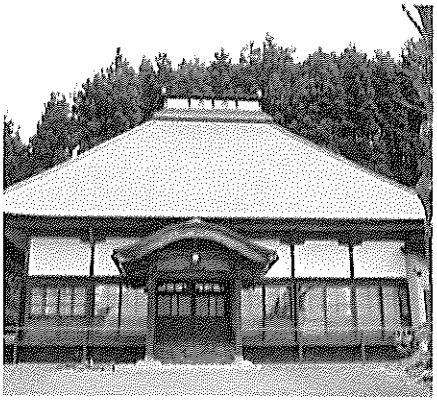
このほかに特徴的な寺宝として、経塚から出土した壷があります。真行寺の境内となっている裏山は、現在墓地となっていますが、その丘陵の頂点に経塚が造られていました。

経塚は半ば崩されていましたが、昭和四六年（一九七一）発掘調査の結果、多数積み重ねられた小石の間から、御経を納めたと思われる細長い壷が発見されました。

由来等は全く判っていませんが、形式からして中世上期のものであり、慶長元年（一五九六）にこの地に移転するに際して、由緒ある経塚のある場所を霊地として、移転場所を決定したのではないかと考えられています。



㈱本堂の裏山にある墓地から中世上期の経塚が発掘され、小石の間から納経の壷を発見。
㈲この地に移ってから約四百年という本堂。



真行寺は江戸時代、小山田（東和町）を始め八重畑・新堀（石鳥谷町）等の戸籍を取り扱い、寺子屋を開き、また南部藩主の御布告の会所と伝えられていました。

昭和四六年（一九七一）それを示す資料が本堂須弥壇下から発見しました。杉箱には「第九区御布告会所御用」と表書きされ、ローソク台は銅鉄合金の折重ね型二本足で、胴体と足には金色模様を刻んだ立派なものです。

# 肥後国から諸国行脚し開山の伝説

## 西峰山 信泉寺（さいほうざん しんせんじ）

真宗大谷派

◆和賀郡東和町土沢五区二九八
◆電話（〇一九八）四二－三八一〇
ファックス四二－三八一〇
◆住職（第二五世）今西教映
奥行寺兼務住職

JR釜石線の土沢駅から百㍍ほど向い側、旧釜石街道沿いの小高い丘の上に西峰山信泉寺はあります。本堂は二百年ほど経た建物ですが、隣接する庫裡は平成二四年七月に完成したばかりの真新しい建物です。

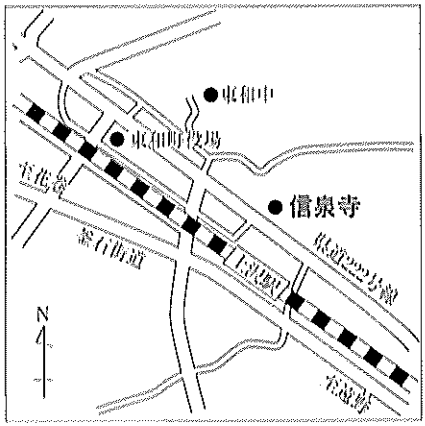
信泉寺の開基については寺伝による以外ありませんが、開基は肥後国（熊本県）生まれの長谷川西信で、どんな人間なのか、何故何時開基したのかは判っていません。土ヶ村（現東和町）の西峰に一宇を建立、西峰庵と号して十代ほど続き、その後の火災によって堂宇を類焼したとつたえます。恐らく当時は、別の宗派ではなかったかと考えられています。

類焼後しばらく無住時代が続きますが、摂津国（大阪）の尾崎刑部元信が発心出家し得度を受けて法名釈道喜を授かり、浄土真宗の布教に陸奥に下りました。そしてこの地を訪れた天正元年（一五七三）三月西峰庵の住職となって再興しています。

慶長四年（一五九九）三月、京に上り本願寺十二代門跡教如上人より阿弥陀如来御絵像一幅を拝受して本尊としています。このとき寺号を信泉寺と賜りました。寺伝では釈道喜は一世とあり、以後七世までも全く資料はなく不詳となっています。

元禄から享保年間（一六八八～一七三六）にかけての代表的な文筆家で知られる松井道円（現花巻市出身）が著したといわれる『和賀稗貫郷村志』には、『信泉寺、山号高流山。浄土真宗盛岡本誓寺末寺なり』とあります。この記録では山号を『高流山』とありますが、現山号の『西峰山』と改めたのはその後の復興山号なのではないかと考えられています。

享和年間（一八〇一～〇三）に二度目の火災に遭い、そのあと再建されたのが現本堂です。



## 無住や兼務住職で変転
## 享保則から残る過去帳

信泉寺には享保年間（一七一六～三六）からの過去帳が残っています。この過去帳には、各個人の戒名と死亡年月日が記されているほか、士族・平民・非人など個人の身分差別事項も記入されており、基本的人権を守るために、一般には閲覧が禁止されています。

昭和四六年（一九七一）九月六日付の真宗大谷派宗務所から「過去帳の取扱要領」についてつぎのような通達が傘下の各寺院に下されています。

まず僧侶、寺族及び門徒は、つねに教法を聞信し、同和問題に関する正しい認識に基づき、その事業に協力し、もって同和同朋の実を上げなければならないとして、過去帳の整備・保管・監督について注意を喚起しています。

㈠　整備について＝過去帳・檀信徒名簿・遺骨預り簿に、身分・種族・出生の種別・死亡の原因などの記入をしてはならない。

㈡　保管について＝住職・主管者以外の者には、いかなる理由があっても閲覧させてはならない。記載事項その他の応答については基本的人権を充分尊重して行うこと。

㈢　監督について＝住職・主管者は、自己の責任において坊守・寺族の指導監督を怠らないこと。

信泉寺は、……世長谷川憲明まで続きましたが、昭和一八年（一九五三）以降は正法寺（石島谷町）、同四〇年（一九六五）以降真行寺が兼務住職として法務を司っています。

㈭享保年間に二度目の火災に遭って再建された本堂。

㈮信泉寺には、享保年間からの過去帳が残っている。

# 和賀氏家臣が発心し庵結んだ古刹

## 高階山 成澤寺（こうかいさん じょうたくじ） 時宗

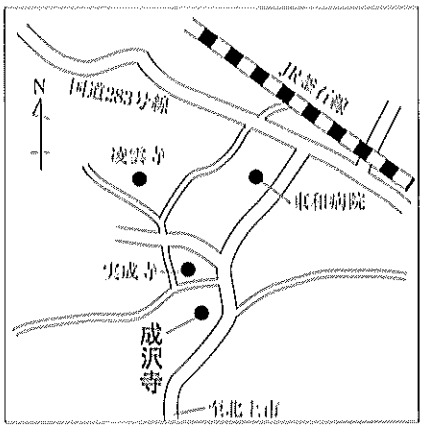
◆和賀郡東和町安俵一〇区一五二
◆電話（〇一九八）四二－二七二二
ファックス四二－二七二二
◆住職（第二六世）佐々木勝夫

木造日本一の毘沙門天を祀る毘沙門堂から道沿いにやや北上すると、左手に立派な山門とその両側に老杉が立っている寺院があります。これが時宗の成沢寺です。この寺院には東和町に現存する最も歴史の古い寺伝があって、しかも災難や法難にも耐えて、すでに廃寺となった時宗と真言宗二つの寺院の寺宝をも伝えています。

寺伝による開基は、応永七年（一四〇〇）、この地方を支配していた和賀氏の家臣で安俵城主の安俵玄蕃の弟武部が、遊行二五世尊恵上人の巡国化導に際して、喜びのあまり発心して弟子となり、名を量阿教順と改めます。そして安俵城内に草庵を結び開山となったと伝えております。

しかし、安俵小原氏系図には、安俵玄蕃も弟の武部名もなく、また量阿教順の事蹟も判っていません。ただ同寺には恵心僧都作と伝える本尊阿弥陀如来を安置する厨子の裏に、朱文字で天正八年（一五八〇）の弥阿弥陀仏の署名があり当寺三代とありますから、初代か二代は量阿教順で、安俵玄蕃の弟であっても年代的にはうなづけるものがあると東和町史に書いています。

その後天正一八年（一五九〇）に火災に遭い焼失、現在の本堂は嘉永二年（一八五〇）に改築されています。いずれにしても当寺には延享二年（一七四五）以降の過去帳しか残っていませんので、それ以前については記録としては定かではありません。




### 廃寺となった二つの寺 数多くの寺宝引き継ぐ

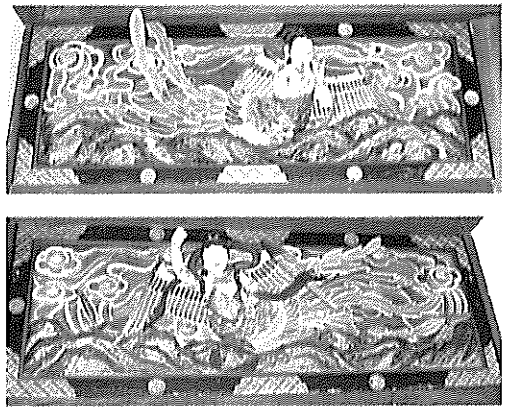
当寺に伝承されている寺院外の資料に、まず同じく時宗であった東山養福寺伝承のものがあります。判っているものに位牌がありますが、位牌堂の本尊阿弥陀如来像も養福寺のものではないかとみられています。

養福寺は猿ヶ石川の落合周辺にあった寺院で、享保九年（一七二四）の末曾有の大洪水で流失、その後細々と営まれていましたが、更に明治初期の水害で完全に流失したと伝えられる寺院です。本寺の石鳥谷町光林寺に残る資料によると、元禄・五年（一七〇二）の住職重阿湛義が、五世としていますので、一世を十年と見ても百五十年以前、永禄・天文年間の開基の寺院と想定されています。同じ村にあった成沢寺はそのときが、四世ですので養福寺が少し古いと考えられています。

更にもう一つが熊野山成嶋寺に伝承の資料です。この寺院は地区唯一の真言宗寺院でした。毘沙門堂の別当寺として創建され、古代からの霊地として庶民の信仰を集めていました。南部藩でも寺領を与えています。

しかし明治の廃仏毀釈によって廃寺となり、成嶋寺の主な寺宝は、明治四年（一八七一）に当時の成嶋寺住職岩珊法印から成沢寺に引き継がれています。その主なものに「大日如来坐像」「観音坐像」「地蔵菩薩立像」「釈尊誕生仏」があり、その他の什物では「棚間四枚＝記録では五枚」「寺号額」、それに「過去帳」などがあります。その引継書には他に「毘沙門堂」「阿弥陀堂」各一棟も含まれています。

引き継がれた仏像は、製作年代は判りませんが、地蔵菩薩立像は大仏師成間信人と墨書銘があります。また棚間は現在成沢寺本堂に飾られ、文政一年（一八一八）駒仮村（現花巻市）の瓶屋忠兵衛が奉納したものです。



(上)明治の廃仏毀釈によって廃寺となった成嶋寺の数多くの寺宝を引き継いだが、この本堂棚間「飛天」の立派な彫刻もその一つ。

(下)東和町で最も古い開山の歴史を持つ本堂。

# 和賀一族関連の菩提所として創建

## 松峰山 浄珠院 曹洞宗

◆和賀郡東和町土沢一区三二二
◆電話（〇一九八）四二・四七二〇
ファックス四二・四七二〇
◆住職（第二二世）諏訪千秋

JR土沢駅から徒歩数分、土沢商店街の北西端に浄珠院は位置しています。平成八年不慮の災害により庫裡が全焼しましたが、幸いにも本堂は仏門に守られて被災をまぬがれ、江戸時代の建物を守ることができました。

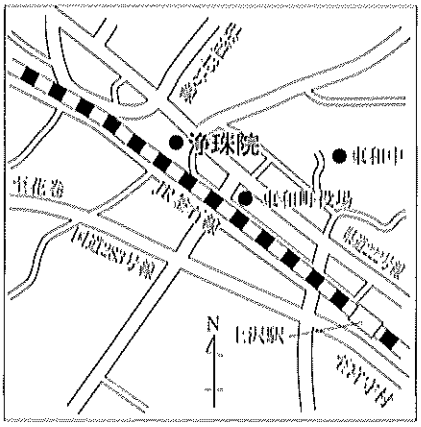
当院の由緒沿革については、記録がないため明らかではありませんが、寺伝によりますと、慶長一〇年（一六〇五）の頃には十二ケ村（現東和町）の土沢の丘陵の上にあった仮庵住居の山寺であったとされています。ところがその場所は、土沢城構築の要地となるために、その地の現在地に移ることになりました。当院山号の松峰山は、それに起因して命名されたのではないかと考えられています。

慶長一八年（一六一三）、花岩守徳大和尚は、この村の有力者であった江州屋の川村采女や大黒屋の小原民部などの帰依を得て、仮庵から寺院創建に取り組むことになり、十二子村（現北上市）の永明寺四世突室禅叟大和尚を開山に勧請しました。土沢城の構築は、慶長一七年（一六一二）ですから、その翌年のことです。

この地方は中世の豪族和賀氏の所領であったことから、和賀氏ゆかりの人々は和賀氏の菩提所と伝えられる永明寺とも連絡して、当院を創建したのではないかと考えられています。

以上のように当院の開基は、江州屋の川村采女と大黒屋の小原民部で、開山は突室禅叟大和尚です。開山に努力した花岩守徳は、二世になります。

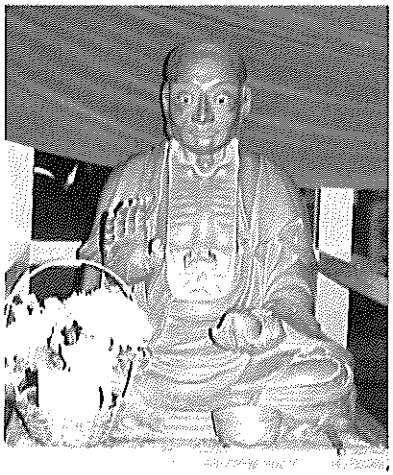
下って明和五年（一七六八）に永明寺より大学東海が着任、本堂及び庫裡を新築再建、三世中興と呼ばれました。また安永元年（一八五四）から六年間かけて、本堂が完成したという寺伝があります。以来現在まで本堂は守られてきました。そして、昭和三五年（一九六〇）には屋根を茅葺きからトタ



ン葺きへ、また同五〇年（一九七五）には銅板葺きに替えています。

## 開基の子孫製作の寺宝
## 育児教育に土沢保育園

当院が寺宝としている仏像の中には開基の一人小原民部の子孫である小原玉光が製作した二体も含まれています。一体は『賓頭盧尊者像』で、六羅漢の一人です。日本での賓頭盧信仰は、仏弟子となる前の家業が医者であることから、尊者の像を撫でると病気が治り、また病気にもかからないとして信仰が集まりました。撫仏ともいわれます。もう一体の『半託迦尊者像』も、六羅漢の一人で、第十位の地位にあります。彫刻した小原玉光は、黒沢尻町（現北上市）の出身に生まれ、小原家の養子になった彫物師ですが、生家の報恩寺薬黒寺に欄間や賓頭盧尊者像も彫るなど、仏像を中心に県内各地に優れた作品を残しています。



㈹開基の一人小原民部の子孫小原玉光が製作した寺宝『賓頭盧尊者』。他に『半託迦尊者』もある。

㈺平成8年の不慮の災害により庫裡が焼失したが幸いにも本堂は仏門に守られ百五十年の伝統守る。

このほかの寺宝には、高徳坊（児島高徳）が背負ってきたと伝える『地蔵尊像』、制作年代が不明ですが『釈迦南伝仏画』などがあります。

なお当院では、社会福祉事業として子供達の保育に当っています。この事業は、昭和初期に当時の住職が農繁期中に農家の子供を対象に季節保育所として開所したのがはじまりです。

後に昭和二四年（一九四九）土沢保育園と改名し、更に昭和三九年（一九六四）には社会福祉法人として認可を得ました。多くの子供達の育児教育にあたり、現在に至っています。

# 元岩谷堂城主江刺氏が開基した寺

## 鳩峯山（きゅうほうざん） 浄光寺（じょうこうじ） 曹洞宗

◆和賀郡東和町土沢一区三九
◆電話（〇一九八）四二―四六一三
ファックス四二―四六一三
◆住職（第二四世）福盛田儀彦

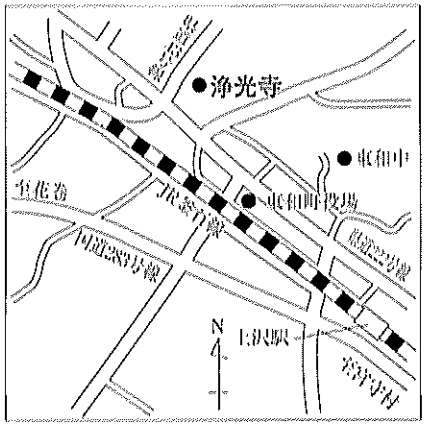
花巻市から国道一八三号線で約十分車で十数分で東和町に入ります。バイパスに入らずに旧釜石街道沿いに進入し、土沢の市街地に入って約二百mの左高台に、参道とうっそうと繁る林の中に、古刹を思わせる山門をわずかに望むことができます。

浄光寺は天保一二年（一八四一）七月一七日の晩、山門ばかり残して焼失したという「大図日記」の記録がありますが、それ以外開山や開基に関する記録は一切残っていません。寺伝によると、この火災を含めて過去二回火災に遭ったと伝えています。

開基を知る手掛りは、盛岡の報恩寺に残る安永七年（一七七八）の記録にあります。それによりますと浄光寺は二子村（現北上市）永明寺の末寺。また開基は明叟浄光居士、すなわち江刺兵庫頭重恒で文禄元年（一五九二）に遷去されたので、茶湯料として十石寄附したとあります。

開基の戒名には「浄光」の文字が入っており、開山は当然重恒が亡くなる以前と考えられるわけです。また土沢の豪商江州屋の記録に、浄光寺が「倉沢」にあったという記録もあり、開山時期の調査は今後の課題です。

江刺兵庫頭重恒は元江刺郡岩谷堂城主でしたが、葛西氏の一族であることから奥州仕置によって所領を失い、亡命したのが田瀬郷（東和町）でした。




それは天正一八年（一五九〇）の秋のことであり、そして亡命した江刺氏を南部信直は千五百石で抱えています。しかしその二年後には重恒は亡くなっていますから、浄光寺の開基を江刺重恒とすると、浄光寺の開山は天正年間でなければなりません。

いずれにしても浄光寺は、江刺家の菩提所として創建されたと伝え、事実境内には江刺氏初代から十二代までの当主の墓が祀られています。またその

家臣団の家老三ヶ尻氏をはじめ、太田代・小田代・三関・栗生沢・大沓・歌詰・百岡・蛍沢など江刺郡ゆかりの各氏が挙られております。

## 南部氏に仕えた江刺氏
## 上沢城破却まで城主に

南部利直は伊達藩との境警護の拠点として慶長一七年（一六一二）に上沢城を築き、重臣の中から江刺氏三代長作を起用して上沢城主に据えました。しかし五代勘兵衛長房のとき正保四年（一六四七）に上沢が大火となり上沢城も焼失。城館は再建されたが勘兵衛は上沢城常住を解かれ、盛岡直参として盛岡屋敷を給されました。以来江刺氏は上沢城から離れています。なお、上沢城は寛文一〇年（一六七〇）には破却されたと考えられています。

いずれにしても判明していることは浄光寺開山は永明寺三世の一枝宗曇和尚であり、その後当寺一世融室全祝が田瀬に興禅院を、また小山田に滝沢寺をそれぞれ開山しています。

現在の本堂は嘉永年代（一八四八～五二）一六世覚明亮弘によって再建されたもので、昭和三九年（一九六四）トタンに葺き替え、同六一年（一九八六）に現在の銅板葺きになりました。

山門は天保の火災に焼け残り、その古さから山門額と共に東和町の指定文化財です。なお梵鐘は、貞享四年（一六八七）に江刺氏六代市左衛門の献納したものでしたが戦時中に供出、昭和五一年（一九七六）新梵鐘が奉納されました。また当寺は陸中八十八ヶ所三十六番札所にもなっています。

㊤元葛西氏の一族で岩谷堂城主の江刺重恒は、南部氏に仕え上沢城主となり浄光寺を開基。その墓。

㊦嘉永年代再建の本堂。山門のみ昔のままに残る。

## 農村地帯に曹洞宗布教目的に開山

# 立石山 福藏寺（りっしゃくざん ふくぞうじ）

曹洞宗

◆和賀郡東和町倉沢四区一三五
◆電話（〇一九八）四四・二一六九
ファックス（四四・二一七三）
◆住職（第二二世）佐々木時雄

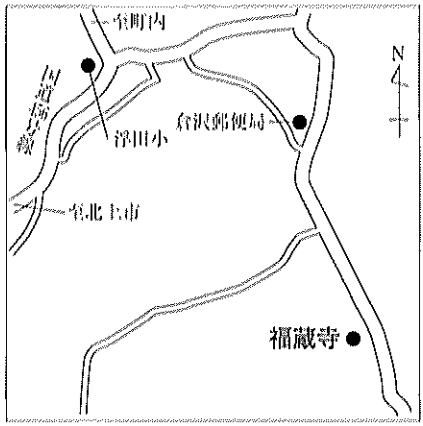
東和町の中心部土沢から国道四五六号線を南へ下り、下浮田の交差点から東へ向かうと倉沢集落に入ります。その中心部に周辺を水田に開まれた立石山の中腹に福藏寺が位置していて、土沢から車で約二十分の距離です。

町道から五十数段の急な石段を登ると、こじんまりとした中にも威厳ただよう本堂が鎮座しています。かつては周辺一帯に老杉が生え茂っていたといいますが、現在は殆ど伐り払われて小潅木のみとなり、本堂がひときわ引き立って見えます。

本堂裏手の立石山の山頂周辺は、中世の城跡を思わせる構造が残り、堀跡や石垣跡などが当時をしのばせます。また火薬の原料の硝石を採掘したとの言い伝えもあって、今後の史跡調査に期待する所が大きい地域です。

そのような場所に何故当寺が創建されたのか、それは何時なのか山緒沿革についての記録は全く伝わっていません。しかし寺伝によると開山は曹洞宗布教に安俣集落の凌雲寺五世・嘯全慶和尚と伝えています。そして開山年代は安俣の凌雲寺が東晴山村（東和町）に所在していた延宝六年（一六七八）までの間に開かれたのではないかと東和町史には記述しております。

開基は当寺の隣に位置する屋号「大志田」という家の先祖で、戒名『禅徳院・桟道晴居士』。俗名を大信田六右衛門といい、享保九年（一七二四）に亡くなっていますが、何故開基したかその由来は判っていません。子孫は現在八重樫姓を名乗っています。




### 江刺氏との関連なのか 境内に残る家老の墓地

現在の本堂の建設時期も判っていませんでしたが、幸い平成二年に位牌堂を新築する際に棟札を発見しました。それによりますと、明和二年（一七六

五）三月二八日に三世の大深哲琳が再建しており、大工棟梁は宮守村の吉之助とありました。

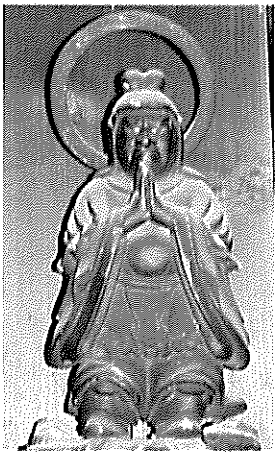
石段の最下部に現在も野井戸が残っていますが、伝承によるとそこに草庵が営まれていて、それが火災で焼失したのを機会に山の中腹に移転させたのではないかとも伝えます。また寺名についても開基に関係した方の人名から取ったものともいわれます。

いずれにしても資料のない現在、想像の域を脱しませんが、本堂の建造時期が判明したのは幸いでした。昭和四二年（一九六七）頃に茅葺きの屋根にトタン張りして保護しました。また昭和六〇年（一九八五）には庫裡の新築を終えています。

この地域は中世には江刺氏が所領しており、その家老であった三ヶ尻氏の墓地もありますので、その辺の早期解明を期待したいものです。

当寺には、厨子に寛政一〇年（一七九八）六世虎勇紹由の代に寄進を受けたと記録されている珍しい仏像が祀られています。それは「草駄天尊像」であり、寺の歴史を知る貴重な証言者でもあります。

草駄天と呼ぶ仏像は、四天王、三十二将の首班にあって、草駄天将軍の名で通っています。勇猛な武人の典型で性聡明、行状きわめて清浄、一切の欲を離脱し親しく釈迦牟尼仏から仏法の外護を命ぜられて、東・西・南の三州を守ります。庫裡には必ず菩提伽藍の守護神として草駄天の像を祀っています。草駄天はよく走ったので、現在も走者をこの寺院で呼んでいます。



(1)数少ない寺宝中、寛政10年今から二百年前に寄進された「韋駄天尊像」は寺の歴史を語る。

(2)平成2年の位牌堂建築の際に棟札を発見して二三七年前の明和2年に建築したと判った本堂。

# 中世城柵の地に江戸時代立地の寺

## 熊峯山 常泉寺

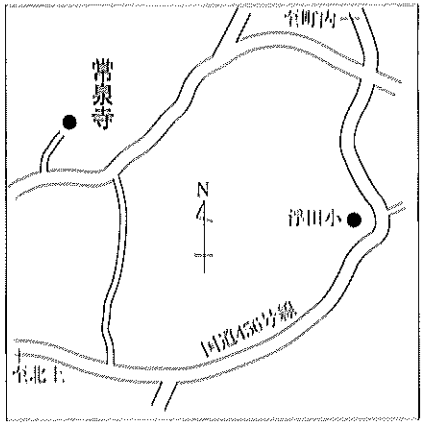
曹洞宗

◆和賀郡東和町中内七区二二〇
◆電話（〇一九八）四二-四七二四
ファックス四二-四八〇八
◆住職（第二二世） 伊藤和弘

毘沙門堂を祀る東和町北成島の交差点から南の方向へ、小通川沿いに南進すること約八㌔、土中内バス停で下車し、東方へ徒歩五分位の右手山裾に、常泉寺は位置しています。

かつて寺院周辺は、うっそうと茂る老杉林に囲まれていましたが、太平洋戦争の折に悉く供木。現在老木はなく殺風景となってしまいました。しかし前方には中世史を彩る徳沢館（現毒沢館）の遺跡が昔の繁栄をしのばせてくれます。因みにこの地方は中世には和賀氏の所領であり、領主和賀政義の三男徳沢八郎盛義が徳沢館の初代館主となりました。軍略上からも重要な位置を占めた場所と考えられますが、八代ほど続いた徳沢館も、豊臣秀吉の奥州仕置によって壊滅。以後この地は南部領となって、徳沢館も廃城となりました。この館跡は最近発掘されましたが館跡の確認はできたものの、遺物は殆どなく破壊の恐ろしかったことが想像されています。

この徳沢館と常泉寺がどのような関わりをもったか記録がないので全く判りませんが、寺伝によりますと、安俵の凌雲寺四世浮舟存湖大和尚が布教教化のために慶長六年（一六〇一）にこの地を訪れ、地域の善男善女の帰依により草庵を結ぶことになったと考えられています。そしてその二年後の慶長八年（一六〇三）には、諸堂建立が完成しています。




### 開創四百年で諸堂建立
### 山門に旧成嶋寺の仏像

しかし当寺の開創はその時期を遡るものと考えられています。それは寺伝では凌雲寺の前方にあったといわれ、現在も「浄泉寺屋敷」の名称が残っています。『浄泉寺』が「常泉寺」に何時変わったのか判りませんが、旧寺名額「浄泉寺」が保存されています。

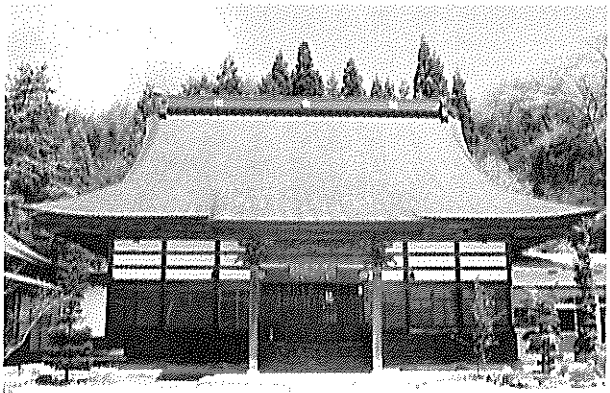
その後元文五年（一七四〇）五世・開大体の代に本堂と庫裡を造作。寛政一〇年（一七九八）、八世大耕右牛の代に現在の本堂と庫裡を同時に再建しました。また文政七年（一八二四）九世祖岩梅英の代に衆寮を新築しました。

戦後しばらく伽藍はそのままの状態でしたが、庫裡の老朽が激しく、檀信徒の浄財の寄進を得て昭和四九年（一九七四）新築。また昭和五一年（一九七六）には開山堂と位牌堂を新築しました。いずれも一〇世禅法広悦の代です。現住職の代になり、平成二年に本堂入母屋造りの改修と銅板葺替え工事を行い、同九年に御堂兼鐘楼堂を再建しました。梵鐘は太平洋戦争に徴発されましたが、昭和二八年（一九五三）に檀信徒より寄進されています。

なお昨年は来年に迫った開創四百年記念事業として山門を新築しました。そして明治二〇年（一八八七）頃、廃仏毀釈で廃寺となった北成島の成嶋寺より引き継がれた「仁王像」二体を山門の両脇に祀りました。

寺宝には、元文五年（一七四〇）奉納の「殿鐘」、鋳造師が上橋五郎兵衛宮保作のほか、寛保二年（一七四二）奉納の「本尊釈迦如来像」、同二年（一七四二）の「開山像」と「大権・達磨大師像」、また文政一〇年（一八二七）奉納の「涅槃絵掛軸」、弘化四年（一八四七）の「山号額」と「祈祷額」など数多くあります。

なお成嶋寺より引き継がれた「仁王像」は、東和町民俗資料館館長の鑑定では、元禄時代（一六八八～一七〇四）作ではないかと考えられております。



㊤約二百年間、建造当時のままで残っている本堂。

㊦現在の中内地域に移る前は、安俵地域にあって寺名も「浄泉寺」と称した。今に残る「寺号額」。

# 旅の僧が開き銀米産地に再建する

## 月浦山（げっぽざん） 凌雲寺（りょううんじ） 曹洞宗

◆和賀郡東和町安俵五区九〇
◆電話（〇一九八）四二―二〇五五
ファックス四二―二九二八
◆住職（第二三世）西川隆道

東和町の市街地を形成する安俵地区の北西端の小高い丘陵地帯に、未だ木の香がただよう雄渾な本堂が屹立しています。月浦山凌雲寺で、開山の悦桃周懌（えっとうしゅうたく）大和尚が深い意味を込めて名づけました。寺の中から月や猿ヶ石川と山並みを望み、それは海岸の浦辺をほうふつとさせる光景でした。また凌雲の二文字にも深遠な意味が込められています。それは現世の欲望や妄想に惑わされることなく、正しく仏の教えを悟って欲しいという願いなのです。

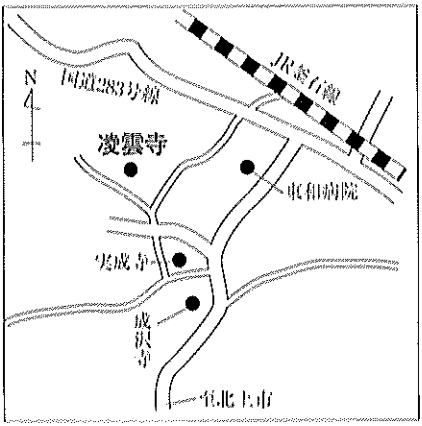
悦桃周懌大和尚は、福島県石川郡古殿町の龍台寺一世でしたが、その寺を退き、悪行や非行の防止を教導するために各地を遊歴する旅に出ました。そしてたまたま現在の東和町東晴山に来たとき、近隣の善男善女の尊崇を得てその地に小庵を結びました。そこは山紫水明の里であり、そこから山号と寺号を考えたと伝えています。

当寺は二度の火災に遭い、寺の歴史等の記録は殆ど残っていませんが、たまたま、九世の大然道林が記録していた資料の中にそのようなことが書かれています。しかし開山の時期は定かではなく、安土桃山時代の創建ではないかと考えられています。

南部藩の治世となった江戸時代の延宝三年（一六七五）六世和尚の代に火災に見舞われ、伽藍はことごとく焼失しました。その後の再建には困難をきわめましたが、七世和尚の代に安俵六本木の小原五郎兵衛という篤志家が寺院用地として五千坪の土地と木材などを寄進されました。

そこで延宝六年（一六七八）東晴山から現在地の安俵六本木に寺を移し本堂を再建。その場所は安俵という地名に見られるように昔からの穀倉地帯で南部藩の数少ない銀米産地でした。

そこを眼下に見下ろす場所に、九世育堂元生の代に諸堂整備が終わりまし



た。開山の東晴山には「寺地長根」の名称が残り寺の跡地をしのばせます。

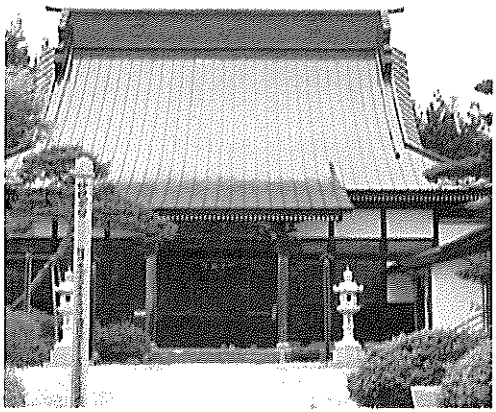
## 焼失の本堂再建を願い水墨画描いて諸国行脚

山門興隆の一途を辿った当寺ですが不幸にも大正十五年（一九二六）…世霊戒元孝の代に再び火災に遭い、諸堂は烏有に帰しました。当寺ではとりあえず庫裡を建立、その中に仮本堂を置くという苦肉の策を取り、胡四王神社の別当宅の建物を譲り受けました。

そして、本堂再建に真先に立ち上がったのは当時の住職霊戒元孝でした。霊戒は土沢の絵師菊池素香に師事した水墨画家であり、特に達磨を得意とし「達磨の霊戒」とまで呼ばれていました。そこで復興資金の一助との思いで、達磨図等の画会を各地で開いてその作品を頒布。それは霊戒五十歳のときから、昭和…年（一九四七）に七十歳で亡くなるまで続きました。

しかし残念ながら本堂再建という悲願は、存命中には達成されませんでしたが、その作品は全国各地に多数残っていて、その作品の評価は益々高まっています。

本堂の再建を終えたのは昭和五〇年（一九七五）…世凌嶽隆道の代で、仮本堂から五十年ぶりに解放されました。そして昭和六…年（一九八七）には庫裡、平成七年に開山・位牌堂、同九年に山門が完成しています。そして山門には廃仏毀釈により丹内山神社から移された「…王像」が祀られました。この仏像は「十一面観音菩薩立像」…体と共に県指定文化財です。



昭和50年に、五十年ぶりに再建された本堂。

「達磨の霊戒」と呼ばれるほど素晴らしい水墨画の作品を各地に残した二一世霊戒の達磨

# 土沢城に入る前の江剌氏の菩提寺

## 砥峰山 興禅院 曹洞宗

◆和賀郡東和町田瀬一五区二三五
◆電話（〇一九八）四四・五六二五
ファックス四四・五六二〇
◆住職（第二六世）菊池裕光

国道一〇七号線から北へ、田瀬湖を周遊する県道に入り車で数分。右手に湖を望みその背景の砥森山の対岸五十段ほど石段を登ると、中腹に砥峰山興禅院があります。ここは遠野市・宮守村・江剌市と境界を接する東和町田瀬地内で、中世には和賀氏と阿曽沼氏が所領を争い、また近世は南部と伊達との境界という重要な場所でした。

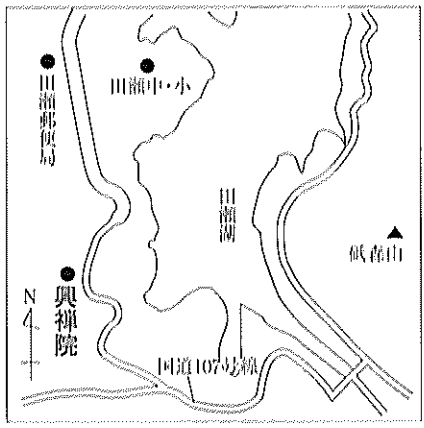
興禅院の開創は文禄元年（一五九二）とありますが、そこまでに至る経緯を寺伝は次のように伝えております。

天正の中頃（一五八五）、和賀一族とゆかりのある月心孤公が、田瀬の寺沢に草庵を結んでいた所へ、浄光寺二世の融室全視和尚が訪ねて交流を重ねていました。時に天正一九年（一五九一）九月、田瀬の領主となった江剌兵庫頭重恒との出会いによって、寺院建設に着手することになったのです。

江剌重恒は旧岩谷堂城主でしたが、奥州仕置による葛西氏滅亡により、新領主伊達氏に追われ南部領に亡命しました。南部藩主信直は、重恒を家臣として迎え田瀬など、千石を与えて、伊達藩との境界を守らせたのです。

文禄元年（一五九二）、秀吉の朝鮮出兵が行われた頃、一月に興禅院の伽藍は完成、全視和尚を開山として迎えました。ところがその年の七月、重恒は亡くなります。そこで興禅院は二代重隆の手にゆだねられますが、重隆も、四年後の慶長九年（一六〇六）に没し「興禅院殿丹宵心公大居士」の戒名が贈られます。「興禅院」の寺号はこの頃から定着したと考えられており、それ以前は「浄光寺」ではなかったかと推論されています。それは江剌氏初代重恒の戒名が「雄岳院殿明叟浄光大居士」となっているからです。

慶長一七年（一六一二）、江剌氏は二代長作隆直の代に土沢城が完成、城主となって田瀬から土沢に移りました。



そして城の真下に菩提寺を建立、それが浄光寺であり、残った興禅院は城代家老小田代肥前を中心に家臣団によって守られることになりました。

## 藩境監視の江剰氏家臣
## 三ノ関氏の菩提も弔う

その後明暦二年（一六五七）江剰氏五代勘兵衛長房は、興禅院境内に薬師瑠璃光如来を本尊とする薬師堂を再建しました。棟札には三ノ関諸岐恒愛とその子清左衛門清久の名が見られますが、三ノ関氏は江剰氏譜代の家臣で藩境の監視役をつとめています。興禅院には江剰重恒、重隆と共に三ノ関氏累代の墓も祀られています。

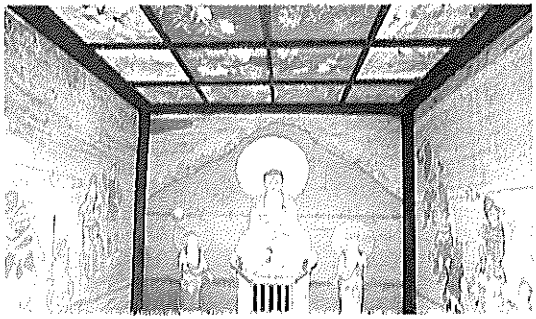
興禅院は六世方明大民の代元文五年（一七四〇）野火によって焼失、再建は七世大岩祭黒の代明和二年（一七六八）に、田瀬郷全村挙げての寄進によって実現したと伝えています。

以来近代に至るまで伽藍はそのまま維持されてきたものの、国策により昭和一六年（一九四一）田瀬ダム建設に伴い移転を余儀なくされました。

戦前から移転工事が行われ、現在地に移築が完了したのは昭和二九年（一九五四）のことです。実に二百六十二年間過ごした芦沢の地は、現在は湖底に沈んでおります。

⑭葛西氏滅亡で新領主伊達氏に追われて南部領に亡命した江剰氏は、田瀬に落ち着き興禅院を菩提寺とした。

⑮江剰氏五代勘兵衛長房が境内に薬師堂再建。その薬師堂は現在まで残り、内陣壁画が県指定文化財である。



移転のとき本堂は屋根は葺き替えたものの、百数十年前の面影をそのに伝えています。なお扉裡は昭和六二年（一九八八）に新築しました。

参道横にある「真乃院持法信士」墓碑は、地元出身の刀工祇森山が、師匠である四ツ峯の供養のために天保二年（一八三一）建てたものです。

# 小山田館主菊池氏開基と伝える寺

## 池峯山 瀧澤寺

曹洞宗

◆和賀郡東和町北川目一区一七三
◆電話（〇一九八）四二・三六一〇
◆住職（第二九世）　諏訪宏道

東和町の中心部土沢から石鳥谷行きの町営バスに乗って約二十分、滝沢寺前のバス停で下車。そこから始まる百八段の石段を登り切った高台に四百年近い歴史の滝沢寺が営まれています。

ここは和賀郡内にある中世の古城小山田館跡で、土沢伊部達曽部村（現宮守村）と稗貫郡大迫村（現大迫町）に接する要衝の地でした。かつては樹齢数百年の老杉に囲まれていましたが、戦時中の供木で伐採されて当時の面影はありません。しかしその後に植栽された杉は五十数年を経て再びうっそうたる境内になっています。

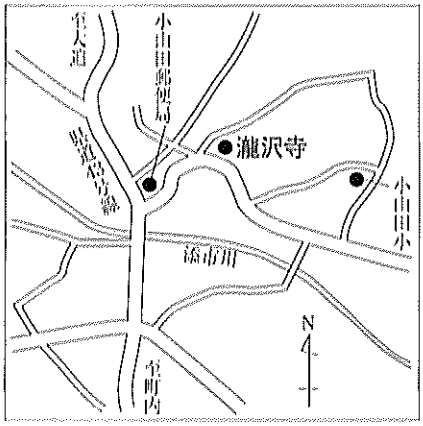
当寺の開山は寺伝によれば、土沢の浄光寺二世融室全祝大和尚であり、創立年代は判っていません。想定しますと開山が示寂したのが慶長二年（一六〇〇）ですから、それ以前に開かれたことは間違いありません。

当寺の由緒や沿革等を記した記録は保管していた本寺浄光寺の火災によって失われてしまいました。伝承では本山田館の領主だった菊池石近（法名誠忠院殿勇巌義公大居士）の開基といわれます。菊池石近は九州の豪族菊池武光の十代目子孫で、菊池氏は南北朝時代に南朝に尽くし、京都守護職を勤めた名家です。

北条氏が亡んだ後、朝廷から恩賞として東和賀地方を中心に領地を賜った菊池石近は、一族と共に伊勢から船で石巻に上陸、北上川を遡って江刺の角懸に足を止めます。そして村々に村地頭や郷地頭を置き、自らは小山田館に居を構えたと考えられています。

近世に入り、発心した菊池石近は館跡に寺を建て、屋敷は掘一つ隔てた隣地へ移りました。現在も子孫がいて屋号を「館」と呼んでいます。

現在の本堂や庫裡は開山の百年位後に建てたと考えられ、それを示すように庫裡を六枚の襖で仕切る鴨居は幅五



○年、長さ八尺ほどの巨大な材木を使用するなど、歴史を感じさせる建物です。本堂は二十年ほど前にトタンに替え、また昭和五八年（一九八三）に現在の銅板葺きに改修しました。

## 稲荷大明神と楊柳観音
## 9日と18日の縁日盛る

本堂の後方、境内の一角の杉巨木の前に当寺の鎮守稲荷大明神が祀られています。これはかつて菊池石近の守護神であり、毎月九日が祭典日となっていて参詣者が絶えません。

寺宝も数多く、最も貴重な掛軸「出山釈迦像」の墨絵は、名僧雪舟筆で、かつて南部家にあったものが信者から寄進されたと伝えています。

また毎月、八日を縁日としている金剛仏の「楊柳観音像」には、つぎのような話が伝えられています。それはこの仏像はかつて松前城のお姫様の守護仏であり、家臣の佐々木宅に安置していました。ところが昭和の代に、当寺・七世為成賢孝和尚が函館市台町の高龍寺に布教部長として入院中、骨董屋の店先でその観音像を見つけて毎朝礼拝をしていました。

ある日（一八日）骨董屋に呼び止められて理由を聞かれ、さらにその仏像を信者の函館市元町の石井ハルさんが先立ちとなり身請けしたのが、八日。そして賢孝和尚に寄進のための清め式を行ったのも、八日。滝沢寺の大仏式は昭和□□年（一九□□）八月、八日という十八日に由緒ある仏像です。

ほかに大道町居の妙泉寺にあったと伝える「十六羅漢像」、また京都の大徳寺銘の鉄瓶なども伝わっています。

(右)数多い寺宝の中で最も貴重な掛軸「出山釈迦像」の墨絵は、名僧雪舟の筆でかつて南部家にあったもの。(上)開山を記す記録はないが、開山百年後の本堂と庫裡という。庫裡の太い鴨居が歴史の古さを感じさせる。

# 東和・花巻地区日蓮宗の布教拠点

## 壽量山（じゅりょうざん） 本妙寺（ほんみょうじ） 日蓮宗

◆和賀郡東和町土沢五区二六四
◆電話（〇一九八）四二―三〇三八
ファックス四二―三〇三八
◆住職（第八世） 砂子田裕貴

JR釜石線土沢駅から徒歩で五分、旧釜石街道東町はずれ左側より六〇mほどの山館の下側に位置しており、東和町営の火葬場が隣接しています。

開山の歴史は浅く、大正四年（一九一五）本山孝勝寺貫主柏植日量上人が布教のため当地を訪れました。菊池家より現在地の寄進を受け、二間四面の布教所を建立しました。ここを東和・花巻地区の布教の拠点とされたのが当山のはじまりです。その後数多くの信者の厚信をいただき、大正一三年（一九二四）に堂宇を拡張し、孝勝寺別院土沢立正教会となりました。そして昭和六年（一九三一）には、日蓮聖人の大布教像を開眼されました。

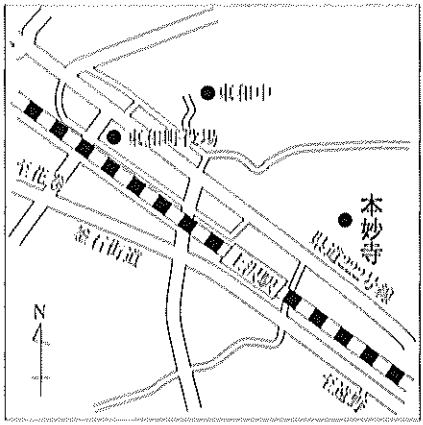
孝勝寺貫主が当寺の住職を務め、各行事には東和・花巻・北上地区の信徒数百名の参拝がありましたが、昭和九年（一九四四）当山四世で孝勝寺貫主、立正大学学長の守屋貫教上人、また長年留守居役を務めた五世工藤瑞導上人が相次いで遷化され、その後寺院は荒廃の一途を辿りました。

昭和二二年（一九四七）、砂子田瑞豊上人の代に寿量山本妙寺の寺号をいただき中興開山しています。その後七世砂子田智裕上人が入寺されましたが、寺宝の一部はなくなり、本堂は雨漏り等により痛みが激しく手がつけられない状態だったといいます。

そこで昭和四五年（一九七〇）には本堂と庫裡の屋根改修工事を行い、また昭和六二年（一九八七）には書院を新築しました。

現在、日蓮大聖人の立教開宗七五〇年報恩事業として、駐車場の整備、各尊像の修復、また庫裡新築事業は平成一四年完成予定で、平成一五年は本堂の新築事業に取りかかります。

寺宝の一つ日蓮大聖人尊像は、身丈四尺五寸（約一・三六m）の本造で、全国有数の大尊像です。



## 歴代住職が祈祷の尊像
## 白黒蛇・木仏・観音様

当寺は祈祷寺で、堂内には歴代住職祈祷による祈祷の尊像が祀られています。『白龍・黒龍大権現』は、工藤瑞導上人の祈祷により盛岡の信徒の蔵にあった長持の中からとぐろを巻いた状態で発見された白蛇と黒蛇のミイラで、当山に奉納開眼され、商売繁盛、安産、家内安全等に信仰されています。十二年に一度、半日だけご開帳されます。この白黒の蛇は大正年代（一九一二～二五）盛岡の信者「あめ市」と呼ぶ方の蔵から発見されています。

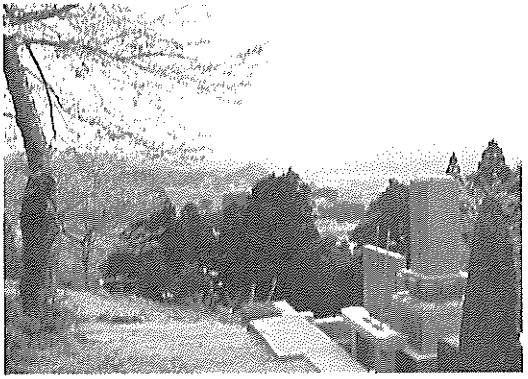
『木仏像』は、大正二年（一九一三）の寒中に、工藤瑞導上人が霊夢でお告げがあり、このことを信者花巻の大橋喜助という人に話したところ、北上川の朝日橋の橋げたから水中に飛び込み、川底の石と石の間にはさまっていた仏像を拾い当寺に寄進しました。この仏像は、高さ七寸（約二一・二㎝）約四百年前に製作されたと伝えられる日蓮大聖人尊像です。

『第八十三番観音』は先代砂子田智裕上人の祈祷により発見されました。御厨子の扉を開けると目が見えなくなるとの云い伝えで忘れ去られていた観音様。開帳された瞬間、御厨子の金箔と納められていた小判の光で、同日がくらんだそうです。

寺院から徒歩五分ほどの高台に約二千坪（約六六〇〇㎡）の墓地があります。昭和五〇年（一九七五）に整備され、桜や桃・椿・つつじなどが植栽され、眼下に北沢が眺望できます。妙遠観音や東屋、ペットの墓もあります。

㊧立教開宗七五〇年事業で来年新築予定している本堂。

㊨北沢の街並みを眺望する高台に墓地を整備している。



# 南部藩士帰依から変転し法灯守る

## 久遠山 實成寺（くおんざん じつじょうじ）

◆和賀郡東和町安俵七区（八六）
◆電話（〇一九八）四二－四〇三七
◆住職（第九世） 田口昌芳

日蓮宗

JR釜石線土沢駅で下車、町営バス成島毘沙門天行きバスで南へ、五分、安俵地区の本町で下車します。ここは中世の安俵館跡の一角で、ここから徒歩二分の所に実成寺はあります。

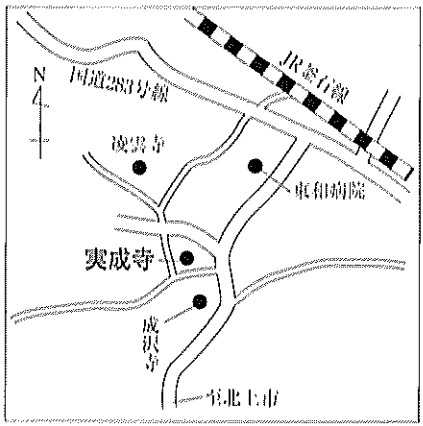
盛岡市北山の法華寺の末寺で、開創は文政年間（一八一八～三〇）の初期と伝えられておりますが、開山や開基については全く判っていません。

その後、天保年間（一八三〇～四四）の初めに、安俵清水に祀られていた草堂を現在の場所に移し、祖師堂としたと伝えています。当時遠野南部の藩士であった鈴木儀兵衛経教は、深く法華経に帰依し、やがて仏門に入って花巻の郊外の島地区や更木（現北上市）安俵を中心に各地を布教し、多くの信者を得ました。そして法名を顕本院玄道日徹上人と称して中興開山となりました。日徹上人は嘉永四年（一八五一）五月二七日に七五歳の天寿を全うしています。その前年の嘉永二年（一八五〇）には京都の大仏殿御所妙法院の宮より天拝の『日蓮大菩薩』並びに『開運妙見大菩薩』の御尊像を拝受し祖師堂に安置しました。

中興開山の日徹上人の墓地が、花巻市矢沢地内にあることが判り、昭和四六年（一九七一）頃、実成寺の境内に移転し祀っております。

その後安政二年（一八五五）に小原弥助氏から境内地の寄進を受け、信徒等が協力して本堂を新築しました。そして明治二年（一八六九）京都御所石座の法印自証光寺貫主大僧正新田日信上人より久遠山実成寺の山号と寺号を授与されました。

しかし明治七年（一八七四）神社改めの際に廃堂されることになりますが二年後の明治九年（一八七六）盛岡市法華寺の伊保内日海上人が総代と共に復興願いを行い、それが許可されて祖師堂として再興しました。



## 賢治と共に国柱会信奉
## 教師退職後宗教の道へ

大正・五年（一九一六）八月、千葉県茂原市の如意輪寺塔中である浄立寺をここに移すことになり、同年一一月に遂工、顕本法華宗浄立寺と称して、管長大僧正井村日成上人が初代住職を兼務されました。

昭和二年（一九二八）に本堂及び庫裡の増改築を行い、竣功と共に久遠山実成寺の旧称に復帰します。そして、代住職に唯一京乗院日心上人が就かれました。日心上人は俗名小原通勝といい、晴山村や小山田村（現東和町）で小学校長を勤めましたが病いのため退職、かねて交友のあった宮沢賢治が信仰する国柱会に加入します。

国柱会は日蓮の教学布教の宗教団体であり、小原通勝は熱烈な日蓮宗の信者となりました。宮沢賢治はその日記の昭和四年（一九二九）八月五日の項に「土沢の人は小原日勝（通勝の誤り）。病気は信仰の足りぬせいと難じる。熱心な法華信者。」（『校本宮沢賢治全集』第一四巻「年譜」）と書いています。

小原通勝の法華経への強い傾斜が、衰退していた実成寺の復興へと向わせます。そして遂に僧籍を得て、実成寺一世唯一乗院日心上人として日蓮の教えの布教に生涯を尽くしました。昭和一九年（一九四四）七一歳で大往生を遂げました。

庫裡客殿の新築は、昭和五一年（一九七六）、また同五八年（一九八三）に本堂の大改修を行いました。

㈩嘉永3年（一八五〇）京都の大仏殿御所妙法院の宮より拝受の御本尊『日蓮大菩薩』像。

㈭賢治と共に国柱会信者日心上人再興の本堂。

# 豪雪の新開地に高まる建立の気運

## 雪屋山 南昌寺（せつおくざん なんしょうじ） 曹洞宗

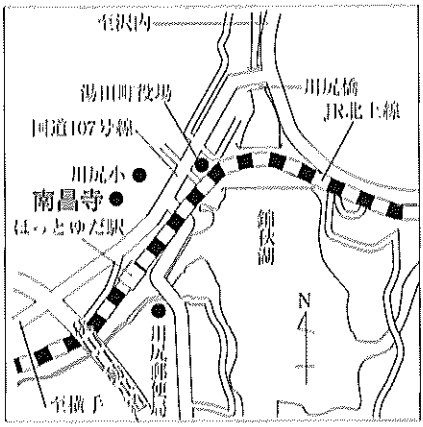
◆和賀郡湯田町川尻四〇・一三〇・一
◆電話（〇一九七）八二・二五一八
ファックス八二・二五一八
◆住職（第四世） 小向曹通

JRほっとゆだ駅の裏手、国道一〇七号線に近接した湯田町川尻地区に、南昌寺の真新しい本堂が姿を現わしました。昭和の開山で、しかも基幹産業であった鉱山の打ち続く閉鎖などによって人口減が著しい湯田町にあって、寺院を維持することは大変なことでした。信者による長年の努力によって、七十五年ぶりに本堂を新築、寺院の面目を保つことができました。

当寺は、昭和二年（一九二八）雪屋文道和尚によって開山されました。明治二一年（一八八〇）盛岡市の祇陀寺第一〇世柏順霊道の二男として生まれました。長兄の琢禅道器が、隣村沢内村の玉泉寺住職であった関係で、湯田の地へ度々足を運んでいました。

湯田町民の菩提寺は沢内村にある二カ寺がそれを担っていたわけです。湯田町は稀に見る豪雪地帯であり、冬期になれば交通が遮絶することもあって、寺院のない湯田町にとってこの上ない不便を来たしていたのです。

このような環境をよく知っていた雪屋文道は、昭和二年（一九二八）東山町の遠山寺住職を去り、湯田に草庵を結ぶことになりました。その頃の湯田町は時代の要求に応えて鉱山が繁栄し、しかも戦時色が色濃くなるにつれて、湯田町の鉱物資源の重要性が益々高まって行きました。従って人口も急増し、寺院建立の気運が盛り上がり、昭和二年（一九二六）頃から町を挙げて新寺院建立が進められました。




しかし終戦、戦後と諸条件が整わぬまま、初めて寺院への昇格が達成されたのは昭和二二年（一九四七）一〇月四日のことです。奇しくもこの年に開山の雪屋文道は亡くなりました。

## 変化著しい寺院の環境
## 鉱山廃止とダムの建設

戦後の復興の鍵を握る国土開発とし

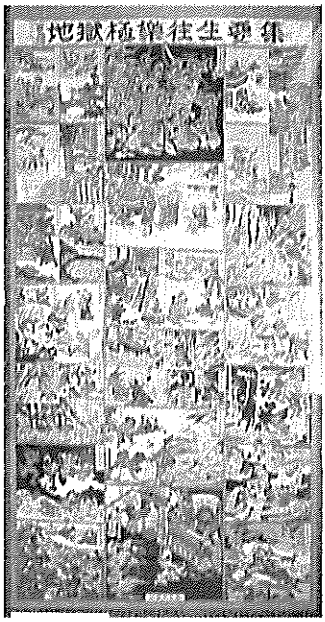
て北上川流域に五大ダムを建設することになり、その組上に乗ったのが和賀川への湯田ダムの建設でした。北上川特定地域総合開発計画に基づくもので、昭和三八年（一九六三）には胆沢町の石淵ダムが完成、翌年東和町の田瀬ダムが完成しています。

その中でダムによる水没家屋の最も多いのが湯田ダムでした。約五百戸の水没補償交渉は難行をきわめましたが、昭和四一年（一九六七）に妥結し調印、翌年に工事に着工しています。このダム工事により国道の切り替え、国鉄横黒線（現北上線）の切り替えも行われました。そして六年の歳月をかけ、昭和四九年（一九七四）本体工事が完成。この湯田ダム建設に伴い、寺院も現在地の川尻地区に移転しました。

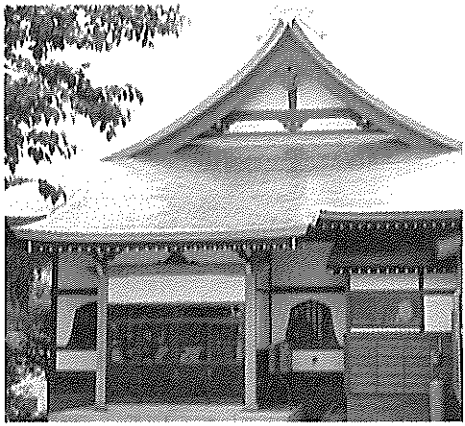
鉱石の枯渇や安価な鉱石の輸入によって、一時代を画した和賀地方の鉱山業は衰退、上畑鉱山を最後に湯田町から完全に鉱山が姿を消してしまいました。当然のことながら従業員は他へ流出、またダム水没者の町外移転などもあって、湯田町の人口は極端に減少していきました。

寺院にも影響を及ぼし、一世行広、二世吉水と続きますが、他に職を持ったり兼務住職だったり、時には住職の不在の時期もあって、宗教に関心ある者を留守番に置いたこともあります。しかし平成一〇年総持寺での修行を終えたばかりの四世宮通和尚が専任となり、今年本堂の再建を終えました。

本寺は文道和尚の長兄塚禅和尚が玉泉寺を経て北上市妙桃寺住職となったことが縁で妙桃寺となっています。




㈭鉱山景気で繁栄を見せた湯田町も、鉱山廃業と湯田ダム建設に伴う立ち退きで極端に人口が減少寺院維持が難しくなり無住時代が続く。そのとき寺守をしていた菊池観然が描いた地獄極楽往生要集。



㈮新住職を迎えて新築した本堂。

# およね地蔵尊を祀る西の門徒の寺

## 東澤山 浄圓寺（とうたくさん じょうえんじ）

浄土真宗本願寺派

◆和賀郡沢内村太田第三地割四五
◆電話（〇一九七）八五・二三五〇
ファックス八五・二三五〇
◆住職（第一六世）広田 宏

沢内村太田集落の県道・岩線沿いに寺院三寺が並び、その中間にあるのが浄土真宗本願寺派の浄円寺です。現在沢内村の観光行事となった『沢内甚句全国大会』の前夜祭として行われている『およね地蔵まつり』は、当寺に祀っている地蔵尊の供養行事であり、参詣者は年々多くなっています。

浄円寺は、寺伝によりますと親鸞聖人の直弟子是信坊を開山とし、秋田県六郷町の善証寺三世浄信房によって寛永四年（一六二七）に和賀郡沢内太田村（現沢内村）館平という山裾に草庵を建て、善証庵と称したとあります。館平というのは現在地の裏山ではないかと考えられ、その場所は平地で寺跡の伝説が伝えられています。

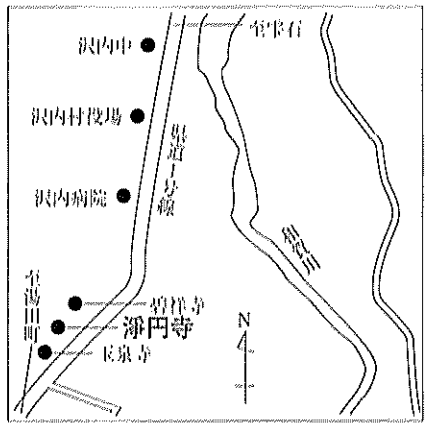
一方『沢内年代記』には、浄円寺は延宝三年（一六七四）盛岡願教寺の末寺が沢内において、鍬沢村（太田）作左衛門、太田村（太田）治部、同惣左エ門の二人が開基したとあります。

その後元禄七年（一六九四）当寺の三世恵教の代に、本山より浄円寺の寺号を賜っています。

その後、『盛岡藩雑書』によると、享保九年（一七二四）三月二五日に本堂が焼失したとありますが、寺伝ではその焼失が享保九年（一七二四）四月とあり、二度の被災なのか誤記なのかそれは判りません。いずれにしても二年がかりで本堂八一坪、庫裡六〇坪を現在地に再建したとあります。

また『盛岡藩雑書』では、天明六年（一七八六）に本堂修復のため寺内の杉八尺廻りまで、七十七本の伐採などを願い出ています。

江戸時代建立の本堂は、戦後昭和二三年（一九四八）に焼失、本堂は同年中に、庫裡は同三〇年（一九五五）に再建。同四〇年（一九六五）茅葺きをトタン葺きにしました。また庫裡は平成元年に新築しました。



## 沢内甚句と地蔵供養祭
## 深沢晟雄生命村長の墓

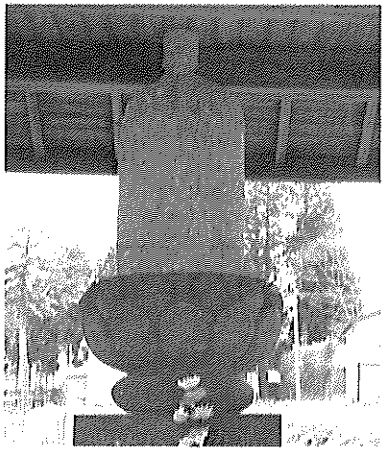
本堂前に祀る「およね地蔵尊」は、悲しい運命を辿った娘「およね」を祀る地蔵尊として信仰を集めています。江戸時代に南部藩を襲った大飢饉の際に、村一番の小町娘といわれた村の北方新山集落の吉左エ門の娘「およね」が、年貢米の上納に苦しむ村人の苦難を見るに見かねて、進んで藩主に輿入れを嘆願して村人を救ったという伝説に基づくものです。

今では全国的民謡となった「沢内甚句」の歌詞に歌い込まれて、およねの伝説が広がりました。その地蔵尊を供養する祭りが、毎年九月二十日の夜に浄円寺の境内で行われています。

なお、この地蔵尊は、新山集落の吉田翁が製作したとも、また「およね」を慕い続けた「新左」が作ったともいわれ、明らかではありません。この地蔵尊は昭和三九年（一九六四）、およねの生家が当寺の檀家だったことから境内に移転安置されました。

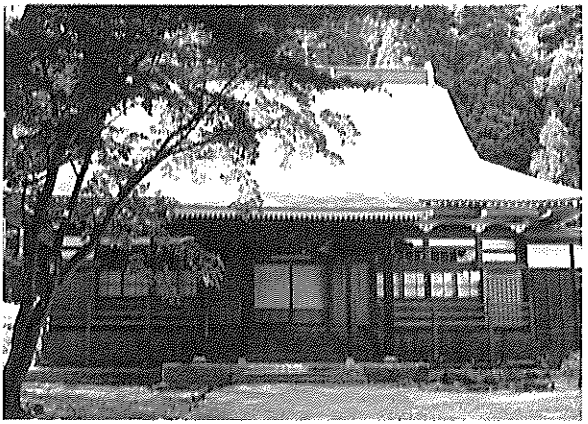
当寺には、「生命村長」と讃えられた深沢晟雄（ふかさわあきお）氏の墓地があります。昭和二二年（一九五七）に村長になってから住民の生命を守ることにすべてをかけ「日本一の保健の村」にしました。昭和三七年（一九六二）には乳児死亡率ゼロを達成、また乳児と六〇歳以上の老人医療を無料化しています。職務に専念の余り、昭和四九年（一九六四）に現職のまま急逝されました。

本尊の阿弥陀如来像は、沢内村の指定文化財になっています。



(1)昭和23年の火災で焼失の後に再建された本堂。

(2)沢内村新山集落のおよねの生家にあった地蔵尊を昭和39年に浄円寺に移転し安置している。



# 民俗資料館経営する東の門徒の寺

## 本宮山 碧祥寺（ほんぐうざん へきしょうじ） 真宗大谷派

◆和賀郡沢内村太田［略］
◆電話（〇一九七）八五［略］
ファックス八五［略］
◆住職（第一四世） 太田祖龍

碧祥寺博物館といえば、今ではマタギ資料など雪国地帯の貴重な文化財を展示している民間の施設として全国的に知られるようになりました。

沢内村太田集落の県道・方線沿いに三ヵ寺営まれている寺院の北端に位置する真宗大谷派碧祥寺が、その博物館を経営しており、参詣者と共に観光バスも数多く訪れています。

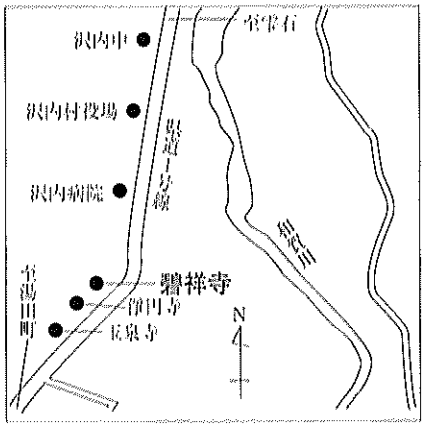
碧祥寺の開山については、寺伝によりますと、和賀の産で俗名多田弾正源延清という武士が出家し延清と称し、慶長・八年（一六〇三）秋田において一宇を建立。その後寛永・年（一六［略］）に和賀郡沢内村前郷に草庵を結び、碧祥寺と号したとあります。また慶安年中より万治年中（一六四八～六［略］）までに三度も類焼し、そのために寛文三年（一六六三）太田に移住しました。そこは深沢城主太田縫殿之助の屋敷跡と伝えられる場所でした。

太田氏は和賀氏の流れをくむ一族でしたが、天正（一五七三～九［略］）の頃和賀氏に取き南部氏についています。そして沢内に八百石を領有していたと伝えます。しかし縫殿之助は寛文元年（一六六［略］）に亡くなり、その墓地が寺の参道に残っています。

また郷土史家の説によれば、碧祥寺は関所寺だったといいます。かつて陸奥国と出羽国とに分れていた当時、以前寺を置いた前郷集落から国境の真任番を通る街道があり、そこの関所近くにあって往来の人々に宿や食事の世話をした関所寺ではないかというのです。

寛永・年（一六二五）の開基というのは、この地が南部領と明らかになった頃、関所寺を碧祥寺に変えたのではないかと推定しているのです。

その後、寺伝では文政四年（一八［略］）に本堂を建立、また弘化元年（一八四四）には庫裡を再建したと『沢内年代記』に記録されています。



## 民俗資料五つの展示館
## 二二七九点が国の指定

境内にある奉安殿には、大正天皇着用の海軍通常礼服や食器などが安置されていますが、これは檜家の故小山田繁蔵海軍中将が侍従武官長を勤めた功績で下賜された大正天皇の遺品です。

また本堂に描かれている極彩色の大壁画は、法隆寺壁画の模写を手がけられた宇都宮市の笹沼竜雄画伯の作品で、昭和三六年（一九六一）から描き始め、三十五年計画で完成しました。

博物館は民俗資料を中心に収集され生活や生産、信仰、芸能等の各分野の資料が約一万五千点展示されております。なかでも国指定の重要有形民俗文化財が総数で二千二百七十九点にも及んでおります。

これらの資料は祖電現住職が、長年にわたり収集したもので、雪国農村の生活実態を知る上で貴重な資料です。

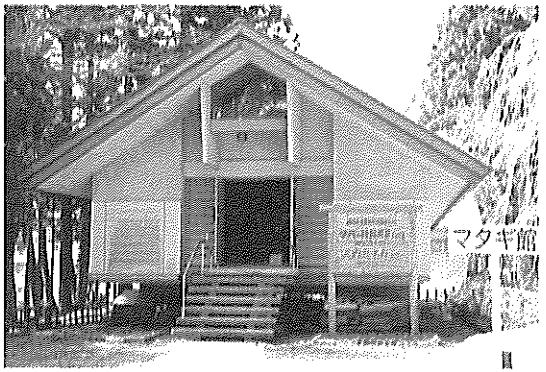
境内には展示館が四棟建てられています。第一資料館には、民間信仰・芸能・小道具・軍隊遺品など、第二資料館は農耕具・台所用品などを展示。また第三資料館は、雪に関する書籍や日中友好資料など展示するほか休憩所にもなっています。

第四と第五資料館はいずれも国指定文化財の収蔵庫であり、第四資料室には「丸木舟」と「マタギ狩猟用具」四百八十六点を展示。そして第五資料室は「積雪期生活用具」が、千七百九十二点展示されていて、雪国のあらゆる生活用具を見ることができます。

なお祖電現住職は、沢内村長として村政に貢献されました。

㊤佐竹領との国境い前郷集落から現在地に移転の本堂。

㊦国指定の丸木舟とマタギ狩猟用具展示の第四資料館。



# 厳しい西和賀地方民の救済に開山

## 一点山 玉泉寺（いってんざん ぎょくせんじ） 曹洞宗

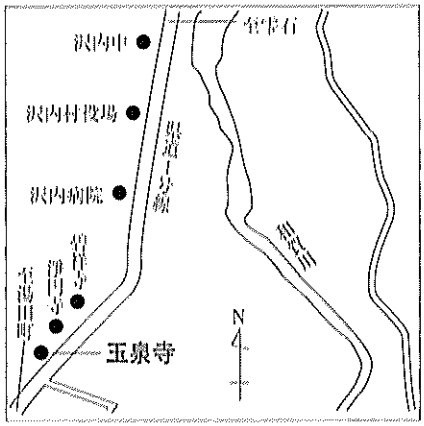
◆和賀郡沢内村太田三・五七
◆電話（〇一九七）八五・二〇五〇
ファックス八五・二〇三二
◆住職（第三世）泉 全英

JR ほっとゆだ駅から県道、号線を北へ数十㌔、沢内村の中心部より南寄りの太田集落に二つの寺が並んでいて、その最南端が、一点山玉泉寺です。

車を走らせると、左手の山の中腹にインドのパゴダを思わせる建物が見えてきます。この一帯が玉泉寺の境内で、本堂を中心に仏舎利塔、地蔵堂、稲荷堂など堂宇が立ち並び、しかも本堂前には大庭園があって、寺院の景観を一層引き立てています。

当寺は寺伝によると、笹間村（現花巻市）の昌歓寺二〇世渓巌光浦大和尚が、寛永二年（一六二五）に開山したとあります。それを裏付ける資料に盛岡藩主南部利直が寛永四年（一六二七）に下付した知行状の内訳にあたる『百姓之高書』があって、それには『六石弐斗九升四合 小国 玉泉寺』とあります。小国とは中世に沢内一帯を指した地名であり、この資料によって玉泉寺の歴史の古さが判りました。

伝えによると開山の渓巌光浦は、風の便りに西和賀地方の住民の苦難な生活状況を聞き、その人々を仏力で救済しようと永住を決意し単身で山野を越え道を開きながら当地に辿り着いたといわれます。そして清らかな泉を発見し、この場所こそ布教救済の最適地であると悟り、一宇建立を決意しました。寺号は境内に湧き溢れる清らかな泉の水にちなんで『一点山玉泉寺』と号しました。以来、その清い水に恵まれ、開山以来一度も火災に遭うことなく、現在に至っています。




玉泉寺の創建後、間もなく東の門徒碧祥寺がこの地に移り、また西の門徒浄円寺がおよそ百年後に火災後の再建を現在地に行っています。

『沢内風土記』が書されたのは宝暦一三年（一七六三）ですから、その頃には沢内村太田には三つの寺が並んで建っていました。

## 裏山に仏舎利塔を建立
## 異彩はなつ文化人文庫

当寺の現住職寛洪全英は、昭和五〇年（一九七五）に月海蒙潅大僧正からお釈迦様のお骨である仏舎利と舎利佛、阿難陀両尊者二人のお弟子の分骨を拝受しています。愛知県の大嶽山岩窟寺から分骨されたもので、仏舎利の分骨は東北では珍しく、また二人の弟子の分骨に至っては日本でも余り例がないといわれます。

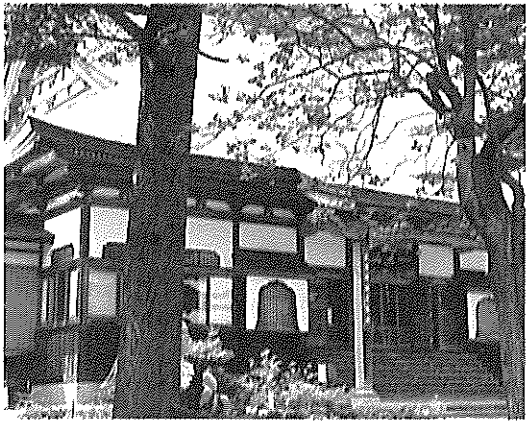
寛洪全英は昭和五七年（一九八二）に舎利塔建立を発願、十二年の歳月をかけて本堂の背後の小高い山に建設、平成七年に完成しています。この仏舎利塔に至る道は、直線の急勾配を一八七段の階段で結びました。

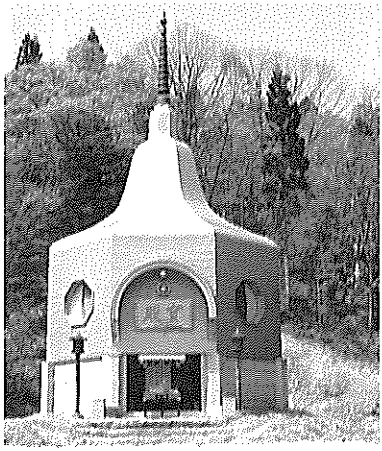
また同じ山の中腹は一千一観音霊場となっています。この大霊場を発願して果せなかった先代、先々代の意志を継ぎ、現住職が帰山して最初に手掛けたのがこの霊場の建設でした。昭和四〇年（一九六五）に発願、一十一年の歳月をかけ昭和六一年（一九八八）に開眼しています。

そのほか境内にある「いろは香堂」に、当寺ゆかりの作家吉澤元夫妻と交流深かった武田麟太郎・高見順・田宮虎彦など作家の初版本を集めた「人民文庫」は異彩を放ちます。

昭和五一年（一九七六）本堂の大改修、平成一年には庫裡の改修。また同五年に庭園完成、同七年には一点間・地蔵堂・稲荷堂が完成するなど、玉泉寺一山の整備を始ど終えています。

仏像や大般若経など数多い寺宝のうち「頂相の図」は村指定文化財です。





㈱愛知県の岩窟寺から分骨の仏舎利と舎利仏、阿難陀両尊者二人の弟子の分骨を宝殿に祀る。

㈱寛永2年開山以来火災に遭わなかった本堂。

# 古来から庶民の信仰集めた観音堂

## 音羽山 清水寺（おとわさん きよみずでら）

天台寺門宗

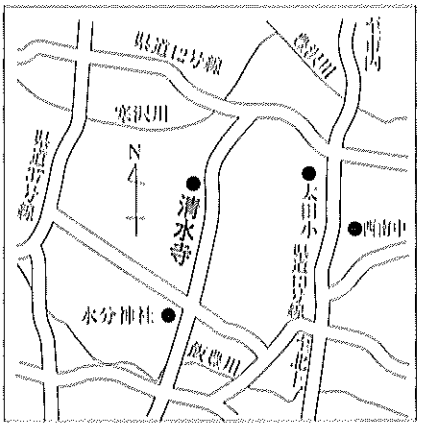
◆花巻市太田二一一〇
◆電話（〇一九八）二八一二六一四
◆住職（第二世）清水龍孝

花巻の市街地より西南へ約一〇キロ、現在では立派な自動車道が四通発達し容易にお参りできるようになりました。しかし江戸時代はこの遠い道程を徒歩で行く信者の列が絶えなかったといいます。そのために道はすべて清水寺へ向かい、その分かれ道には追分碑があって「きよみずみち」と必ず寺の方向を指す石碑が建っていたのです。

京都・播磨（兵庫県）と共に日本三清水といわれ、信仰を集めた清水寺は「太田の清水観音」の呼び名で知られた古刹です。現在奥州三十三観音札所及び旧南部観音霊場当国三十三ヵ所中第一番の札所であり、その御詠歌「はやいそげ　みのりのみちを　きよみずに　めぐりあうため　つきをみんため」を詠います。

山縁によれば清水寺の草創は古く、大同二年（八〇七）坂上田村麻呂が開いたと伝えます。田村麻呂が蝦夷征伐の際、蝦夷が強く容易に平定できませんでした。そこで兜に入れていた守本尊・寸八分の十一面観音に祈願したところ、戦況にわかに好転し平定することができました。そこで十一面観音を安置して敵味方の菩提を弔い、また国家鎮護のために一宇を建立しました。これが清水寺のはじまりと伝えます。

最初は現在地より西方約八キロの八方山にありましたが、稗貫と和賀の郡境である現在地に何時移ったのか判っていません。前九年・後三年の両役が行われた康平年間（一〇五八～六四）、源頼義・義家親子は本寺に戦勝を祈願し強敵を破ったので、七間四面の伽藍と末社等を建立したとも伝えます。




### 明治の廃仏毀釈の嵐で修験宗から天台寺門宗

いずれにしても開山は応永五年（一三九八）京都の智鑑秀仙法印で、東山の岩王寺で法を受け、東北教化の命を

受けて当寺の別当になったと伝えます。

時代は戦国の世から江戸時代に移り天和二年（一六八二）、代官野々村宇右衛門の進言により、寺社奉行切田小兵衛が再興したといわれます。

また享保一五年（一七三〇）に二間四面の堂宇を建立。文化一〇年（一八一三）には大改革を行い、それが現在まで続いています。

最初は本山修験宗で、京都の聖護院末寺でした。和賀・稗貫地方には修験寺院が七、八十ヵ寺はあったとされ、それを統括していた、明院の役割を数代にわたって勤めたといいます。従って同じく修験寺院として大きな勢力を持っていた早池峰山麓の妙泉寺との交流はつねに行われていました。

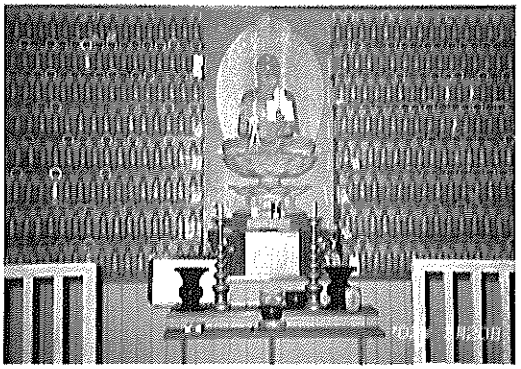
ところが明治の神仏分離令の嵐は、修験宗寺院は廃止に追い込まれ、ある寺院は神社に転宗。また仏教寺院として残った寺は、天台宗か真言宗に代わりました。清水寺の場合、天台寺門宗として近江の三井寺に属します。

清水寺は地方信仰の、大中心地であり、物資の交換地でもありました。慶長年間北松斎が花巻に街を移すまではここが中心地で、反町では市場が開かれたといいます。現在も行われている清水まつりは当時をしのばせます。

庶民の祈願所のため檀家は少なく、寺宝も見るべきものがありませんが、花巻市指定文化財に薬師如来騎仏があります。南部利剛筆の扁額「清水護寺」や開山当時の版本も残されています。なお現山門は昭和二年（一九二七）に大改築、同四〇年（一九六五）には千体薬師堂が落慶しました。

㈤日本三清水の一つといわれた名門寺も今は寂しい。

㈥奥羽三十三観音及び南部観音霊場当国三十三ヵ所いずれも第一番札所の観音堂への参詣は途絶えない。



# 明治維新に翻弄されたお地蔵さん

## 櫻華山（おうかさん） 延命寺（えんめいじ）

◆花巻市中根子字古館七五
◆開基（〇一九八）――一五四九六
◆住職（兼務）光明院長峰良輔
本山修験宗

花巻市の市街地から志戸平温泉へ向かって主要地方道を約一キロ、北側道路沿いに杉の大木がそびえ、春は桜花に包まれた子安地蔵堂と並んで、延命寺本堂があります。かつては桜羽場の苗字が生まれたように、桜の名所として名高いところでした。

この寺は、元来寺号も院号もいわず『根子の地蔵さん』と呼ばれ、また陸中八十八ヵ所・八番札所として、奥州一円に親しまれていました。櫻華山延命寺と名乗ったのは明治維新後と推定されています。

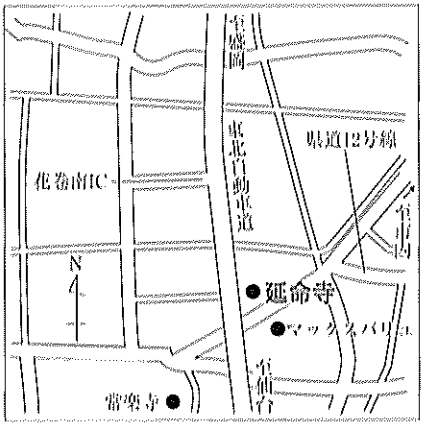
維新に翻弄されて、寺院の由緒に関する資料は失われて伝わっていませんが、境内には正保二年（一六四五）の古碑や樹齢数百年の巨大な杉が残っていることから、古くから地蔵菩薩の霊場であったと考えられています。

この地蔵堂建立にまつわる伝説が、『一郷見聞私記』に記録されています。

この地の長者が抱える数多くの召使いの中に「安」と呼ぶ飯炊き女がいました。どこの生まれかいつから奉公しているか知る人はなく、いつも、十歳前後で容姿が変わらず、主人に気に入られ数代に使われていました。

ところが同じく使われていた下男に『久助』という同名の二人の若者がいて、安に求婚しお互い譲りません。二人とも余り熱心なので、安は難題を出しますが、向甲乙がつきません。そこで相撲で勝負をつけようといいますが、巳の刻（午前十時）から未の刻（午後二時）まで押し合ってもなかなか勝負はつきませんでした。

仕方なく安は遂に仏身を現わし『われこそは子安の地蔵なり、永くこの地に止まり女の難産を救わん』といえば、人の久助も『われは金勢大明神なりこの地に止まりて子を持たぬ女の悦胎を助くべし』といって、杖を相撲場の入口に差して雲間に入りました。



その杖に根がつき枝葉が茂って大木となったといいます。それが地蔵堂入口に大木となっていて、東の巨杉に祈れば男児、西に祈れば女児が授かると伝えられています。

## 宮沢賢治が遊んだ古寺 巨大な杉への想い記す

地蔵堂の境内の杉は、大木となると幹が二本となり、『子持ち杉』と呼ばれました。この地を度々訪れた宮沢賢治は、代表的詩集『春と修羅』第一集に、この地蔵堂の巨大な杉について詩を詠んでいます。大正一四年（一九二五）賢治二九歳のときの作品です。

地蔵堂の五本の巨杉が／まばゆい春の空気の海に／もくもくもくもく盛りあがるのは／古い怪性の青唐獅子の一族が／ここで誰かの呪文を食って／仏法守護を命ぜられたというかたち

……地獄のまっ黒けの花柳菓め
そらをひっかく鉄の爺め！
（中略）
いまやまさしく地蔵堂の正面なので／二本の幹の間には／きうくつそうな九枚ばかりの石段と／褪せた鳥居がきらんと並び／掛にはいっぱいの雀の声
（下略）

これらの杉のうち最も大きいものが平成一二年一月、風で『子』の部分が折れ、地蔵堂の屋根を破損。現在『子持ち杉』は一本となりました。

七世慈観秀二、二八世小原教雄と続き、小原哲也氏がその後を継ぐために本山聖護院で修行していますが、現在は北上市の同宗派光明院が兼務住職を務めています。

㊤根子の地蔵さんとして親しまれた寺も今は昔の面影。

㊦宮沢賢治の代表的詩集「春と修羅」が掲載された詩碑。

# 善男善女の願いに応える祈願の寺

## 天龍山（てんりゅうざん） 遍照院（へんじょういん）

真言宗 国分寺派

◆花巻市桜町二―四五
◆電話（〇一九八）二四―六四二二
◆住職（第二世） 平賀智照

花巻市の上町から南へ、豊沢川を越えると、ひときわ目立つ建物があります。ここが「桜町の弘法さん、お不動さん」と親しみをもって呼ばれている遍照院です。毎月、八日は、本尊不動明王の御縁日で大護摩法要が行われ、多くの善男善女が集まって商売繁昌・当病平癒・交通安全などの諸願成就が祈願されます。

当院の前身は、高野山大師教会子安講岩手県支部と、天台宗竜王山白薬院です。白薬院は矢沢村（現花巻市）にあり、京都聖護院門跡末の修験寺院で、明治時代の宗教改革で天台宗になったお寺でした。

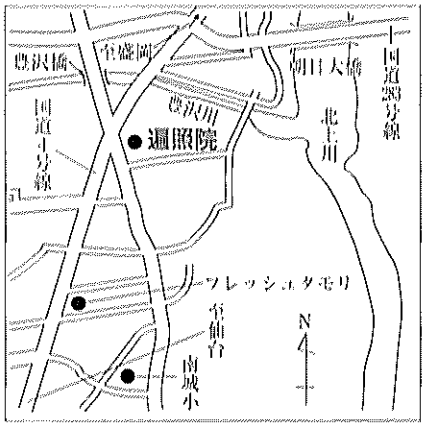
当院は昭和二六年（一九四一）七月、花巻の二枚橋に大師教会支部の再興設立とともに始まり、昭和二六年（一九五一）五月、現在地に移転。そして、白薬院本尊波切不動明王を奉遷して、大師教会支部に白薬院を再興、遍照院と改め、真言宗寺院として現在に至っています。

本尊波切不動明王は、詳細は不明ですが、荘厳豊かで威容があり、天保年間の効験など伝わっていますが、今日においても真摯な祈りに霊験あらたかな仏様です。

鎮守として、文化九年（一八一二）の当山稲荷勧請記をもとに、白薬院鎮守森山稲荷大明神を復元し祀っています。東寺門前で弘法大師が出会ったという翁姿が珍しい御像の明神様です。

また、白薬院二世谷僧正の嘉永五年（一八五二）の記録に基づいて、百八体の不動明王を弘法大師御生誕千二百年祭を記念して信者各位の寄進で奉安しました。

真言宗は宗祖弘法大師以来、国利民福・自他福智の成就のため、加持祈祷を重視しており、真言寺院は祈祷の必要があります。当院第二世の智周大僧正は、当院の第二の性格を、この周辺



では少ない「御祈祷寺」としてきました。この関わりで、当院では手相や家相などの相談にも応じております。また、お参りは不動尊信仰、弘法大師信仰が中心になっています。

## 不動明王や地蔵菩薩等数多く伝承する寺の宝

外見からは想像しにくいのですが、華麗で荘厳な本堂の内陣に、数多くのご本尊の波切不動明王像をはじめ、遠野市青笹常楽院の日本尊不動明王像紫波町長岡清光院の日本尊不動明王像そのほか弘法大師坐像、森山稲荷大明神像などがあります。

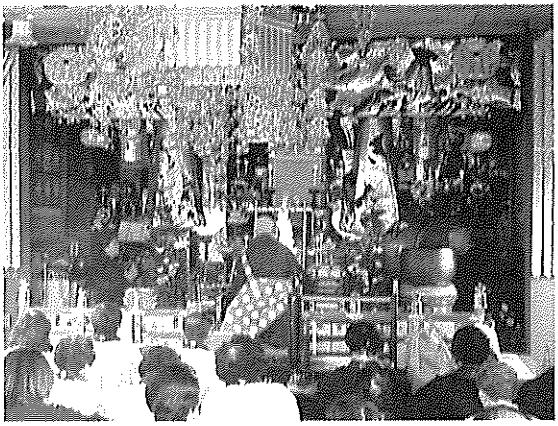
花巻市の文化財に指定されている地蔵菩薩立像は、室町末期から江戸初期の作といわれ、盛岡藩主南部重直が京仏師に作らせ、永福寺に納めた仏像とみられています。

このほかに釈迦涅槃絵像や、七難即滅大方にらみの不動明王絵像などが祀られております。

当院では、八日の御縁日以外にも、護摩供養を行っています。密教の仏様は「生きている仏」といわれますが、お参りにきて「仏の力」をいただけたと感じてもらえるようなお寺でありたいと思っております。

㋑真言宗寺院として、現在地に定着したのは昭和26年。弘法大師入定1150年の御遠忌として、現在の建物を新築した。

㋒「桜町の弘法さん、御不動さん」として親しまれ、毎月28日の不動明王の御縁日には、数多くの信者が各地から集まって大護摩法要が行われている。写真の法要は、弘法大師の正御影供法要である。



# 水垢離修行に信者集まり寺を建立

## 海運山（かいうんざん） 不動寺（ふどうじ）

真言宗智山派

◆花巻市高木（九三二・一）
◆電話（〇一九八）二四・二三三〇
◆住職（第二世）　佐藤正順

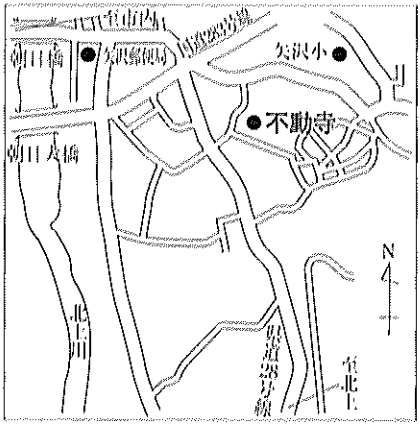
不動寺は玉順和尚が大正□年（一九□□）、成田山不動明王を勧請して本尊として開山した寺です。

当初は高木小路の矢沢農協の二階に本尊を安置、断食修行や北上川の朝日橋下の川原で水垢離修行をして仏道に励みました。真言行者として実践をしながら布教しているうちに信徒が続々と集まってきて仮の安置場所は狭くなってきました。

そこで玉順和尚の発願と信徒の新人による浄財によって、大正□□年（一九□□）近くに真言宗醍醐派の堂宇を建立しました。

以来、真言行者として庶民信仰の中心となり布教に専念。信徒から親しみを込めて「お父さん」と呼ばれ、信頼と徳望を重ねながら真言護摩の秘法を厳しく修行、数々の霊験を現わしました。親しく信徒と信仰を語り合うため高木不動講を結成、稗貫郡・和賀郡・紫波郡を中心として、不動講組織を確立しました。

昭和元年（一九二六）総代はじめ各講長と協議し、八幡村（現石鳥谷町）の棟梁佐賀患治氏等が中心となって、浄財が寄進され、堂宇の増築が行われました。また玉順和尚は毎年五月には成田山新勝寺に参籠して断食修行することを常とし、七月には恐山地蔵尊参詣を信徒と共に行ってきました。しかし老齢のため昭和□〇年（一九五五）までで終えています。




## 祈祷の寺から菩提寺へ
## 火難にめげず布教推進

諸願成就の祈祷寺として布教してきた不動寺でしたが、昭和□□年（一九四六）真言宗智山派に転派し、総本山智積院の末寺となって、祈祷寺であると共に菩提寺ともなったのです。

昭和□四年（一九四九）四月、近所からの出火で堂宇は類焼しましたが、

幸い本尊は上順和尚がお守りして、難を免れています。同年四月現在地に移り、再建に着手して本堂は、一月に建立されました。

また庫裡は、谷内村（現東和町谷内）田瀬の篤信者内館久七氏の家が、田瀬ダム建設のため水没することになり、その旧家の寄進を受けて現在地に移築されたものです。

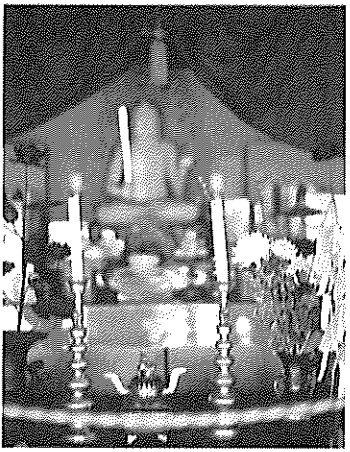
人間はそれぞれに生きる力を持ち、不動の心で毎日を過ごし、安心立命して生きることを念願しています。人々が求める諸願成就の祈願寺としての使命を果たし信徒の心に行き続けてきた上順和尚は、昭和一八年（一九六三）一月七日歳で永眠しました。

その後も不動信仰は人々の心に生き続け、本堂補修をしなければならない状態になったので、信徒の総意によって昭和四八年（一九七三）浄財を募り本堂の補修工事と堂内の荘厳整備がなされて今日に至っています。

昭和六三年（一九八八）には、日展入選の仏師佐藤瑞圭氏によって不動明王をお迎えし、本尊を胎内仏として納め、信仰の中心になっています。

開山の上順和尚が広めてきた信仰が、信徒の心の中に生き続けて七十数年。不動信仰を中心とした仏教精神が、信徒の心の中に深く浸透しながら、信徒の心に生き続けているのが当不動寺の特色なのです。

そして真言宗の教義の現世利益、密厳浄土が、信仰の支えとなるよう益々修行を積み重ねていかねばならないと考え、実行に移しております。



(イ)日展入選の仏師佐藤瑞圭氏によって不動明王をお迎えし、本尊を胎内仏として納めた。

(ロ)昭和22年（一九四七）に真言宗醍醐派から智山派へ転派。二年後火災に遭って現在地に移転、民家の寄進を受けて本堂を再建する。

# 花巻で最も歴史の古い真言宗寺院

## 實相山 自性院（じっそうざん じしょういん）

真言宗智山派

◆花巻市四日町二―五―五四
◆電話（〇一九八）二三―七四六九
ファックス二三―七四六九
◆住職（第五〇世） 斎藤善昭

JR花巻駅から花巻温泉方面に向かって徒歩一五分、いわゆる旧花巻町といわれる旧国道四号線の四日町二丁目から五〇㍍ほど東へ入ったところの左手に自性院があります。

花巻では最も長い歴史をもつ真言宗の古刹で、千年を超える寺院史を刻んでいます。数十年前に本堂と庫裡を新築するに際して、周囲の杉の大木を伐り倒したために、外部からの印象では古刹の面影がなくなりましたが、その後の植樹で緑が深く、銀杏の大木がひときわ高く天を摩しています。

自性院が開基したのは貞観二年（八六〇）、運子という真言の行人が布教のために諸国を行脚し、湯本の小瀬川村（現花巻市小瀬川）に止まって、宇を建立、真言密教の本尊、本造の大日如来を安置したのがはじまりです。

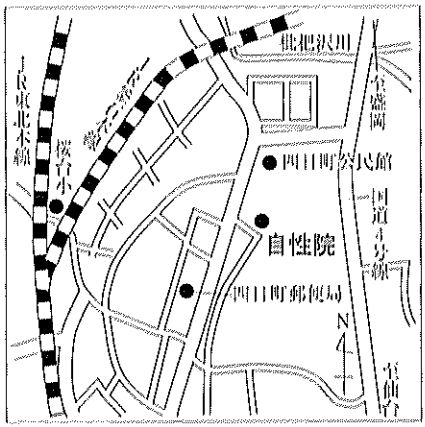
応永二八年（一四二一）二世貞海のとき、出羽（山形県）の湯殿山に登山修行しますが、そのときから注連寺末となり、山号・院号及び住職の海号を許されました。弘法大師の木像を安置したので大師堂と呼ばれました。

寛永年中、二四世順海のとき火災にあい、同二年（一六二五）当時空地だった現在地に移って再建しました。

『自性院世代書』によりますと、末寺に関する記事が多く出てきます。今ではいずれも廃寺となって現存していませんが、当時自性院がいかに指導的立場の寺院であったかが分かります。

『二五世運海に二人の弟子あり。第一の了海、寛文年中稗貫郡横塚村に青光庵を開祖。第二の林海、延宝年中和賀郡下鬼柳村に真明寺を開祖。第三の仙海、同じく延宝年中和賀郡上鬼柳村に柳光庵の開祖なり。以上三ヶ寺、当時無住につき廃寺と相成る』

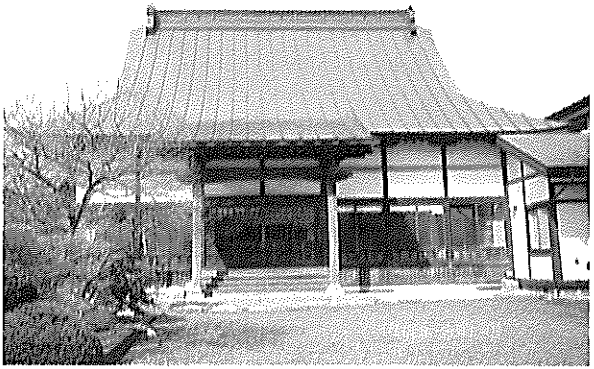
『宮野目村に林宮庵を開基運海。寛文年中より入院、延宝年中まで第二、世二海、第三世教海住す。』右寺院境内は



二十間四方、小杉雑木少々之有候」

「二六世春海弟子良雪、正徳年中和賀郡二子村に雲樹庵を開祖。二八世利伝の弟子清海、享保年中神貫郡北湯口村に宝樹庵開祖なり。当時いずれも無住につき廃寺と相成る」。

以上が本寺に関した記録です。



## 無住での荒廃乗り越え 寺門の興隆につとめる

その後世代が下って四二世応海のとき、天明二年（一七八二）の凶荒によって当寺も無住となって、時荒廃することになります。

(4)境内にある観音堂に三十三体の観音を祀る。

(5)かつて境内は、杉の大木で覆われていたが、本堂の新築に際し切り倒されたため、今では古刹の面影が少なくなった。だが本堂の裏側から今も昔も変らずに草池峰山の雄姿が望まれる。

しかし文政六年（一八二三）には、本寺の湯殿由注連寺より本唫鉄門海上人の弟子門海が来られて法灯を守ることになり、四二世を継ぎました。また四七世大海のときに、廃れていた本堂と庫裡を新しく造営し、寺門の興隆に勤めました。そこで当寺では、四二世門海と四七世大海と二人の和尚を中興の祖と仰いでおります。

寺宝として金剛界大日如来、鋳造の毘沙門天立像、十一面観音菩薩立像は花巻市の文化財に指定されています。像高四一・五㌢、檜材の寄木造りで江戸時代初期の作と考えられています。

ほかに不動明王立像が二体、慈覚大師作と伝えられる木造地蔵菩薩立像、古い涅槃絵図、弘法大師絵像、釈迦三尊絵図、十六羅漢絵図などがあります。

なお境内には、別に二十二体観世音菩薩を祀る観音堂が建てられており、陸中霊場八十八ヵ所観音の七十五番札所となっています。

## 北松斎から一字賜った近代的な寺

# 三宝山 摂取院 松庵寺

浄土宗

◆花巻市双葉町六・四
◆電話（〇一九八）二三・二〇三三
◆住職（第二七世） 小川隆英

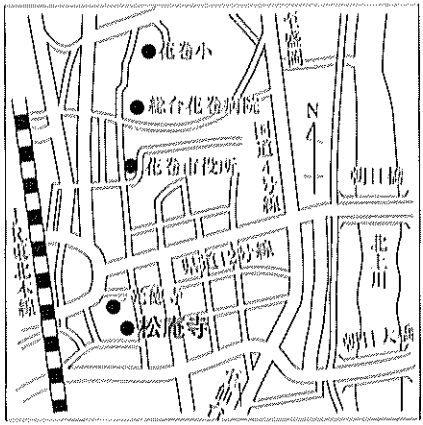
花巻市の飲食街双葉町に、お寺のイメージといささか異風な建物が見えます。外観は大谷石造り、屋根にはインドやネパール、ビルマ等の寺院に見られるパゴダ（仏塔）が高くそびえ、向拝の段々を登ると中はタイル張りに椅子式の本堂、そして天井と内陣の両奥には大型のステレオ音響装置があり、法要はもとより葬式、結婚式等にはパックミュージックを流しているという近代的な寺院です。戦災後の復興で、昭和二七年頃再建されました。

元この寺は真言宗の学寮でした。またまた念仏の行脚僧がこの寮に足を留め、土地の人々に念仏の教えを広めましたが、永禄五年（一五六〇）に広隆寺五世良縁上人を開山と仰ぎ、念仏庵としています。

慶長五年（一六〇〇）和賀の一揆で花巻城夜討のおり、住職の存泰和尚が止宿中の津軽の浪人二名を連れて馳せ参じました。二石余もある住職は大なぎなたを振り回し奮戦、その戦功によって城代の北松斎公の「松」の一字を許されて松庵寺としたといわれます。

北松斎公は、夜討ちをした敵岩崎城を攻め凱旋の途次この寺に立ち寄り、とどもりの観音に餅を供えて城に戻った古事によって、今も花巻祭の出御に伝えられています。

浪人共も南部藩に仕官し優遇されましたが、この末裔が和賀地方の開山、奥羽取の開さくに貢献しています。




### 寺が行う飢饉救済事業 福祉事業にも取り組む

松庵寺は貧しい庶民を救済した寺としても知られています。江戸時代、宝暦や天明、天保と度重なる凶作飢饉、疫病に教われました。貧しい人達は食を求めて寺に集まり、山内には施粥釜を築いて救済に当たったといいます。

このお助け粥によって多数の人命が

助かりましたが、餓死する人も多くこれをねんごろに弔い埋葬しました。

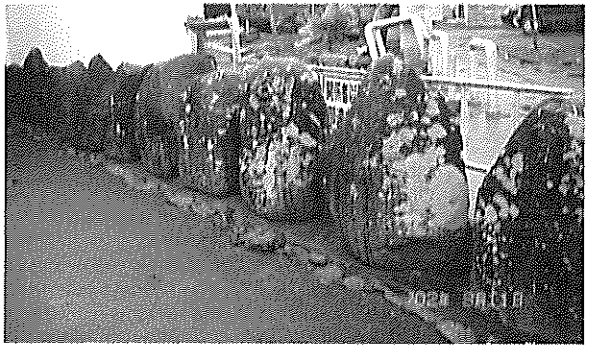
松庵寺山門の前に、二十基近い自然石の墓石が並んでいますが、すべて餓死供養塔であり、当時の悲惨さをしのばせてくれます。この飢饉に対処して、墓地と墓地の間に薬草を植え備えていたのもこの寺ならではのことでした。

また当時は貧しさから間引（堕胎）やお直し（赤児を川に流す）が平然と行われていました。それを憂う、四世慈観和尚は、宝暦一〇年（一七六〇）地蔵尊像を勧請し、生命の尊厳と育児の大事なことを強調し、諸中を結んで啓蒙につとめています。中絶指導者であった産婆のおなつは罪を詫びて嬰子遊魂の塔を建て弔いました。

このようにこの寺は大衆と共に生き大衆の苦しみをわが苦しみとして念仏の中に共に生きる喜びを与えました。代々住職の活動は境内に四十八夜念仏結集の碑や、百万遍、五百万遍念仏の石が建っているのを見ても分かります。最近では先代小川金英和尚が、終戦後の困窮者救済のため「よるひる銀行」を創設、福祉の父として平成一一年の花巻市民劇場に取り上げられました。

寺宝には木彫阿弥陀如来像が花巻市指定文化財、また小野道風の書、芭蕉句碑、その他各種仏像があります。

㋑パゴダを思わせる本堂は戦災による復興事業で再建された。
㋒山門前に建っている二十基近い自然石による餓死者供養塔。



## ■高村光太郎の詩碑

終戦直後、焼跡の仮御堂で高村光太郎が千恵子の回向を行ったが、そのとき残した詩「松庵寺」の詩碑に刻まれて祀られています。

# 稗貫地方の領主が開いた念仏寺院

## 藤興山 廣隆寺 浄土宗

◆花巻市四日町一・二・四七
◆電話（〇一九八）二三・四五三三
ファックス二三・七四七四
◆住職（第四二世）谷地玄雅

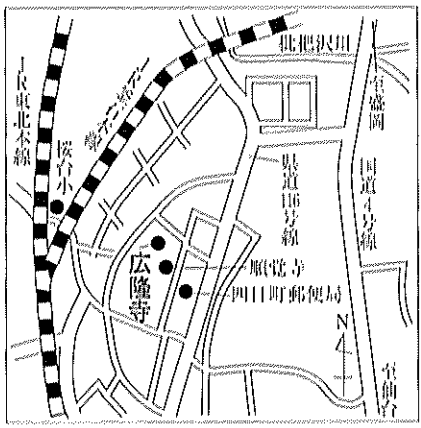
花巻の市街地の北部四日町には、かつて馬検場があってせり市で賑わいました。現在は商店街や住宅街として街の様相が一変しています。ここに浄土宗・真宗・真言宗の三つの寺院が営まれてきました。その中での古刹が浄土宗の藤興山広隆寺です。

この寺院が現在地に創設されるに至った経緯はつぎのように伝えています。浄土宗の宗祖法然上人の高弟であった行真金光上人が、師命を受けて浄土宗念仏を広めるため東北地方を巡錫。各地に浄土宗の寺院を建てながら花巻地方にやってきました。

その頃宮野目（現花巻市）の下似内地区に真言宗の庵がありましたが、上人はここに留って他力本願の教えを広めたため、念仏庵と呼ばれました。この庵を中心に宮野目・高木・似内など現在の花巻地方に多くの信徒を得て栄えたといいます。

その後明徳年中（一三九〇～九四）に下野国（現栃木県）大沢の円通寺良伝上人の弟子良聞が、教化の途中に金光上人の旧跡を慕って当庵に住し、念仏勧化に努めました。良聞は近隣の老若男女の帰依を得て、庵には朝暮の参拝が絶えなかったといわれます。

その頃この地方を支配していた豪族は稗貫氏です。領主稗貫氏には忠公と広隆の二人の子供がいて、この兄弟は共に上人に深く帰依して浄土念仏に対して熱心でした。兄弟が仏門に入ることによって、上人はこの地に留まって説法を行うことになりました。この頃から庵を談義所と呼ぶようになったといわれます。




### 藤原氏の興隆願い由号 亡き子「広隆」を寺名

明徳二年（一三九一）、浄土念仏に熱心だった広隆が病に倒れ亡くなりました。父の領主稗貫氏はその死を深く悲

しみ、菩提を弔うために広隆を開基として現在の場所に一宇を建立することになりました。開山には良間上人を勧請しています。

そして寺号は「広隆」の名をとって「広隆寺」と称し、また山号は秦氏が藤原氏の出であることから藤原氏の興隆を願い「藤興山」と号しました。

その後、今から約二百年前に火災に逢い、また明治二〇年（一八八七）四月の四日町大火で類焼し、本堂・庫裡などを焼失しましたが、幸い本尊の阿弥陀如来像は焼失を免れました。この仏像は桧材を使用した寄木造りで、漆塗り金箔押しの坐像です。室町時代の作と推定されています。

焼失した本堂の再建が行われたのが十年後の明治三〇年（一八九七）で、また大正八年（一九一九）には鐘楼堂、昭和四八年（一九七三）には山門「解脱門」がそれぞれ再建されました。

現在寺宝となっているのは本尊のほか「十王絵」十幅があります。京都泉涌寺の裏書があり、江戸時代作といわれます。また法然上人の自作と伝える木造の「勢至丸像」一体、花巻の絵師小野寺野周徳が江戸時代に描いた「十六羅漢の杉戸絵」などがあります。

なお境内には、樹齢六百年と推定される大公孫樹があります。

## ■北松斎を助けた「松子」の墓

慶長五年（一六〇〇）、子城主相賀主馬が鳥谷ヶ崎城を攻めたとき、当時の門前に住んでいた松子と浦子の二人の娘が城にかけつけ、北松斎公の馬のくつわを取り城の防戦にあたりました。この功績で、二人は松斎公から一生を保護されたといいます。その松子の墓が祀られています。

(右)北松斎を助け、鳥谷崎城を守った松子の墓。
(上)明治30年（一八九七）に再建の広隆寺本堂。

# 豪商清水甚兵衛が開基の如来さん

## 如来堂 勝行院 浄土宗

◆花巻市鍛冶町八・一五
◆電話（〇一九八）二四・二四四六
◆住職（世代不明） 谷地玄光

花巻南温泉郷に向う道路は、かつては電車道として車と共存して利用していました。その電車が境内の直前を走っていたのはもう過去のこと、今では道路は立派に整備されて、「如来さん」と親しまれてきた勝行院への参拝も容易になっています。

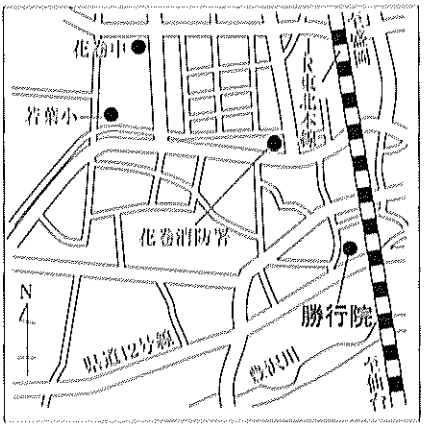
この寺院の開創は不明ですが、本寺の広隆寺所蔵の『広隆寺日記』によりますと、万治年中（一六五八～六〇）花巻城代北松斎公が近郷から寺院を町へ移した際、南根子から南川原地区へ移転された念仏庵だったと伝えます。

その後たび重なる水害によって荒廃しているのを聞いた豪商清水甚兵衛が自分の土地を寄進して庵を建立、広隆寺の末庵としました。この庵は現在の末広町に建てられましたが、常念仏の賑物が往来する人達の妨げになるとされて、領主の命によって更に現在地の鍛冶町に移転されました。

庵の土地を寄進した清水甚兵衛は、その先祖は甲州の武士でしたが、花巻に定着し商人として活躍、真宗大谷派の順覚寺建立にも貢献しております。勝行院にはその本尊の造建も志しながら他界、その子佐兵衛の代に造建し、親の意思を成就しました。従って開基は清水甚兵衛であり、開山は向誉西念となっております。

鍛冶町に移転建立したのは享保二年（一七一六）五間四面（一八平方m）の御堂です。その御堂も明治二年（一八七〇）の火災で焼失、再建されたのは約二十年後の明治二二年（一八九九）です。幸い本尊阿弥陀如来像は焼失を免れ、現在国の指定重要文化財です。そして昭和二六年（一九六一）にはその収蔵庫が完成しています。

勝行院には檀家は一戸もありません。信者の人達によって毎月一回講中が開かれていますが、四十～五十人が参加して如来さんを参拝しています。



また毎年七月二八日には、化巻では最も賑わうといわれる夏祭りが開催され、数千人が参拝しています。

なお境内には虚空蔵菩薩が祀られており、参詣者が絶えません。

## 国重文の阿弥陀如来像
## 御本尊も清水氏の寄進

勝行院の本尊として安置されている阿弥陀如来坐像は、昭和四年（一九二九）に国宝に指定されましたが、後に法令改正で昭和二五年（一九五〇）国指定重要文化財となりました。

この仏像の造建を志したのは清水喜兵衛ですが、志半ばの元禄五年（一六九二）に他界しました。

その子佐兵衛は、当院二世尊人の代に、本寺広隆寺・七世良宿上人から、親の志と念仏を広めるために、阿弥陀如来の造建を勧められます。そして京都東山の益田左近に丈六（一六〇㌢）の仏像を彫刻させました。

佐兵衛は途中江戸に立ち寄り、後に増上寺の大僧正になった祐天上人に開眼を願い出、更に『南無阿弥陀仏』の御名号を賜わって、親の意思を成就させました。

完成した阿弥陀如来座像は、元禄八年（一六九四）江戸から船で運ばれ、北上川を上って光徳寺と松庵寺の間を流れていた豊沢川の船着場に到着しました。そこから仏像を運んで納めたといわれます。

⑨昭和25年（一九五〇）に、国の指定文化財となった勝行院の本尊『阿弥陀如来坐像』。木造漆箔、玉眼。像高が百八十七・九㌢、鎌倉時代作である。

⑩豪商清水喜兵衛が土地を寄進し末広町から現在地に移転した。明治32年（一八九九）再建の本堂。

# 是信房に同行した侍僧が開山する

## 折居山 光徳寺（おりいざん こうとくじ）

浄土真宗本願寺派

◆花巻市南川原町九五
◆電話（〇一九八）二三・四六一四
ファックス（〇一九八）二四・九九五〇
◆住職（第二三世）鎌倉玄悦

花巻市の上町通り南側に併行して走る双葉町通りから浄土真宗本願寺派の古刹光徳寺を望むことができます。

この寺院は信覚法師によって開基されました。信覚は鎌倉に生まれましたが、親鸞聖人第二番目の直弟子である是信坊の教化を受けて得度しています。その後師の是信坊が宗祖聖人の念仏弘道の命を受け、奥州に教化の旅につかれるとき、侍僧として師に従って下向しました。

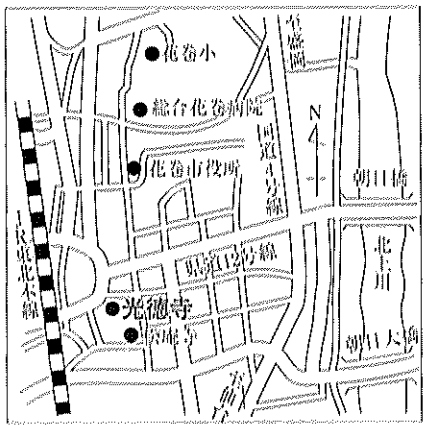
建保二年（一二一四）に和賀の「二つ伯」の地に居住して、師と共に教化活動をします。そして信覚は稗貫郡太田折居（現花巻市太田）に草庵を結びました。弘安元年（一二七八）のことで、ここが光徳寺発祥の地です。

以来、花巻の実相寺（元根子村）に移転、また更に花巻城の堀のそば仲町に移りますが、第二一世浄玄のとき、花巻城代北松斎の帰依を受け、懇請されて現在の地に定着しました。従ってこの浄玄を中興の祖と呼んでいます。現在の本堂は火災後の再建で、文政三年（一八二〇）に建立されました。

また本堂左側に建てられている太子堂・太鼓堂は、法隆寺ゆかりの太子像や北松斎寄進の太鼓を納めている御堂で、上層が太鼓堂・下層が太子堂となっています。

太子堂に奉安している太子像と御厨子は、法隆寺より寄進された貴重な仏像です。昭和一八年（一九四三）、法隆寺五重塔改修の大工工事を行う際、戦時中のため漆の入手が困難になり、工事が中止に追い込まれましたが、そのとき光徳寺より生漆を献上無事工事を終えることができました。その因縁により、法隆寺より破格の太子像寄進を受けることになりました。

また、太鼓堂は境内にありましたが、破損がひどく、また戦災で更に損傷を受けたため、太子堂の上に再建してい



ます。昭和二四年のことです。

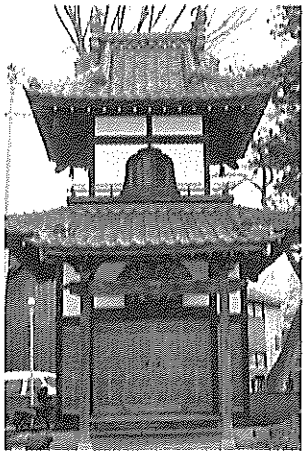
## 数多く保存されている市指定古記録や古文書

寺宝は数多く、まず御本尊の阿弥陀如来立像は二体あって、いずれも檜材の寄木造漆箔の像で、一体は像高が七尺、他の一体は四九・五㌢の仏像で平成二年に花巻市の文化財に指定されました。

このほかの文化財に絵画として頭如上人の真影があります。また経巻類のうち「改邪鈔」一冊は、本願寺より貴重文献として指定されています。

古記録や古文書類は数多く伝えられていますが、代表的なものに花巻市指定文化財「浅野長吉証文」があります。浅野弾正長吉（後の長政）が豊臣秀吉の命を受け奥州御検地の役をもって花巻へ下向するとき、浄玄に帰依し当寺にしばらく滞在、そのとき「根子村・村を寺領とする」という寄進状で、天正一八年（一五九〇）の文書です。

ほかに「石山陣中矢文」七通があります。これは浄玄が石山法難に参じてその功によりなえられた本願寺文書で地方と本願寺との関係を知る貴重な文書で、また永享元年（一四二九）今川了俊筆「今川状」などもあります。



㋑本堂に向かって左側の二重塔風の建物は、太子堂・太鼓堂と呼ばれ、法隆寺ゆかりの太子像は下層に祀られている。また上層には北松斎が寄進した太鼓を納めている太鼓堂となっている。

㋺花巻市太田の折居から実相寺、花巻城の堀そばと移転、文政3年現在地に本堂を建立した。

## ■「蔵修館」のチベット資料

光徳寺住職の親類であるチベット学者多田等観師が、チベットに十一年間留学し帰朝の際持ち帰った仏像、仏画仏具等で、境内に保存公開していたすべての文化遺産を平成六年に花巻市に寄贈、同一五年オープン予定の市立博物館で公開される予定です。

# 弘法の志深く郷里に布教拠点築く

## 山口山 専念寺（やまぐちやま せんねんじ）

浄土真宗本願寺派

◆花巻市花城町二二七
◆電話（〇一九八）二三一九三〇
◆住職（第二六世） 山折時儀

花巻市の中心部が米軍の空襲を受け上町付近で火災が発生。六七二戸が焼失し、死者二二名の被害を受けたのは終戦を目前にした八月一〇日のことです。その戦災復興都市計画が行われることになり、昭和二五年（一九五〇）専念寺本堂前に道路が新設されて、境内は二つに分割されました。

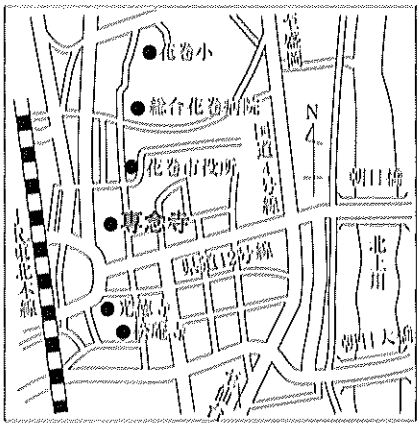
そもそもこの地に寺院が建てられたのは、慶安二年（一六四九）二月、第六世了秀の代のことです。稗貫郡鍋倉村（現花巻市鍋倉）から移ってきましたが、今でも鍋倉には専念寺が建てられた跡が残っています。

専念寺は西本願寺の末寺で、宗祖開山は見真大師親鸞聖人であり、御本尊に阿弥陀如来を祀っています。そして当寺を開基したのは和賀郡生まれの善子法師でした。秋田県仙北郡六郷村にある本願寺派の末寺善証寺の弟子となり、修行を積み法名を「善子」と改めています。

善子法師は弘法の志深く、郷里に戻って鍋倉村（現花巻市）に一宇を建立しました。寛永五年（一六二八）四月、第二世了心のとき、本願寺宗主准如上人より専念寺の寺号を賜わりました。

第二世了智、第四世了覚、第五世了頓と続き、第六世了秀の代に現在の場所に移ったことは先に述べました。その後寛文元年（一六六一）二月、本願寺宗主寂如上人より、現在の御本尊である阿弥陀如来像と連如上人の御真影を下付されています。

第七世了融の代の享保二年（一七一八）四月一〇日、本願寺宗主住如上人より聖徳太子、七高僧御絵像を下付されました。その後第八世了性、第九世了恵、第一〇世浄覚、第一一世了善と続き、二百四十余年の寺院の歴史を経てきましたが、明治二二年（一八七九）一一月の火災によって、御本尊の阿弥陀如



来像を除き、本堂、庫裡、古文書、法宝物等悉く焼失してしまいました。

また第二十三世の了善は若くして没しましたので、その後暫くの間無住の寺となっていました。しかし気仙郡住田町世田米の大谷派末の浄福寺から、第二十四世忻教法師が入寺して、これを中興しています。

更に大正七年（一九一八）八月、門徒一同の協力により本堂を再建することができ、漸く寺院としての体裁を整えることができました。これは焼失してから実に四〇年を経過してのことでした。本堂再建と同時に、親鸞聖人、蓮如上人の御真影を世田米の浄福寺から譲り受けています。

(3)紅葉が美しい本堂前のモミジは、南部藩四天王の一人相馬大作が愛した樹木と伝える。樹齢は定かではないが、専念寺の歴史を語る貴重な遺産である。危く切り倒されるところだった。

(3)大正7年に火災後四十年ぶりに再建された本堂だったが、その前に戦後の都市計画によって道路が新設され、境内が三分割されてしまった。

また昭和四二年（一九六八）一月、本願寺宗主勝如上人より、聖徳太子と七高僧の御影を下付されました。

## 南部藩の四天王の一人 相馬大作が愛した紅葉

本堂の前にモミジの古木が残されていて、秋には紅葉を楽しませてくれます。このモミジの木は、伝説によれば相馬大作（注）が紅葉を鑑賞しながら、時の住職と囲碁を楽しんだと伝えられている伝説の樹木です。

樹齢は定かではありませんが、戦災復興の都市計画で道路が新設される際に、危うく切り倒されるところでしたが、わずかに道路からそれていたために難を免れました。

（注）兵法武芸を学び南部藩四天王の一人と称された。津軽氏を討って亡君の恨みをはたそうとしたが失敗獄門に処せられる。藤田東湖は義烈を讃え、吉田松陰は長詩を残した。

# 沢内から北上を経て現在地に定着

## 命壽山 延妙寺（みょうじゅさん えんみょうじ）

浄土真宗本願寺派

◆花巻市北笹間二―五六
◆電話（〇一九八）二九―二六三四
ファックス二九―二六三四
◆住職（第二十世）藤本晃爾

花巻の代表的穀倉地帯、笹間地域の、角にあって、四方が田んぼに囲まれた静かな佇まいの中にあります。

本堂の前には、二百年以上の槻齢と思われるしだれ桜の古木があって、見事な花を見せてくれます。また庫裡の裏の庭園は苔むして、自然美あふれる景観を見せています。

延妙寺は延文二年（一三五七）に和賀郡沢内村に建立された寺です。

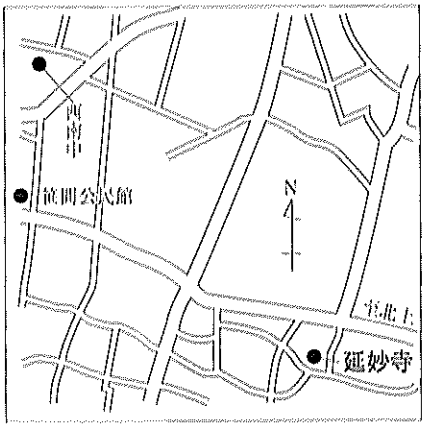
開山は延元といいます。延元は真宗の布教のため、阿弥陀如来を携えて沢内村を訪れ、本山にお願いして寺号を頂き、一院を建立しました。

文安年中（一四四四～四八）、六世専教のときに沢内村から花巻川口町の裏に移りましたが、一世常知のときに、子村（現北上市）和小路に移りました。その事実を示すように現在も和小路には、延妙寺の墓地があって、毎年一月二八日に役員一同お参りしております。そして、五世教順のときに現在地に移りました。

開山から三度目の移転で定着したわけですが、おおよそ百年間隔で移転していますが、その移転理由は全くわかっていません。

現在の本堂は、嘉永四年（一八五一）四月に建立されたもので、百五十年以上の長い歴史を刻んでおります。

なお、現在庫裡と会館を建設中であり、八月中には完成します。




### 地方史解明に貴重仏像
### 県指定と市指定文化財

延妙寺には寺宝として岩手県指定の文化財阿弥陀如来立像と花巻市指定文化財の聖徳太子立像があります。

阿弥陀如来立像は、開山延元が携えてきた仏像と伝えられ、鎌倉時代中期の作として昭和四七年（一九七二）に指定されました。尊像の高さが七八・八㌢、桂材の寄木造りで、漆塗り金箔

押し、玉眼です。昭和…年（一九五八）八月に解体修理が行われましたが梵字六百字のほか、つぎのような胎内墨書銘が発見されています。「大仏師幸運同子息幸賢　寛元元年歳次発卯十月廿五日　奉造立…尺阿弥陀如来像・体於江差郡厚谷郷奉造立之願主正兼　金剛仏子離愛　…味持者也」

なお梵字の意味するものは、真宗解釈によりますとつぎのようになります。

『生命を仏と法と僧との三つの宝に帰投してその教誨を帰依する。然あるべく最上に賛嘆し称揚する。勝れたる能生によって解脱せん。然あるべく最上に賛嘆する。勇猛にして、大勇猛なる。普ねき□□□…徳をもって災いをやみ利益を増すことを成しげん」

この仏像の墨書銘は延妙寺史のみでなく、地方史や仏教美術の解明に重要な資料となっています。

聖徳太子立像は、地方の仏師信定の作で、享禄…年（一五三〇）につくられています。県内に数多くある「まいりのほとけ」として信仰されてきた仏像で、足の裏に「信定花押　仏作宝殿□□…年七月十日」と墨書銘があります。郷土史家可東重雄氏は、不明の…文字を「享禄」と判読しました。享禄は室町時代末期の年号です。

阿弥陀如来立像は、平成・六年に開館予定の花巻市立博物館に展示するために、レプリカを製作しています。

㊤本堂は三度目の移転で現在地定着。

㊦沢内に開山の際に延元が携えてきたと伝えられる阿弥陀如来立像は、鎌倉中期の作品で岩手県指定文化財。地方史や仏教美術の解明に貴重な資料で、木造聖徳太子立像と共に寺宝。

# 諸国行脚し郷里に布教の礎を築く

## 願休山 順覺寺（がんきゅうざん じゅんかくじ）

真宗大谷派

◆花巻市四日町一一一五
◆電話（〇一九八）二三四四
ファックス二三四四
◆住職（第一五世）藤枝剛

花巻市街地の中で最も早く町づくりがなされた四日町、丁目の閑静な地域に願休山順覚寺があります。京都の真宗大谷派本山・東本願寺・真宗本廟の直末寺院です。

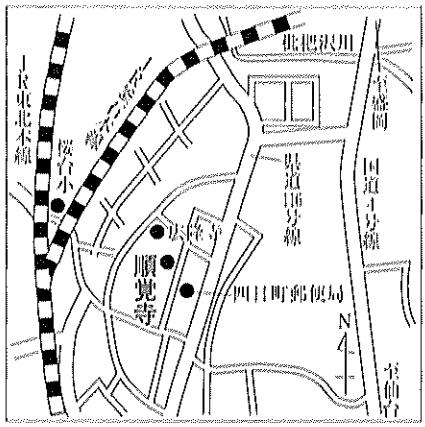
開基は俗姓を藤枝義宗といい、南部盛岡藩士でしたが、世の無常を深く観ずるところがあって仏道に帰依しました。法名を釋浄誓とたまわり、その生涯を人々の教化に捧げました。当時の人々はその徳を慕って空誓大徳と尊称したと寺伝は伝えています。

開基釋浄誓法師は、今から二八〇年ほど前の江戸時代初期、東本願寺第一二代法主宣如上人の「諷（側近）の座を占める御弟子として真宗法義を習得しました。

その後諸国を行脚した後、故郷の南部に帰り、当時開町して間もない花巻の地に開法道場を開き、本願念仏の教えを広めて人々を教化しました。

稗貫・花巻地方は、親鸞聖人の直弟子であった是信房の念仏信仰につちかわれた地域であり、また開基の人徳と熱心な教化により承応二年（一六五四）に正式に本山より認可され、真宗寺院として順覚寺が開創されました。

開創から堂宇建立に至るまでの協力者、大檀越として清水甚兵衛という人物がおります。清水家の家系は、甲州武田家の重臣でしたが、主家の滅亡後は南部家に身を寄せ、武将としてではなく商人として花巻に在住、当時八方両分限を持つといわれるほどの南部藩を代表する豪商でした。

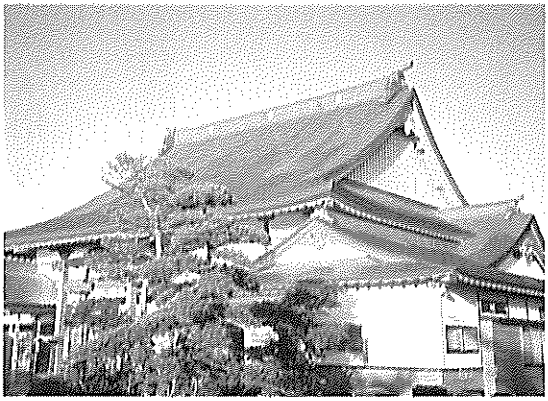



### 堂宇建立に豪商協力者 寺の親戚の清水甚兵衛

清水家は代々東本願寺と関係が深く、信仰心の厚い念仏信者でした。この甚兵衛が順覚寺の建立と発展に尽力した理由の一つに、清水家と藤枝家とが親戚関係だったことが、現清水家当主の

調査で明らかにされています。

清水甚兵衛の子孫と門徒の合力によって建立された当寺の本堂は、七間四面、欅造りの立派な御堂でしたが、残念ながら明治二〇年（一八八七）の四日町大火で類焼炎上しました。しかし御本尊はじめ法宝物、過去帳等は無事避難し、今日に伝えられています。



㋭平成13年大改修工事を行い、一新した順覚寺の本堂。

そして、二一世紀初頭の平成二二年に、総檜信徒の浄財寄進と協力によって本堂の大改修工事を行い、本堂・同朋館（書院）・庫裡玄関・接待所等を一新し、銅板葺きの本堂として往時の姿を再現することができました。

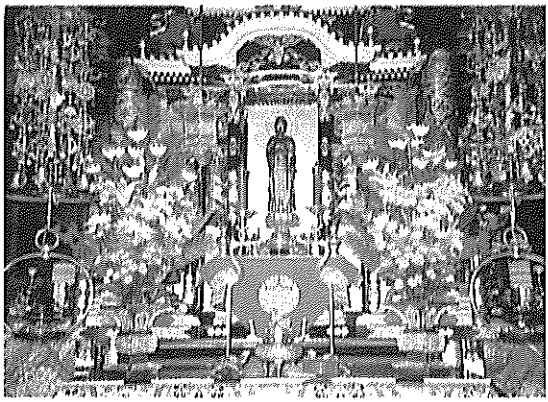
江戸時代の初期から、明治・大正・昭和そして平成と、時代や社会の変遷を乗り越えて歴代血脈、法脈相続して現住職の藤枝剛・釋智周師に至って第一、五代となりました。そして本願念仏の教証のため同朋の人々と共に聞法を中心に開かれた真宗寺院として、大切に護持されています。

順覚寺に伝持されてきた主な寺宝はつぎのような法宝物です。

御本尊の阿弥陀如来立像は、御仏師宗重作で本山から下付されました。花巻市の指定文化財です。

そのほかに、金銅阿弥陀如来像（開基・釋浄賢の念持仏）、鏡面阿弥陀如来像（開基坊守・念持仏）、親鸞聖人御影像（元禄・〇年銘）、蓮如上人御影像（明和四年銘）、七高僧、聖徳太子絵像、親鸞聖人御絵伝、本願寺歴代法主親筆名号、中国の長安様式の釈迦如来手字仏足図と石碑、賽の河原子ども栄光地蔵尊大掛軸があります。また南部藩お抱え力士の錦木塚五郎の墓碑と錦絵などもあります。

㋬花巻市指定文化財の御本尊阿弥陀如来像祀る須弥壇。



# 是信房の布教地を点々と移転する

## 石龍山 圓徳寺（せきりゅうざん えんとくじ）

真宗大谷派

◆花巻市鍛木一〇・二九
◆電話（〇一九八）二九・二三四七
ファックス（〇一九八）二九・二三四七
◆住職（第二三世）石田盛興

花巻市の西南部、水田地帯の広がる旧笹間村を南北に走る県道盛岡和賀線沿いに円徳寺があります。花巻の中心部から車でくる場合、鉛温泉方面に向かい、本杉地区から約十分南下すると右側に見えます。

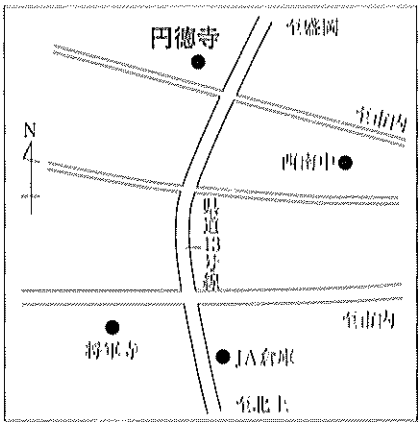
円徳寺の由緒を記しているものに、一五世円諦が明和元年（一七六四）に書き上げた『由緒書上』があります。それによると開山は、京都山科の士族であった石田法眼祐信で、出家して布教のため諸国行脚し、秋田から奥羽山脈を越え和賀町（現北上市）岩崎の山口に落ち着きます。

その後同町の竪川目へ移転、さらに同町の藤根にきて蓮実に庵を結びました。宝徳二年（一四五〇）のことでここには古くから阿弥陀堂があり、庵は藤根院といいました。

元来、和賀地方は親鸞十人の高弟である是信房が、熱心に阿弥陀信仰を説いて廻った地域です。その頃和賀地方は真宗布教の最北端でした。旧来の仏教に飽き足らず新しい仏教が唱えられた時代でした。『阿弥陀経の本願』を信ずる浄土経ばかりでなく、禅宗、法華宗が興ったのもこの頃です。

円徳寺が本願寺から寺号を授けられたのは、開山祐信が阿弥陀堂に庵を結んでから六七年後の大永二年（一五二二）四世祐辨の代のことです。このとき本願寺九世実如上人から十字の名号『帰命盡十方无碍光如来』を賜わりました。由号は寺宝としてあった宝石（水晶）の中に、龍の形をしていたことから石龍山と号したといいます。

六世尊空の代に火災に遭い、永禄元年（一五五八）中笹間村（現花巻市）の願念に移転します。そしてさらに寛二年には太田村（現花巻市）の寺沢宇兵衛が子孫の来と土地を寄進したことから、現在地の藤木村（現花巻市）笹田に移りました。



## 寺跡地に残る厚い信仰層を拡大した寺院移転

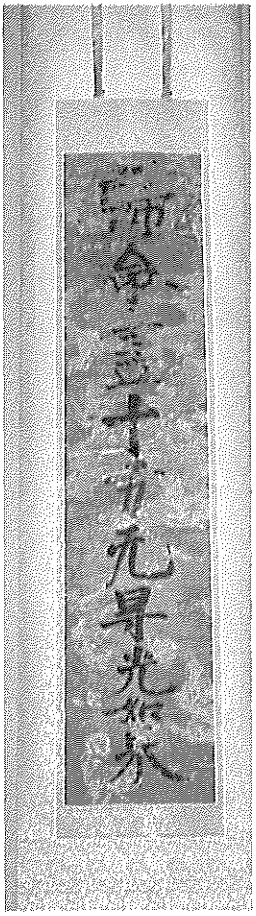
円徳寺の草創と移転を見ますと、真宗の教義である念仏浄土の教えが地域としてまとまった信仰圏が出来上がってきたことを示しているように考えられます。藤根村（現北上市）で開かれた弥陀の大慈大悲の救いが、願念に、そして雀田にと範囲を広げ篤い信仰に支えられてきました。最初に庵を結んだ藤根村（現北上市）は、横ノ上樽井ノ里遺実と呼ばれ、昔から阿弥陀堂があって信心深いところでした。今でもこの付近に住む人々に円徳寺の檀家が多く見られます。

円徳寺が移った後の跡地には稲葉神社が建立されていますが、同社に「阿弥陀如来堂再建」の棟札が四点、古文書などが伝来しています。また花巻の絵師小野寺周徳筆の山額「関龍山」も保存されており、円徳寺との深い関わりを物語っています。

円徳寺の本堂は荒廃のため再建されたのが文政七年（一八二四）のことです。当初庫裡は下手（東側）にありましたが、明治の初め、八世大観の代に上手（西側）に移転改築し、曲り家づくりの全国でも珍しい建築構造の寺院として話題を呼びました。しかし昭和五四年（一九七九）の火災で本堂・庫裡を全焼、翌五五年本堂、五六年に庫裡を再建しています。

本尊の阿弥陀如来立像は、花巻市指定の文化財であり、それ以外の寺宝として、寺号を許されたとき本山から賜わった十字名号、また聖徳太子絵像などがあります。

㈤開山以来五回目の移転で、現在地に定着した円徳寺。



㈥本願寺九世の実如上人から、円徳寺の寺号と共に十字の名号「帰命盡十方无碍光如来」の軸物を賜っている。

# 本堂はじめ数多く伝承の文化遺産

## 石林山 妙圓寺（せきりんざん みょうえんじ）

真宗大谷派

◆花巻市愛宕町七-五
◆電話（〇一九八）二三-五四二九
ファックス二三-五四三九
◆住職（第二七世）林 正文

JR花巻駅から徒歩五分、かつては閑静な寺町の中にありましたが、最近は周辺に住宅が数多く建ち、市街地の中に飲み込まれた形です。

妙円寺を開基したのは、滋賀県出身の念仏行者玄祐と伝えます。治水元年（一、七七）慧覚大師の遺跡を訪ねて青森県の恐山に参詣、その帰途花巻に立ち寄り四日町の順覚寺西隣に草庵を結びました。

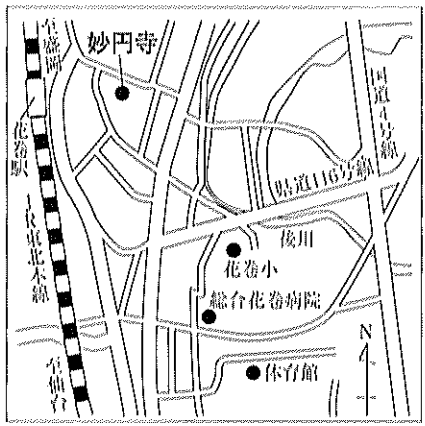
元亨年中（一、……～一、……）四世了達のとき天台宗より浄土真宗に改宗。本山第二代覚如上人の御真筆阿弥陀如来絵像を本尊として安置しました。

四世敬伝のとき、信心篤い清水甚兵衛祐重（法名釋順西）の寄進を受け本山本願寺にお願いして寛文二年（一、六六二）七月六日、妙円寺の寺号及び本仏像を頂きました。寺号は清水甚兵衛の母の名をとって付けられたといわれております。

寺院は寛文二年（一、六七二）に現在地の愛宕町に移りました。それまでは四日町長谷寺の隣りにあったと伝えられます。現在の本堂は享和元年（一、八〇一）の創建で、大工棟梁は宮沢兵蔵でした。総けやき造りですでに二百年を過ぎ、花巻市指定文化財です。

妙円寺には数多くの仏教遺産が伝えられております。約八百年前の作といわれる天台宗第二祖慧覚大師御真筆の阿弥陀如来絵像、約六百年前作の浄土真宗第二代覚如上人御真筆の阿弥陀如来絵像。そして現本堂の御本尊は清水甚兵衛が寄進した江戸時代の阿弥陀如来像で花巻市の文化財です。この御本尊を祀る須弥壇には、本堂建立に協力した、四軒の家紋が記されています。

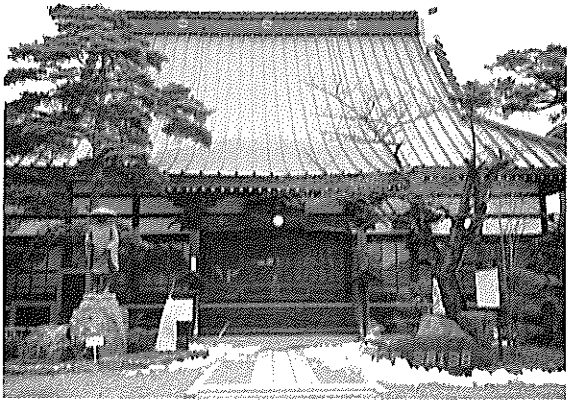
また東北地方に浄土真宗を布教した鼠信坊が作った親鸞聖人の木像も伝えられておりますが、盛岡の本誓寺から頂いたものと考えられています。これも花巻市の指定文化財です。



このほか江戸時代の絵師小野寺周徳のふすま絵八枚もありましたが、花巻市の博物館へ寄託しました。

## 江戸時代は寺子屋経営 現在は幼児教育に開放

江戸時代に本堂を寺子屋として提供。



㊤総けやき造りの本堂は二百年前建築で花巻市文化財。

㊦江戸時代初期、当地方の文化に大きな足跡を残した松井道円の墓。医師であり学者であり絵師でもあった。

また明治の初めには第九番小学校（花巻小学校の前身）として初等教育に当たりました。本堂の左手に建っている石碑は、寺子屋小学校の訓導だった林正導の事績を記しています。

花巻地方の教育向上に尽くした寺院の伝統を現住職が受け継ぎ、昭和三九年（一九六四）檀信徒の協力を得て、花巻市内では初の私立幼稚園「大谷幼稚園」を設立しました。また昭和四七年（一九七二）には特別養護老人ホーム「大谷荘」を設立。二年後には花巻市から養護老人ホーム「はなまき荘」の経営を委託され、寝たきりや身寄りのないお年寄のお世話もしています。

昭和四五年（一九七〇）各種学校の「池坊大谷学園」を設立、池坊流の花道の指導を行っています。更に同四八年四月から学校法人大谷学園を設立して、湯口地区に「湯口大谷幼稚園」を開園しました。

現住職の平和への希求心が強く、本堂に「正義のための暴力」と題した中央美術協会会長千住博一氏の銅版画の作品十三点を展示するほか、広島平和公園から採火した「平和の灯」を本堂内陣に採火しています。また境内には平和のバラとして知られるアンネのバラ、長崎市寄贈の平和の木、クスの木を植栽、平和を誓っています。

# 郡代の帰依を受けた士族開基の寺

## 花巻山 安浄寺

真宗大谷派

◆花巻市桜木町一―四六
◆電話（〇一九八）二三―五〇七六
◆住職（第二七世） 膝舘黍琳

花巻市の東西を結ぶ幹線道路銀冶町と末広町の坂道との交差点から南に向う道路の真向かいに、真宗大谷派の寺院安浄寺があります。

かつては境内も広く、南川原町に向う道路が境内を貫いていたといわれます。しかし現在は幕地も他所に移され境内は狭くなり当時の面影はありません。しかし本堂の後方にある大きな銀杏の木は、大人が両手を広げて二回り半という巨木であり、広かった当時をしのばせてくれます。

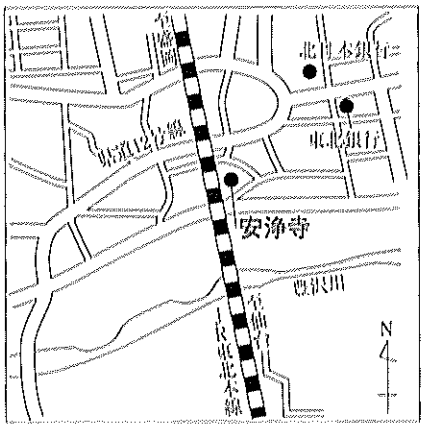
この寺院を開基したのは弘教坊釈永堅、俗名膝舘弾正輝忠です。延徳二年（一四九〇）のことでした。東本願寺八世蓮如上人のお弟子の列に加えられ弘教坊の名を賜わった膝舘弾正は、旧領地である湯口上根子に一宇を建立、誓久山安浄寺と称しました。

そして寛文二年（一六七二）八世円誓のとき、時の花巻郡代四戸金左衛門の帰依によって、上根子から現在の場所に移っています。

二世泰全のとき、南部利剛公から真筆花巻山の山号を賜わりました。現在本堂の向拝に見えるのがそれです。そのときから山号が誓久山から花巻山に変わりました。また、家紋「太輪に向かい鶴・輪なし武田菱」を拝領したのもこのときです。

南部利剛公は南部家四〇代目で、盛岡藩二四代の藩主です。和歌や茶道に堪能な文人としても知られ、多くの遺徳を残しています。その利剛公が鉛温泉で湯治をしているとき、旅情をまぎらすために藩の文人や学者を集めて、鉛温泉付近の景勝の地を吟詠させ絵にして綴らせました。慶応二年（一八六六）のことです。

「鉛村八景画帖」といわれるもので湯元であった安浄寺が懇請して拝領したものといわれます。現在寺宝として大切に保存されています。



# 南部利剛公ら文人八名「鉛村八景」歌に詠む

絵は盛岡藩お抱えの絵師狩野休意と金矢桃隣が交互に四景ずつ描き、序は太田孝、歌は心正斉休意がそれぞれ揮毫しています。また歌を詠んだのは、南部利剛公をはじめ八名の文人で、黒川派の歌人長嶺将作、江戸千家不白流の茶人上田宗立、同じく太田原珠朴、植山隆幹、久慈伝兵衛、江剛恒久、富田忭の名が記されています。

鉛温泉付近の景勝地である八景は、「烏帽子森紅葉」「鉛村炊烟」「高倉山夕立」「大森山清水」「棲橋行人」「豊澤川群流」「澤田澤飛滝」「阿弥陀巌残雪」のタイトルがつけられ、それぞれに象徴的な日本画が描かれ、歌が添えられています。

ちなみに南部利剛公の歌は、「山姫のおれるもみぢの錦きて　烏帽子のもりぞ時得顔なる」で、烏帽子森紅葉の絵に添えられています。

南部利剛公は慶応二年（一八六七）二月にも鉛温泉で湯治し、大澤まで遊遥した際、その風光も素晴らしいことから、中国の瀟湘八景に擬して侍臣に歌を詠ませ、絵師川口月嶺に絵を描かせて「大澤八景」を著しています。

かつて鉛温泉地方は安浄寺の所有であり、この温泉にあった南部藩の湯治場を安浄寺が管理していたのでした。これら利剛公に関わる寺宝のほかに東本願寺第八世蓮如上人真筆の「六字名号」があり、糸引名号の名で知られている貴重な遺産です。

㈲花巻市湯口上根子に勝鎧弾正輝忠ごと弘教坊釈永璧が開基した安浄寺は、寛文11年（一六七一）八世円誉のときに花巻郡代四戸金左衛門の帰依によって現在地に移る。

㈳鉛八景「烏帽子森紅葉」に寄せた藩主南部利剛公の歌。

# 遊行二代に帰依の稗貫重臣が開基

## 金生山 寶喜院 常樂寺

◆花巻市中根子字二六古館前二五
◆電話（〇一九八）二三・二八九五
◆住職（第二〇世） 照井広善

時宗

主要地方道花巻・大曲線を西へ、東北自動車道の下を通るとすぐの所に、鍛冶町から西へ向う市道との交差点があります。その周辺に常樂寺の門柱があって、そこから南へ百㍍ほどの所に本堂が見えます。

この寺院の開山に関する記録は、常樂寺の鎮守熊野権現の棟札に記されていました。それによりますと、中世にこの地方を支配していた領主稗貫氏の重臣根子和泉守が、鎌倉に在番のため都に登ったとき、遊行二代の他阿真教上人の法話を聞く機会に恵まれます。

上人の法話に数多くの参詣者が集まり、そのご利益はことのほか勝れていることに随喜感心して毎日法益を受けていました。しかし和泉守は在番を終え帰郷することになり、上人に別れることを深く悲しみました。

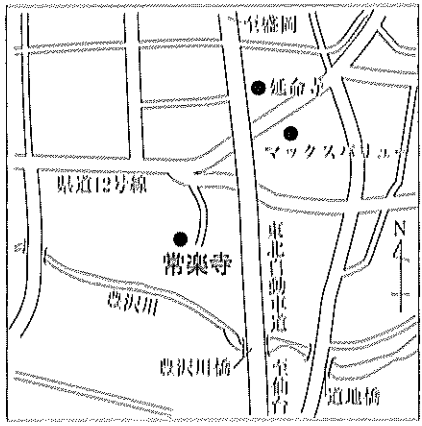
上人はその志を奇特に思い、弟子の中から其阿という僧を付き添わせることにして、同道させて帰郷しました。そして下館という所に其阿を開山として一宇を建立しました。

それは乾元元年（一三〇二）のことで、阿弥陀如来を本尊に朝夕勤行したので、周辺の人々はこの寺を下館の高道場と呼んだといいます。

天正一八年（一五九〇）豊臣秀吉の名代として、三好中納言秀次が奥州へ本松まで下ったとき、その先陣に浅野弾正少弼長吉が稗貫氏の領地に向かいます。そして旧支配者の討伐に当たりますが、稗貫氏の家臣根子一族の城も落城して秋田県仙北郡に退散しました。仙北郡には根子原敗と呼ぶ遺跡が残っていると伝えています。

慶長五年（一六〇〇）の頃、根子氏は旧領に戻りますが、南部利直に襲撃されて一族は飛散してしまいました。

慶長九年（一六〇四）に檀信徒の平賀某が、二世の住職弥阿が仙北郡に在留していることを伝え聞き、訪ねて



同道し帰郷しました。そして旧寺領の共阿田という所に寺堂を建立したのが現在の寺院です。それ以外の記録については数回の火災によって失われ、代々の縁起は判っていません。

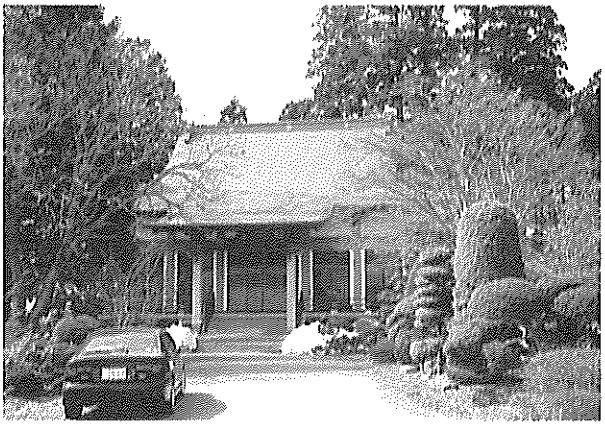
## 会津での疫病完治伝説
## 信仰集める日限地蔵尊

位牌堂に安置している地蔵尊は、東京芝白金の名刹松秀寺に祀られている弘法大師の作と伝える日限地蔵尊の御分身です。この地蔵尊の由来にはつぎのような縁起があります。

天正年中、奥州の会津地方に疫病が流行し嘆き悲しんでいました。そこにどこからともなく一人の僧が現われて病人に御守護符を授与し、病の軽重によって一日または七日と日限を誓約し精進して地蔵尊の名を唱えるようにと教えました。それを守った病人は悉く疫病がなおったといいます。

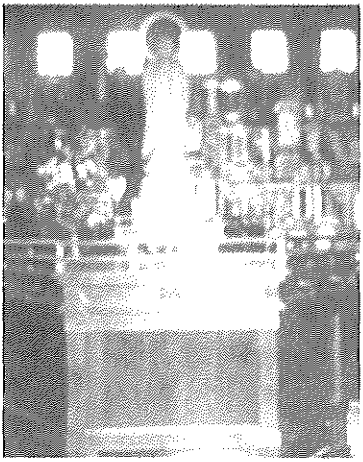
人々は不思議に思い、どこの僧でしょうかと尋ねたところ、「われは芝松西光寺の地蔵なり」と仰せられました。

その後、参詣する老若男女数知れずもろもろの願いごとに対して、日限のとおりに満足しないものはなかったといいます。



そのときから「日限願満延命地蔵大菩薩」というようになりました。そして衆生結縁のため東京にて開帳することになり、信仰する者多く、一宇を建立して末永くその地に留まることになりました。

昭和一一年（一九三六）常楽寺の位牌堂を改築するに当たって、この地蔵尊の分身を勧請しました。



㊤遊行二代弥阿上人の教えにより開山した寺院。
㊦位牌堂に安置の地蔵尊は、会津地方での疫病完治の伝説を持ち日限地蔵として信仰を集める。

# 南部家の歴史と共に歩んだ遥拝寺

## 妙應山 長久寺（みょうおうざん ちょうきゅうじ）

臨済宗妙心寺派

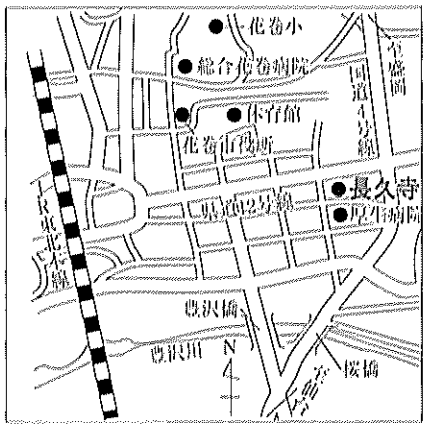
◆花巻市御田屋町二―一七
◆電話（〇一九八）二四―二八八六
◆住職（兼務）長松院佐藤勝也

国道四号線を北上し、豊沢川に架かる桜橋を渡りますとやがて花巻市のメーンストリート上町との交差点があり、その周辺が御田屋町です。

東西に商店や住宅が混在する中で、二つの寺院が軒を並べ、その南側には県立花巻厚生病院がありますが、実は昭和二〇年（一九四五）四月、六日、この病院からの出火で周辺に大きな被害を及ぼしました。二つの寺院のうち一寺が被災、南部家の遥拝所として長い歴史を誇っていた妙応山長久寺も類焼。什器、古文書など貴重な文化遺産のすべてを焼失しました。

南部家ゆかりの花巻に臨済宗の寺院がなく、南部家代々の御忌日にも拝礼の場所がなく悩みでした。そこで延宝年間（一六七三～八〇）の初め、時の花巻郡代四戸金左衛門が本寺の聖寿寺に寺の建設を請願。住職の大道禅師はいたく感激し、かつて久慈にあった長久寺を花巻に再興することになり、大道禅師が中興開山しました。

そもそも長久寺は何時どこに開基したのでしょうか。『妙恩山長久禅寺興建記』や『一郡見聞私記』によりますと、元中八年（一三九一）に義山明恩禅師が現在の久慈市内になっている長久寺村に開山、領主久慈氏の菩提所でした。義山禅師は、四国の土佐（高知県）にある天恩寺の住職で、三光国済国師の高弟でした。布教教化のため奥州に下り、当寺を建立したわけです。



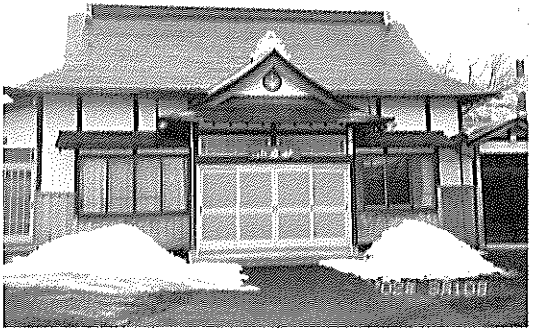

そして元中九年（一三九二）には、浄法寺町にある古代寺院八葉山天台寺の梵鐘に銘を刻みました。

久慈における長久寺は、江戸時代には衰退し全く荒廃してしまいます。そして寺宝などは本寺の聖寿寺に移されていました。その寺院が花巻に再建されたわけですが、檀家のない寺院の悲哀から再び荒廃、郡守織笠庄助安慎らの手によって再興されたのが宝暦・・

年（一七六一）のことです。

## 名僧育てた過去の栄光
## 現在は兼務住職で守る

長久寺の再中興といわれるのが昭和九年（一九三四）九十歳で天寿を全うした妙応琳大和尚です。本山に招かれるほどの名僧だったといいます。その



(b)昭和20年の大火によって焼失、28年再建の本堂。

次代のときに盛岡の長松院との関わりを持ち、更に若死にした二代のあとにその兄である現長松院住職が長久寺の兼務住職となっています。

長久寺はこのように度重なる荒廃と再興によって開山以来何世の住職であるか世代は不明となっています。

なお、現在の本堂と庫裡は、昭和二八年（一九五三）に再建されています。

(a)無住時代が長かった長久寺には、その間に本堂の縁の下に狐が棲みついたといわれる。そのいたずら狐を餓死させたが、供養のため寺院境内に稲荷神社を祀った。

## ■伝説「長久寺の狐」

現在寺院の境内に稲荷神社を祀っていますが、それには長久寺の狐にまつわる伝説が伝えられています。

古い記録『二郡見聞私記』によりますと、次のようなお話です。

長久寺が無住のとき、本堂の縁の下に狐が棲みつくほど荒れていました。庫裡の台所には卑しい者が住んでいましたが、その狐の騒々しさに腹を立てて、狐の往来する穴をふさぎ、一匹残らず餓死させてしまいました。

ある夜、大勢の人の気配を感じた卑しい者は、壁のすき間からのぞくと、葬礼の儀式が行われています。和尚が引導を渡していたのです。ところが、翌朝日をさまし外を見ますと、葬式の列と思われた跡は、実は狐の足跡だったのでした。境内にある稲荷神社はこうして祀られました。

# 古代の伝説秘める和賀氏関連の寺

## 鶏頭山 将軍寺 曹洞宗

◆花巻市藤木一四・五八
◆電話（〇一九八）二九・二七四一
◆住職（第二三世）新渡戸常道

花巻市中心部から西南方へ車で十数分、旧和賀郡笹間村に含まれていた藤木地区に将軍寺は営まれています。

伝説によれば寺の歴史は古く、大同二年（八〇七）に坂上田村麻呂の帰依によって草庵を結び、天台宗に属していました。藤木という地名は、この寺建造に際して二つの車を使用し材木を運搬したことから起こった名称であると伝えています。

長い無住期間を経て文亀元年（一五〇一）に鬼柳村（現北上市）の正覚寺六世深谷是泉和尚によって曹洞宗寺院として開創しました。そのときの開基は藤木村旧館の領主藤木兵庫頭で和賀氏の一族でした。一説には、天文五年（一五三六）開創説もあります。

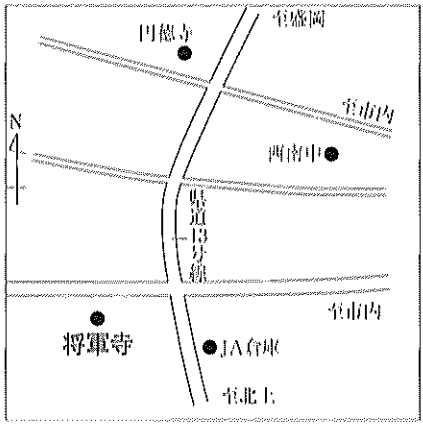
藤木の館は天正年間（一五七三～九一）頃まで続きますが、和賀氏の滅亡によってこの館も二代にして滅びました。兵庫頭は後に剃髪して月岩と号しました。そして息子の長右衛門は南部利直に仕え、七百石を賜わってこの館に住したといいます。

このように中世この地方を支配した和賀氏との関わり深い寺院ですが、その家臣八重樫氏は明治初期まで一族の氏寺として護持したといいます。

この寺は寺院の間では古代寺といわれる貧乏な寺でした。古代寺とは、人前になっていない僧がいるとか寺院の周辺が田んぼだらけなど貧しさを象徴する言葉だったのです。

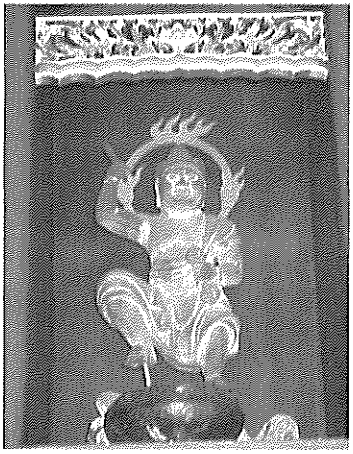
本尊は釈迦牟尼仏で、現在の仏像は慶応二年（一八六六）花巻の仏師浅野権八の作で、四世大然道林和尚の代の勧請です。また現在の本堂は文化一二年（一八一五）一一世仏山法眼の代の造営であり、約二百年前から過去帳が保存されております。

寺宝は弘化年間（一八四四～四八）作の釈尊涅槃絵図一幅と年代不明ですが二百年位前の作とされる烏枢沙摩明



## 開基轟木氏の愛憎物語
## 今に残る妻妾巡る伝説

南部藩の古い記録「二郡見聞私記」



㈱和賀氏の一族轟木館の領主が開基した将軍寺。

㈱文化年間に建立した本堂が現在も残っていて、古い記録や仏像が保存されている。花巻市指定文化財「鳥枢沙摩明王」は二百年位前の仏像。

王像があります。後者が花巻市指定の文化財であり、東司（トイレ）を守る仏様といわれます。

によりますと、将軍寺にまつわる伝説が記録されております。

将軍寺を開基した轟木兵庫頭の子、長石衛門に愛妾がいましたが、従者との密通がうわさされていました。ある日長石衛門夫婦が清水寺に参詣したとき、境内の大杉は妻の元結を大釘で打ちつけていました。これはめかけの仕業であると告げられていました。

またあるとき、長石衛門は妻と妾を連れ雫提寺の将軍寺に参詣しますが、妻が語るには「妾のたもとに何かあやしい物があるから取り上げてご覧下さい」とすすめるので、長石衛門が改めて見たところ「轟木長石衛門」と書いた札がありました。それには泥足跡で踏みつけた跡があるので、妾に尋ねたところ当惑して答えません。

妻がいうには、従者と逢うごとに足で踏んだのだといい、長石衛門は大いに怒って即刻打ち捨てました。

その後、妾の怨霊が本妻に取り付き奸計をしたことを口走って苦しみながら死にました。長石衛門もその年の内に死亡、世継ぎがなく轟木家は亡んでしまいました。

妾を殺害した場所が本堂の前で、現在は石塔婆が立っていますが、お盆の十六日には、年中行事として供養を欠かしません。

# 和賀氏支配時代の檀家が多く残る

## 溪雲山 東光寺（けいうんざん とうこうじ） 曹洞宗

◆花巻市北笹間七・七一
◆電話（〇一九八）二九・二二二二
ファックス二九・二〇〇九
◆住職（第二〇世） 清水孝雄

JR花巻駅から西南に一二㌔、県道盛岡藤根線ぎまま幼稚園の所から東方に徒歩で十数分の所に東光寺があります。隣接して館守と称している小高い丘があり、笹間館跡といわれますが、現在は水田地帯となりました。

東光寺が建っている場所は旧和賀郡笹間村地内であり、中世和賀氏の支配地でした。そして開基は和賀氏の家臣唐丁崎家の先祖である斎藤九郎左衛門で、その出身地飯豊村（現北上市）では檀家の一分の一を占めています。

伝承由来を示す古い文書類は、明治初年の廃仏毀釈の際に失い今では明らかではありませんが、開山の遷化が元和二年（一六一六）とありますから、開創はそれ以前と考えられます。

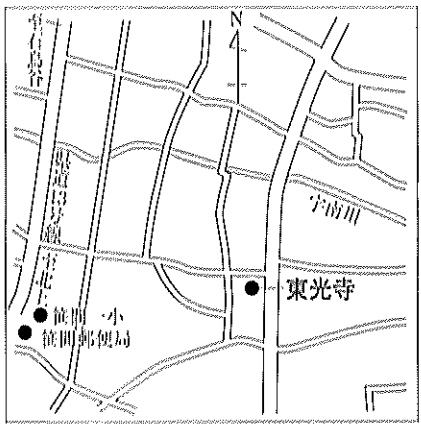
『笹間村誌』によりますと、二子（現北上市）の永明寺の四世突宗禅叟大和尚が、布教の途中この地に一夜を明かし、朝鶏の鳴くのを聞いて朝日の光を拝しましたが、そのときの感動からこの地に一宇を建立したといいます。

本尊は釈迦牟尼仏で、脇本尊に文殊菩薩と普賢菩薩が祀られ、また十六羅漢も安置されています。

現在の本堂は、二三世霍山志錦大和尚が発願、そしておよそ十数年間かけて文化四年（一八〇七）、四世道山祖恭大和尚の代に再建しています。このことは昭和四二年（一九六七）に本堂の屋根を茅葺きからトタン葺きに改修する際に棟札を発見判明しました。なお平成六年には、本堂の屋根を銅板葺きに変えています。

鐘楼の大梵鐘は、昭和一九年（一九四四）に太平洋戦争のため応召、現在ある梵鐘は昭和二八年（一九五三）、当寺の檀信徒である元岩手県知事阿部千一氏が追善記念に寄進しました。

本堂の背後には御廟二百数十年のキヤラの大木があって、寺の庭園美を形づくっています。

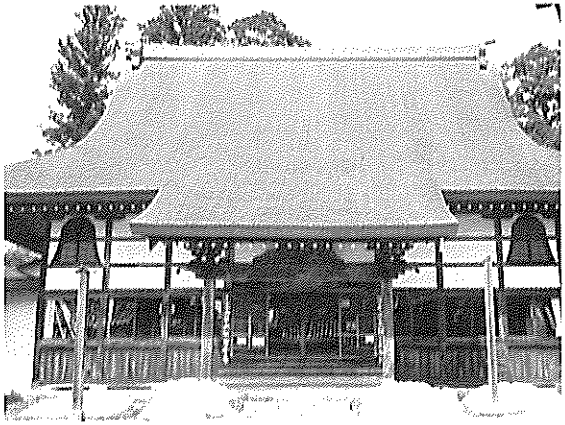


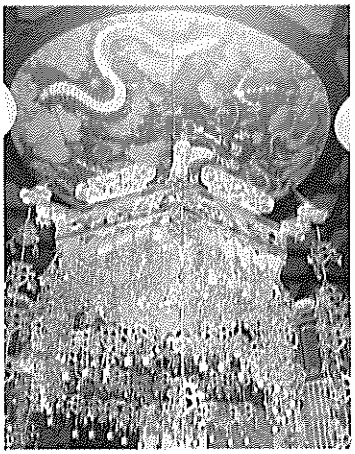
## 奉納された作品に偲ぶ
## 和賀稗貫地方の芸術家

本堂内には稗貫・和賀地方を代表する絵師の作品や算額・神楽額などが奉納されています。

天蓋のある天井絵としてダイナミックに龍の絵が描かれています。これは花巻を代表する江戸時代の絵師小野寺周徳の作品です。周徳は医師の家に生まれ、医術はもとより絵画の腕もすぐれていました。

周徳が最も活躍したのは、文化六年（一八〇九）の花巻城大改造のときで、城の襖絵を書きました。そして文化十年（一八一四）に没していますが、





㊤文化十年落慶以来約二百年間伝えている本堂。
㊦本堂内には稗貫・和賀地方で活躍した芸術家の作品が多い。江戸時代の絵師小野寺周徳の龍。

その「龍図」には墨書があり、「四世道山祖基和尚の需めに応じて描いたことがわかります。

また襖絵八枚は、周徳の弟子八重樫豊澤が黒沢尻（現北上市）に弟子として置いた菅原黒川の作品で、「唐獅子にぼたん」などが描かれています。

奉納額として慶応二年（一八六六）に関流八伝高橋半助の門人達が奉納した縦八十二、横一五〇㌢の「算額」があります。和算の問と答の文章がきれいな色で書かれています。

珍しいのは「伊勢流神楽額」です。縦一七〇、横二七〇㌢の大きな杉材の額で、南笹間の大工長七が製作中笹間の絵師金七が描き、神楽衆によって慶応二年（一八六七）に奉納されたものです。この額から大神楽と呼ぶ民俗芸能の由来や装束などを知ることができ、この種の伝承資料が少ないことから、岩手県の民俗芸能史の一頁を印す貴重な資料です。

# 禅宗の布教に稗貫や南部氏の庇護

## 法音山 昌歡寺（ほうおんざん しょうかんじ） 曹洞宗

◆花巻市太田一七・五
◆電話（〇一九八）二八・二四五五
ファックス（〇一九八）二八・二九八五
◆住職（第二二世）神 眞正

花巻市の西南部、県道盛岡・藤根線沿いの旧太田村の中心部、太田公民館から更に西へ数百㍍の所に古木に覆われた曹洞宗の古刹昌歡寺があります。

かつて曹洞宗第二の本山の格式があった永沢市黒石町の正法寺の末寺として昌歡寺は開山しました。

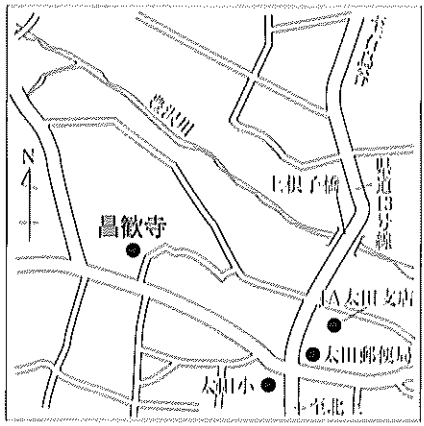
その記録は過去二度の火災によって殆ど失われ、最も古い記録としては、七世徹堂覚洪和尚が著した宝暦一〇年（一七六〇）の『法音山亀記』です。

これによりますと、開山は正法寺二世の虎渓良乳禅師であり、その弟子の吉叟妙弁和尚が応永二年（一三九六）に、現在の花巻市笹間栃内の上大塚東方二〇〇㍍の地に庵を結び布教につとめたとあります。

十年余り経た応永二一年（一四一四）になり、時の領主稗貫氏の重臣根子大和守の帰依を受け、仏殿・禅堂・庫裡・山門など伽藍を寄進されました。

昌歡寺が創建された翌年、鳥谷崎城本丸に稗貫氏が開基となって瑞興寺を建立されたことから、稗貫氏の家臣根子氏も寄進したものと考えられています。根子氏は昌歡寺の現在地を含む上館と呼ばれる館を構えていた武将でしたから、その家臣や所領の田畑を耕作する農民の間に信者が増え広まったものと推測されます。

以後二世祥雲から九世光鷲までの二百年間は戦国時代で、天正一八年（一五九〇）豊臣秀吉が天下を統一しました。そして弱小豪族が領地を没収される中で和賀氏も没落。その家臣の根子氏が有力な帰依者であった昌歡寺も厳しい立場に置かれました。




## 戦乱の中に伊達領内へ 南部領菩提寺で再出発

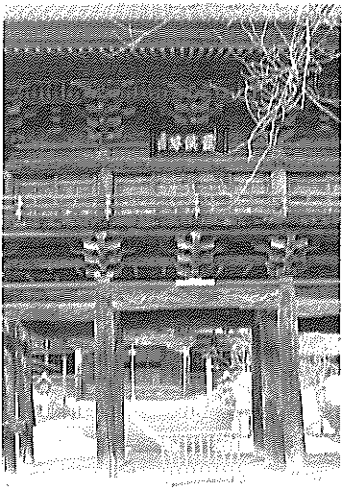
慶文禄元年（一五九二）秀吉の方針に不満を持つ和賀・稗貫両氏の一揆によって諸堂は灰燼に帰し、九世光鷲和

尚は伊達領の棚本に逃れました。

伊達領から和賀郡仙内に戻った渓岩光浦和尚は寺の復興を願い、時の郡代岩間将監に訴えます。そして文禄二年（一五九三）根子氏の館跡である現在地四百間四方の土地を賜りました。

岩間将監は南部氏譜代の家臣で、花巻城主南部彦九郎政直に仕え、太田村と横川目村を併せて二百石の知行地を与えられています。政直没後は暫く花巻城代も勤めました。

呂欲寺を現在地に再建したのは文禄四年（一五九四）、一〇世光浦の代。その後、八世即門大心のときの明和四年（一七六六）火災で一切を焼失、その年に再建しています。



山門

度重なる火災によって現本堂は大正12年の落慶。

の山門は焼失を免れ文政3年建立の重層楼の山門。文久3年作の十六羅漢を祀る。花巻市指定文化財。

一〇世宗玄探中の代の文政一一年（一八二九）に重層楼山門を建立。一五世実林俊峰の代文久三年（一八六三）に十六羅漢を山門へ入仏しています。この山門は現在も残っており、花巻市の指定文化財です。

大正一一年（一九二二）二九世徹唐惟安の代に山門・千体仏堂・山神堂・薬師堂を残し火災ですべて焼失。庫裡はその年に新築しますが、本堂は大正一一年（一九二二）に落慶しています。

幸い本尊釈迦牟尼仏は難を逃れ、現在花巻市指定文化財です。なお位牌堂は平成九年に落慶しました。

## ■伝説「妖怪石」のこと

呂欲寺を現在地に定めるときの伝説に、「妖怪石」または「岩土石」と呼ぶ話が伝わっています。

現在は鳥居が建っていて、そこに白龍大権現を祀っていますが、これが妖怪石を祀る鳥居でもあります。

# 武士から商人転進の清水家が開基

## 寶林山（ほうりんざん） 地藏寺（じぞうじ） 曹洞宗

◆花巻市材木町九・八
◆開基（〇一九八）三三・四四七五
◆住職（第一一世）　大村豊隆

花巻市内の国道四号線から繁華街上町を通って西に向かう主要地方道に入り東北本線を跨いですぐ左手に大きな屋根が見えます。そこが地藏寺で、右手には花巻税務署や消防署、社会保険事務所など公的機関があります。

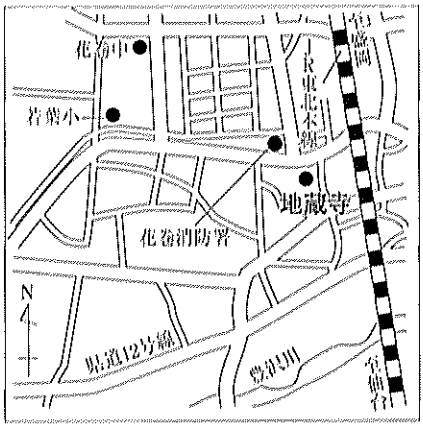
地藏寺の開基は清水市右衛門祐光です。先祖は本宮の源義仲の嫡子清水義高といわれます。義仲滅亡後武田信玄に仕えましたが、天正三年（一五七五）の長篠の戦に精強を誇った武田騎馬軍団は壊滅的大敗を喫し、多くの家臣は追手を逃れて四散しました。

言い伝えによれば、祐光は叔父義祐と共に転々した後、やがて成人して主家の再興を期し、領内の金山に着目して同じ甲州（山梨県）出身の南部氏を頼って花巻城下に来ました。義祐は武田氏の軍事力に大きな役割を果した金（かな）山衆に関わった人といわれます。

祐光は商人として身を立て、寛文四年（一六六四）には藩主南部重信に巨額の献金を行い、その恩賞として六十石の花巻城士に召し出されますが、それを固辞しています。

またその子孫兵衛祐重は、鬼柳家からの養子ですが、稗貫や和賀地方の鉱山を開発、なかでも南部藩最大の水沢銅山を経営して巨利を得ました。

しかし、時代の変転は祐光の意を満たすものではなかったようで、主家の菩提を弔うため草庵を結んで入道しました。地藏寺の草創はこれによるものです。市右衛門祐光の戒名と没年は、「（帰真）自庵道清居士　寛文六歳（一六六六）丙九月二十四日」とあり、開創は二百数十年前と考えられます。

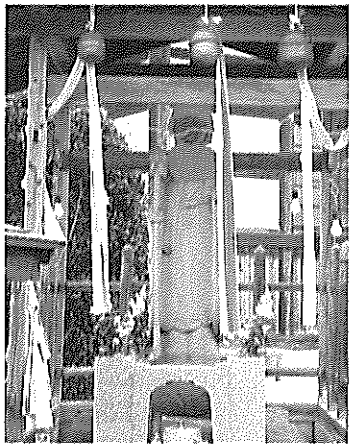



### 商行で得た富の一部を数ヵ寺院の建立に寄進

清水茂兵衛祐重が経営した水沢銅山の産出量は、南部藩雑書によりますと寛文二年（一六七二）に産出した銅

は八五・四貫にも上っており、この銅やこの地方で産出した米を江戸や大阪に船で運んで売り、帰り船には反物、古着物等を積んで来る商法が大いに当たりました。そして江戸の南部屋敷の勝手方御用達として、米五千俵を調達するほどの大商人となり、花巻や黒沢尻に店を持ち、造り酒屋もやるなど、この地方随一の豪商になりました。

また甚兵衛祐重は信仰にも熱心で、仏道に深く帰依し父祐光の草庵に地蔵堂を建立しています。享保一五年（一七三〇）七月建てられた甚兵衛の等身大と伝えられる延命地蔵尊は、その人となりを偲ばせる柔和な眼差しで、祐光、祐重親子の墓のかたわらから、・・



(上)花巻市西部官公庁街近くに建っている地蔵尊。
(右)開基清水家を祀る等身大の延命地蔵尊をはじめ大小様々の地蔵尊が境内各地に祀られている。

山を見守っています。このほかにも甚兵衛は、商行で得た富の一部を広隆寺・順覚寺・妙円寺等の大檀那として本堂・庫裡・仏像・仏具・諸品を寄進するなどの功徳を行っています。

没したのは元禄五年（一六九二）、法名は釈順西で墓地は「甚兵衛卿塔」として地蔵寺にあります。

この寺院はもと天台系六部の修験者の道場でした。あるいは近接する虚空蔵さんと、体的関係にあったと推測されています。寛延二年（一七五〇）に亡くなった権大僧都法印真静など広く法印まで、九代にわたる修験者によって護られてきたことが墓碑により知られます。また松山寺などの退院老僧の隠居寺でもありました。

文化一五年（一八一八）庵主・丁黙心のとき、瑞興寺二八世大鏡智道大和尚により供養が行われますが、このとき以降曹洞宗に転じ、地蔵寺が開山しました。

# 烏谷崎城にあった中世以来の古刹

## 蓮池山 圓城寺 曹洞宗

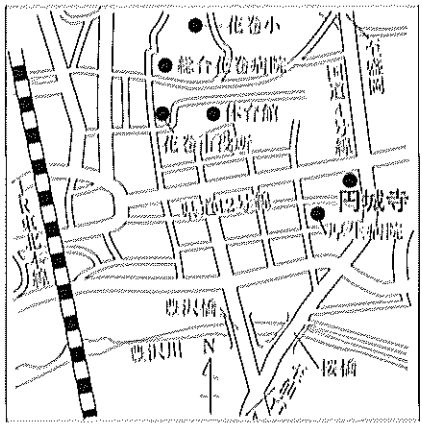
◆花巻市御田屋町三―一五
◆電話（〇一九八）二三―四八八五
ファックス（二三―四八八五
◆住職（第二八世）渕沢英隆

国道四号線と上町を結ぶ交差点に、それと気づかずに通り過ぎていくほどのこぢんまりとした寺院が営まれています。曹洞宗の円城寺で、中世以来の古刹として知られています。

古記録『稗貫郡目記』によりますと、「此の城（烏谷崎城）往昔より有りて今云う本丸に瑞光寺（瑞興寺）、二ノ丸に烏谷島（崎か）圓寿寺（今圓城寺と云う）居住すと云う。然るに天正一九年（一五九一）浅野弾正少弼長吉公々」とあり、更に搦手の門を圓城寺門と云う。其の坂を圓城寺坂と云う（是れ則ち往古、此の坂の上に圓城寺居住せし故、其の名残れり、今の門は元は二子道手門と云う）」とあり、中世の稗貫氏時代にすでに開山されていたことが、この記録から伺えます。

稗貫氏時代、二の丸にあったというその所在地は定かではありませんが、現在の烏谷崎神社の付近と考えられています。南部氏の時代になって、城郭の整備が図られ、その際に現在地に移転しました。

円城寺の開基は不詳ですが、開山は林庵宗鶴和尚と伝えています。明暦二年（一六五七）雄山寺と本末関係を結び、雄山寺第五世宣国寿印和尚を開山に勧請しています。『盛岡領内諸宗山号寺號記全』には、『稗貫郡十六ヶ寺』とあって、円城寺については『蓮池川口雄山寺末寺　蓮池山円城寺』と記されています。

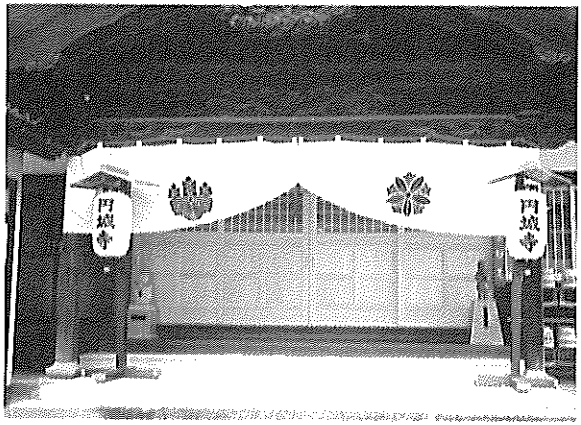



本尊は釈迦三尊で、釈迦牟尼如来坐像を中心に脇侍は右に文殊菩薩坐像、左に普賢菩薩坐像が祀られ、更に本尊檀の裏左右に、大権修理菩薩倚像と達磨大師倚像が安置されています。

円城寺の本堂と庫裡は茅葺きだったため、昭和一〇年（一九四五）の県立花巻厚生病院の火災で飛び火を受け類焼しました。再建は一年後の春、境内の杉を伐採、また市内湯本台の菊池正

雄氏の旧宅を譲り受け材料としています。そして同…年（一九四八）に入仏式を行うことができました。

幸い戦災を免れた経蔵に保存されていた寺宝に、仏像のほか大般若経六百巻、釈迦涅槃図、釈迦出山図、十六善神図などがあります。




## 鎮守の弁財天を祀った広い蓮池も今は夢の跡

円城寺の鎮守は弁財天で、毎年七月五日に宵宮祭が行われています。この祭りは江戸時代から盛えたといわれ、『花巻城代日記』の記録には、『文政…年（一八…〇）閏…月、円城寺境内の弁天堂が零落したので手入れをした

ことと、ついては還宮したい旨、またその法楽として鳴物神楽を奏したい』などの『日上の覚』を花巻城の寺社奉行に願い出ています。弁天堂に関する記録の唯一のものです。

いずれにしても由来となった広い蓮池が境内にあって、その近くに鎮守堂が建てられ弁才天が安置されていました。国道四号線バイパスの開通によって蓮池は埋め立てられて、今では昔日の面影はありません。

この弁才天立像は、江戸時代中期の作と見られ、木造で八本の腕を持っています。台座の上に直立し本地の彫刻に金泥で細密な彩色が施されています。そして頭頂には、福徳をもたらす宇賀神を頂いていますが、残念ながら宝冠は失われました。

八本の腕には弓、矢、鉄輪などを持ち、戦闘神の性格を特徴づけています。総高は…八…、像高…・…五…。花巻市指定文化財です。

(右)広大な蓮池に守られていた円城寺の鎮守の弁天堂は、その池は姿を消してしまったが、弁天堂に祀る弁財天立像は美しい姿を見せている。
(上)円城寺の本堂の正面玄関。この上部には永平寺七五世山田霊林禅師書による山号額がある。

# 花巻城本丸にあった稗貫氏菩提寺

## 龍淵山 瑞興寺（りゅうえんざん ずいこうじ）

曹洞宗

◆花巻市城本町一・一六
◆電話（〇一九八）二四・二四六二
ファックス二四・二四七二
◆住職（第二八世）須田雨夫

花巻市役所や合同庁舎が建つ旧島谷ケ崎城（花巻城）城内を下ったすぐ下旧国道四号線沿いに、真新しく豪壮な寺院が建っています。曹洞宗瑞興寺で度重なる火災に遭いながら、平成一一年に開創六百年の記念事業として本堂の再建落慶法要を行いました。

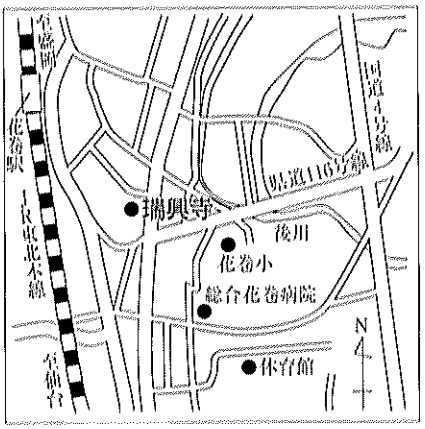
大正五年（一九一六）の火災で焼失以来、実に八十三年ぶりに仮本堂から開放されました。仮本堂は火災の翌年小山田村（現東和町）の農家鎌田清助宅を購入し改築した建物でした。

このような火災は過去にもあって、古い記録は殆ど失なわれており、詳細は分かっていません。伝えによると元亀鳳山瑞興寺といい、応永四年（一三九七）に江刺（現水沢市）の正法寺第二世虎渓良乳大和尚が開山しました。二世妙弁吉叟が内外を整備充実しています。開基はこの地方を支配していた稗貫氏で、本堂は花巻城の本丸にありました。その事実を示す一つに稗貫氏の家紋「丸に太一つ引き」が、瑞興寺の家紋となっています。

天正一八年（一五九〇）、豊臣秀吉は奥州諸侯に小田原参陣を命じましたが、天下の形勢変化の認識に暗かった稗貫氏は、この命令に応じなかったため所領を没収され亡んでしまいます。そして翌天正一九年（一五九一）に秀吉はこの地方を含めた稗貫・和賀・紫波の三郡を南部氏に与えました。

南部氏は稗貫氏が支配していた島谷ケ崎城を領境警護に重要な場所として、家臣の北秀愛に八千石を与えて城代としました。この年に島谷ケ崎城を花巻城と改めています。

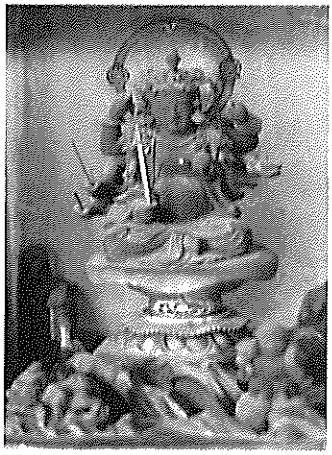
北秀愛は花巻城の城郭の改修を行い、その際本丸にあった瑞興寺と二の丸にあった円城寺を、それぞれ城外の現在の場所に移しました。山号を龍淵山と改めたのは、このときからと考えられています。



## 山緒ある大本堂を守り
## 傑物の僧を育てた古刹

『花巻史談』第八号（昭和□□年・○月号）に高梁さんが「瑞興寺炎上の前後」と題して瑞興寺の記録について書いています。それによりますと、瑞興寺は建立以来二度の火災に遭い、什宝の大半はもちろん、記録もすべて失ったとあります。しかしこの界隈きって寺格は高く、末寺も五ヵ寺ありました。三方杉の木立に囲まれた中に十一間に九間の大本堂、十二間に九間の庫裡があり、山緒ある桜の老木を配した山門には、珍牛和尚が書いた山号額が掛かっていたと書いています。

また瑞興寺の住職は世襲ではなく、衣鉢を継いだ住職には代々傑物が多かったといいます。ある武家出身の住職の場合、寺宝の仏像や梵鐘、太鼓などを飲み代にしたとか、□□世四戸久夫和尚は稀に見る秀才で、寒さにもめげず素手素草鞋で町中を練り歩き、瑞興寺再興を願ったり、檀徒に茶や生花、作法、修証義の普及を行ったとあります。その徳を慕って集まる法弟が多く、□四世圓応天融、□□五世南淮古峰もその法弟達です。



㈤八十三年ぶりに仮本堂から解放され、平成11年に開創六百年の記念護摩法要を行った本堂。

㈥焼失を免れた棟貫氏時代の寺宝木造弁財天像。

大正五年（一九一六）の寺炎上のときは□四世天融和尚の代で、成道会を終えお講もすんだ暁方のことでした。焼跡の廃虚を前に廃寺論者や地蔵庵合併論者がいる中で、健康を損ねていた住職は人力車に乗って折衝を重ね再興に努めました。

寺宝として残っている木造弁財天像は花巻城時代の仏像で、棟貫氏時代に本丸にあった瑞興寺の鎮守でした。花巻市の指定文化財となっています。

# 悲劇の花巻城主南部政直公が開基

## 天巌山 宗青寺（てんがんざん そうせいじ） 曹洞宗

◆花巻市御田屋町三―一二
◆電話（〇一九八）二三―四六三三
ファックス（二三）四六七七
◆住職（第二〇世） 佐藤儀峰

宗青寺が建てられている自然環境は北東に早池峰山を仰ぎ、眼下に北上川の流れを望む極めて閑静な所に位置していました。しかし現在は道路や住宅に変貌しました。

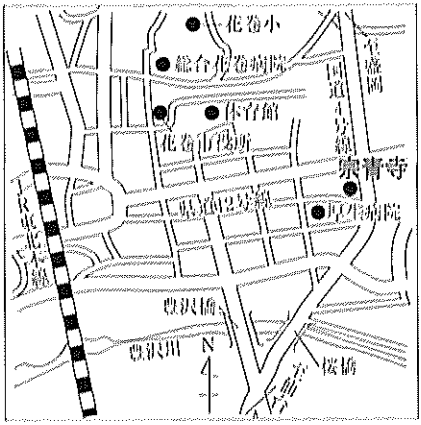
この寺院の開基は、南部第二七代信濃守利直の次男南部彦九郎政直となっていますが、近世江戸幕府の揺籃期における悲劇がかくされています。

全国を統一した豊臣秀吉による地方豪族の改易によって、和賀・稗貫の二郡を南部家新領地に加えることになりました。ところがこの処分を不服とする和賀・稗貫の旧臣が一揆を起し南部家はやっとの思いでこれを鎮圧します。そして伊達家との境を接する地として三方を瀬川・北上川・豊沢川に囲まれた高台という天然の要害花巻城に着目、ここを仙台藩への備えと、郡管轄の拠点として城下町を造りました。

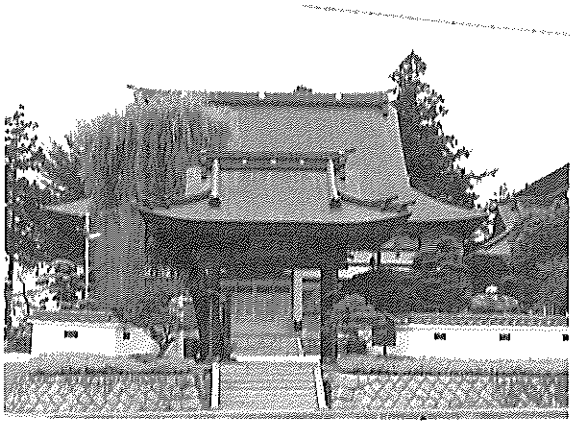
当時の領主は南部利直で、最初の郡代は秀吉が派遣した浅野長政の推挙で北信愛の次男北玉馬尉秀愛を郡代に命じました。ところが秀愛は間もなく死亡、藩はその父北松斎を石高八千石で後任に据えます。また藩境警備のため葛西家の旧臣で城主だった伯山明宗の子伯山伊勢守明助を岩崎城城代として千石を与え、また新たに土沢城を築城しやはり葛西家旧臣の江刺隆直を一千石で置き警護にあたらせます。

その後花巻郡代の北松斎が亡くなり後任に南部利直の二男彦九郎政直を花巻城主として、一万石という破格の処遇を行いました。政直が城主となった任期中は郡内には大規模な反乱は起こりませんでした。ところが、寛永元年（一六二四）一〇月一一日、江戸へ登る藩主一行が花巻宿泊中の酒宴で、政直と岩崎城代の伯山明助が相次いで急死する事件が起きます。死因は酒に盛られた毒による死でした。

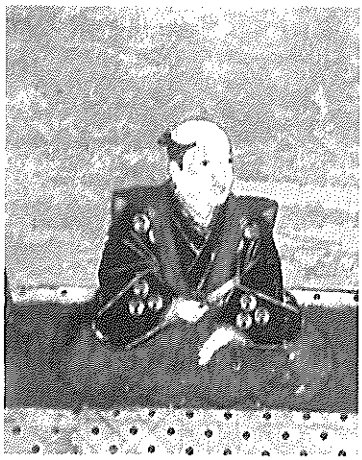
このとき南部政直は若干二五歳、藩



主利直は嘆き悲しみ菩提のため、宇建立を命じました。その寺院は政直の戒名『海潮院殿天厳宗青大居士』にちなみ、天厳山宗青寺と命名し、翌年雄山寺二世天庵玄甫大和尚をもって開山としました。藩から百四十石を寄進されますが、その半分の七十石を開山の雄山寺に納めることになりました。



正保五年（一六四八）二世別外円英のとき宗青寺修復に石鳥谷の藩直営の山から材料を求めています。文政六年（一八二三）二世卿外子のとき本堂を再建、以来屋根や堂内の一部改修は行われたものの百数十年の歴史を保っている本堂です。昭和二〇年の大火の際も幸い類焼を免れました。



㊤昭和20年の大火で類焼を免れた宗青寺本堂。

㊦開基南部政直公の肖像。死後に南部家から納められ、江戸初期の上級武士の風俗を知る資料。

## 謀殺の岩崎城代柏山氏 犠牲となった花巻城主

花巻郡代北松斎の推挙によって岩崎城代柏山明助は、松斎の死後庇護者を失い伊達政宗との内通の疑いをかけられます。寛永元年（一六二四）南部利直が江戸出府の折、柏山伊勢は花巻城内に呼び出されます。利直の命を受け内密裡に謀殺を計画していたのですが、柏山伊勢に不審の念を抱かせないために、最初に花巻城主の政直に盃を渡し、その後に柏山伊勢に遣わしました。

そして、二人とも無残にも急死しました。藩主利直は将来を期待していた政直を犠牲にしたことの悲しみは、想像に絶するものでした。政直の遺体は現在の宗青寺本堂須弥檀の真下で茶毘に付され、遺骨は玉川で仕切られ安置されました。導師は盛岡報恩寺六世梵積和尚で、同時期に高野山にも石塔が立てられました。

# 密教寺院が江戸時代から禅宗の寺

## 大龍山 圓通寺

曹洞宗

◆在巻市十二丁目一九
◆開基（〇一九八）三三・六五一七
◆住職（第三四世）伊藤篤里

国道四号線花巻バイパスを南下し、東北本線と立体交差するところから東南方へ約五百㍍のところに円通寺があります。境内は広く明治天皇御巡幸の際お通りになられた奥州街道に接しており閑静な城跡に建てられています。戦前は境内に隣接した寺有の耕地が広がる広大な用地でした。

天文二年（一五三三）伝宗玄達大和尚の開山と伝え、天台宗または真言宗であったと推測されています。また開基は不詳ですが、当地の豪族十二丁目氏ではないかともいわれております。

円通寺が建っている十二丁目城は、獅子ヶ鼻の台地上にあって、古館・上館ともいいました。台地の後背部に濠があったといわれます。伸町・反町などの地名が今に残っていて、当時の繁栄がしのばれます。

永禄の頃（一五五八～七〇）この十二丁目城に居住した伊藤石馬助祐光が初めて十二丁目氏を名乗ったと伝え、中世にこの地方を支配した稗貫氏の家臣の中でも相当の重臣であったと考えられております。

天正一八年（一五九〇）浅野弾正長政が秀吉の命でこの地方を仕置するに際して、当城にも浅野の一族が駐留したと伝えています。天正二〇年（一五九二）の『諸城破却書上』には「十二丁目平城破　寺前縦殿助持分」とあります。また慶長五年（一六〇〇）に起こった和賀・稗貫では、和賀勢が立て籠もりました。

### 大龍を串うための寺院
### 山号にまつわる伝説譚

江戸時代に入り、花巻の瑞興寺一世長由祖天大和尚を招請して、伝法開山し、この時から曹洞宗になりました。本尊は釈迦牟尼仏で花巻市の指定文化財です。一説によれば長慶天皇の守り本尊であったといわれております。

山号の「大龍山」は、つぎのような伝説に由来しております。

当地を流れる北上川には、小舟渡・古川・獅子鼻などの渕が間近に続いていました。そしてそこには龍が棲んでいました。この流域に「そでえだら」という長者が住んでいて、米俵を外にまで積んでいるほどの富豪でした。そのために「外俵＝そでえだら」と呼ばれていたのです。しかし盛者必衰の理で、長者の家もお婆さん一人居るばかりの末路となりました。

ある日没の頃、「外俵」の家を美しいお姫様が訪れて、「私はこの地に棲む龍である。某日の夜、亥の刻に暴風雨となり、早池峰に棲んでいる龍が挑戦にやってくる。どうぞ激しい風雨の音を聞いたときには『何者だ』と人間のことばを一声かけていただきたい」とお願いするのでした。

お婆さんは承諾し、その途端にお姫様の姿は消えました。

さて、某日亥の刻となりました。確かに暴風がやってきて、それは恐ろしい風でした。台地を打つ豪雨の音に加え、雷鳴も凄くので、お婆さんはぶるぶると震えていました。あまりにも恐ろしくて、たのまれていた『何者だ』のことばも出ませんでした。

嵐のやんだ翌朝、お婆さんはやっと救われた気分になって、外に出て周囲の様子を眺めていましたが、一瞬息をのみ込みました。巨大な龍の屍を見たからです。

大龍を弔うため円通寺が建てられ、大龍は守護神「大龍大権現」にまられたのです。そして外俵の家は滅亡しました。外俵は十二丁目氏といいます。

㈱伝説の山号額を掲げている豪壮な山門。

㈱かつて十二丁目城があった所に建つ本堂。

# 花巻開町の恩人・北松斎の菩提寺

## 陽光山（ようこうざん） 雄山寺（ゆうざんじ） 曹洞宗

◆花巻市愛宕町二―二五
◆電話（〇一九八）二三―二六三四
ファックス二四―七〇〇〇
◆住職（兼務）昌歓寺　神　貞正

JR花巻駅広場のすぐ真下に墓地と並んで大きな屋根の本堂が見えますが、この寺院が花巻開町の恩人として知られる北松斎公の菩提寺雄山寺です。永禄元年（一五五八）乾外嶺碩和尚によって開山された小庵が最初で、現在地より鉄道線路に寄った場所に建てられていたと伝えています。

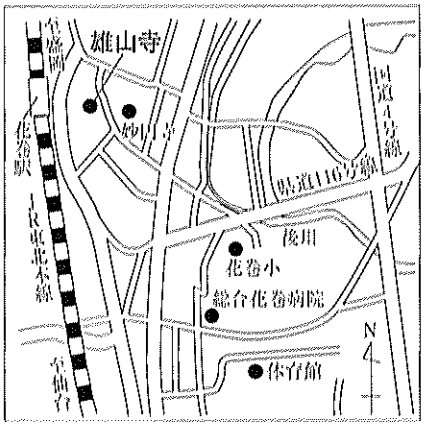
天正一九年（一五九一）南部氏が豊臣秀吉から稗貫・和賀・志波の三郡を与えられたことによって、南部氏の重臣北松斎（北左衛門佐信愛）は慶長二年（一五九八）に、花巻城代となって花巻城に赴任しました。

そして天正一八年（一五九〇）津軽との戦いで若干一六歳で戦死した四男愛邦の菩提を弔うために、寺を建立、愛邦の諡号にちなみ陽光山雄山寺と号し、開基となりました。愛邦は松斎の最も愛した子で後継者と考えていたので悲しみは大きく、花巻城代となったのを機会に菩提寺を建てました。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いで、徳川家康の命を受けた南部利直は、山形に出陣しますが、その機に乗じて和賀や大迫等の旧領主が各地で蜂起しました。このとき松斎は花巻城代として諸軍を指揮して兵士を四方に派遣、そのために花巻城内には騎士二三名と若干の従卒を残すに過ぎなかったといわれます。

その状況を察知した和賀の旧領主である和賀忠親は、兵五百余をもって花巻城を攻めました。城は危機に瀕しましたが、松斎の名指揮と町家の壮丁や子女等の協力によって撃退、花巻城を守りました。そして翌年松斎は王代の南部利直と共に和賀、稗貫を平定、本格的に花巻の城下町づくりをします。

花巻の南方に里川口が開かれ、物資輸送に川口を利用します。また城下内部の遠見をさけるため、主要道路の屈折を多くし、更に町内寺院の配置に軍



事士の考慮をするなど城下町としての形態を整えました。松斎は慶長一八年（一六一三）亡くなるまで居住、雄山寺に葬られました。花巻開町の恩人として讃えられるのはそのためです。

## 数多い松斎関連の資料
## 新渡戸氏の墓地も祀る

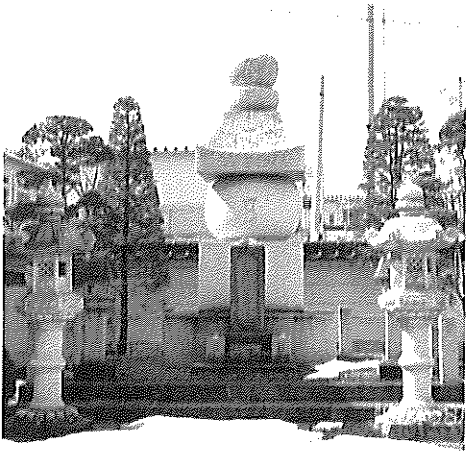
雄山寺には北松斎が残したものとして、岩手県指定文化財の「鉄錆地繊矧二枚胴具足」のほか、松斎自筆の「太平記」、秘仏の「もとどり観音」が伝えられています。今でも花巻祭りの前日に、北松斎の墓前で「松斎祭」が行われております。

北松斎を祀っている雄山寺には、花巻系新渡戸氏の墓地もあります。本来新渡戸氏も雄山寺の旦那の一人としてお寺の維持興隆に尽力してきました。新渡戸氏の墓地には春治・常雄の五輪塔のほか、花巻新渡戸本家、第二分家、第四分家等の墓地もあります。

南部氏に初めて仕官した新渡戸春治と花巻系新渡戸本家及び分家の代々が葬られている雄山寺は、北松斎の菩提寺であるだけでなく、盛岡藩の兵学の振興、新田開発、殖産等に貢献した新渡戸家のルーツともいうべき人達の菩提寺でもあったわけです。

## ■「もとどり観音」の縁起

北松斎は深く観音を信仰し、出陣にあたっては持仏の観音を常に「もとどり」に納めていたといいます。そこで松斎が亡くなった命日を観音祭（花巻祭）の日とし、神輿にその持仏観音を奉じています。



(上)花巻城代として開町に貢献した北松斎は、最も愛したわが子愛邦の菩提を弔うため建立した。(右)本堂裏手の高台に北松斎の墓地を祀っている。

# 地元の郷土が開基の鳴のお寺さん

## 圓通山（えんつうさん） 歓喜寺（かんきじ） 曹洞宗

◆花巻市中十二丁目一〇一四一
◆電話（〇一九八）三二―四七三二
ファックス三二―四八一一
◆住職（第二四世）深沢啓道

花巻から釜石に向かう国道一八三号線の春前林より県道六日市線を南下して車で数分。あるいは国道四号線から花巻南大橋を渡って東和町に向かい、県道六日市線をつき抜けると、間もなく左手の丘陵の麓に寺院の大きな屋根が見えてきます。ここが歓喜寺です。

現在東十二丁目と呼ばれていますが、花巻市に参加する前は矢沢村の鳴で、かつては鳴村でした。従って今でも歓喜寺というよりも信者の間では「鳴のお寺さん」で通っています。

正保元年（一六四四）に、花巻市太田の吉歓寺一〇世渓岩光浦大和尚が、当時の鳴村長根の郷士で通称万九郎、吉川太郎右衛門の帰依を受け、境内地となる山林二町歩（二ヘクタール）有余の土地の寄進を受けて開創されました。

山号は円通山、寺号は歓喜寺と号しましたのは、開基の吉川太郎右衛門の戒名「円通院無礙道本居士」、妻の戒名「歓喜院源窓妙公大姉」からとったものといわれます。

開山の渓岩和尚は、沢内村の玉泉寺の開山にもなっており、当寺二世端室和尚が中興となっているので、勧請開山ではないかと考えられています。

本尊は釈迦牟尼仏ですが、釈尊特有の螺髪がなく、聖観音坐像とも見られますが、頂上の肉髻がありません。寄木造りで年代不詳です。台座は五世大連和尚の元文二年（一七三六）京都の仏師駒野丹下作とあります。

二世中興大梅和尚の代、文化六年（一八〇九）に本堂が、また文政四年（一八二一）に庫裡が再建されています。本堂再建にあたった大工棟梁小田島伝蔵は檀徒で、吟味した寺を建てるため、前の田に一度組み立てたのち改めて建立したと伝えられます。家財を投入しての献身的な建立でした。

本堂の茅葺きを戦前に瓦葺きにし、昭和六三年（一九八八）には銅板葺き

に大改装を行いました。

## 寺の裏山を地域の公園
## 小中学生の遠足地にも

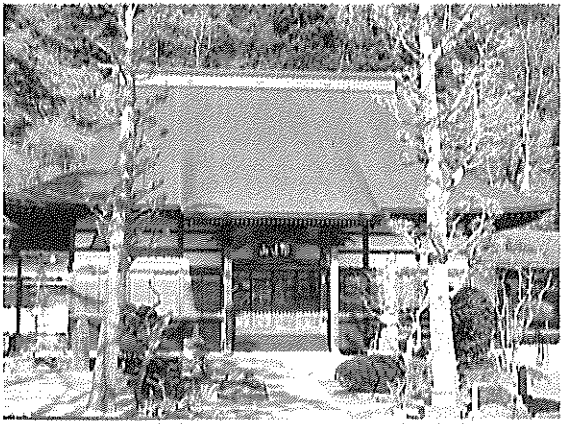
前住職督修和尚は、寺有の裏山を地域に開放するため、昭和三〇年（一九五五）檀徒の篤信者吉川純一氏と相談して、地域住民の労力奉仕を頂き、四年がかりで地域の憩いの場として展望公園を建設、「東岡公園」と名づけました。そして昭和四七年（一九七二）には、特志者多数の浄財をもって高さ五mの歓喜大観音を中心に、斜面の各地に二十三観音、交通安全観音など四十体の石像を配置建立しています。

歓喜大観音のそばには、鐘楼と観音堂も祀られており、毎年この丘の上から除夜の鐘が鳴り響いています。

自然林の松林の中に桜の植樹も行われ、レクリエーションの場所として、近くの小学生や中学生の遠足地にもなっています。展望が素晴らしく、また深閑静寂な観音霊場公園でもあります。

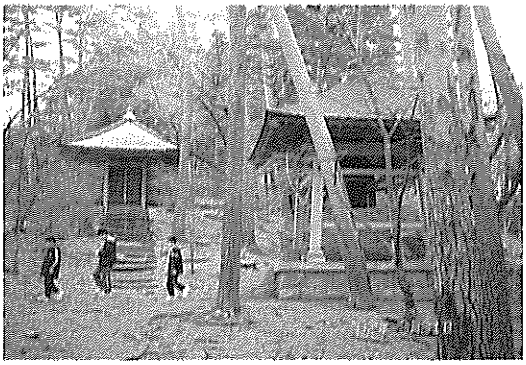
寺院に伝承している寺宝としては、宝暦九年（一七五九）九世の代に建立した石灯籠が本堂を守っています。また文化二年（一八〇五）には六地蔵が建立されました。

天保一四年（一八四三）に作成された東十二丁目の絵図面、更に歴年の暦が天文四年（一七三九）から大正一一年（一九二二）まで百八十四年間分、一冊の欠本もなく、またその当時の書き込みもあって政治や経済の動きを知る貴重な資料です。このほか夫婦和合や商売繁盛の御利益がある歓喜聖天像も祀られています。



㊤地元の郷士の帰依によって開山された嶋のお寺さん。

㊦三㌶に及ぶ寺院の裏山を、四年がかりで整備し「東岡公園」と名付けて、地域民や子供達の遊び場である。



# 維新後村役場を併設した禅宗古刹

## 萬壽山 松山寺 曹洞宗

◆花巻市台二・七
◆電話〇一九八―二七―二七一〇
ファックス〇一九八・四五・三三
◆住職（第二六世）瀬川耀峰

県道花巻温泉郷線を車で走り、終点を間近にした左手に、広い境内を持つ曹洞宗松山寺があります。花巻温泉行きのバスに乗れば、松山寺前のバス停からすぐ目の前です。

松山寺は享徳二年（一四五四）に秋田県雄勝郡の大乗山最禅寺の第二世渓残玄顧大和尚によって創建されました。玄顧大和尚は、花巻の瑞興寺第二世香聖妙弁大和尚の勧奨を受け、後に最禅寺第二世久庵玄菊大和尚の法灯を嗣ぎ同寺の第三世となった僧です。

古老の言い伝えによると、最初は上日向の台山に小庵を結んでいましたがその後現在地に移り、山号も龍谷山から万寿山と改称したといわれますが、その時期は定かではありません。

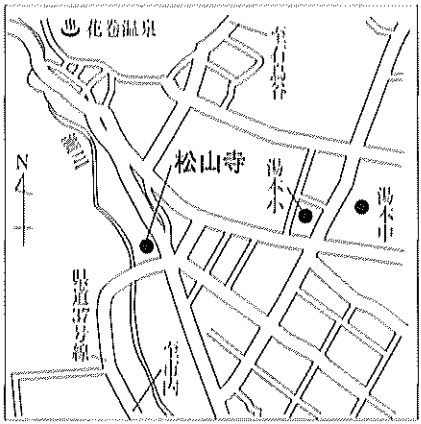
江戸時代に文筆家として活躍した町医者松井可敬の著書『台温泉一覧記』によりますと、「追分、松山寺を過ぎて道二岐有　右は山道　左は湯之道の石印在　此道分より湯之沢へ五里…」とあります。ここに書いている追分碑は元禄一〇年（一六九七）四月に、松井可敬の父松井道円と平賀次郎左衛門の建立であり、松山寺はこのときすでに現在地にあったと推定されています。

六世輝庵天暁和尚は忠臣蔵で活躍した大高源吾の叔父であり、討入りのときの装束を寺に保存していましたが、残念ながら火災で焼失しました。

享保二年（一七一七）の秋、第一〇世無中宝門和尚は、盛岡の鋳物師鈴木喜兵衛相元に命じて大梵鐘を鋳造しましたが、昭和一八年（一九四三）一月太平洋戦争のため供出しています。

一八世偉雲和尚は徳の誉れ高く、南部領録所報恩寺、四世として召し出され、その礼として南部家よりお膳などを贈られています。

明治維新後村役場を併設していた座禅堂から出火、全山伽宝物の殆どを焼失したのは、明治二八年（一八九五）



のことです。…世南浦古峰和尚は、曹洞宗大学林に学び、宗学の奥義を究め明治…四年（…九〇…）法灯を継承しました。本山布教部長や宗会議員を務めながら堂宇再建に力を尽くし中興の祖と呼ばれています。本堂は…時、現在の国立花巻温泉病院付近への移転が計画されましたが、諸般の事情で現在地に明治四…年（…九〇八）…月に落慶しています。

## 農民一揆に加担した僧 追放されるが復権顕彰

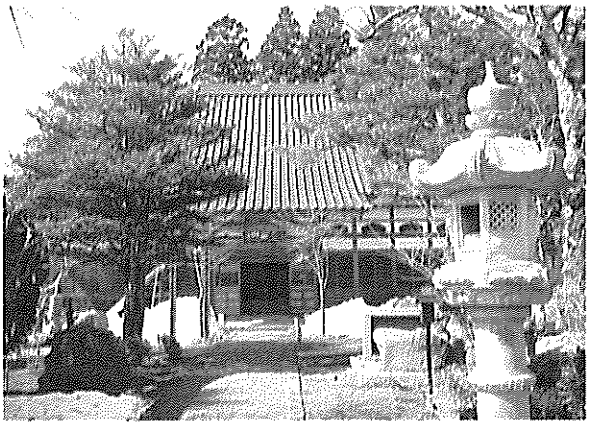
平成…年六月、松山寺境内の…角に「義に立てる人」として、当時住職だった錦鍔天祐和尚と農民冨手嘉右衛門の顕彰碑が建てられました。

天明から、連年の凶作であえいでいた農民は、追い討ちをかけるような南部藩からの苛酷な上納金に対して憤慨。寛政七年（…七九五）当時村役だった冨手嘉右衛門は、…七世住職の錦鍔天祐和尚を誘い、南部藩主の南部利敬に直訴を行おうとしました。

嘉右衛門は捕らえられ、寛政…年（…八〇〇）に処刑されましたが、嘉右衛門の…命と引き替えに村人はおとがめなしということになりました。

またこの計画に加担した錦鍔和尚は僧侶にあるまじき行為として僧の資格を剥奪され…子永明寺に執居となりました。顕彰碑を建てた年は丁度…百年に当たり、法会を行うと共に錦鍔和尚に改めて…七世位を贈っています。

松山寺の宝物に、狩野探幽の絵画、身延開基真孫波木井氏所持の茶道具、西行像…山禅師の和歌などがあります。



㊤明治維新後に村役場を併設していた寺の座禅堂から出火、鐘楼を除く堂宇を焼失。明治34年再建した本堂。

㊦苛酷な上納金に反発し直訴を行った村役の冨手嘉右衛門は処刑、同調した住職は追放されている。その墓。

# 田園地帯に曹洞宗布教のため開山

## 瀧澤山 寶昌寺（りゅうたくさん ほうしょうじ） 曹洞宗

◆花巻市矢沢九・三〇
◆電話（〇一九八）三二・二八三二
◆住職（第二世）　長岡孝湍

東北新幹線JR新花巻駅の北側すぐ近くに宝昌寺があります。寺前の道路はかつて人馬の交通が頻繁な所で、馬喰達は寺の境内を休息地として使用しました。その名残りなのか境内北側に巨大な馬魂碑が祀られています。

当寺には縁起など古い記録は全く残されていません。火災によって焼失したと考えられています。

寺伝によりますと、田園が発達したこの地を曹洞宗の布教教化に、花巻の瑞興寺・二世陽山天朔大和尚が元和五年（一六一八）開創しました。従って特に開基となった方はおりません。

最初は現在地の東側、釜石線小山田駅（花巻市）の北西に望む大森山の麓にありました。何時の頃か乞食の失火によって全焼、それは元禄年代（一六八八～一七〇四）以前と推定されています。その理由は過去帳が元禄年代以後のものしか残っていないからです。

周辺に住む檀家で屋号が和野という方が、土地を寄進し現在地に移転しています。それは宝暦年代（一七五一～六四）でした。山門の供養碑にその時期を物語る宝暦年号の石碑があります。現在の本堂もこの頃の建築と考えられております。

なお、移転前の寺跡にも、井戸や鐘楼跡らしきものが昔の面影を留めており、境内にも蓮池跡がみられます。

本堂はその後度々修理され、本堂の向拝には花巻の名工勘次郎が慶応四年（一八六八）に刻んだ見事な彫刻が参拝者を驚かせます。昭和に入り三五年（一九六〇）頃に茅葺きをトタン葺きに替え、また平成七年には屋根を唐破風造りに改造しました。

また庫裡は明治八年（一八七五）から矢沢小学校舎として、十年間使用されました。そのため破損甚だしく、明治二九年（一八九六）に新築。更に平成五年に現在の庫裡になりました。

㈲田園地帯として発達のこの地方に曹洞宗布教のため開山した。㈱北上市和賀町岩崎の旧馬峯寺の本尊だった「馬頭観音立像」は昭和22年に移されている。現在この仏像は花巻市指定文化財。

山門前には天明の飢饉を物語る餓死供養碑が、建てられています。

## 廃寺高松寺旧蔵の仏像
## 廃仏毀釈で数多く移転

宝昌寺には明治の廃仏毀釈に伴い移された仏像などが寺宝として数多く保存されております。隣の高松村（現花巻市）にあった高松寺旧蔵のもので、『金剛界大日如来坐像』『不動明王立像』など密教寺院には欠かせない仏像が伝えられています。これらの仏像等は宥密法印によってもたらされたものです。宥密法印は高松寺から八幡寺へ、そして妙泉寺に転住しますが、最後に帰ってきたのが矢沢村（現花巻市）であり、宝昌寺住職との宗派を越えての知遇があったからと考えられています。仏像のほかに宥密法印が八幡寺住職のときに乗った駕籠や半鐘、古文書類も保存されています。そのうち金剛界大日如来坐像は花巻市指定文化財です。

このほか廃寺となり宝昌寺に移された仏像に『馬頭観音立像』があります。一木造り三面六臂の仏像で、三面共に憤怒相ではなく菩薩の慈悲相です。正面蓬髪の上に馬頭を頂き胸前に馬頭印を結んだ仏像で高さ六六・四㌢、室町時代の作風で和賀郡岩崎村（現北上市）馬峯寺の本尊でしたが、廃寺となり昭和□□年（一九四七）に宝昌寺に移されています。馬峯寺の跡には、駒形神社が祀られています。なお和野家四代川村淳助氏が、寛政年代（一七八九～一八〇一）に大般若経六百巻など多くの寺宝を奉献されました。

# 日蓮に帰依した南部氏開基の古刹

## 身延別院 身照寺（みのぶべついん しんしょうじ） 日蓮宗

◆花巻市石神町二八九
◆電話（〇一九八）二四・八二二〇
ファックス（二四・八二二〇
◆住職（中興第二世）牛崎海秀

花巻市文化会館・市立図書館など公共施設や市民憩いのぎんどろ公園に近接している日蓮宗身照寺は、南に拓けた眺望のよい高台に建っています。境内には身延山から贈られた六本の紅しだれ桜が見事な色合いをみせ、多くの信者が観桜に訪れます。

身照寺の開山は古く、応永元年（一三九四）にさかのぼります。甲州（山梨県）の豪族南部政光は、南北朝が統一後、北朝側の室町幕府足利義満に降るのをいさぎよしとせず、奥州に下り八戸の根城に居を構えました。そして身延山より日祟上人を招き、寺を建立し、蓮光山身照寺と号しました。

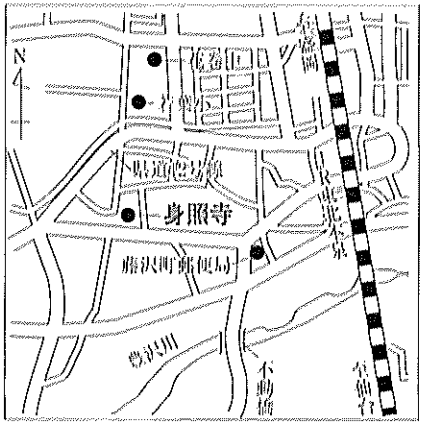
領主南部政光は、日蓮宗総本山身延山久遠寺を開基した大檀越身延の領主南部六郎実長の第八代目に当たり、その遺言である法華経信仰を堅く継承したのでした。

日祟上人は僅か二年で遷化、新たに身延山成就院の日学上人を招いて応永三年（一三九六）に開基、実長の命日を期して開堂式を挙げています。

身延山の延長として日公山身延寺を再建したと記録されています。（政光は身照寺を身延寺に改称したのではないかと考証されています。）身延寺は南朝の勅願所であって、身延山最古の別院でしたが、天正一九年（一五九一）八月すべての堂塔伽藍が焼失しました。

康正二年（一四五七）の御綸旨によりますと、勅願所で代々の貫主は、大僧正に叙せられたとあります。従って相当の格式と由緒のある寺院であると考えられています。

昭和二年（一九二八）、当時身延山鏡門坊住職だった遠野の男爵南部日実上人（南部家二六代）によって、花巻に日蓮宗花巻教会を設立しました。その後、実長公六百五十遠忌に当たる昭和二二年（一九四六）九月、中興開基南部日実上人、中興開山牛崎海勇上人に



よって遠光山身照寺、月光山身延寺の寺歴由緒沿革を継承、遠光山身照寺と寺号を公称して再興しました。本尊は日蓮大聖人像定の大曼荼羅です。

現在当寺に安置の日蓮大聖人尊像は、木彫の坐像で高さは約一尺あり、日蓮大聖人の弟子六老僧の一人、白蓮阿闍梨日興上人作と伝えられます。ドイツの医学者ベルツ博士（日本に二十年間滞在、医学発展に貢献）が、身延山清水房の住職内野日運上人に寄進奉納させたものを、花巻教会設立に当たり南部日実上人に寄進されました。

## 法華経信者の宮沢賢治 真宗を改宗ここに眠る

境内には詩人で童話作家の宮沢賢治の墓、五輪塔が祀られています。賢治は熱烈な法華経信者であり、この寺院に葬られました。

賢治と宗教との関わりは幼い頃から、実弟清六氏の年譜によりますと、大正三年（一九一四）、九歳のとき初めて妙法蓮華経を読み感激、以来同経典を座右に置いたといいます。二十代後半から法華経への信仰ますます篤く、父母・家の改宗を熱望しました。父政次郎は当時浄土真宗寺院の筆頭総代として賢治の信仰とは相容れず、そこで賢治は上京し国柱会に入り街道布教など奉仕を行っています。

病に倒れた賢治は昭和八年（一九三三）、八歳でこの世を去りますが、父への遺言として「国訳妙法蓮華経全品約一千部の出版と知己への寄贈」を残しました。そして父政次郎によって日蓮宗身照寺に埋葬されました。

(上)身延山から移植した桜が美しい身照寺の本堂。
(下)本尊大曼陀羅の前に鎮座する日蓮大聖人尊像は、高さが一尺もあって、日興上人作と伝える。

# 花巻北上地方布教の日蓮正宗寺院

## 顯正山 法王寺 日蓮正宗

◆花巻市桜台二・六・一八
◆電話（〇一九八）二二・四〇九九
ファックス（四・二二二二）
◆住職（第二代） 原田篤道

JR花巻駅の西側地域は、かつて温泉行きの花巻電鉄が通り、街路整備が行われていませんでした。電鉄が廃止になり区画整理が行われて街並みが整い、住宅や商店が立ち並ぶようになった昭和六一年（一九八六）この地に移転、法王寺と命名し本尊の人仏法要を行いました。当時は周辺には建物は殆ど建っていませんでした。

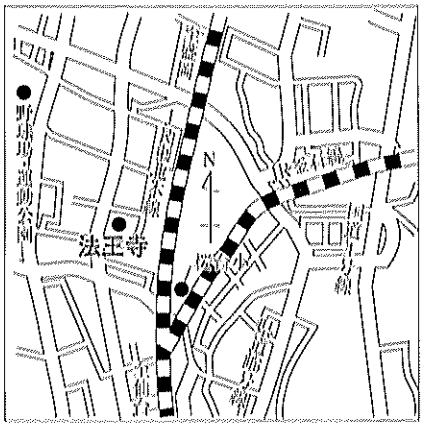
花巻地方に、日蓮正宗法王寺の前身である総本山大石寺花巻出張所法王院が、昭和五七年（一九八二）二月二八日、花巻市不動に建立されました。住職は南原評道師でした。

現在岩手県内に日蓮正宗の寺院は九ヵ寺あります。盛岡・花巻・宮古に各に二ヵ寺のほか、一関・水沢・大船渡・釜石・久慈・二戸の各一ヵ寺です。

日蓮正宗は建長五年（一二五三）四月二八日、日蓮大聖人が『南無妙法蓮華経』の宗旨を建立されたことにはじまります。

日蓮大聖人は二度の流罪など多くの法難に遭いながらも、法華経を広め、弘安二年（一二七九）に信仰の根本である本門戒壇の大御本尊を建立されました。そして、日興上人を第一祖と定め同五年（一二八二）六二歳で入滅されました。

日蓮大聖人が入滅後、身延の地頭波木井実長が仏法に違背する行為を重ねたため、日興上人は正応二年（一二八九）の春、本門戒壇の大御本尊をはじめ一切の重宝を持って、門弟と共に身延山を離れました。そして翌年、南条時光の寄進によって、富士上野の地に大石寺を建立しました。




### 宗旨建立して七五〇年
### 目指そう三十万総登山

以来七百有余年、日蓮大聖人の仏法は日蓮正宗大石寺に正しく伝えられています。現在の総本山の法主は第六七

世日顕上人で、法王寺を開基しました。

日蓮大聖人の仏法を正しく実践するため信徒の集まりとして「法華講」があります。信徒は法華講の一員として所属する寺院に参詣し、僧侶の法話や講員同士の体験などを通じて自らの信仰を深めています。その法華講法王寺支部の組織が許可されたのは平成二年のことでした。そして同六年には第二代原田篤道が入院式を行いました。

今年は日蓮大聖人が宗旨を建立されて千度七百五十年、また法王寺が開山して二十年にあたります。

(右)法華講三十万総登山を目指そうというPR旗。
(上)JR花巻駅西側の新開地に建っている法王寺。

総本山ではこれを記念して「奉安堂建立」「記念大法要」「記念出版」そして「法華講三十万総登山」の慶祝記念の四事業を計画しています。

なかでも法華講三十万総登山は特に重要な行事です。この行事を行うことになったのは、今から八年前の平成六年の夏、同じ信心をしている法華講の人々が六万人も総本山大石寺に集まりました。そのとき法王日顕上人が八年後の平成一四年に三十万人の信徒によって宗旨建立七百五十年を祝おうと指南され、それがスタートです。

その四年後の平成一〇年に十万人の総登山が行われ、今年は最終目標の三十万総登山の年に当たります。

日蓮大聖人の教える信仰とは、信・行・学の実践をいい、信とは御本尊に対する信仰、行とは信仰確立のための修行、そして学とは仏法を学ぶことです。この教えを守ることこそが幸福への道であると教えています。

# かつて繁栄見せた花巻七山の古刹

## 寶城山 長谷寺

◆岩手郡石鳥谷町長谷寺一一八八
◆電話（〇一九八）四五・五五八五
◆住職（代務者） 長谷川 友

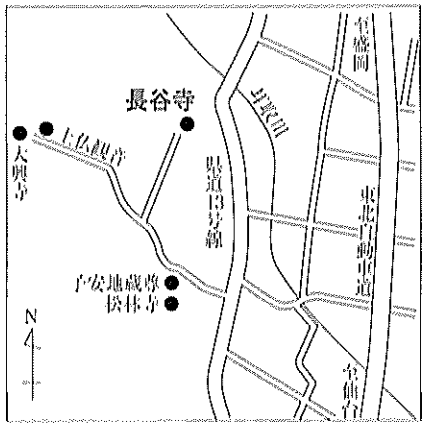
天台寺門宗

石鳥谷町の中心部から西へ、県道藤根盛岡線を横切りやや行くと、奥羽山脈の麓の小高い丘に寺院と神社が並んで祀られています。この周辺は天正年間（一五七三～九一）までは、和賀氏との関わり深い沢田氏の館があったと伝え、そこに建立した長谷寺も大きな勢力を持っていたと考えられています。周辺には大興寺や松林寺の古刹が営まれ、南北に通ずる幹線道路があって、それを安倍道といっていました。

長谷寺は延暦二二年（八〇四）坂上田村麻呂によって創建されたと伝え、修験宗寺院の白翁山長谷寺と呼ばれて花巻七山の一つに数えられていた時代もあります。花巻七山というのは、八幡寺（現在は花巻神社）、白性院、胡四王山（以上花巻市）、遍照寺（北上市）、毘沙門堂（東和町）、光勝寺、長谷寺（石鳥谷町）をいいます。

白翁山には、つの伝説が残されています。坂上田村麻呂が志波城宿営に際し、その夜の夢に衣冠正しい白髪の翁が現われ、兜に祀る守護尊をこの近郊に祀るべしと告げられました。そこで堂宇建立を発願、家臣二名をして場所の選定、建築等に当らせ、仏供料として百二十石を寄進したといわれます。

しかし明治二年（一八六九）の社寺改革に際し、境内に来宇利沢神社が創建され、長谷寺は廃寺とされてしまいます。このときかつて長谷寺の本寺であった花巻の八幡寺は、伊勢神道に転向し、当山に来て廃仏毀釈の運動を行って物議をかもしたといわれます。

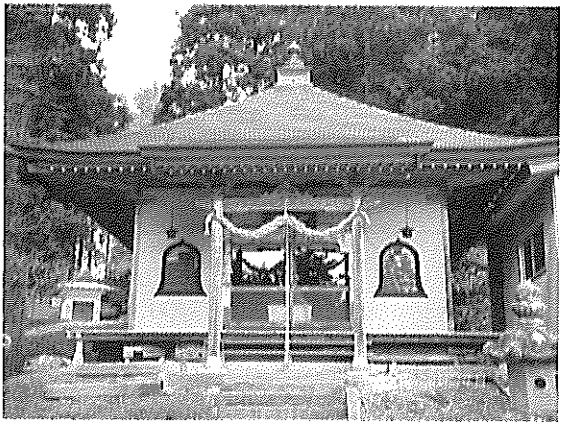



### 明治の宗教改革で廃寺 他寺を移転し再興する

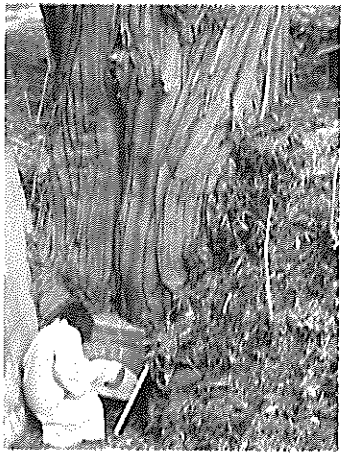
長谷寺は長い年月にわたって、地域の信仰尊として信仰されてきましたので、神社創建と共に廃寺にされることは忍びないことでした。そこで復旧再興を出願しますが許可にならず、更に

種々画策の結果、気仙郡唐丹村（現釜石市）において維持の目途もたたず、住職も帰農して廃寺となっていた寿福寺の再興を思い立ちます。

明治二四年（一八九一）唐丹から長谷堂への寺籍移転を終え、長谷寺と改称して山緒ある本寺の再興をみました。



この年に山号を宝城山と改め、本尊は長谷寺本来の本尊である十一面観世音菩薩と寿福寺としての本尊である不動明王の二体です。そのほか享保六年（一七二一）当地藤原孫太郎の先代孫左エ門が大和国八番長谷寺へ参詣の際に奉納した雲慶作と伝える分霊十一面観世音菩薩があったと伝えられます。



(3)隣接地に神社を創建し廃寺となるが、釜石の唐丹から寿福寺の寺籍を移転して再興することになった。従って本尊は二体祀っている。

(4)寺院前の杉巨木の根元から湧く「閼伽井」。

なお、寿福寺の本尊であった不動明王は、恵信僧都作と伝えられる本造の立像で、明治二四年（一八九一）に住職鳳吟より寄贈されたものですが、以前は南寺林観学院の本尊であったといわれます。

この観学院二代の光林坊秀実法印は、稗貫郡内川目村（現大迫町）妙泉寺宿坊東林坊に住寺中の宝暦二年（一七五二）二月、南部藩主から奉納されたが、明治二年（一八六九）廃院となり、たまたま同院六代の住職鳳吟が所蔵していたとの経緯があります。

昭和五二年（一九七八）観音堂の改築が行われ、当国三十三所の三番札所また陸中八十八所の六十一番札所として信仰を集めています。

ご詠歌に『疑もなしや　つくりし罪消えて　長谷の閼伽井に　浮かふ身の影』とある「閼伽井」とは功徳水のことで、寺院前の杉の巨木の根元から今もこんこんと清水が湧き出ています。

# 今は昔の老杉と数多くの附属寺院

## 松宮山 松林寺

◆天台寺門宗
◆岩手郡石鳥谷町松林寺一・二六
◆電話（〇一九八）四五・二四〇
◆住職（管理者）小山嶺金一郎

石鳥谷町の西端、奥羽山脈の山裾が迫ってくる丘陵地帯に九世紀開山の伝承ある古刹二ヵ寺が祀られています。古代にはその周辺を南北交通の幹線が走っていて、いまでも「安倍道」の名で呼ばれています。安倍道というのは当時奥六郡を支配していた安倍一族やその家臣達が通行した道路ということであり、幹線なるが故に道筋に寺院が建てられたと考えられています。

松林寺は寺伝によりますと長谷寺の創建から遅れること四十七年、仁寿元年（八五一）とありますが、『岩手県管轄地誌』には永和二年（一三七六）四月創立、僧金蔵坊開基とあって、数しません。また同地誌には境内が一反六畝八歩（約一七〇〇㎡）、元修験で山城国（京都）聖護院に属していたが、維新後天台宗に転じ、近江国（滋賀県）円城寺の末寺となるとあります。

松林寺の境内は東西約五百間（九〇〇㍍）、南北二百間（五四〇㍍）の広さで、附属寺院に南勝寺・東ノ坊・西ノ坊・南ノ坊・北ノ坊等があって、巨大な老杉で覆われていましたが、明和年中（一七六四～七二）に焼失しており、いまもその痕跡を残しています。

なお、それ以前の天文年中（一五三二～五四）にも野火で堂宇すべてを焼失したと伝えられています。

松林寺は、いわば勅願により建立された寺として、般庶民にも信仰されましたが、造営修理に際しては時の権力者から特別の計らいもあったようで、慶長二年（一六〇六）に花巻城代の北松斎から頂いた『徴免許状』が残っています。

また慶長七年（一六〇二）の南部利直からの藩主祈願状が残っており、縁日には藩主警護のため町奉行・足軽鉄砲など合わせて四十人、ほかに代官と随員を加えて五十人以上が派遣されたと考えられています。

## 至難だった火災後復興
## 現在は子安地蔵尊信仰

このように格式のある重要な寺院であったわけですが、天文年中の火災後の復興について、宝暦年間（一七五一～六三）の建替奉加の記録によりますと、建替工事がいかに至難であったかが推察できます。

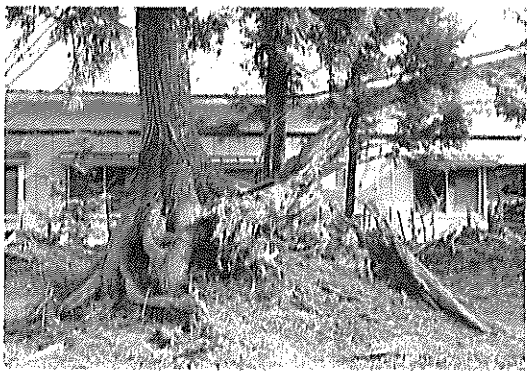
宝暦元年（一七五一）に寄附募集をはじめ、同一四年（一七六四）になっても施工せず、明和五年（一七六八）になって完成、遷宮の上ご開帳を行っています。いわゆる遷宮事業がいかに困難であったかが伺えます。

なお、このほかにも開帳時に飯米のために十五駄ほど米を貸してくれという証文も残っていますが、何時の時代にも事業施行には人知れぬ苦労があることを感じさせてくれます。

松林寺は子安地蔵として知られ、安産の地蔵様として広く、殿様民の信仰の厚い寺です。寺伝によりますと、仁寿元年（八五一）人皇五十五代文徳天皇の后染殿、清和天皇を御懐妊せられし時に、御心を傾けられ給えし処、御降誕の霊験ありしにより、その功徳を日本六十六州に各一体の地蔵尊を安置せられたり。当寺地蔵尊これなり」とあります。

旧暦の六月二十四日の縁日には、「松林寺参り」として、各地からの参詣人で賑わいました。寺院名が地名として残っていることは、それだけ重要な寺院だったことからなのでしょう。現在は無住になっています。

堂内には南部藩御抱え絵師狩野休意（きゅうい）による絵馬等が掲げられています。



㊤かつて南勝寺・東ノ坊・西ノ坊・南ノ坊・北ノ坊など配下に置いた寺院松林寺だが、今は面影はない。
㊦狭くなった境内には老杉の切株が当時を偲ばせる。

# 慈覚大師開山伝説の五大尊の古刹

## 貴峯山 光勝寺（きほうざん こうしょうじ）

真言宗豊山派

◆樽囲郡石鳥谷町五大堂一一・四九
◆電話（〇一九八）四七・二三三〇
ファックス四七・二三三八
◆住職（第二九世） 佐藤宥弘

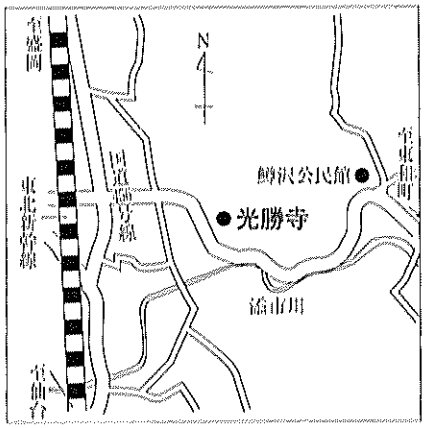
国道四五六号線、石鳥谷町八重畑の花巻市との境に近い十字路を東へ東和町に向かってやや走ると左手に寺院の標柱と鳥居が並んで見えます。

神社と同じように鳥居を山門としている「五大尊」には、不動明王（大日如来）、降三世明王（薬師如来）、大威徳明王（阿弥陀如来）、軍荼利明王（虚空蔵菩薩）、金剛夜叉明王（釈迦如来）が祀られていて、光勝寺境内にある、二つの堂宇です。

光勝寺の寺伝によれば、開基は平安時代前期の承和三年（八三六）東北巡錫中の慈覚大師円仁が田鶴の巣村（現石鳥谷町五大堂）に立ち寄り、二十一日間の修行をされて、大師自ら釈迦如来、薬師如来と五大明王（五大尊）像を刻んで安置し、「五大院里の坊」と称したのに始まると伝えています。五大堂の地名はここから起こりました。

文治五年（一一八九）七月、南部家の祖光行公が五大尊を尊崇し、その霊験によって駿馬を得て連戦連勝したことから、これひとえに五大尊明王の加護であると建久元年（一一九〇）当寺に参詣し、貴峯山光勝寺と命名したといわれます。寺号は「光行公いくさに勝つ」という意味といいます。

翌年旧正月元日から始まった蘇民祭は、現在は石鳥谷町の観光行事です。かつては住職が七日間祈祷、満願日に早朝から数百頭の乗馬が階段を駆け上る勇壮な行事だったといいます。




### 廃仏毀釈を逃れた仏像
### 本山永福寺から四五体

その後鎌倉時代後期の建治元年（一二七五）、智空阿闍梨が中興開山し、それまでの天台宗から真言宗に改めました。安政三年（一八五六）三月、火災に遭い伽藍・尊像・仏具・古器物・古文書など、一切を焼失、寺外に預けていた過去帳だけが残りました。

江戸時代は藩主の祈願寺として百石を領し、盛岡藩真言宗寺院総録の盛岡永福寺を本山としていましたが、明治維新の際、所領没収と廃仏のため本山永福寺が廃寺となりました。当時永福寺の住職赤塚宥天が光勝寺へ六世になったとき、仏像の難を逃れるため信徒の藤根弥之右エ門と図り、中津川から北上川に出て、更に下って石鳥谷の関口の舟場で陸揚げしました。明治二年（一八七〇）一月で、四十五体の仏像を光勝寺に奉安しました。従って光勝寺には永福寺から移された仏像を含めて百八体の仏像が祀られております。

本山永福寺の廃寺により、光勝寺は永福寺の支配寺院の一つの花巻城の祈願所八幡寺の末寺となりますが、この寺院も廃寺となりました。現在は総本山である奈良の長谷寺の末寺です。

五大尊とは仏・法・僧の三宝と国土及び人民を守護するという仏教伝説上の守護尊です。当寺が牛馬守護尊として崇拝されるようになったのは、南部光行の駿馬が没し境内に葬り、馬頭観音として本馬を奉安されました。それが五大尊如意輪前で、牛馬安全の守護尊として信仰を集めています。

㈹寺門と鳥居が並んでいる一帯が光勝寺境内で、本尊五大尊は本堂ではなく鳥居のある五大堂に祀る。

㈺明治の廃仏毀釈から逃れた仏像が数多く、中でも本山永福寺から移された仏像は四十五体でその中で最古の「不動明王立像」は平安時代後期作の優雅な雰囲気の仏像。

## ■「蛇ぬめり」の伝説

石鳥谷町民劇場にも取り上げられたこの伝説は、「寺の池に棲む大蛇が子供を飲み込んだので、毒蛇降伏法を行うこと十七日間。満願日に雌雄大蛇は苦しみに耐え切れず北上川に入って流れ黒岩村（現北上市）で二つの黒い岩となった。大蛇の這った跡を蛇ぬめりと呼ぶ。」現在も北上川の水量が少なくなると、その岩肌を見せてくれます。

# 念仏堂から明治初めに寺院に昇格

## 梅香山（ばいこうざん） 鳥谷寺（ちょうこくじ） 浄土宗

◆花巻市石鳥谷町好地八・八五・一
◆電話（〇一九八）四五・二八三三
ファックス四五・二八三三
◆住職（第一五世） 吉永正教

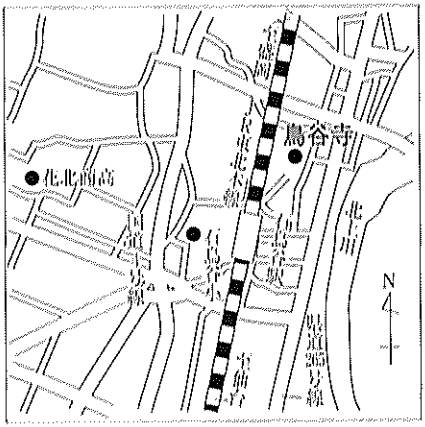
JR石鳥谷駅から駅前通りを左折して北へ約一・二キロ、徒歩五分。花石鳥谷小学校に隣接して鳥谷寺があります。その昔は老杉が生え茂る閑静な場所だったと聞きますが、現在は樹齢約一・二百年の老杉が一本と若い樹木がまばらに生えているのみで、寂寥の感ひとしおのものがあります。

この寺の由緒沿革を語る記録は全く残されていませんが、言い伝えによりますと、元禄八年（一六九五）当地にあった大泉寺檀徒だった橘源兵衛という方が屋敷内に建立を懇請しました。そして盛岡の大泉寺・九世淳洪和尚を勧請し、寺を建立、好地院と称して開山したのが始まりとされています。

開山当初は念仏堂的なもので、宗派の別なく好地村（現石鳥谷町）の葬祭場として、あるいは説教場として宗教活動の中心になり、念仏信仰の輪を広めていったと考えられています。

従って住職は、本寺である大泉寺住職と兼務であり、半僧半俗の和尚がささやかな庵に住んでいたのが実態でした。明治一五年（一八八二）に、事由を具申して許可を得て寺号を鳥谷寺と改名しています。

兼務住職は一一世まで続きました。もとよりこの寺は無檀無縁でしたが、一二世賢祐和尚が入山してから檀信徒も日を追って多くなり、現在信徒六百戸を数えるまでになり、逐年増加の一途を辿っています。旧本堂と庫裡は、昭和一六年（一九四一）賢祐和尚の手によって、有縁の方々の浄財寄進によって建立されました。




### 賢治の教え子の墓地や戦没者の慰霊供養塔も

以上のように鳥谷寺は比較的新しい寺院であり、過去帳も大正年間（一九一二～二五）からのものしか残されていません。

しかし昭和二十三年（一九四八）には本堂前に日支事変の戦没者慰霊塔が寄進され、また宮沢賢治ゆかりの教え子の墓地などもできて訪れる信者が多くなり、本堂が狭くなりました。

そこで前住職正観が大増改築を発願、檀家総代と協議の上、檀信徒に呼びかけました所、浄財の寄進を受け、昭和四八年（一九七三）本堂と庫裡の建築に着手、間口七間（約一二・七m）、奥行き六間（約一〇・九m）で完成しました。その際に、境内に植栽されていた杉の大木を倒して材料として用いたため、現在は古杉・木が残るのみとなっています。

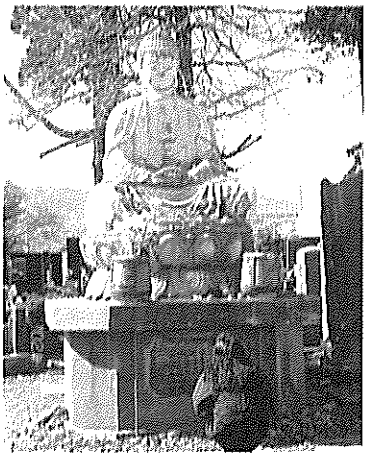
御本尊は阿弥陀如来で、そのほかには特に目新しい寺宝がありませんが、珍しいものとして冒険家だった植村直己氏が焼いた「ぐい呑」があります。

植村直己氏は生前に使用したピッケルを大追町の山岳博物館に寄贈していますが、たまたま現住職の友人から焼物を譲り受けることができました。

植村氏は生前、伊豆の山中にこもって次の冒険への構想をねり、焼物に凝っだったといいます。そのうちの一点で、当寺の寺宝として大切にしています。そのぐい呑の箱に植村氏の奥様が箱書きをしています。

ほかに境内には水難供養碑が祀られており、毎年お盆の時期には老人クラブの方達が供養を行っています。

また陸中国八十八ヵ所霊場の第七番札所であり、観音霊場巡りの信者が訪れています。



おかつて石鳥谷小学校が開校していた場所に隣接して、鳥谷寺本堂や墓地が祀られている。

の新しい寺院には新しい仏様が多い。昭和12年に開戦した日支事変における、戦没者を慰霊する供養碑が、本堂前に建てられている。

# 四季の彩りを背景に持つ高台の寺

## 大石山 長善寺（たいせきざん ちょうぜんじ）

◆宮城郡石巻市新堀六五－五四
◆電話（〇一九八）四五－五八八一
ファックス四五－五八八一
◆住職（第一九世） 大石敦彦

真宗 大谷派

石巻谷町好地から北上川を渡り、大通町に通ずる県道を東に向かいますと北方の山裾に赤い大きな屋根が見えますが、これが長善寺です。

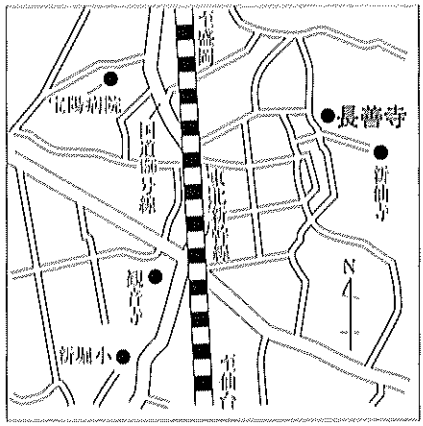
春は樹齢四百年近い本堂前の老桜がピンクの花を開き、新緑の山に映えて美しい光景を見せます。この桜はエドヒガンの一種で、根元の直径が一・三m、目通り周囲が三・二m、樹高が約一〇mあって、石巻谷町の文化財に指定されています。

夏は庫裡前のサルスベリの巨木が花をつけ、晩秋には樹齢百五十年ほどの銀杏の大木が黄金色に色づき、これまた美しい眺めです。

小高い境内より西南を眺めれば、春は一面の青田、秋には黄金色の稲穂のそよぎなど、その中に点在する農家の屋根を加えた風景は、一幅の絵であり心静まる田園風景を描きます。

長善寺によりますと、寛正二年（一四六一）多川右京之進という行者が、由伏姿で不動明王を背にして巡教し、この地に来て新堀の北上川のほとり大石野に一棟の寺を建てました。そして真宗に帰依して、寸八分（約五・四㌢）の阿弥陀仏を安置し、名を法道と改めて開基となりました。大石野の畑の中には、創建した寺跡と思われる所に墓地が残っています。

文明一五年（一四八三）本願寺より阿弥陀仏の御絵像を下賜されて長善寺と号しました。これが現在も寺号仏として残っています。




元和三年（一六一七）七月、北上川の大洪水によって本堂とその他の建物が破損したため移転することになりました。そして現在の場所（堺野山の一部）を買い受けて移住再建しました。しかし九世浄悦の代寛文元年（一六六一）に火災に遭って、堂宇残らず焼失していいます。仮住まいの後、一〇世教実が再建しています。

## 紫波町まで広がる信者
## 維新直後は学校に使用

現存している仏像・絵像・絵伝などは、本堂再建後に備わったものです。

・・三世自道の代に本山より下げられた寺宝が多く、寺の記録に残っています。

天和・・年（・六八・）親鸞聖人の御影を、如土人より下付、太子・七高僧絵伝は、・・三世法雲代に下付、蓮如土人御影は、・・三世自道の代下付などです。

昭和・・四年（・九五九）春、本堂並びに庫裡の屋根などを改修、また平成八年には庫裡を新築しました。

門信徒の分布を見ますと、北は紫波町の犬吠森・佐比内・赤沢・彦部、石

(4)親鸞の直弟子是信坊の布教地域に多い信者。(5)四季の彩りが美しく寺院を引き立たせるが、中でも春の樹齢四百年のエドヒガンは見事だ。

鳥谷町新堀では上郷・山根・中野・戸塚と東の山沿いに南に向かって多くあります。このことを考えますと、その昔、東山の麓にあった道路に従って、布教されたものと考えられます。

また紫波町の彦部には、親鸞聖人の直弟子是信坊の墓所があることを考えますと、開基が真宗に帰依してこの地に寺を開創したこともうなずけます。

藩政時代には、住職が寺子屋の師匠となって子弟の教育に当たっていましたが、明治八年（・八七五）に学制が布かれて長善寺が新堀の学校として創立されています。明治・五年（・八八・）校舎が他所へ移るまで学校として使用されていました。・五世満然・・六世法淳・・七世尚観が教師として任命されていました。

現在境内の面積は約四〇〇坪。山を掘り崩して平坦にし建設されたものと思われ、山裾には泉が湧きいかなる旱天にも渇れることはありません。

# 無住時代にも門徒に支えられた寺

## 大悲山（だいひざん）観音寺（かんのんじ）

真宗大谷派

◆宮城県石巻市石巻市石巻町新堀町四〇・一九
◆電話（〇一九八）四五・三三六二
ファックス四五・三三六二
◆住職（第二三世）大富靜信

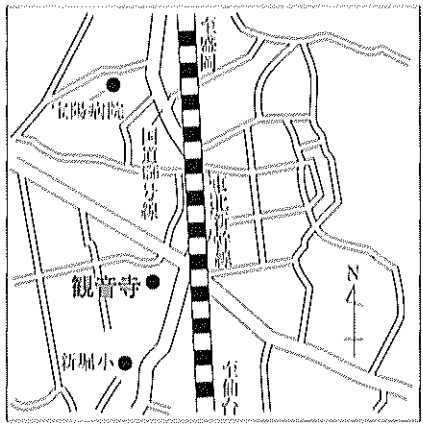
石巻谷町新堀地内の中心部を南北に走る国道四五六号線と県道石巻谷・大道線の交差点付近に、観音寺は位置しています。過去に無住時代もあって、御本尊阿弥陀如来像が、二回盗難に遭うという悲劇に見舞われました。

当寺は永正元年（一五〇四）二月八日に、僧英善が開基しております。かつて新堀村（現石巻谷町）の半が尊という所に、願用坊と呼ばれていた小庵がありました。この願用坊は、明応八年（一四九九）七月・七日に開基の英善によって建立されたもので、建っていた場所の願川嶋にちなんで願用坊と呼ばれていたのでした。

永正元年（一五〇四）二月八日、東本願寺の実如上人より阿弥陀如来立像・体と寺号観音寺を賜わり、開山しました。以来法義を相続し化導にあたり現在に至っていますが、今からおよそ五百年前のことであります。

その後慶長・八年（一六〇三）庵を近くに移し、願川嶋付近の整備を行っています。御本尊の阿弥陀如来立像は、寛延四年（一七五四）江戸浅草の開名寺から分寄されたものといい、像の御心に仏舎利を納めていました。

明治時代の初期（一八七〇頃）に、堂宇の建て替えが行われています。その本堂の解体作業の際に、屋根裏のタルキ材に建造された年号が書かれていて、慶長・八年（一六〇三）に移転したことが判りました。




## かつて公民館敷地にも専住で守る貴重な寺宝

戦後、各地区に公民館建設の気運が高まり、新堀地区の中心部にも建設することになります。そこで地区の中心部にあった観音寺の寺有地の一部を町と賃借契約を結び建設することになりました。それに伴い寺院は敷地の北側に移されることになって、昭和・九年

（一九五四）に新築移転しました。

当寺が無住となったのは、江戸時代と現住職が就住するまでの二回で、およそ五十年間ずつの合わせて百年間でした。御本尊が過去二回盗難に遭って、現在は三代目の御本尊を拝しています。江戸浅草の開名寺から分霊された御本尊は、二代目の御本尊と考えられ現在は山縁起のみ残っています。

現本堂は昭和六〇年（一九八五）八月四日の落慶です。新堀公民館が他の場所に移転するのを機会に、寺有地の返還を受け新しい建物を建てました。

現存している寺宝は、主なものとして『曼荼羅』一軸、『可思議』額のほか『正法寺開山記』一冊があります。

曼荼羅は絵図の下に記されていることから天平年代（七二九～四八）作のものと思われますが、作者、入手経路は明らかではありません。

また『可思議』と記している書額は、『可』が釋圓慧、『思』が釋空圓、『議』が釋良空の三人の僧侶が一文字ずつ書いた珍しいもので、本堂の入口内側に掲げています。

正法寺開山記は、『江剌郡黒石村正法寺開山記　巻第一』とあり、黒石村『現水沢市』の古刹正法寺が開山した様子がくわしく書かれています。入手経路は定かではありません。

(5)国道四五六号線沿いに建つ観音寺本堂。(6)僧侶三人が一文字ずつ書いた「可思議」の書額。

# 大和国の領主が入道して開山する

## 強淵山 長楽寺（ごうえんざん ちょうらくじ）

◆花巻都石鳥谷町南寺林三一〇九
◆電話（〇一九八）四五・六〇九八
ファックス四五・六〇九八
◆住職（第二十四世）藤原善継

真宗大谷派

国道四号線を北へ花巻市と境を接する石鳥谷町の南端八幡地区に、長楽寺はあります。東北の方向に北上の連山を従えた早池峰山を望み、西の方には岩手山を主峰とする奥羽の山脈が遠く続いています。

また南方には稲田が広がる谷間を縫って北上川がその水面を白く光らせながら音もなく流れているといった典型的な日本の田園風景の中にひっそりとたたずんでいる寺院です。

寺伝によりますと、開基は俗名を藤原源太夫弘長といい、大和国（奈良県）高市郡で地領十五万八千石を領していたと伝えます。訳あって城を明け渡し、建長二年（一二五〇）、『岩手県管轄地史』によれば建保元年七月（一二一三）に奥州に下り、当初江曽館（現石鳥谷町八幡江曽）に住まいしました。

そして後に入道して庵室を営み、これを恵明庵と称し、自らは恵休と号しています。また次弟の権太夫兼長は、葛村（現花巻市宮野目）の仁右エ門と称する所で農業を営んでいます。また一説には末弟の助太夫兼頼は、大瀬川の葛丸川上流の畑集落に入って狐を営んだと伝えています。

畑集落は最近、好地の西部に全部開して今はなくなりましたが、その大部分の十戸ほどは藤原姓であり、かつその本家には武器も伝わっていたといいます。

文永二年（一二六五）九月二五日、二代惠念のとき、親鸞聖人の法弟是信房より阿弥陀如来絵像を一幅賜っています。また二代長心は、是信坊の弟子となって深く真宗の教えに帰依しました。そして寺号を恵明庵から現在の長楽寺に改めました。

### 本堂は江戸中期の建築 御本尊なども今に残る

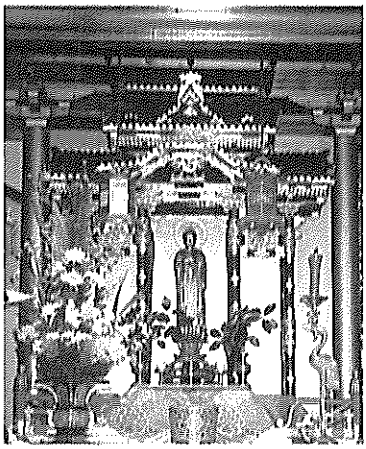
長楽寺は、はじめ江曽集落の矢の根

館の沢田をへだてて南方の古館という所にありましたが、二二世明隠の代に現在の黒沼集落に移転したといわれ、それ以来現在地において法義を継続しております。

現在の本堂は、明和元年（一七六四）

に再建した建物であり、火災に遭うこともなく今に残っています。従って江戸時代の建築様式を伝えており、柱はすべてカノコ建て（土台に直接柱を建てる建築工法）になっています。

本尊阿弥陀如来像は、三百五十年位は経っている仏像といわれ、また過去帳も宝永元年（一七〇四）から保存されてあります。しかし古い寺であるにもかかわらず、寺宝といわれるものは何も残っていません。



㈠カノコ建て建築様式を今に伝えている本堂。
㈡開山以来守っている御本尊阿弥陀如来像は三百五十年以前に製作の仏像である。過去帳も宝永元年（一七〇四）から保存している。

本堂の屋根を茅葺きからトタン葺きに変えたのは昭和四〇年（一九六五）で、それを現在のような銅板きにしたのは平成五年のことです。

浄土真宗の寺院は、宗祖親鸞聖人の御教えを自らも聞き、人にも伝えて、共にたくましく生きていくための聞法（教えを聞く）の道場であり、集いの場でもあります。

いろんな行事を行っていますが、その主なものを上げますと、元旦の早朝集会である修正会をはじめ、春秋の彼岸会、盆会、隔月に開かれる定例の聞法会があります。

また毎月の二十八日講、お取越、報恩講など、これらの集会に出席して熱心に教えを聞き合う人々の心こそ、長楽寺にとって唯一無二の寺の宝であると話しております。

# 世の無常を感じた和賀家臣が開基

## 鶏頭山 正法寺

真宗大谷派

◆横手市石鳥谷町八重畑（三・五七
◆電話（〇一九八）四七・二二三三
ファックス四七・二二三三
◆住職（第二九世） 小原正圓

国道四号線、枚橋交差点を東方へ、北上川にかかる東雲橋を渡って約一・五キロ、道路の右側に正法寺の掲示板が見えます。ここが参道入口です。

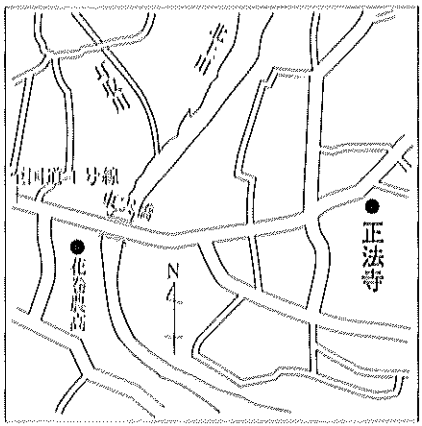
この地域は、昔は見渡す限りの野原だったと伝えられます。江戸時代の末期に開田が行われ、現在は美田の中に杉林に囲まれて静かなたたずまいをみせております。昨年正法寺開創五百年を讃える法要を行いました。

正法寺の開基は、和賀多田蔵摩守儀次の家臣小原清八という武士でした。長い戦乱から人世に無常を感じ、明応五年（一四九六）頃、石山本願寺で蓮如上人の御教化を受け、発心得度して法名を釋正圓と名のりました。

その後文亀二年（一五〇二）、和賀郡小山田村（現東和町）に帰国して、西之条に一坊舎を建てたと記録されており、その二八月二五日が正法寺開創の日と伝えられております。

御本尊と正法寺の寺号は、四世善教のとき慶長一七年（一六一二）に、東本願寺教如上人より授与されており、寛永一五年（一六三八）六世正清のときに、蓮如上人の御影を東本願寺宣如上人より賜りました。

九世敬誉の代、延宝五年（一六七七）八重畑治部猪鼻石京の帰依によって、和賀郡小山田村（現東和町）石鳥岡から神代郡八重畑村（現石鳥谷町）の現在地に移転しています。




そしてその十年後の貞享四年（一六八七）に東本願寺、如上人より、宗祖親鸞聖人の御影を授与されました。それを裏付ける本山からの下付状がありそれが現存で最古の資料です。

### 見事な彫刻豪壮な本堂 近年の火災で焼失する

由号の鶏頭山についての由来伝説につぎのようなお話があります。小山田村（現東和町）の石鳥岡地区に一つの

峰があって、その頂上に鶏頭山・本木観世音を祀っていました。

その昔、有名な大将がいて、馬に乗り・本木まで来ると、馬が大変疲れた様子なのでこの・本木につなぎ休息させ餌を与えました。しばらくすると疲れがとれ元気になり、元のように勇んで進みました。その後六月・五日に馬をつなぎ水を飲ませるようになったといいます。このことから鶏頭山を由号としたと伝えられています。

・五世教珊の代の文久・年（・八六二）・・月、本堂が建立されました。慶応・・年（・八六六）に、還仏供養と先住・先々住忌法要が勤められていることを考えますと、完成まで数年かかったと推測されます。本堂は七間半四面で欅の丸柱が十数本と虹梁の彫刻、外陣廊下側の・間・・枚の欄間の龍の彫刻は見事なもので、幕末の・・代目高橋助次郎作と伝えられていました。その後、・・ヵ年かけ昭和五四年（・九七九）に本堂の全面的な増改築工事が完了、九月・・日に落慶法要を行いました。

ところが翌五五年、田植前の代掻きが真最中の五月六日朝八時、突如として有線放送の火災通報が鳴り響き、正法寺出火が告げられました。およそ五〇分で鎮火。出火場所は後堂の廊下内でした。その再建は直ちに行われ、昭和五六年（・九八・）・〇月、不慮の災禍以来わずか・年五ヵ月で完成しています。その後平成八年庫裡と同朋会館が新築落慶したのを機会に、五百周年の記念諸事業が提案されました。

平成・・年九月・・四日に、正法寺開創五百周年記念事業として慶讃法要が厳修され、念仏道場としての新たな・歩を踏み出しました。

㈩開創五百年を間近に、再建されたばかりの本堂。

㈪和賀氏の家臣小原清八がゆかりの地小山田村石鳩岡に最初に建てた場所には発祥の地の石碑が建立。

# 中世の面影残る一遍上人縁りの寺

## 林長山 光林寺（りんちょうざん こうりんじ） 時宗

◆樺園郡石鳥谷町中寺林二二・五四
◆電話（〇一九八）四五・六五三八
ファックス四五・六五三三
◆住職（第二二世） 三井義覚

国道四号線を北上し、石鳥谷バイパスに入って最初の信号を左折して西に向かいますと、間もなく右手に古城の面影を留める、丸があります。

ここが中世の館・寺林城跡で、ここに光林寺が建てられています。山門に入ると、直径二m近い杉と桧の巨木が空にそびえ、長い寺の歴史を感じさせてくれます。

光林寺の創立は、今を去る七百数十年前の弘安三年（一二八〇）です。

開基しましたのは、伊予国（愛媛県）の国守河野通信公の長男河野通俊の次男であり、樺巻郡の大守寺林城主の河野通重公であると、伝えられております。そして、開山しましたのは城主の嫡子の河野通次でした。

弘安二年（一二七九）、樺巻郡の前身である葛岡郡の地頭だった通次は、時役で京都に在番中に時宗の開祖で父の従兄弟の一遍上人の説法に感動し、帰依して名を順道と改めました。

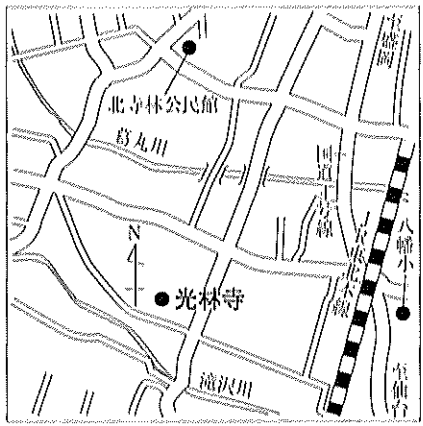
そして翌弘安三年（一二八〇）春、一遍上人に同行し奥州江刺郡（現北上市）に眠る祖父通信の墓前で、「転経念仏」の供養を行いました。

その後一行は、通重公の領地である寺林城で越年しています。このときに城主通重公とその妻も入信、領地のうちの二千町歩（二千㌶）を寄進伽藍を建立しました。

弘安四年（一二八一）春、一遍上人の導師で落慶法要を行いましたところ、「西の林より光」が差して、天地を輝かせました。

これを見て不思議に思っていたところ、上人は「この光、衆生念仏信心が厚ければ、お救いの日出たい印である」と申されました。

このことによって、寺号を光林寺と命名されたと伝えています。その光る石は「供石」と称して、現在は寺宝となっています。



## 開山は豊沢川のご託宣
## 戦乱乗り越え法灯守る

開山の宿阿順道は、熊野権現の霊夢によって、豊沢村（現花巻市）の古屋場平に草庵を結び、樵夫と共に「別時念仏」を行ったところ、川が滝のように波打ち水中から光を放った金色の木仏が現われました。そのご託宣によって、この仏像を衆生を救うための本尊として光林寺の堂宇に安置されました。その仏像阿弥陀如来は、平安末期の作で石鳥谷町指定の文化財です。

なお、古屋場平は、光林寺公園として整備されており、また別時念仏は民俗芸能豊沢大念仏剣舞によって今日まで伝承されています。

本堂は度重なる兵乱で焼失をくり返していますが、当時五世龍天の代の応永九年（一四〇二）と永正八年（一五一一）の二度、また天正一八年（一五九〇）の二度合わせ四度の兵乱に際して焼き討ちにされました。

その復興が難しかったのですが、浅野彈正長吉より寺領の寄付証文が下付され実現しました。また、慶長一〇年（一六〇五）には、南部利直公より七十石が寄付されました。いずれも古文書が保存されています。

元禄一四年（一七〇一）には、一六世円護が本山遊行四五代尊遵上人となり、東山天皇御行幸の折り勅願を願願し、勅許のもと大納言藤原基時卿のおん染筆を賜りました。これによって寺門前に下馬札を拝領する旨の公儀が下されています。

その後明治九年（一八七六）に本堂が焼失、二年後に再建しています。また昭和一〇年（一九四五）には本堂の大改装を行いました。

㈱東山天皇の勅許によって、大納言の藤原基時が揮毫した「光林寺」の寺名書で寺宝の一つ。

㈱「西の林より光」が差して天地を輝かせ、開山したという縁の名称「光林寺」本堂。明治時代の火災によって焼失、再建された建物である。

保存する寺宝も数多く、石島谷町の文化財に数多く指定されています。

指定されている考古資料としては、「開基等の石塔」が五基あって、そのなかには、県内では最古の宝篋印塔である「開基河野通重公墓」などがあります。また、指定されている仏像は十九体、絵画十二幅、古文書二十一通など合わせて六十一点に及びます。

昭和四二年（一九六八）には、境内の一角に施設を建設しました。時宗の開祖一遍上人の「捨ててこその奉仕の精神」の教えに基づいて建設されたもので、知的障害施設・児童施設ルンビニー学園と更生施設のルンビニー苑を創設し、経営しています。

そのほか、お寺の事業としては、ご詠歌の会、こどもを中心とした寺子屋合宿、永六輔氏の紹介で始まった「光林寺寄席」などが行われております。

お気軽にお寺がご活用できるように取り組んでいます。

# 光林寺・塔頭 超勝院

光林寺の境内にトタン葺きの一般民家と思われる建物があります。これは光林寺の守護のために祀った三鎮守、七社に奉行する寺僧の居住宅として建てた本寺塔頭八寮の一つ超勝院です。

その創建は明らかではありませんが、九世良阿快悦による延享二年（一七四六）本山に差し出した由緒書には、

（元塔頭寮）宝林院　後に宝樹庵
（元二番所）超勝院　後に清浄庵
（元四間寮）清月庵　後に川月庵
（元竈ノ寮）善徳庵
（元中之寮）蓮光庵
（元紙衣屋）吉福庵
（元土之寮）吉祥庵
（元滴一石）称名庵

この八寮のうち、宝林院・清月庵・称名庵の三寮は天正年間火災で焼失、再築されません。外の四寮は再築されましたが、善徳庵・吉福庵などは維持困難で明治三年（一八七〇）に廃庵、蓮光庵は明治八年（一八七五）に本寺光林寺に吸収、超勝院だけが光林寺八寮の一つとして保存しています。

㊤光林寺には八つの塔中があったがその一つ超勝院。

# 仏様 さまざま ③

## 不動明王

明王は、如来や菩薩の状態から変化して実際に働いてくれる状態の仏様をいいます。お不動様として厚い信仰を得ていますが、その形相は青黒い忿怒の表情で、背に火焔、右手に降魔利剣の剣を立てて握り、左手には悪逆無道を捕縛する縄を持っています。五大明王の一人で中央に位置しますが、大日如来の化身といわれ、修験道では本尊としています。

## 軍荼利明王

五大明王の一人で虚空蔵菩薩の化身といわれます。南方を守る忿怒身で、大咲明王、甘露金剛、吉里吉里明王などとも呼ばれます。その形相は身の毛もよだつほどですが、祈るものには甘露や安楽を与えて下さるといいます。民俗芸能鬼剣舞の赤面がこの仏様に当たります。

## 降三世明王

阿閦如来の化身といい五大明王のうち東方を守る忿怒の仏様です。その手には矢・弓・鉾・太刀・縛縄・独鈷を持っています。悪人降伏・戦勝祈願には最もふさわしい仏様です。鬼剣舞では青面に当たります。

## 金剛夜叉明王

北方を守る五大明王の一人で、千二人の子供があったという精力絶倫の仏様です。千人は発心し仏道へ、残りの一人は悪魔に、一人は金剛力士になったといいます。忿怒の形相はすごく息災調伏が仕事で、一切を食い尽くすのが大得意です。鬼剣舞では黒面に当たります。

## 大威徳明王

阿弥陀如来の化身といわれる五大明王の一人で西方を守る仏様です。忿怒の相が凄く、一切の悪霊を調伏し、その徳はどの仏様より勝り、またその威力は毒蛇悪獣といえども怖れるといいます。鬼剣舞では踊りリーダーの自面に当たります。

## 閻魔大王

地獄の頭の仏様で、金も名誉も学識も閻魔の目にはなんの権威もありません。懲罰司法の大権を握っていて、人間の最後の価値は、実は地獄での閻魔の決定にあるといいます。

# 律宗の古寺から南部北家の遥拝所

## 猪頭山 廣濟寺 曹洞宗

◆岩手郡岩手町猪鼻四・五七・一
◆電話（〇一九八）四七・二四〇
ファックス四七・二四七
◆住職（第二七世）川守田伸樹

国道四号線に沿いその東側を国道四五六号線が走っていますが、石鳥谷町八重畑地内の中心部の小高い丘の上に広済寺があります。ここはかつて中世の館跡猪鼻館が置かれた所であり、山門脇の樹齢約四百年という杉の古木が歴史の古さを教えてくれます。

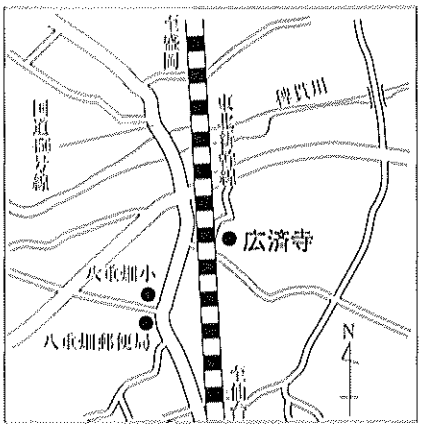
広済寺の寺伝によると、元は律宗の寺で天平年間（七二九～四八）行基菩薩が刻んだ釈迦仏を本尊とし、釈迦堂を建て、後に円仁が来住して八体の尊像を脇座としたといいます。その大座那は当時この地方を支配した俘囚氏・族と思われる猪鼻広済でした。

慶長年間（一五九六～一六一四）に、京都の徳岩宗久禅師が奥州下向のおり、この地を訪れて八重畑村（現石鳥谷町）関口に釈迦堂を移しました。そして南部氏一族の北家の遥拝所として、律宗を改め曹洞宗としています。そのためにこの禅師を中興開山といっております。以来六世の了忠白心の代まで京都から住職が派遣されています。

延宝年間（一六七三～八〇）に火災のため殆ど焼失しました。また境内地が北上川に近く水害を受けるため、貞享二年（一六八七）七月、六世白心和尚がこれを憂い釈迦堂を猪鼻館に移して、伽藍を再建し広済寺と改めました。

北家は関口に知行代官を置き、北家一代官維が寺門を復旧し開基となりました。一二世永月万江の代の享保七年（一七二二）、南部家一族の北家の四代北可維四男鶴五郎が死去。翌八年には同娘お頭が病死し共に広済寺に葬送。このときから北家とは特別の縁故が生じています。そして享保九年（一七二四）、北倫弥より寺領として四石六斗八升四合が寄進されました。

延享二年（一七四五）、幕府の寺社奉行より本寺が明らかでない寺院は廃寺とされるとのことで、一五世大忍祖勇は盛岡の報恩寺に願い出て、報恩寺第



七世慶安恕慎大和尚を勧請して、開山としました。

## 凶作救済に本堂を新築
## 百観音や経蔵の多宝塔

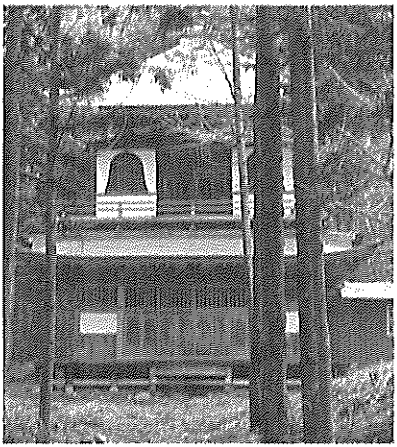
七世安山祖全の代の天明三年（一七八三）凶作の年、村内の暗山伊兵衛が土地を寄進、曲田の与右エ門が、救済事業を兼ねて、一人で本堂一宇を新築寄進しています。本堂を建立したのは、従来の場所から一段下の現在地であり、従事した村人は延べ三千人に及んだと伝えられております。そのために、安山祖全を中興としております。

天明五年（一七八五）九月、五日に総本山の勅賜輪住（一日住職）を勧め御綸旨を賜り、現在も文書三通保存されております。

本尊は釈迦牟尼仏で行基の作と伝えられており、貞享三年（一六八六）に京仏師の須田直之承が修復しました。また脇座は慈覚大師作と伝え、明治年間に修復しています。

山門は大正八年（一九一九）に建立、両側の仁王尊は、黒沼村（現石島谷町）の藤原武山作です。その上に大梵鐘がありましたが戦時中に供出、昭和五五年（一九八〇）に寄進され元の姿に戻りました。また旧釈迦堂跡には昭和三年（一九二七）建立の三階建て多宝塔があって寺の威容を示しています。

一階には西国・秩父・板東の百体の観音を安置し、二階には大蔵経を輪堂に納めていて、県内には余り例がありません。いずれも三四世隆岳恵暁の代のもので、和尚は昭和三四年（一九五九）百三歳の天寿を全うしています。



㈤天明凶作救済のため新築された広済寺本堂。

㈥律宗時代に釈迦堂を置いた跡地に多宝塔を建て、百体の観音と三四七冊の大経蔵を収納。

# 戦乱に翻弄された稗貫氏主従の寺

## 萬疊山 大興寺 曹洞宗

◆稗貫郡石鳥谷町大興寺（三・一）
◆電話（〇一九八）四五・五五七九
ファックス四六・一〇八五
◆住職（第二四世） 桐野好正

JR石鳥谷駅から西に向かって約六㌔、静まりかえった奥羽の山裾に抱かれ、ひっそりとたたずまいを見せている大興寺です。参道入口から境内を望むと、右に十仏観音、山門付近に石仏、六地蔵、鐘楼等、六百年の歴史を物語る荘厳な本堂が目に入ります。

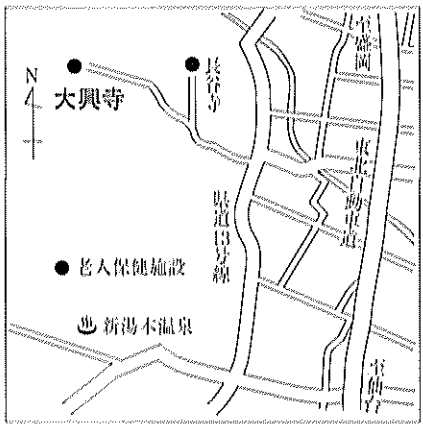
開山は永徳元年（一三八一）三月、悟山聞本禅師で、曹洞宗の開祖道元禅師から七世の法脈を継いだ僧です。

応安五年（一三七二）葛岡邑（現石鳥谷町大興寺の古名）の山中に草庵を結び座禅しました。そのとき土地の郷士澤田佐五兵衛忠貞は、永和年間（一三七五～七九）寺へ土地を寄附して開基となり、一宇を建て大興寺と称したのが始まりといいます。

また大興寺は稗貫氏の菩提寺だったと伝えられ、稗貫氏六柱の墓地が残されています。それは藤原広重（常陸四郎為家・稗貫大和守）、秀清（文珠次郎・広重五男稗貫大和守）、遠基（太郎左衛門・稗貫左中将陸奥守）、広信（稗貫出羽守）、政直（武重・稗貫大和守）、広忠（万千代・稗貫孫次郎）で、そのうち戒名が残っているのは稗貫政直（武重）など二柱です。また瀬川氏・由影氏など稗貫氏の流れをくむ方達の菩提寺ともなっています。

稗貫氏や南部氏から寺領を下賜されたと伝えていますが記録は残っていません。しかしかつて大興寺村（現石鳥谷町大興寺）と呼ばれた地域は、すべて寺領であったといいます。周辺には、松林寺、長谷寺など古刹があり、また寺にまつわる屋号も残っています。また「安倍道」と呼ぶ古道もあって古くから開けた場所と考えられています。

七世周雖中易の代、文明一二年（一四七九）に本堂は再興しますが、天正一八年（一五九〇）秀吉の奥州仕置に伴い一揆が起こり、大興寺は光林寺と共に放火されてしまいました。



現本堂は昭和四五年（一九七〇）、三十世演外文宗の代に落慶しています。

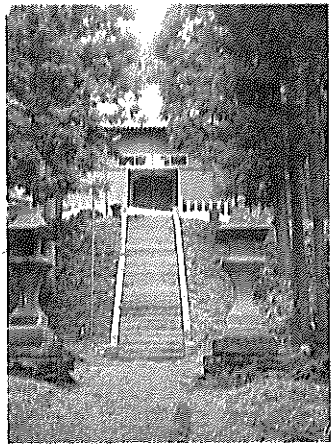
## 今なお信仰集めている 開山ゆかりの土仏観音

境内の一角、庫の土に土仏観音堂を祀っています。一間四面の総檜素木細工で、天保二年（一八三一）六世・峯徳宗の代に再々建立しました。向拝の柱の三方・正面唐戸、四方の欄間、腰欄間等の彫刻があって、中でも昇降の両龍は素晴らしい作です。花巻吹張の工匠初代勘次郎が七ヵ年の歳月を費して製作したと伝えられています。

ここに祀られている土仏観音は、開山の梅山開本禅師の急難を救ったといわれる尊い霊像です。観音像の高さが四寸六分（約一四㌢）の小仏像ですがつぎのような由緒があります。

「禅師が京都六角通りを頭陀行して歩いているとき、路上で二人の子供が土を集め小便で練り土像を造っていました。よく見ると聖観音です。師はそれをくれるよう頼んだ所、実は師にあげようと思って造ったのだといいます。そしてわれらは二社明神であり、仏法を守護するため子供の姿で現われたのだといい去って行きました。

その後、師は土仏観音を奉持して頭陀行を行っていた所、幸い民家を見つけ一夜を頼みますが、いま主人がおらず女房の私だけだからとことわられます。なんとかお願いして泊まりますが、主人とは盗賊でした。夜戻った主人は師の寝床に入り刺し殺し、屋外に埋めますが、不思議なことに旅の僧はまだ寝所で眠っていました。土仏観音が身代わりになったのでした。盗賊は悔い改め僧となり、後に遠州に一ヵ寺を開創しました」という物語です。



㊤江戸期のお堂が残る土仏観音の信仰は厚い。

㊦由緒ある曹洞宗の古刹であるが、戦国の世の戦火にまみれて罹災された。現本堂は昭和45年（一九七〇）に新築された建物である。

# 田園地帯で教える禅の厳しい戒め

## 稲荷山 金剛寺 曹洞宗

◆滑川市石坂谷町新堀四一一七八
◆電話（〇一九八）四五一二七〇五
◆住職（第二三世） 吉沢勝光

国道四号線と併行しその東側を走っている国道四五六号線、石坂谷町新堀地内の中心部から西に向かって数百㍍のところに金剛寺はあります。

その昔、境内は老杉で覆われ、夏でも冷気を感じ昼でも薄暗い境内でした。しかし昭和三〇年（一九五五）庫裡改築に際して杉材として活用したため、現在は若い杉林に変わりました。

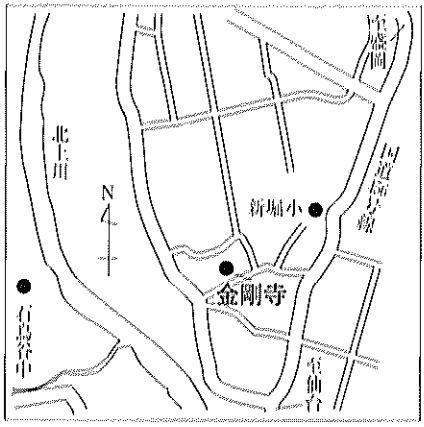
山門に立つと、その右側に高さ一㍍四五㌢ほどの御影石がどっしりと立ち、「禁入帯酒山門」と大書しています。山門をくぐる者は、酒はもとより魚・肉、野菜でもニラやネギ・玉ネギなどのくさいものを食べてはいけないという厳しいお達しなのです。

僧に対する戒めであると共に、檀家にも禅宗の厳しい教えを、この禁碑石は語っています。享保一九年（一七三四）、七世全長和尚が建立したもので金剛寺唯一の古い記念石でしたが、庫裡改築で杉の大木を倒したとき破損、現在のものはその後設置の碑です。

金剛寺の開山は、石坂谷町好地の古刹万昌山大興寺第一三世底庵玄徹大和尚です。天文一〇年（一五四一）の開山で、新堀の中野愛右山畑長俱に小庵を建てました。開基したのは高畑家の祖先で、俗内高衡（戒名「金剛院殿無玄浄作居士」）となっています。

この庵を金剛坊と名付け、当時は祈願所でしたが、付近一帯は草林続きで度々野火に見舞われたので、現在の場所に移転し、稲荷山金剛寺と改号したと伝えています。

移転の年代は不明ですが、元の寺跡という地に「金剛清水」と呼ぶ湧水があり、また耕地となっている付近から古い陶器片等が出ているといいます。




### 二百余年の本堂を守り 附属の堂宇を新築整備

初代玄徹和尚は金剛寺を、一世宝山順

泰大和尚に継譲して、隣村亀ヶ森（現大迫町）におもむき、亀ヶ森山中興寺を創建開山しました。

宝暦一〇年（一七六〇）六月、九世宗山中音の代に本堂より失火し、寺宝や寺伝書類はことごとく焼失してしまいました。同七年の一一月には本堂を再建、再び寺門の隆盛に努力し、現在まで続いています。

再建した宝暦一一年（一七六一）に記念として歴代住職の墓地の角に銀杏を植え、一百数十年を経て巨木となっています。この銀杏には和尚が杖としていた木を、試しに手植えしたものが根づいたとの伝説があり、「倒木銀杏」とも呼ばれています。

(4)度重なる火災を教訓に二百余年の本堂を守る。

(5)羽黒修験者が背負ってきた二尺余の不動明王を信者から寄進され不動堂を建てて祀っている。

本堂は再建以来、一百数十年の歳月を保っていますが、昭和一〇年（一九三五）には茅葺きをトタン葺きに、また平成七年には銅板葺きに変えました。

明治一七年（一八九四）、一〇世祖海全亮の代に、縦横各一間半の開山堂を建てました。山門は昭和一一年（一九三七）に改築、同四〇年代にも改築しています。そのほか経蔵は大正八年（一九一九）、鐘楼堂は大正九年（一九二〇）、不動堂は昭和一一年（一九三五）、共に一〇世祖海全亮の代の建築です。なお鐘楼は、戦時中に鐘を供出、建物も古くなり解体しています。

不動堂に納めている不動明王は台座を含む一本造りで、一尺ほどある古い仏像です。山形生まれの羽黒修験者がこれを背負ってこの地に訪れ、祀ったのでした。その後修験者の子孫が金剛寺に寄贈したものですが、その仏像を所有している家を今でも「坊様」の屋号で呼んでいます。

# 南部藩の重臣内堀氏が開基した寺

## 稲荷山 新仙寺

曹洞宗

◆陸奥国稗貫郡新堀六五・八・一
◆開基（〇一九八）四五・二五・八
◆住職（第二九世）柏　卓道

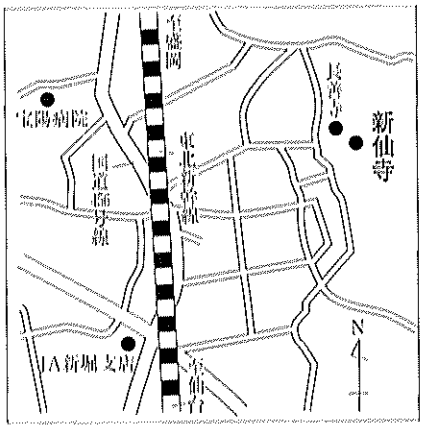
JR石鳥谷駅から東の方向へ約四㌔、由ふところの緑に抱かれた新堀城の真下に新仙寺はあります。その城には俗に新仙寺館と呼ばれ、南を望みますと新堀村（現石鳥谷町）を一望できますし、更に花巻市や北上市も眺望できるという高台になっています。

ここに建立された新仙寺の由緒は、資料保管していた家が火災に遭い不明です。寺伝によると享禄元年（一五二八）、大興寺一世泰川練寅の開基であるといいます。なお『岩手県神社庁地誌』や『岩手県史』によりますと、天永二年（一一一一）建立とあります。

天正年間（一五七三～九一）に、新仙寺館に新堀作兵衛が居住していた当時、鎮守稲荷神社を祀っていて、この背後の山を稲荷山といいました。新仙寺の山号はここから生まれたと考えられています。

新仙寺は始め、現在地より更に東方約四・五㌔離れた亀ヶ森村（現大追町）との境にほど近い一獄堂（一竹堂とも）にあったという伝承があります。現在もその付近を新仙寺跡といわれ、その一部は保存されているといいますが、訪れる人とてなく草むらの中にひっそりとしています。

慶長年間（一五九六～一六一五）の末頃、内堀伊豆頼式四郎兵衛が新堀を知行するに至って、寺を一獄堂から現在地に移し、開基となって寺門の維持興隆を図ったといわれます。

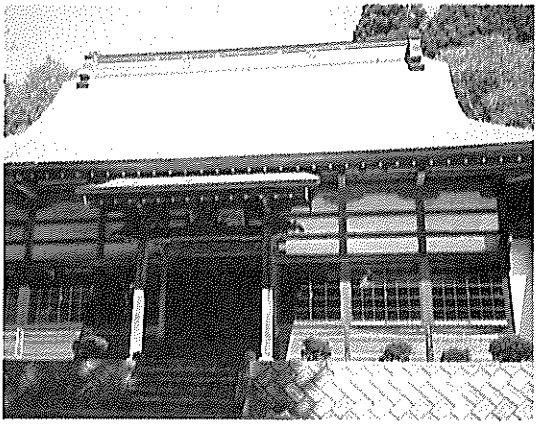



### 寺禄を給された菩提寺
### 不思議な二体の御本尊

内堀氏は近世南部藩の重臣でした。本姓が諏訪で、最初江州（滋賀県）の浅井長政の家臣でしたが、主家没落後加賀（石川県）の前田利家に仕えています。前田家から一戸の南部信直のもとに使者として往来し、後に南部氏に仕えました。頼式は戦国乱世の武人で

知能的人材として三戸南部氏に採用されたものとみられています。

内堀氏は、慶長から元和年間（一五九六～一六二三）頃に、新堀村を知行しますが、この地は後に主沢城主となる江刺氏の知行地でした。内堀氏は最初五百石、後に千百石を領したといわれています。



㋐新堀城の麓に建ち領主の庇護を受けた新仙寺本堂。
㋑南部藩の信頼厚い内堀氏の菩提寺であり、内堀氏先祖をはじめ歴代領主など一族21柱が祀られている。

頼弐は南部信直・利直・重直の三代に仕え、信任厚く南部氏が盛岡城築城の際には、石垣積みの指導者でした。後年、伊豆と改め剃髪して円斎と号し長命を保って寛永二十年（一六四三）九十歳で亡くなっています。

新仙寺は内堀氏の菩提寺であり、寺禄として十石を給しています。同寺には初祖伊豆頼弐をはじめ、高さが二尺九寸もある第二祖織部頼治の墓、また第三祖伊豆頼宗、第四祖伊豆頼吉など歴代領主墓地のほか、頼弐の妻明房など二十一柱が祀られています。

御本尊は三体あって、一体は釈迦本尊ですが、もう一体は薬師如来です。何故そうなったのか資料が散逸し、現在全くの謎です。

内堀氏の庇護があったとはいえ、歴代住職は生活苦に追われ、前代寺という異名で呼ばれたこともありました。ただこの寺自慢のものは大自然でありなかでも樹齢四百年にも及ぶ「琉球つつじ」は見事で、五月になるとオレンジの花を咲かせます。新仙寺の歴史を語る貴重な証言者です。また開基の奥方使用の御膳二式が残っています。

昭和三十年（一九五七）本堂の大改装を行い、茅葺きからトタン葺きに変えています。

# 廃仏毀釈を免れた稗貫氏縁の寺院

## 醫王山 法壽院（いおうざん ほうじゅいん）

◆稗貫郡大迫町亀ヶ森三一・六六
◆電話（〇一九八）四八・三八九一
◆執筆者　藤原由三

### 本山修験宗

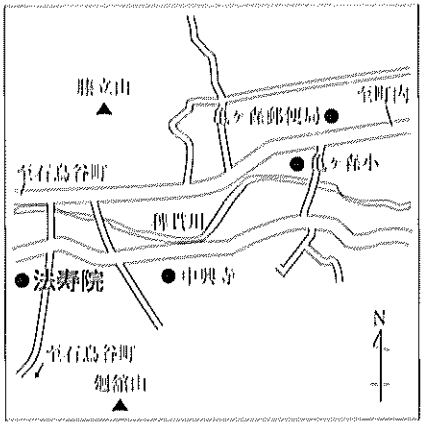
大迫町の最西端、県道・牧橋・大迫線羽黒堂バス停留所より徒歩で約十分、右側丘陵の中腹に位置しています。東北方には早池峰の霊峰を望み、東南方には権現堂山、東方眼下に稗貫川の清流を眺める所に法寿院があります。

大迫町にはかつて修験宗寺院が四ヶ寺ありました。本山派に所属する正法院・喜法院・法寿院、また羽黒派として宝乗院です。いずれも霞と称する支配の範囲があって、そのうち法寿院は亀ヶ森地区のうち衣更着氏の支配地域でした。明治三年（一八七〇）に神仏分離令によってこれらの寺院は廃され子孫も記録も四散してしまいましたが、幸い法寿院はその命脈を保ちました。

法寿院は滝田村（石鳥谷町八幡・境界変更で現大迫町）にあった医王山大明寺であったとされ、この寺院については言い伝えのみが残って歴史は全く不明です。慈覚大師が薬師如来を彫刻した際、その残本をもって十二体の薬師如来を彫刻し十二カ国に安置したと伝えますが、その一体が羽黒山若王寺に納めました。当山開基の能円宰通大比丘尼が若王寺の法弟だったため、その仏像を慈順法印より賜り、それを開基本尊としたと伝えています。

大比丘尼の弟子能海運慶法印ら中興の安光教道法印に至るまでの約四百年間は、寺伝もなく全く不明です。

永禄三年（一五六〇）四月、稗貫大和守政直が難病にかかり、病気平癒祈願を和賀・稗貫十五ヶ寺の僧に依頼、当山に百日山籠します。そして、十一日目に薬師の霊夢あって「当山野に生える草十一種を薬師経読誦のもとに煎じて服薬すべし」といわれます。それを大和守に捧げた所じ十日で全快しました。大和守は喜んで次の三首の歌を捧げたと伝えています。「術つきて我身を有難や　救い給うぞ薬師如来」「みな人も罪をのがれん医王山　薬師の誓い

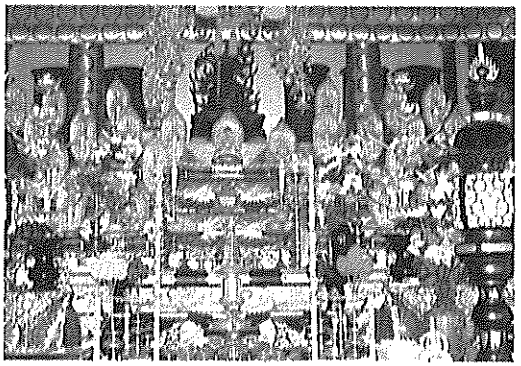


頓め諸人」「名も高き空通坂に折らめや草もくすりに医王山かな」

## 度重なる堂位置の移転 境界変更で大迫町内に

その後禅門大和守の五男藤原又四郎富勝が発心し、得度戒を受け安覚教道と称し、明暦二年（一六五六）京都本寺聖護院へ申し立て、大保坊と改め当山を再興しました。五世光井泉学法印の代正徳二年（一七一二）、本山公務御用のため参勤を命ぜられ、その功により法寿院の院号を賜りました。その後一一世昌長法印に至るまで、公務御用の参勤を勤めています。

㋐現在の堂宇は大迫町と石鳥谷町の境山手側にある。



㋑本堂内には御本尊の薬師如来のほか、不動尊、一代守り本尊八体仏、三宝荒神、延命地蔵などを祀る。

これより先に野火のため堂宇が焼失したので、寛保二年（一七四二）亀ヶ森村（現大迫町）字前畑に移転。しかし土地が狭く旧所の大明寺長根内の南端に明治一四年（一八八一）堂宇を再度移転。ところが湿地で土台腐朽のため明治二六年（一八九三）十間ほど南の八重畑村（現石鳥谷町）滝田に移転修築して現在に至っています。昭和二九年（一九六四）、町境界変更によりその土地は大迫町に編入されました。

法寿院には御本尊の薬師如来のほかに不動尊、一代守り本尊八体仏、三宝大荒神、延命地蔵尊、十一面観音など安置されていますが、特徴的な仏像に紺青尼天坐像があります。

この仏像は像高四・五㌢の小像で、素晴らしい作です。胎蔵界曼陀羅では、紺青尼天は真鬼門鎮護の天尊で、像容は東密（真言密教）系は忿怒相ですが、通形相なので台密（天台密教）系本山派の仏像と見られています。

# 新大迫町開町計画で現在地に立地

## 往生山 養徳院 到岸寺 浄土宗

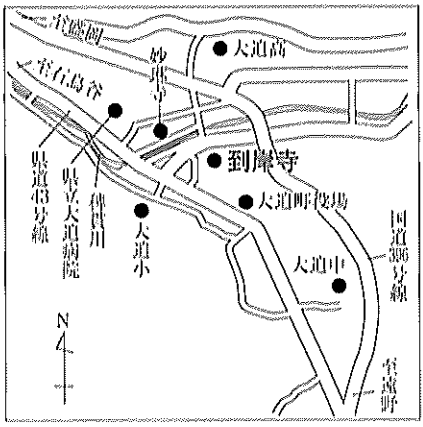
◆神奈川県川崎市川崎区大師本町一一一三
◆電話（〇一九八）四八－三〇三一
ファックス（四八－三〇三一）
◆住職（第二三世） 昆野大樹

大迫町の中心部、大迫町役場やコミュニティセンター、山岸博物館などが集中しているその一角、川原町に、浄土宗到岸寺があります。

寺伝によりますと、開山は奥州相馬領（福島県）鹿島の出身の存運真貞です。幼いとき同地の大徳良奥上人について剃髪染衣の身となり、二八歳で専称寺の学寮において二十年間修行し、慶長二年（一五九八）五月、奥州に下って巡錫、そして亀ヶ森村（現大迫町）の北久保にさしかかったとき、日も暮れたので農家を訪ねて一夜の宿をお願いしました。

上人は宿の親切により滞留して正法を説いたところ、村民も多数集まり日夜念仏に帰依します。これこそ真の法門の広大なることを知り、北久保の地に庵室を結び、称名念仏の道場としました。ここに在住すること十五年、上人は慶長一八年（一六一三）五三歳で亡くなっています。

その後、六世良心学意の代の元禄九年（一六九六）七月、現在地に百数十戸の檀家を有し、一寺を建立して移転、最初は東岸寺と称しました。それは大迫町の新しい町割が行われた元和二年（一六一六）に、現在の原敷地区にあった九日町が上町・中町・下町に分けられますが、日九日町の東、唐川の東という意味で名付けられた寺と考えられています。




それは新大迫開町計画に折り込まれた移転であって、当時南部氏に敵対した稗貫氏旧臣の菩提寺である桂林寺や中興寺は、町割計画の対象からはずされたものと考えられています。

後に東岸寺を到岸寺と改め、大迫の人々の念仏浄土と、宝永元年（一七〇四）創立の大迫薬師堂に安置した薬師如来や地蔵尊等の仏力を説教しつつ、精神医療を授け、貧しい病苦の人々を安心させたと伝えています。

## 御本尊と四仏像を祀る うち二体が町の文化財

開山当時の堂宇を再度建立営繕したと伝えますが、時期は定かではありません。しかし明治四〇年（一九〇七）の大道町大火で類焼、同年薬師堂や庫裡を再建していますが、本堂は十数年を経た大正一四年（一九一五）申興良巌玄定の代に建坪七二坪の堂宇を再建、落慶法要を行っています。

御本尊は阿弥陀如来ですが、ほかに四体の仏像が祀られており、うち二体が大道町指定の文化財です。

その一体の薬師如来坐像は鋳銅製の半丈六仏（高さ約一・六五㍍）で、宝永元年（一七〇四）に八木沢金山経営

㈱南部藩政下新大道町開町計画で現地に移転。

㈱町指定文化財の延命地蔵尊像は、宋様式の彩色仏像で像高約九五㌢、元文元年京仏師の作。

で財をなした二代目大倉田源右衛門が勧請した仏像と伝えられています。明治維新の廃仏毀釈の難に遭い、危く廃棄されるところ、一八世良儀覚立が県庁より下付を願って境内に観音堂を建てて安置しました。鋳物師は南部鋳物師の名工として知られる小泉仁左衛門で、宝永元年（一七〇四）四月吉日作と銘文が切っています。

もう一つの延命地蔵二尊像は、宋様式の彩色を取り入れた京七条仏師の本格的な彫像で、本尊延命地蔵菩薩立像は丈二尺一寸五分（約九五㌢）で、台座内側に元文元年（一七二六）の銘が墨書されています。両脇侍（仁王）と合わせ二尊像と共に、七世良接郷然の代、延享二年（一七四五）に土蔵の地蔵堂を建立し安置しています。

ほかに高村光雲の高弟山本瑞雲作の聖観音像、また秘仏ですが赤穂義士小野寺十内ゆかりの者が奉納したという木造阿弥陀如来像も祀られています。

# 稗貫氏家臣の妻が尼僧となり開基

## 亀鉢山 妙琳寺（みょうりんじ）

真宗大谷派

◆稗貫郡大迫町大迫四・四七
◆電話（〇一九八）四八・二六二三 ファックス四八・二六七〇
◆住職（第二五世）衣更着哲心

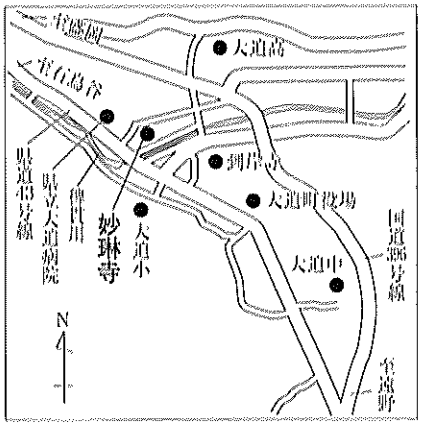
大迫町はバス路線の主要な拠点となっており、盛岡・石鳥谷・花巻・遠野大船渡への交通は至極便利です。また花巻空港への道も最短路で結ばれ、十分ほどで到着します。

そのバスセンターから約二百m、大迫町の中心部に位置する妙琳寺は、町内随一の庭園を持つ寺院としても知られております。

この寺院の開基は、明和元年（一七六四）の山緒書によりますと、開基は釈尼妙祐という若い尼僧です。文亀二年（一五〇二）春半ば、黒髪を切り落した若い女性が、はるばる奥州の片田舎衣更着の郷から四十日に余る苦しい旅を続け、京都本願寺の九世実如上人に逢っています。亡き夫木皿継（きさらぎ）掃部の菩提と念仏弘通の真意を披瀝し、一寺を建立したいと願い出たのでした。

衣更着の郷は現在の大迫町亀ヶ森の一角で中世の面影が残る一帯です。伝えによると、ここに御所ヶ館と呼ぶ館があって、その主が稗貫氏の家臣木皿継掃部でした。

この館の近くには真治七年（一三六八）九月銘のある「真治の碑」があって大迫町指定文化財です。応仁・文明（一四六七～八六）の頃、城主木皿継氏が家老保渡田幡守宅に家臣を集め盛大に「九日酬」の酒宴を開きました。その最中に亀ヶ森図書の襲撃を受けて城をうばわれ、木皿継氏は滅亡してしまいます。




## 来年は開創して五百年 数少ない方便法身尊像

夫の死後、妻は剃髪して実如上人の弟子となり、後に亀ヶ森村（現大迫町）の鉢集落に、開基本尊の方便方身尊像・軸を頂き庵を建てました。

この鉢集落の墓地には、衣更着家の先祖も祀られております。由号の亀鉢山は、この集落名から由来しています。

慶安二年（一六五〇）現在地に移転し本堂を建て、延宝五年（一六七七）寺号妙琳寺と本造の御本尊阿弥陀如来像を下付されています。

また明和三年（一七六六）には、寺号額が奉納されています。久慈文真と呼ぶ盛岡藩随一の能書家で、通称喜八郎、東皐と号しました。享保元年（一七一六）に生まれ、十歳五人扶持（五十石）の藩士でした。安永九年（一七八〇）六五歳で亡くなっています。

文真は書を佐々木文山（江戸で活躍した書家、佐文山）に学び、中国人の書家孟魯軒の筆法を受け継ぎました。書体は豊潤緊密で力強く、妙琳寺の寺号額は、なかでも久慈文真の代表的な本額の一つで、保存状態もきわめて良好であり貴重な文化財です。

また大迫町の指定文化財である開基本尊方便法身尊像は、全国で九五〇点が残っていると伝えますが、東北地方には数少なく、現在確認されているものはわずかに二点のみです。

妙琳寺に伝承している画像には「文亀二年癸亥七月二十二日　俾抜郡衣更着郷載牛村奥州」とあり、非常に貴重なものです。

妙琳寺の開基となった釈尼妙祐は、行方不明となりましたが、下付された絵像は郷の商人の手によって郷里に運ばれたものと考えられています。

この開基の文亀二年（一五〇二）から数えて、来年は妙琳寺開創五百年に当たりますので、記念の法要が計画されています。なお本堂が茅葺きからトタン屋根になったのは、昭和四二年（一九六七）、また銅板葺きにしたのが平成元年のことです。

(4)来年開創五百年を迎え記念法要が行われる本堂。
(5)大迫町指定文化財の御本尊と共に貴重な寺宝寺号額は、盛岡藩随一の能書家東皐の書で盛岡藩士。

# 郷土の子弟教育に捧げた庶民の寺

## 亀通山 浄圓寺（きつうざん じょうえんじ）

真宗大谷派

◆揖斐郡大迫町亀ヶ森一三一一五
◆電話（〇一九八）四八一三四〇五
ファックス四八一三四〇七
◆住職（第一六世）亀山助正

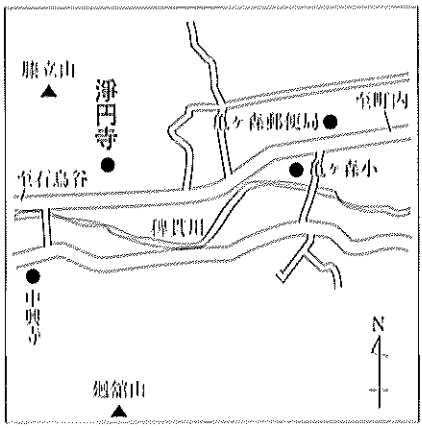
石島谷町から大迫町へ通ずる県道を東に向かうと、新堀を経てゆるやかな峠にさしかかります。この峠を越えたところが亀ヶ森地区です。

神門川の清らかな流れに沿って東西にのびる、山あいの静かな集落の中ほど、県道の左手（北側）の山裾に浄圓寺の本堂が見えます。

大迫町にある寺院は、大迫氏、亀ヶ森氏、衣更着氏というように、中世の豪族との関わりを持つ寺院が多いのですが、浄圓寺の場合は庶民の寺院として浄土往生を願い、庶民と共に歩んできました。

天正二年（一五七四）三月一五日、釈浄圓によって開かれました。俗姓は亀山義孝で、出自については判っていません。剃髪得度の後、江州（滋賀県）石山寺の観世音の御分霊を背負い諸国を行脚して、亀ヶ森村（現大迫町）上ノ山の地に落ち着き、専ら念仏往生の教えを説きました。そして有縁の人々の帰依によって庵を建てたのがこの寺の始まりといいます。

延宝二年（一六七五）四世正誉のとき、東本願寺より浄圓寺の寺号を賜っています。文化二年（一八〇五）火災に遭い、堂宇・什宝ともに灰燼に帰しましたが、金属製の観世音像だけが残りました。再建されたのが文政五年（一八二二）、〇世圓證の代です。その後数度の改修を経て、昭和二九年（一九五四）本堂の屋根を茅葺きからトタン葺きにし、平成七年に山門を新築、また同一一年にも屋根の大改修を行っています。




### 布教のかたわら農業に教育に医療などに尽す

浄土真宗は宗祖親鸞聖人の教えからいわば庶民の仏教でした。領主や豪族等の庇護で成り立つ宗派ではなく、貧しく名もなき村人に助けられ、共に働

き、共に聞いて法灯を伝えてきたものと考えています。

当寺累代の住職は、布教のかたわら農業に従事し、また子弟に読み書きを教えてきました。境内地一帯が「師匠の森」と呼ばれてきたことからも、それをうかがうことができます。

十一世勝浄は自らノミを揮って本堂内陣の欄間を彫り、藩政期からの葉タバコの生産普及に貢献しました。十二世明は、明治初めから二十九年間、生涯を郷土の子弟教育に捧げました。子弟郷党の手により、頌徳碑が境内に建てられています。

十四世敬帆は、庫裡の一部を診察室にして、布教のかたわら医業を営み郷土の保健や厚生に尽くしました。また十五世英は、高等学校長のあと大道町教育長・助役、平成元年から大道町長・助役を勤め町政に貢献しました。

㈣眼下に広がる耕地と共に教えを広めた浄圓寺。

㈤庶民寺院として特徴的な木造聖徳太子孝養像。

寺宝には文化三年（一八〇六）九世妙因の代に本山の本願寺より下賜された木造阿弥陀如来立像があります。また開基が背負ってきたと伝えられ観世音の御分霊も祀っております。

なかでも、庶民の寺院浄圓寺として特徴的なのは木造聖徳太子孝養像です。作者は不明ですが、ヒノキ材寄木造り漆箔像で、全高八・一㌢、像高六・一㌢、肩幅・五㌢。柄香炉を奉持したいわゆる「孝養太子像」です。

洗練された唐絵の文様が衣裳部分に施され、張りのある豊かな像容を見せている美しい尊像です。

聖徳太子を日本仏教の教主と仰ぐ親鸞聖人のお考えから招来しているもので、現世の浄土を祈願した太子の思いを伝えています。

# 産金とキリシタンの名残とどめる

## 静涼山 宗通寺（せいりょうざん そうつうじ）

真宗大谷派

◆稗貫郡大迫町外山目三三・四四
◆電話（〇一九八）四八・九四三〇
ファックス四八・九四三三〇
◆住職（第一六世） 丸田善明

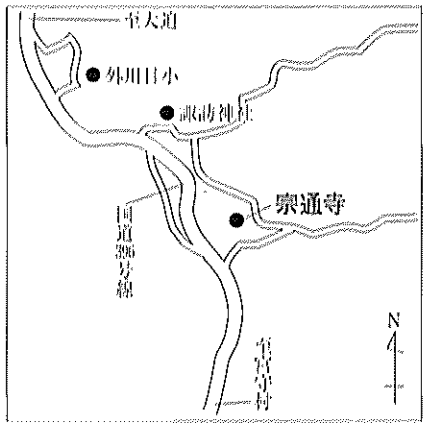
岩手県のほぼ中央部、盛岡市から国道三九六号線を車でおよそ三〇分ほど進むと、岩手県のほぼ中央部に位置する大迫町に入ります。大迫バイパスを過ぎ、遠野方面に向かって…ほどのところに岩脇という集落があり、国道左手に宝形造りのお寺・宗通寺が見えます。八木巻川にかかる静涼橋をわたり山門の前を通る道は、藩政時代、盛岡と遠野を結ぶ遠野街道の名残です。

宗通寺は釋宗哲によって慶長五年（一六〇〇）に開基されたとされますが、「弘治元年（一五五五）」の日付と「本願寺・顕如」の裏書きを持つ阿弥陀如来絵像本尊・軸が開基本尊として伝わっているほか、当時を知る資料はありません。

一六〇〇年といえば中世から近世に移る風雲たけなわの頃、天下分け目といわれた関ヶ原合戦の年。畿内や関東から遠く離れたみちのくでも戦乱の嵐は吹き荒れ、この地方を統治していた大迫氏が天正十九年（一五九一）の九戸政実の乱に同心、破れて逃散した後を治めた南部氏の目代・田中藤四郎を襲った大迫一揆も同じ年のことです。

本願寺から阿弥陀如来の本像本尊の下付と寺号を免許されたのは元禄八年（一六九五）、四世・釋玄栄の時代ですが、それ以前から宗通寺を名告っていたようで、永応二年（一六五三）の「五人組書上帳」にその名が見えます。

草庵は「宗門改め」に連動して寺号を持ち、門徒を抱えるようになっていたのでしょう。やがて寺域を現在地に移して本堂を建立し、本像本尊を安置し「（ママ）寺請寺院」の体裁を整えていったのだろうと思われます。その後、宝暦十年（一七六〇）に改築の現本堂は当時の真宗寺院の様式を今に伝えています。

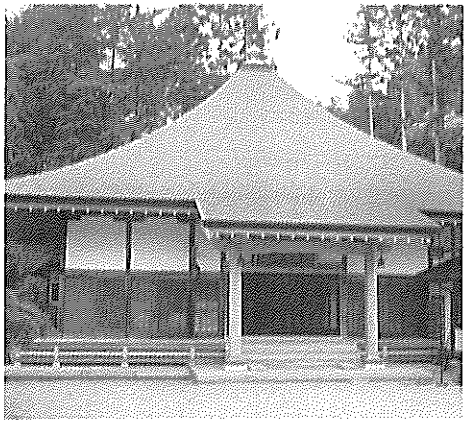



**新興宗教渡来の産金地**
**キリシタンから門徒に**

宗通寺が寺請寺院になった背景には、キリシタンとの関わりがありそうです。

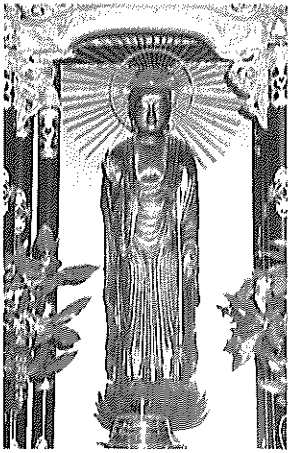
大道郷は日本有数の産金地として知られていました。この地方を流れる川は支流に至るまで砂金があふれ、砂金採掘の技術者の中には新興渡来宗教であるキリスト教の信者になった人たちが数多くいます。釋宗哲が草庵を結んだ頃、大道郷岩脇は現宗通寺裏の小高い丘陵に立つ岩脇館の館主・帯刀（遠野十二郷を領した阿曽沼氏の支流と伝えられる）の勢力下にありましたが、帯刀も、そして大道一揆で日代を討った堂ノ前彦次郎もキリシタンでした。当時、大道土町にすむ町人・理右衛門は東北地方の代表的キリシタンとして知られる後藤寿庵の直弟子で、彼らはその弟子にあたります。

寛永十二年（一六三五）、理右衛門とその家族は盛岡城下に引き立てられ刑死しますが、帯刀や彦次郎などは刑を免れて宗通寺の門徒になり、寺請寺院化に力を尽くします。弥陀・佛への帰依を根拠とする真宗に、一神教徒であるキリシタンの人たちが、共有する心情を見いだしたのかもしれません。仏師の名は分かりませんが、江戸初期の名工によったであろう、精巧な彫刻による豊かな表情を持つ阿弥陀如来を本尊として迎えた人々は、そこに、人間の思惑を越えた深い慈悲を感じたと思われます。



開山以来四百年、宗通寺は天災地変に翻弄され、権力の重圧に苦しめられながら、ただひたすら、大地にへばりついて生きるよりほかなかった山峡の里の人々に、如来の大悲をいきる人生を開いて、深い安息となってきました。

境内の筆塚は、明治九年（一八七六）、当寺に始まった近代教育を記念し、郷土教育の父・鈴木富衛を顕彰して建てられたものです。本堂内欄間の墨絵は、富衛晩年の遺作です。



㈠本堂の大改修を行い面目を一新した宗通寺。

㈡元禄年代作と考えられる御本尊木造阿弥陀如来方便法身像は寺号と共に本願寺から下付。

# 中世の稗貫一族亀ヶ森氏の菩提寺

## 亀林山 中興寺 曹洞宗

◆樺貫郡大迫町亀ヶ森（地図ページ）
◆電話（〇一九八）四八－二六一
◆住職（第二六世）穂積惠祥

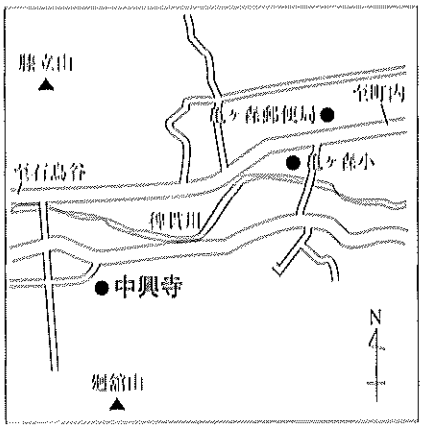
花巻空港から県道・牧橋・大迫線を走り、大迫町に入った最初の地域が亀ヶ森地区であり、その西寄りの稗貫川を渡った南側の丘陵に中興寺があります。ここは中世の館跡亀ヶ森城の置かれた所でした。

中興寺は、その亀ヶ森城主である亀ヶ森氏の菩提所として創建された寺院です。天文年間（一五……～五四）、稗貫氏の菩提所である石島谷の大興寺……世底庵玄徹禅師によって開山されました。底庵禅師は曹洞宗の開祖道元禅師七世の法孫で、その名も高い梅山聞本禅師（大興寺開山）の流れをくむ僧で、幼くして天性英敏、出家得度以来禅の修行に励み、本師綿浜禅師の法嗣となり大興寺……世を継ぎます。その名声が各地に伝わり、請われるままに北上川河東の新堀村（現石島谷町）に金剛寺を開山しました。

その頃は室町幕府の末期で、群雄割拠して民心の動揺が著しい時代だったのです。その当時亀ヶ森城主だった八十沢外記も没落、領主を失った村内は騒然として混迷の状態でした。これを耳にした底庵禅師は、済世の大願心を起して、山を越え草を踏み分けて亀ヶ森の里に錫を転じられたのです。

八十沢外記の後に亀ヶ森図書が転封され、民心統一と開発に努めています。禅師もまた二日市に一枚田の試作地を設り、水田耕作の可能なことを立証して開拓されました。四十八田の先駆をなすなど行の仏法を弘通し、禅師の高徳を慕う信者が多くなりました。そこで図書は天文一〇年（一五四一）頃、信徒一同から浄財の寄進を得て、館の一角に堂宇を建立、亀ヶ森山中興寺と称しました。そして禅師を開祖とし、亀ヶ森氏の菩提所としました。

奥州の仕置により稗貫氏が滅亡した後も、亀ヶ森氏は南部信直との面識から所領が安堵され、大迫・摺や稗貫川



国の蜂起に際しても動かず、信直の信を厚くしています。しかし図書の子亀ヶ森玄蕃の代に、領地は没収されてしまいます。亀ヶ森氏の滅亡により慶長五年（一六〇〇）館は取り壊され、寺だけが残りました。

## 護身仏が縁での観音講
## 雨乞い祈願に石碑建立

玄蕃も信仰厚く、父の護身仏だった丈、寸八分（約五・四㌢）の聞浮陀金（純金の意）の十一面観音を引き継ぎ、守り本尊として甲冑に納め肌身離さず持ち、危難を逃れること度々でした。

身代わり観音として霊験新たかなこの仏像も、花巻の質屋に手離されていましたが、七世万貞の代に信者から浄財を集めて求め、その観音を奉納し数百人の善男善女が長蛇の列をなし、御詠歌を奉唱しながら中興寺に帰還したといいます。これが観音講の始まりで堂宇を本堂の東側に建立しています。

明和五年（一七六八）の大旱魃のとき、万貞和尚が雨乞い祈願を行ったところ突如雨が降り作物は救われました。村人は喜び感謝報恩のため中興寺門前に丈余の石碑を建てました。

大正二年（一九一三）二十世禅真の代に伽藍を焼失しましたが、大正九年（一九二〇）入山した中興・四世大耕豊年の努力によって、同・四年（一九二五）本堂・鐘楼を再建させました。棟梁は小山田村（現東和町）の小原楢山です。唐破風の向拝の彫刻が素晴らしく、正面の懸魚は『瑞雲に鶴』、脇懸魚『瑞雲』などとなっています。

本尊は釈迦如来坐像で、文殊菩薩坐像と普賢菩薩坐像が脇侍となる三尊形式の仏像です。大迫町の文化財に指定されています。

㈩神貴氏から南部氏への変転を見守った本堂。

㈫大正14年再建の本堂向拝彫刻は小山田村小原楢山作で正面の懸魚や脇懸魚の彫りは見事。

# 東北の布教で定着し大迫氏が開基

## 寶鏡山 桂林寺 曹洞宗

◆増田郡大迫町内川目四八・二九
◆電話（〇一九八）四八・二五〇八
◆住職（第一〇世）佐々木邁雄

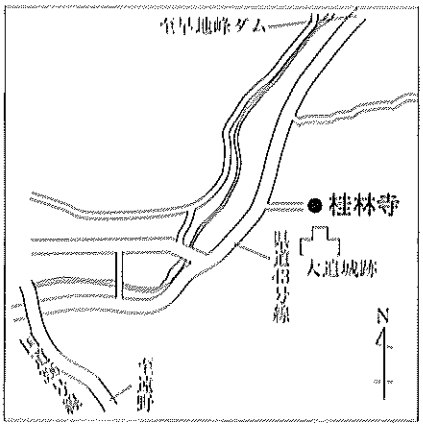
国道二九六号線大迫町の中心部から北東に向かい、早池峰国定公園の方向へ約二キロ車で数分。行手の丘陵に中世の館跡大迫城跡を、また眼下に閉伊川の流れを望みながら、その中腹の小高い丘に位置しているのが桂林寺です。

桂林寺『当山縁起略記』によりますと、桂林寺を開いたのは二世堅山俊廓禅師です。開山・二世は性翁慶守禅師で武州（埼玉県）の人間郡名古谷村（現川越市）の蓮光寺六世です。二世禅師の師のため勧請して開山・二世になって頂きました。二世禅師は長崎の人で、一二歳のとき蓮光寺六世につき出家得道しています。天文四年（一五三五）東北地方に布教の旅を続け、留まった所が外川目村（現大迫町外川目）で、同七年（一五三八）に草庵を結び、この地を生国にちなみ「長崎」と名付けています。禅師二五歳のときです。

天文一二年（一五四三）外川目村旭ノ又に馬鳴山東林寺を開きました。現在はその寺はありませんが、寺跡といわれる場所が、寺地の地名で残っています。ここに一七、八年間いました。

永禄八年（一五六五）時の領主大迫右近の招きによって大迫城の近くに伽藍を建立したと伝えています。

大迫氏は稗貫氏の支族ですが、和賀氏との関わりも深い一族です。すなわち和賀薩摩守義治の弟守行は、大迫遠江守為弘の嗣子となったと伝えられる大迫行盛です。和賀忠親の叔父にあたり、行盛の子が大迫右近です。




### 主家が大迫一揆で没落 南部藩政下も浮提弔う

奥州仕置により主家の稗貫氏が没落、大迫右近は九戸政実に味方しましたが破れて旧領に戻り、重代の山緒や宝物を桂林寺に預け、一族は四散しました。

大迫右近は長子又一郎、次子又右衛門と江刺郡の人首に隠れ、伊達政宗を

頼り時期を待ちましたが行遅は病没しました。その後俘囚郡は南部領となりますが、慶長五年（一六〇〇）大迫又二郎兄弟が旧領回復しようと、援を起します。大迫城は夜討ちを受け、南部側の守将田中藤四郎は討死、大迫又二郎兄弟は本領を奪い取ったものの、同時期の和賀・援が不首尾に終わるなどで再び伊達領に逃げます。

そして又二郎は、翌年岩崎・援に参戦し討死。弟の又右衛門は南部氏に降ったが、成敗されて大迫氏は亡んでしまいました。桂林寺では大迫氏が没落し、南部氏の支配下になった後も、菩提寺としてその墓と位牌を大切に安置しています。

四世生岸芳天の代、寛永・七年（一六四〇）に火災を出し、本堂・庫裡・山門などすべてを灰燼と化しました。

現在の本堂は、四世単元全提の大誓願によって、文化九年（一八一二）三月、五年の歳月をかけて完成しています。時のお金で千八百貫文と記されており、現在では数千万円の巨額にのぼるものと考えられています。

九世霊洪良伝の代に本堂の大修理を行い、また開山堂・観音堂を新築。更に延享二年（一七四五）以来朝夕打ち鳴らし続けた大鐘楼も戦争で供出、しかし新鋳され「桂林寺の晩鐘」も八景の一つとして親しまれています。

寺宝には本尊釈迦牟尼仏像・阿弥陀如来像など仏像のほか、鋳金・染織物など沢山ありますが、大迫町文化財指定は十一面観音半伽像と秋葉山三尺坊大権現立像の二つの仏像です。

㈭奥州仕置きで、主家没落後も菩提を弔った桂林寺。
㈮大迫町指定文化財「秋葉山三尺坊権現」の表と裏。

# 仏様 さまざま ④

## ■十六羅漢・五百羅漢

顔の渋い頭の凸凹した男をみますと羅漢面といいます。羅漢様はよくよく女に縁のない方々の寄り合いです。だからこそ修行ができて立派な僧になられたのでしょう。羅漢様はそろいもそろって醜面です。

羅漢というのは、大体修行の位の名で、正しくはアルハン、阿羅漢と呼び、殺賊・無学・応供または真人などと訳します。煩悩を断ち、仏道を修行して、限りない功徳をそなえた人々のことです。十六羅漢は著名な仏弟子で、仏教の教えを護り広めることを誓って、釈迦の生前や没後に活躍しました。第一、尊者から第六尊者までのうちピンドラバラダージャは日本の民間信仰のオビンズル様で、賓頭盧尊者といいます。

死者の安住往生を導き、また患部と同じ部分をなでると治癒すると信じられてきました。

五百羅漢は五百の羅漢様というよりも、多数の羅漢様という意味で、各尊者には名はなく、服装は印度僧西域の僧や中国僧などを連想させます。珍しいものには、額の上に手をかざし彼方を望むマルコポーロ像や威厳のあるフビライ像もあります。

## ■烏枢沙摩明王

便所を守る仏様、として知られますが、医者の真似や御祈祷が上手で、除病・愛敬・受福・敵伏などに効験あるといい、特にこの方が祈願すると生まれるべき女子が男子に変わるといいます。不浄を司るほかに、安産や産穢の祓いにも祀られます。

## ■韋駄天

四天王、三十二将の首班にあって韋駄天将軍の名で通っています。甲冑を着て両手に宝剣を捧げ、勇猛な武人の典型です。性は聡明で行状きわめて清浄、一切の欲から離れて、釈迦から仏法の外護を命ぜられました。東・西・南の三州を守ります。

伽藍の守護神としてお寺には必ずこの仏様を祀っています。

## ■達磨大師

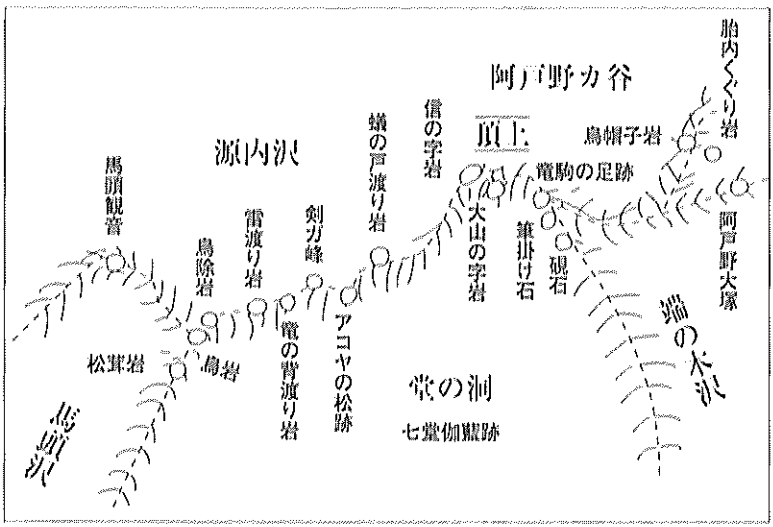
本名を菩提達磨といい、南印度の香至国王の第三子です。命がけで中国に渡り面壁座禅九年、尻も腐ったとの風評まで出たといわれます。

# 寺院に伝わる

# 伝説・文芸

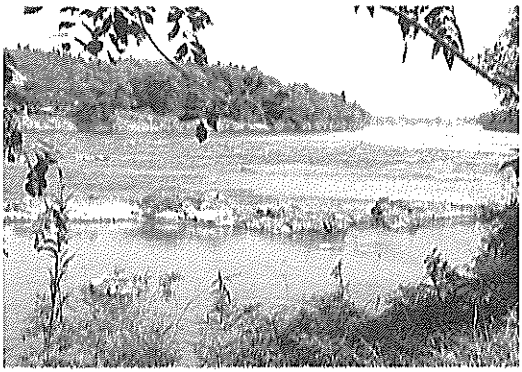
お寺や神社には地域にまつわる伝説が数多く伝えられています。その伝説で圧倒的に多いのは古代のお話で、未だこの地方が大和朝廷の支配下にならず土着の蝦夷が治めていた頃、大和朝廷への教化を意図したものなのか、龍や大蛇が登場しそれを退治しています。また中世に入ると、悲運の和賀氏に関するもの、近世では貧しい南部藩内の圧政への農民の悲しみのお話が最も目立ちました。

文芸では宮沢賢治と高村光太郎、それに城下町花巻には文筆家や絵師、また彫刻家や俳諧師なども育っています。




㊧北上市の萬蔵寺の裏山も境内の一角になっていて、かつては吉野系修験者の修験道場として使われていた。ここを阿古野カ谷と呼び公家の娘阿古耶姫の伝説が今に伝えられる。

# 伝説（でんせつ）



㊤北上川の中流域北上市黒岩地区には川底の岩盤が露出していて、この岩をテーマとする伝説が数多くある。

㊦東和町毘沙門堂の伝説の主「山王天龍」と呼ぶ大蛇を祀る供養の石碑。

## 修験道場だった裏山に阿古耶姫伝説が伝わる

慧覚大師開基と伝える北上市の萬蔵寺（86頁）は、かつての天台宗の古寺として数多くの仏像を祀っています。その境内は広く裏山の山頂まで、百㌶に及ぶ広大なものです。

裏山は金峰山（……m）で、別名阿古耶と呼び修験者の修行道場であったと伝えています。現在でも独鈷水・観石・笠掛け石・龍の背渡り岩・剣ヶ峯など名跡がありますが、ここに伝わる伝説はロマンに満ちています。

慶雲四年（七〇七）右大臣藤原豊成卿が流罪になったとき、娘の阿古耶姫は難を逃れて、家臣源内の出身地の当地に逃れ、隠れ住みました。そして、神亀四年（七二七）この地で亡くなっています。山頂の東側に阿古耶姫を葬ったとのいい伝えが残る大塚があります。

現在、この周辺一帯を阿古耶谷と呼んでいるのは、実は山頂の北裏の鳥帽子岩（隠岩）胎内潜り岩のある沢に、阿古耶姫が隠れ住んでいたので、そのように呼んだのだと伝えています。

また歴史の長い寺院や神社には、七不思議と称する珍しい事物を伝えていて、国見山極楽寺（66頁）では七種類の植物を選んでいます。萬蔵寺の縁起にもあって、ここでは十項目を選んでいます。その中の四番目、「阿伽ノ井」（閼伽ノ井）は、仏様に供える水のことですが今は枯れました。同名の湧水で今なお健全な湧水は、石鳥谷町長谷寺

の杉巨木の根元に湧いています。

## 大蛇が姿を変えた岩盤
## 黒岩の地区に残る伝説

流刑の地だった奥州に大和朝廷が目を向けて計略の手をのばし、水沢に胆沢城を築き、北上に極楽寺を建てました。蝦夷地であったこの地方には、アテルイやモレのような蝦夷の勇者がいて大和朝廷軍と戦い、その名を天下に知らしめますが、征夷大将軍坂上田村麻呂の登場により戦況は大きく西に傾いていきました。

この地方には、坂上田村麻呂ゆかりの寺院や神社が数多く、東和町の毘沙門堂（112頁）もその一つです。ここには、山王大龍と呼ぶ大蛇にまつわる伝説が伝えられています。

それは、この地から約二百m離れた大蛇沼に棲んでいた山王大龍と呼ばれた大蛇は、水を司り田畑をうるおしていました。ところが坂上田村麻呂によってこの大蛇は沼から追われ、狼ヶ石川を経て北上川を流れ下り、北上市の黒岩で黒い岩となったというのです。これによって大蛇沼の水は涸れ、農民は困窮したと伝えています。

これに類似した伝説は石鳥谷町光勝寺（212頁）にも「蛇ぬめり」の伝説として伝えられています。ここでの話は「寺の池に棲む大蛇が子供を飲み込んだので、住職が祈祷を行ったところ、大蛇は苦しみに耐えきれず、北上川に入って流れ、北上市黒岩で一つの黒い岩となった。その大蛇が這った跡を蛇ぬめりと呼ぶ」というお話です。

㊧宗賢寺境内には一日千八百㎥が湧く「十石」と呼ぶ湧水がある。源義家や安倍貞任の伝説が伝わる。

いずれも渇水期には北上川の川底が露出して、龍の形の岩が見える北上市黒岩地内の岩場にちなむ伝説です。

蝦夷地と大和朝廷にまつわる伝説は、北上市の修験道場正覚院（54頁）にもあります。坂上田村麻呂に滅ぼされ達谷窟に住む悪路王の弟大竹丸が、この地方を拠点として抵抗していました。

ある日、田村麻呂の家臣田原阿波守兼光が矢を射たところ、その矢を大竹丸が石手で受け止め大地に投げ捨てたといいます。この周辺を現在でも大竹集落と呼んでいます。

## 弓のはずで清水が湧く
## 伝説生む源氏や安倍氏

みちのくの地が大和朝廷に支配された後も、蝦夷の血を引く豪族が勢力を

伸ばしますが、その頂点に立ったのが安倍一族でした。

その勢力を押えようと大和朝廷は、源氏を派遣して、十二年間に及ぶ戦いが行われることになります。当初は優勢だった安倍貞任も、源義家に追われて北へ逃亡、その途中には数多くの戦跡が今もなお戦いの激しさを伝えています。北上山地に入った源義家は、早天続きで飲料水に困っていましたが、弓のはずで岩を突いたところ清水が湧き出たという「十石」の泉が、北上市の宗賢寺（82頁）境内に残っています。一日に十石（約千八百ℓ）が湧くのでつけられた名称といいます。なおこの説と別に、安倍貞任が馬に飲ませるために矢尻で突いたのが湧き出たのだとも伝えられています。

戦乱も納まり東北巡行の旅に出た西行法師が数々の歌を残したと伝え、極楽寺には「みちのくの門岡山のほととぎす　いなせのわたり　かけてなくらん」と詠んだと伝えられています。

## 悲運の話題綴る和賀氏開山伝説にも悲しい話

時代は武家社会となり、群雄割拠を経て鎌倉幕府が確立してから、各地に御家人が配置され統治が行われます。北上・花巻地方には、和賀氏や稗貫氏にそれぞれ領地が与えられました。

㊨本妻の奸計で将軍寺本堂前で殺された妻の怨霊は一家断絶に追い込む。殺害場所に灯篭を立て供養する。

その和賀氏がこの地に定着するに当たって、北上市の正洞寺（102頁）には、つの伝説が伝えられています。それによりますと、和賀氏の先祖は源満仲であり、その子美王代丸（別名美丈丸）は素行が悪く、父から勘当を受けて摂津国多田の里（現兵庫県川西市）の正洞寺に預けられますが、後に奥州へ下って和賀の里に住みつき、寺を建立したというのです。

これにはつぎのような悲話が隠されています。満仲の三男美丈丸（後の満賢）は、父の怒りを買い家老の藤原仲光に美丈丸の首を取るよう命じます。しかし仲光は幼い美丈丸を殺すにしのびず、わが子幸寿丸の首を身代わりに差し出しました。

出家した美丈丸は、幸寿丸のために、寺を建立したのが現在の正洞寺であるというのです。従ってこのお寺の開山堂には身代わりとなった幸寿丸の小像を祀っているほか、開山の美丈丸は

皇室の流れをくむ家柄のために、本堂の屋根に菊の紋章を飾っています。

和賀氏関連の伝説には、花巻市の将軍寺（180頁）にも伝えられています。このお寺は、和賀氏の一族藤木兵庫頭が開山しますが、その子長石衛門の妻と愛妾の争いのお話です。妻の奸計によって妾を殺した長石衛門は、その後本妻に妾の怨霊が取りつき若死、長石衛門もその年に死亡、世継ぎがなく藤木家は亡んでしまいました。

このほかに北上市の染黒寺（96頁）には、北上川のカッパ伝説があり、また和賀氏の菩提寺永明寺（94頁）には飛勢城落城の際に鎧を投げ捨てたとされる北上川の鎧ヶ淵の伝説が伝えられていて、今もなおその周辺は深い淵として北上川の難所の一つです。

稗貫氏の重臣根子大和守が開基した、と伝える花巻市の昌歓寺（184頁）には、「妖怪石」または「岩上石」と呼ばれる伝説が伝えられています。

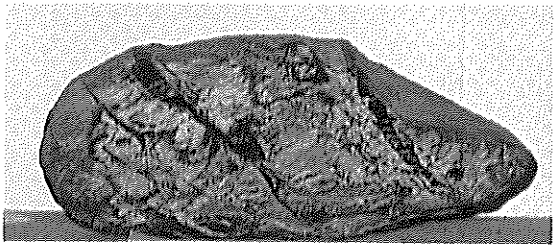
## 開祖による落慶の法要 光を放つ不思議な俵石

今から七百数十年前、時宗を開いた一遍上人を導師に、石鳥谷町の光林寺（224頁）の落慶法要が行われました。

この法要を行っていたとき、「西の林から光」が差して、天地を輝かせたと伝えています。このことから、寺名が光林寺となり、またその光を放ったとされる石「俵石」は、現在寺宝として大切に保存されています。

承久の変によって江刺の地に流刑となった祖父河野通信の菩提を弔うため聖塚を訪れた一遍上人は、この地でススキ念仏をあみ出します。そして、後を継いだ遊行上人と共に光林寺を拠点に布教を行ったと考えられています。

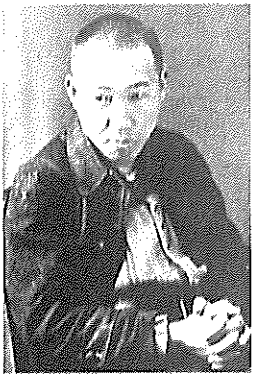
近世に入ると、この地は南部氏の支配下に置かれますが、伝説として最も知られているのが、沢内村の浄円寺（140頁）に伝承されている「およね伝説」です。人身御供は、この地方の貧しさを象徴しているかのようです。一方花巻の円通寺（191頁）には、外俵と呼ぶ長者と北上川に棲む大きな龍のお話。長久寺（178頁）には「狐」にまつわる伝説が伝えられています。また専念寺（161頁）には南部藩四天王の一人相馬大作に関わる伝説があります。



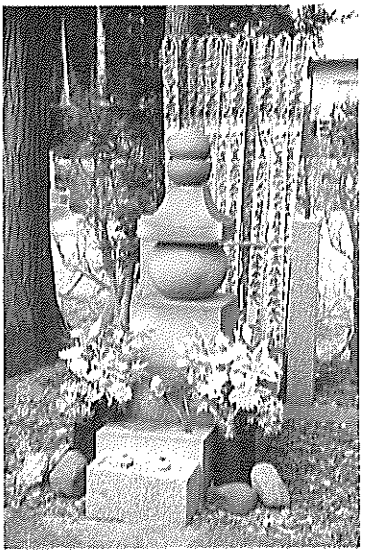
㊤時宗の開祖一遍上人が導師となり落慶法要しているとき「西の林より光」が差し天地を輝かせた。上人は「この光、衆生念仏信心が厚ければ、お救いの目出度い印である」と申され、これにより寺名を光林寺と定めたという。光を放った石は「俵石」といい光林寺寺宝として保存されている。

# 文芸（ぶんげい）

晩年の高村光太郎。



羅須地人協会時代の宮沢賢治。



父政次郎により日蓮宗身照寺に葬る。

## 花巻で生涯送った賢治
## 法華経に傾倒国柱会へ

北上・花巻地方で文芸を語るその人物といえば、宮沢賢治と高村光太郎でしょう。宮沢賢治は花巻に生まれ、短い生涯を花巻で終えますが、その間に残した数多くの童話や詩の作品は今もなお多くの人々に愛されています。

一方東京に生まれた高村光太郎は、昭和初年から賢治と親交を深め、昭和二〇年（一九四五）戦争による疎開で花巻を訪れ、以来約七年間独居自炊の生活を送り、この間に詩や彫刻の作品を各地に残しています。

賢治は昭和八年（一九……）病気のため…八歳で生涯を閉じましたが、父への遺言として『国訳妙法蓮華経全品約予部の出版と知己への寄贈』を残しました。そして父政次郎によって、日蓮宗身照寺（204頁）に埋葬されました。

詩人や童話作家としての賢治は、生前に出版したのは詩集『春と修羅』童話『注文の多い料理店』の…冊だけですが、死後にすぐれた作品があることが判り、数多くの作品が、研究者の手によって紹介されています。

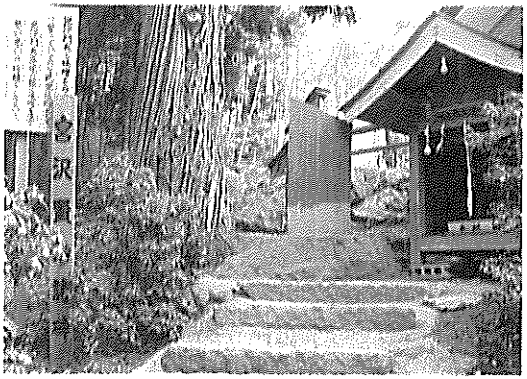
花巻市延命寺（188頁）に伝わる詩は幼い頃遊んだ地蔵堂の巨大な杉を詠んだもので、無題ですが『春と修羅』第…集に掲載されています。

また東和町の毘沙門堂には、お経の言葉にも似た「アナクロナビ」にはじまる詩の作品を残しています。これはこの地方にひそかな民間信仰として伝

えられていた「毘沙門天の脛に味噌を塗る」風習を題材にしたものです。この奇習によって家内安全・無病息災・商売繁盛・交通安全を祈りました。

賢治の家は代々浄土真宗であり、賢治も幼少の頃から阿弥陀仏の教えを信じていましたが、中学の頃から法華経を信ずるようになります。

法華経は八万四千の経典のうちで、大乗仏教の真髄を説かれた尊いお経であるといわれます。法華経全体は華やかな文章と雄大な構想をもって永遠の大生命を賛歌していることから、賢治のように科学的・宗教的・文学的才能に優れている人は、このお経に心をひかれたものと考えられています。



㊤毘沙門天の脛に味噌の民話テーマに作詩した賢治。

大正七年（一九一八）に、盛岡高等農林学校を卒業した宮沢賢治は、東京の国柱会に入会しました。この会の会長は田中智学で、純正の日蓮主義を鼓舞し、無気力な寺院や宗門を離れて、もっぱら日蓮宗を普及するために在家仏教の団体をつくられた方です。

賢治はその日記の昭和四年（一九二九）八月五日の項に、「上沢の人は小原日勝（通勝の誤り）病気は信仰の足りぬせいと難じる。熱心な法華信者」と書いていますが、その小原通勝は教育者から信仰の道に入り、東和町の実成寺（136頁）二代、日心上人となられた方でした。この田中智学の教えに基づいて布教を行っているお寺があります。それは北上市の法華経信行会妙宗寺（110頁）です。

## 傷心いやす独居の生活
## 抒情詩・智恵子抄出版

高村光太郎と賢治の交流は、賢治が文京区駒込の光太郎のアトリエを訪ねたことに始まるといいます。光太郎の最愛の妻智恵子を、昭和一三年（一九三八）に精神分裂症で失った光太郎は、その心の痛手をいやすために、花巻に居を構えたのでした。智恵子の死後七年を経てからです。

雪深い山荘に一人でこもり生活する中で、智恵子への愛はより一層深まって、昭和一二年（一九四七）には北国の山村から抒情を結晶させた「智恵子抄」を世におくったのでした。

光太郎は終戦直後、戦災によって焼失した焼跡に建つ花巻市松庵寺（156頁）の仮本堂で智恵子の回向を行っていま

す。そのとき書き残した詩「松庵寺」の詩碑が境内の一角に祀られています。

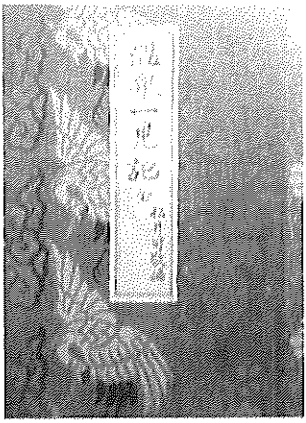
奥州花巻といふひなびた町の
浄土宗の古刹松庵寺で、
秋の村雨のふりしきるあるその命日に
まことにささやかな法事をしました
花巻の町も戦火をうけて
すっかり焼けた松庵寺は
物置小屋に須弥壇をつくった
二畳敷のお堂でした
雨がうしろの障子から吹き込み
和尚さまの衣のすそさへ濡れました
（以下省略）

(上)松庵寺仮本堂で智恵子を供養、詩「松庵寺」を奉納。

## 城下町花巻の文芸家達
## 親子文筆家や絵師三人

城下町花巻市には、江戸時代にも文芸に秀でた人物を数多く輩出しています。代表的な文筆家として知られる松井道円は、医師として花巻城に仕えたほか、友梅と号して詩歌や郷土史を書き、地方文化の向上に大きな足跡を残しています。

その代表作には「昔語むかし物語」があって、四十編からなっています。花巻に関する文章は、円万寺鐘の事、稗貫殿夢想の事、永享年中和賀・稗貫・乱の事、とうせん坊の風の由来、清助俄かに有徳に成りし事などが記されています。このほかに「和賀・稗貫郷村史」も道円の著作ではないかと考え



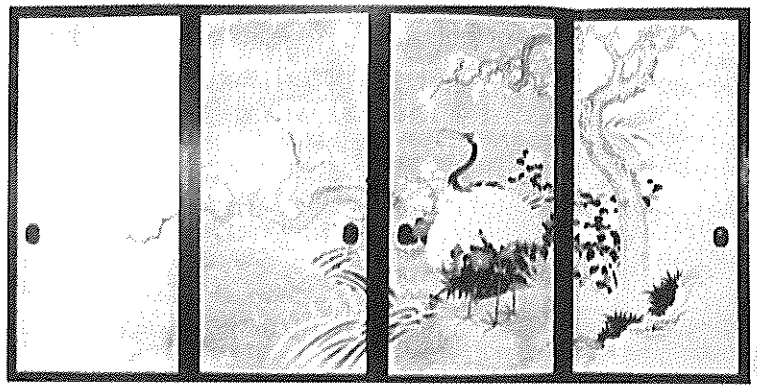
(左)父と共に台温泉を訪れ著した「温泉」見記」。

られています。道円は享保・年（・七・六）に没し、墓地は妙円寺（172頁）にあります。

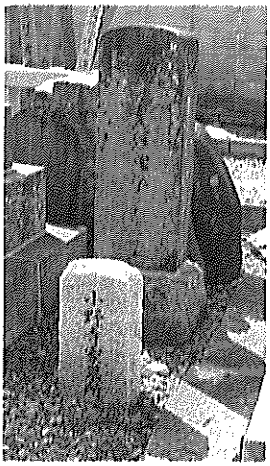
道円の子息、松井可敬も父と同じく文筆家であり、医師でした。著書には「台温泉・見記」があります。これは父道円がたびたび湯治に訪れた台温泉のありさまを書き記した紀行文で、道円の五回忌に当たる享保・六年（・七・・）に同行されています。

絵師としては花巻・画人と称される小野寺周徳、八重樫豊澤、橋本雪蕉がおります。小野寺周徳は宝暦九年（・

七五九）に生まれ、五六歳で亡くなっていますが、最も活躍したのが文化年間（一八〇〇～一四）の約十年間の時期といわれます。谷文晁に直接師事し多くの作品を残しました。代表作には東光寺（182頁）本堂天井にある「龍図」、また「花鳥図」では妙円寺（172頁）旧蔵の襖絵八枚があって、花巻市指定文化財です。現在花巻市立博物館建設準備室に寄託されています。周徳が葬られたのは広隆寺（158頁）ですが、ここにも「十六羅漢」の杉戸絵などが保存されています。



㊤妙円寺旧蔵の周徳「花鳥図」花巻市指定文化財。㊦広隆寺に祀る周徳の墓地。



小野寺周徳に師事したと伝える八重樫豊澤は、天保一二年（一八四一）に花巻に生まれ、八〇歳で没するまで数多くの作品を残しています。

屏風絵や襖絵もありますが、軸装や額装が多く作品は主に個人蔵です。宗吉寺（102頁）には「大黒天図」の軸装が保存されています。瑞興寺（190頁）に葬られました。

豊澤には門人に橋本雪蕉と菅原黒川がおります。黒川は黒沢尻（現北上市）で活躍しますが、東光寺の襖絵八枚には、「唐獅子に牡丹」などを描いています。また雪蕉は、八戸の豪商橋本八右衛門の弟子となり、援助を受けて江戸で活躍しました。そして雪蕉の弟子が東和町の菊池默堂であり、その弟子の菊池春香は、東和町の浄珠院（120頁）に葬られています。

## 建築や彫刻に腕振う匠
## 自作の墨絵で寺の再興

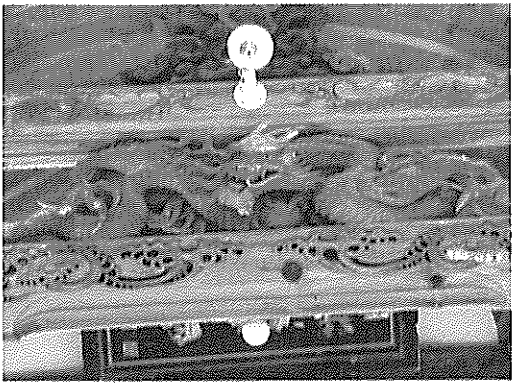
南部藩が誇る規矩師（彫刻師・大工棟梁）として活躍したのが、初代高橋勘次郎です。花巻城の同心釜津田藤左衛門の次男として寛政六年（一七九四）に生まれました。

そして九歳のとき大工春公に入ります。建築の技を磨き棟梁となりますが、彫刻の道に進むには数学や絵を学ぶべきとして、十九歳のとき長男豊吉と共に近畿・山陽地方に遊学。帰郷に際し江戸に立ち寄り、画師をしていた実弟橋本雪蕉に再会し絵画を学びました。

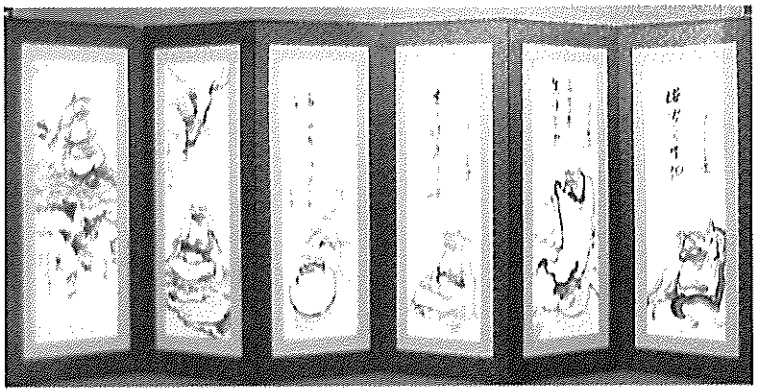
初代勘次郎はこの地域の民家建築はもとより神社や寺院の彫刻も数多く手掛けて、その名工ぶりを内外に知らしめました。例えば石鳥谷町大興寺（230頁）の境内にあって今なお信仰を集めている十仏観音堂は、天保二年（一八三一）に建立した建物ですが、向拝の柱の三方、正面唐戸、四方の欄間、腰懸回等に彫刻を行い、中でも昇降の両龍は素晴らしく、初代勘次郎が七ヵ年の歳月をかけて完成しました。

二代目勘次郎も父にも優る名工でした。花巻市の宝昌寺（202頁）では本堂の修理が度々行われていますが、慶応四年（一八六八）には本堂の向拝の彫刻を勘次郎が行い、その見事な彫物に参拝者を驚かせています。

和賀地方で彫刻で活躍したのは、東和町浄珠院（120頁）の開基の子孫である小原玉光です。黒沢尻（現北上市）の川岸から養子として入山、同寺には十六羅漢の一人賓頭盧尊者像と半託迦尊者像の二つの仏像を奉納しています。また生家の菩提寺である北上市染黒寺（96頁）には、本堂の欄間と賓頭盧尊者像が、二回の明治の大火にも逃れて保存され信仰を集めています。



㊦二代目勘次郎も名工で，宝昌寺本堂の向拝の彫刻。



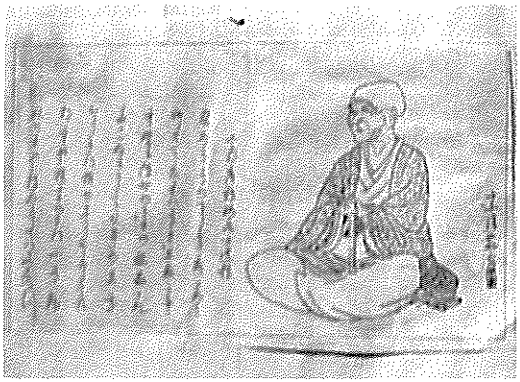
㊧凌雲寺二一世霊戒は火災で焼失の本堂再建を願い達磨の墨絵を資金に充てた。

火災による本堂再建を願い、墨絵の技術を活かして復興資金を集めた住職もいます。東和町凌雲寺（128頁）：：世霊戒元孝で、「達磨の霊戒」と呼ばれるほど墨絵の腕前をもつ住職でした。各地で達磨図を描き、頒布し資金を調達しました。それは霊戒五：歳から七：歳で亡くなるまで続きました。現在寺院には厚紙はもとより会館の襖絵、屏風などにその作品が数多く残されています。また「霊戒の達磨」のファンも多く市場価格も高まっています。

## 庶民の間に普及の俳句
## 漂泊の俳諧師も育てる

江戸時代の俳諧師として、北上・花巻地方で指導的立場にあったのが伊藤鶏路です。寛延元年（一七四八）花巻に生まれ、名を皓、号を笠山、俳号を鶏路、一月庵と称しています。

医師として花巻城に仕えるかたわら文人としての活躍も目覚しく、芭蕉の俳風をとり入れた俳句の指導を行って、和賀・稗貫両郡内で活躍、中央の俳壇にも多くの作品が取り上げられています。現在直筆の短冊「大切な花と成りけり山桜久良」と絵師八重樫豊澤の描いた肖像画（鶏路の良夜吟の賛があり）は、ともに花巻市の文化財に指定されています。文化：年（一八：五）六七歳で没して地蔵寺（186頁）に埋葬されますが、現在は十：丁目の円通寺（191頁）に移されています。

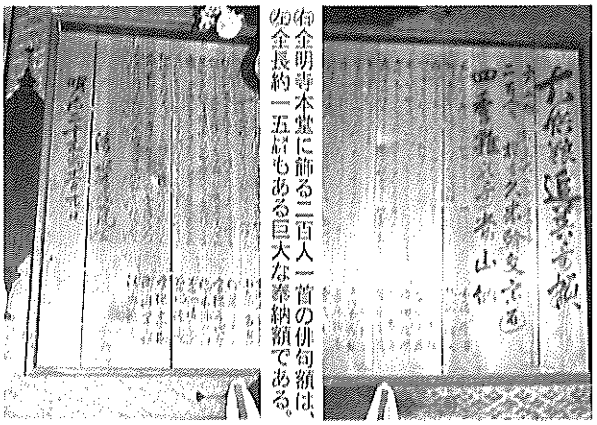


㊾医師で活躍しながら俳句の指導に当たった伊藤鶏路。

江戸時代末期から明治時代にかけて・般庶民の間に俳句の熱が高まりを見せますが、特に北上川舟運で栄えた黒沢尻（現北上市）の川岸港の宿場は、染黒寺（96頁）を中心に俳諧が盛んに行われました。

そこで指導的立場にあったのが、立花（現北上市）の橘中庵錦苔で、その門人には：遷（八重樫助九郎）・調（小山島万次郎）錦丈（清水佐七）などがおります。立花毘沙門堂（萬福寺）が再建された天保四年（一八：：）の十年後の毘沙門祭に、錦苔作の七福神の句七句に門下生の黒沢尻連中と川岸連中が添句して奉納しています。

地元に留まらず、蕉風の昂揚を願って全国を漂泊した俳諧師も輩出しております。南部鬼柳の里（現北上市）に享保・六年（一七：：）に生まれた：草で、当初、也泉庵・草や時雨坊・





金明寺本堂に飾る二百人一首の俳句額は、全長約一五㍍もある巨大な奉納額である。

の句碑が各地に残っており、染黒寺観音堂境内にある「川上と此川しもや月の友」の句碑もその一つです。

北上市の称名寺（100頁）には、奥州俳壇四天王の一人岩間乙二と、盛岡の平野平角合作の句碑があります。これは真雅（平野屋長七）の追悼句として立てられたものです。

北上市金明寺（108頁）には、本堂正面に、縦一㍍、横一㍍五㌢の巨大な句額が掲げられています。大供養道善歌額第二号「一百人一首」として、北上地方の有名無名の作者一八人が、それぞれ一句ずつ寄せた句額です。奉納した明治一五年（一八九一）といえば、鉄道が東京駅から盛岡駅まで開通した翌年のことです。奉納の目的は不明ですが、少なくともこの句額によって北上地方ではいかに俳諧が盛んであったか知ることのできる貴重な資料です。

なお花巻市清水寺（146頁）にも、金明寺より一年前に「百人一首　観世音奉額」が納められています。

江戸時代の伊達領内でも俳諧は盛んだったようで、北上市宝積寺（84頁）の住職は素堂という名の俳人でした。前沢町の大肝入鈴木常雄は俳人であり歌人で、そこに所蔵の俳書誌「水竜集」には、住職をはじめ一八人の一門内の人達の名前が登場しています。

近世における文芸復興の動きは庶民や領主を問わず盛んで、その集大成ともいえる書画帖「鈴村八景画帖」が花巻市の安浄寺（124頁）に保存されています。これは慶応二年（一八六六）時の藩主南部利剛公が中心にまとめたもので、鈴温泉周辺の景勝地八景を選び、南部藩抱えの絵師八人に描かせて、それに南部利剛公など八人の文人が歌を寄せました。湯元にあった安浄寺が懇請して拝領したものでした。

なお翌年、南部利剛公は、大沢温泉まで逍遥し、絵師川口月嶺に絵を描かせて「大沢八景」を著しています。

# 寺院が守る

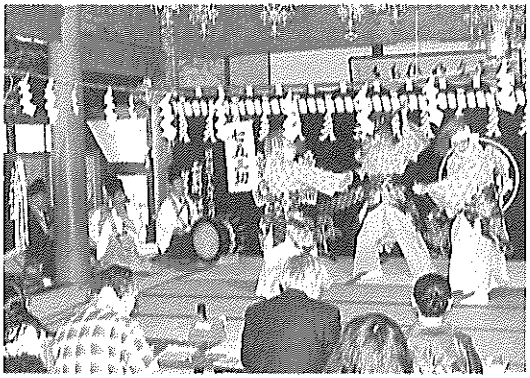
# 芸能・人材

岩手県内には千四百団体に及ぶ民俗芸能が伝承、東北六県内ではもとより最高です。青森・秋田・山形の三県の総数を合わせてもなお多く、なかでも北上・花巻地方には集中的に伝承、しかもその種類は多彩です。民俗芸能は祈りの手段として発祥、神仏へ帰依する芸能が多い中で、現在もなお寺院との関わりを持っている民俗芸能は多くありません。

武家が中心の社会において、一般庶民が名をなすためには事業経営により財をなし武家との結びつきを強めることや力士となって出世することがその早道でした。

㊤平安時代からの古刹を守っている北上市の安楽寺では、地域に唯一伝承している民俗芸能「門岡念仏剣舞」を寺院の行事に組み込んでいる。現住職の晋山式における記念撮影。

# 芸能（げいのう）



㊤慶昌寺で毎年行われている和賀大巣神楽旧正月公演。

㊦かつて慶昌寺詣の主役であった媒孫雛子剣舞公演は今は見られない。

## 修験道の影響深い芸能
## 関わる時宗の踊り念仏

民俗芸能は人間のなしえないことに対して祈りの手段として伝えられてきました。その祈りの対象は自然であったり、神仏であったり様々ですが、それが何時どのようにして広まったのか定かではないのが実状です。

ただ、ついえることは、各種の芸能の所作に共通するのが修験道の呪法（じゅほう）の所作です。北上・花巻地方には修験道寺院が百ヵ寺ほどあったと伝えられ、その布教の手段として民俗芸能が演じられたのが、現在のように広まった原因ではないかと考えられています。

・方北上市内には、踊り念仏として知られる時宗を開いた一遍上人の祖父河野通信の墳墓が伝えられています。

・遍は祖父の供養のために、この地で初めてススキ念仏回向を行いました。この念仏作法は、時宗にとって…大念仏の・つといわれております。

・遍上人はひたすら踊り念仏と念仏のお札をくばって遊行の旅を続けて往生をとげました。その上人の教えによって、民俗芸能が花開いていったのではないかとも考えられます。事実、遊行の旅を続けた県内の道筋に沿って、後に時宗の寺院が建てられ、念仏系の芸能も数多く伝承されています。

その・遍上人の祖父河野通信が承久の変に敗れて流されたのが、現在の北上市の安楽寺（64頁）であり、このお寺ではその墓地「聖塚（ひじりづか）」を守っていま

す。地元に伝承の門岡念仏剣舞は、このようなことからお寺の仏事に組み込まれて演じられてきました。

## 芸能で伝える念仏回向
## 寺と関わり廃れる芸能

一遍上人と従兄弟だったことが縁で伴氏郡司林城主河野通重が開基となり、時宗の寺院光林寺（221頁）を開いています。河野通重が何故この地に定着したのか判っていませんが、伴氏氏等と共に平泉討伐に参加し定着したのではないかと考えられています。従って伴氏氏との関わりが深く、伴氏氏六代目の後行は城主通重の孫に当たっていて光林寺に葬られています。

ところで、光林寺は、城主の嫡子河野通次が京都に在番中、一遍上人の説法に感動、仏に帰依して名を順道と改めました。そして後に光林寺の開山となりますが、それにはつぎのような伝説が伝わっています。

宿阿順道は、熊野権現の霊夢によって豊沢村（現花巻市）の古屋場平に草庵を結びました。そしてそこに住む樵夫達と共に、別時念仏によって法要を行っていますと、豊沢川が滝のように

豊沢ダムの建設によって、現在花巻市内中心部に移転し伝承している豊沢大念仏剣舞は、光林寺と関わりの深い芸能である。

波打ってきて、突如水中から金色に輝く木仏が現われました。そのご託宣によって仏像を安置する寺院光林寺を建立しその開山となったというのです。

その由緒ある豊沢の古屋場平は、現在光林寺公園として整備されており、またその時の別時念仏は、民俗芸能豊沢大念仏剣舞の踊りに組み込まれて、現在に伝えられています。

この民俗芸能は、芸能分類上「大念仏」に分類され、最も仏教色の濃い念仏踊として、主に花巻市から盛岡市にかけて普及しています。この芸能が変化したのが北上市に伝承する鎌子剣舞です。可愛い女の子供達だけで演じられており、踊手の中には坊子の役もあって、時宗の踊り念仏の影響を強く感じさせる民俗芸能です。

北上市和賀町煤孫地区に伝承されている煤孫鎌子剣舞は、地域の菩提寺慶昌寺（106頁）で行われる旧暦七月・六日の慶昌寺詣の主役を演じていました

が、時代の変化によって現在では殆ど演じられることがなくなりました。

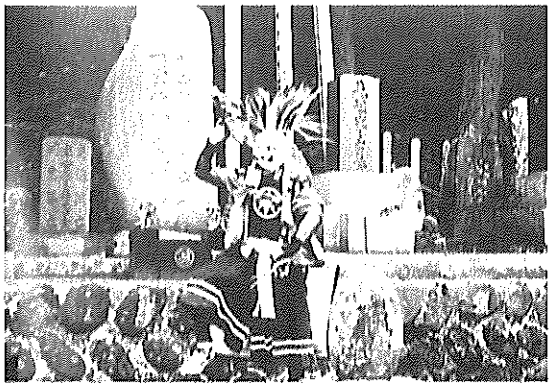
## 仏教との深い伝承由来
## 舞を建て演ずる芸能連

北上地方には修験道の影響が色濃く残っている「大乗神楽」が数多く伝承されています。この神楽は神道の影響が強い早池峰系の神楽と異なって、舞手は白装束を着用し、錫杖を持ってゆるやかに舞います。仏教との関わりの深さを感じさせる芸能であり、和賀郡内のみに伝承しているために、和賀山伏神楽とも呼ばれています。

演ずる場所は、かつては修験道寺院で行われていましたが、明治の廃仏毀釈によってそれ以後は民家や修験寺院から移行した神社社殿で舞うことが多くなり、仏教との関わり深い場所で演ずることが少なくなりました。

しかし北上市和賀町藤根地区に伝承する和賀大乗神楽は、仏教との関わりを求めて、毎年旧正月に菩提寺の慶昌寺（106頁）本堂において各種の演目の奉納公演を行っています。

修験道の影響を受けて普及した民俗芸能に「鬼剣舞」があります。先祖供養のために寺院や墓地などで踊ることがその目的の芸能であり、お盆の時期にはそれぞれの芸能団体ごとに菩提寺で先祖供養を行っています。



㊨北上地方を代表する鬼剣舞は墓前で先祖に回向上げる。

この鬼剣舞の元祖が北上市和賀町岩崎の岩崎鬼剣舞です。菩提寺の泉徳寺（104頁）の山門前や中世の城跡岩崎城跡に供養碑を建て、お盆を中心に念仏回向を手向けております。

北上市江釣子の全明寺（108頁）には、「全明寺盆踊」が伝えられてきました。盂蘭盆の…日から…六日にかけて踊られた「さんさ踊」の一種ですが、その歌詞には全明寺四世大迦和尚が、南部藩最大の開田事業に協力し、藩主から緑を頂き、また…代将軍徳川家光から「葵」の紋つきの裃を下賜されたことが歌い込まれています。

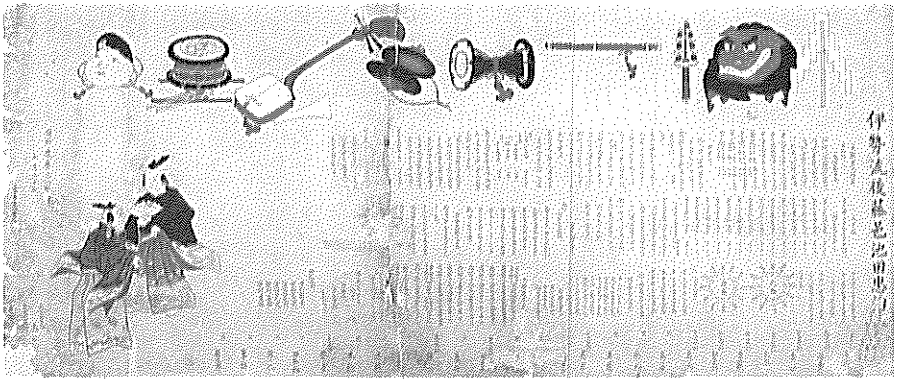
このほか、同立花の萬福寺（56頁）には立花念仏剣舞や立花八王踊の供養碑が祀られるなど、祈りを目的に伝承する民俗芸能は、それぞれ地域の菩提寺や産土神の境内に、供養の石碑を建て芸能の末長い伝承と物故の芸能関係者に念仏回向を捧げています。

## 末長い伝承誓い額奉納
## 芸能を知る貴重な記録

土着性の強い民俗芸能の中で、南部藩主の勧めによって江戸から持ち込み普及した芸能「大神楽（だいかぐら）」があります。伊勢神楽と呼ばれ、伊勢神宮の信仰と深い関わりのある芸能ですが、獅子頭・御幣・鍫杖・笛・小鼓・手平鉦・三味線・太鼓、それに万歳（まんざい）の大夫才蔵、おかめ狂言も描かれています。

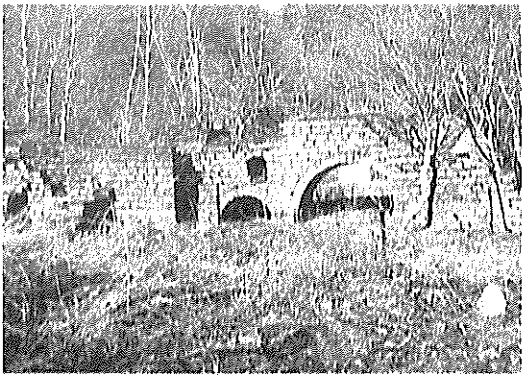
この後藤組をつくったのは、宝暦七年（一七五七）頃で、獅子舞やお囃子のこと万歳に関することなどすべて記録されていて、この地方の大神楽伝承の歴史を知る上で非常に貴重な資料となっています。なお後藤組から戸田組を経て明治八年（一八七五）に門屋大神楽が誕生しています。

㊤東光寺にある奉納額によって伝承の歴史を知ることができた北上市の門屋大神楽。



㊦慶応３年に後藤組が奉納したこの奉納額は県内の伊勢流神楽伝承史を知る貴重な資料である。

# 人材（じんざい）



㊤南部藩最古で多量の銅を産出した水沢鉱山の跡地。

㊤地蔵寺に祀られる清水甚兵衛の墓。

## 仏教に帰依した資産家
## 多くの寺院に浄財寄進

江戸時代、北上・花巻地方における事業家として、最も深く寺院と関わりを持った人物に清水甚兵衛がいます。豪商として知られていますが、農産物や魚介類、また鉱山開発などで巨利を得て、三代にわたって繁栄しました。そしてその利益の一部を花巻城下の五ヵ寺における堂宇の建設や仏像造建などに寄進しています。

清水家の先祖は、木曽（長野県）の源義仲の嫡子清水義高といわれます。義仲の滅亡後は、甲斐（山梨県）の武田信玄に仕えましたが、長篠の戦いで武田氏が織田信長に敗れたとき、生き延びて旧友の南部氏を頼って花巻城下に入ったと伝えています。

仕官を願ったが思うにまかせず、商売で自立することになり、三陸地方の魚介類と、花巻地方の農産物で利益を得ました。その子市右衛門祐光は藩主南部重信に巨額の献金を行い、その恩賞として六十石の花巻城士に召し出されますが、固辞しています。三代目甚兵衛祐重は和賀一族の末裔鬼柳家に寛永二年（一六二五）に生まれ、市右衛門の養子となりました。そして和賀郡山口村（現北上市）に水沢鉱山を開いてその経営に当たり、巨利を得て天下の山師と呼ばれました。

清水家は信仰心が厚く、花巻市の曹洞宗地蔵寺（886頁）を開基したのは、代目市右衛門祐光です。草庵を建てま

すが、後に三代目甚兵衛祐重は地蔵堂を建てています。

一方、承応三年（一六五四）に開創された真宗大谷派の順覚寺（168頁）はその開創から堂宇建立に至るまで清水甚兵衛が大檀越として協力しています。清水家は代々東本願寺と関係が深く、熱心な念仏信者でした。また清水家と順覚寺開基の藤枝家とは親戚関係だったことが最近明らかになっています。

また同じ真宗大谷派の妙円寺（172頁）では、一四世敬伝のとき清水甚兵衛から寄進を受け、寺号は甚兵衛の母の名にちなみ付けたとされています。

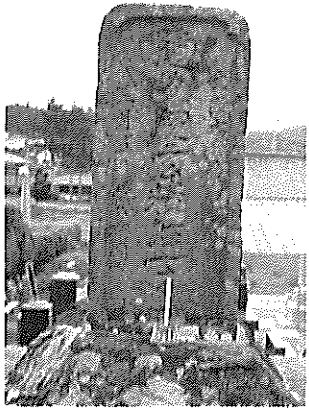
清水家関係の資料は、浄土宗の広隆寺（158頁）所蔵の『広隆寺日記』にありますが、それによると浄土宗の勝行院（160頁）が度重なる水害で荒廃甚しく甚兵衛が自分の土地を寄進し庵を建立しています。更に勝行院の本尊重要文化財の阿弥陀如来の造建を志したのも清水甚兵衛と伝えています。

清水家の財力を支えた水沢鉱山は、寛文元年（一六六一）に甚兵衛によって開かれた南部藩最古の鉱山で、後に南部藩直営の鉱山となりました。

清水甚兵衛は法名を釋順西といい、曹洞宗地蔵寺に「甚兵衛卵塔」として父祖光と共に祀られています。

## 力士出世が名残す早道
## 最高位関取の大関三人

武家社会において庶民が名をなす早道の一つは力士になることでした。北上・花巻地方から数多くの力士が出ておりますが、なかでも和賀郡内から多く、当時最強の力士に与えられた称号「関脇」または「大関」を張った力士が三人も出ております。



延享元年（一七四四）岩崎村（現北上市）に生まれた小田島滝太郎は、大男で大力、大食漢で、二歳のとき泉徳

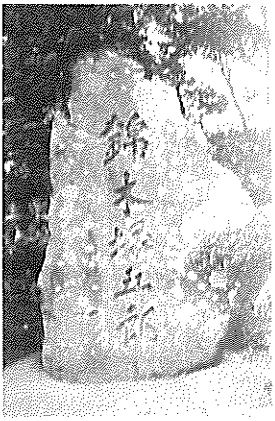
㊦和賀郡地方に力士の門を開いた黒岩万内出身の錦木塚右エ門は、後に二所ノ関部屋を創設し初代として多くの郷土の力士を育てた。
㊧正洞寺に祀る二所ノ関の墓地。

寺（101頁）の寺男にされますが、もて余され隣村の正覚寺（90頁）に送られます。蟬を聞いた南部藩主の声がかりで、岩見形丈右エ門と名乗る力士となりました。江戸相撲で当時最強だった関脇を張り石見潟と名乗り、安永二年（一七七三）引退、盛岡で亡くなりました。寺男をした泉徳寺には、石見潟が、子供の頃運んだ欅の大木で作ったという須弥壇が残っています。

大関が最強の力士といわれたのは天明元年（一七八一）からで、その大関となったのが初代二所ノ関軍右エ門です。北上市黒岩万内集落の小田島勝之丞の子として生まれ、二十歳のとき南部藩抱え力士として江戸へ出ます。当初は滝ノ上音蔵といい、後に錦木塚右衛門と改め、文化三年（一八〇六）大関に昇進、引退後二所ノ関初代年寄を名乗りました。北上市正洞寺（102頁）には墓地のほか、キセルや煙草入れなど遺品が保存されています。

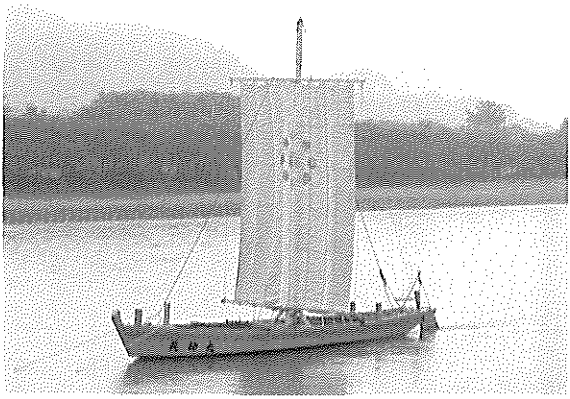
初代二所ノ関の甥乙吉が入門、四ヶ峯西松と名乗ったのが文化八年（一八一一）です。後に四賀峯東吉と改め、文政五年（一八二二）には西大関の地位を得ています。四賀峯が江戸相撲のホープだった頃この地方からの力士希望者が多く、当時の森の越村（現花巻市）出身の秋津風神右エ門は、天保五年（一八三四）に大関に進みました。また四賀峯の弟子砥森山が師匠の供養碑を興禅院（130頁）に建てています。

花巻の八木家に文化九年（一八一二）生まれ、錦木塚五郎を名乗った力士もいます。二十八歳のとき、二所ノ関部屋に入門、初め稲荷山万之助、後に二ツ鱗塚五郎と名乗り天保二年（一八四〇）に小結に昇進して錦木塚五郎と改めています。大関の称号を賜わったとも、二代目二所ノ関を襲名したとも伝えて

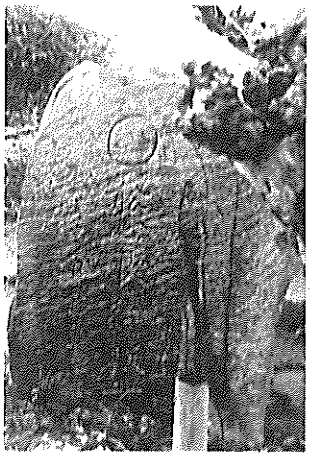



㊦錦木塚五郎の錦絵。㊧順覚寺にある墓地。

㊨初代二所ノ関の腰名前のしこ名錦木塚右衛門を継いだ北上市川岸出身の五代目錦絵。



(14)昭和61年からわずか八ヵ月で完全復元した「艜」が浮かぶ北上川の川岸港の周辺。江戸時代には百艘を超える船が航行した。(15)花泉町日形集落の北上川河畔で発見した「南部黒沢尻船頭清五郎」の名を刻む墓石。



(15)染黒寺に残る船頭清五郎戒名。不名誉な死なのか、二文字のみ。

います。天保二年（一八四一）に亡くなり、花巻市順覚寺（168頁）に葬られました。そのほか藤内相撲として活躍した力士もおり、その始祖は一所ノ関部屋の所属です。北上市川岸出身の五代目錦木塚右エ門、同立花出身の玉川浪五郎で、ほかに、唐糸為右エ門・錦野要作・千鳥川虎蔵・東獄伝蔵・雪ノ浦松ノ丞の力士の名前が見えます。

また行司では、八代目式守伊之助は北上市出身で立行司です。

## 交通の主役北上川舟運
## 名誉と重責裏腹の船頭

江戸時代の主要交通機関だった北上川舟運は、米や生活物資、また多くの江戸文化を運び、その最大の河川港だった川岸港（現北上市）は、経済や文化交流の拠点として賑わいました。

その輸送手段の川舟は、大型の帆掛け船で「艜」（ひらた）といい、最大百五十石、米俵二五〇俵を積む巨大な船でした。それを船頭（船長）一人に、水夫（船員）四・五人で操船、風が吹かないときは馬や人足で引きました。

北上川には各地に難所があり、また風雪の時期には危険も伴って、多くの犠牲者も出ています。特に藩米輸送という重責を担う船頭にとって、事故を起こした場合それが例え天災であっても責任を問われ、厳しい処分を受けました。時には処刑さえも行われたとい

います。船頭にとっては名誉と重責の裏腹の仕事だったのです。

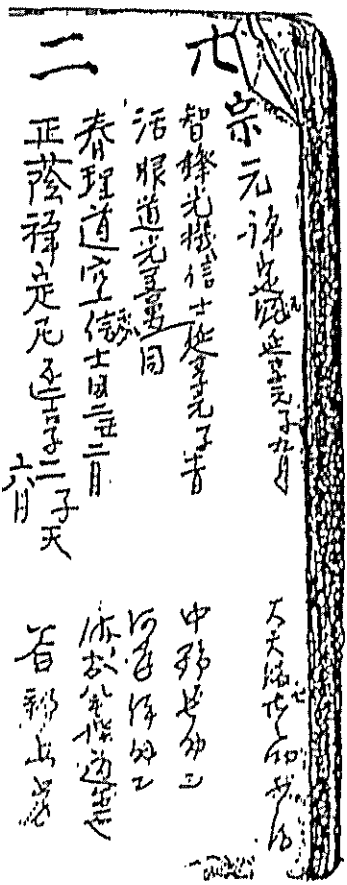
昭和六一年（一九八六）、舟運の主役を担った「艜」を忠実に復元しましたが、その際の調査で江戸時代中期の川岸の船頭の墓が花泉町日形の北上川河畔で発見されました。それは「南部船頭清五郎」の墓で正徳六年（一七一六）の建立です。清五郎の菩提寺北上市染黒寺（96頁）には戒名「寛道禅門」としか残っていないのに「船心良得禅定門」という立派な戒名と墓が祀られていたのは何故なのか不思議です。事故死か処刑なのか、いずれにしても不遇の生涯を遂げた二人の船頭の墓が多くの話題を呼びました。

## 名もない一揆の指導者 今は昔の顕彰碑を建立

墓地を建てることを憚ったのでしょうか、染黒寺の過去帳に名を留めながらも墓地が残っていない者に百姓一揆の指導者八木の伊助がおります。和賀郡は伊達領との境だったこともあって、百姓一揆が数多く起こっており、その多くの指導者は歴史に名を残さぬままに権力から葬り去られています。

川岸（現北上市）八木の伊助もその一人で、寛保四年（一七四四）の畑返し一揆の首謀者として、中野の長助、猫谷地の惣左エ門、藤根の四郎右エ門（いずれも現北上市）と共に打首獄門になりました。染黒寺に残る戒名「活眼道光善男・河岸伊助」と「智鋒光機信士・中野長助」は、わずかにその人間性を伝える貴重な資料です。

一揆の指導者の殆どは、歴史から取り残されていますが、花巻市の松山寺（200頁）には「義に立てる人」と題した撰文碑を添えた一揆指導者の墓地があります。松山寺一七世の錦鏡天祐和尚と村役の富手嘉右エ門の顕彰碑です。凶作のとき苛酷な上納金に憤慨した一人は藩主に直訴し捕らえられました。富手は花巻で断首、錦鏡和尚は僧資格を剥奪され放逐されています。



染黒寺に残る過去帳には、一揆の指導者の人間性がしのばれる言葉で戒名が書かれている。

# 寺院に残る

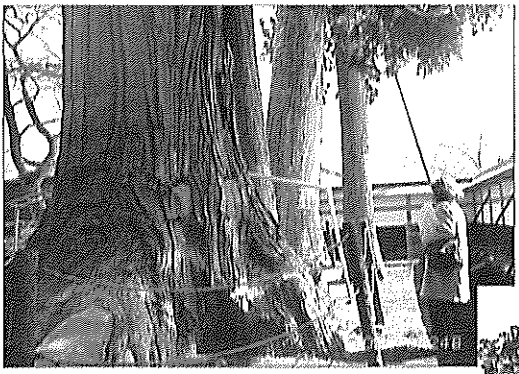
# 巨木・名木

大屋根の本堂を中心に庫裡、位牌堂・開山堂など、附属する堂宇が立ち並ぶ寺院。地域の人々にとって信仰の中心地であり集会施設でもあったお寺は、ひときわ高く広く、規模の大きな建物集団です。この建物を風雨から守り、しかも建物全体の景観を支えてきたのが各種の樹木です。

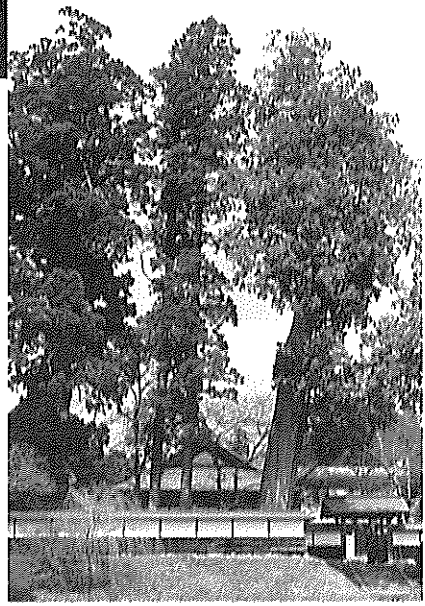
代表的なものに日本古来の品種「杉」や「松」があり、建物と同時に植栽されてきました。また地域民の困窮を救済する目的もあった「銀杏」、宗教的色彩の「伽羅」「菩提樹」など、地域民と共に長い年月大切にされています。

伝慈覚大師の開基や坂上田村麻呂が祀ったとも伝える古代寺院毘沙門堂は、かつて真言宗成鳴寺の塔頭として杉林の中に祀られていました。現在は独立した堂宇になっています。

# 杉（すぎ）



㊤北上・花巻管内最大の杉巨木、目通り径３㍍。
㊦中世の古城を思わせる地に建つ光林寺堂宇。



日本の特産樹木である杉は、かつてどこのお寺の境内にも数多く植栽されて、うっそうと繁った杉林はお寺のシンボルでもありました。しかし杉材は建築用材に使用されるため伐採され、またお寺周辺の都市化や農地化によって杉林は次第に失われています。

北上・花巻地域内約百ヵ寺の中で、都市部のお寺には殆どなく、農村部でも戦時中の供木などによって、巨木といわれる杉林は少なくなっています。

最も樹齢が長いと思われるのは石鳥谷町光林寺（224頁）の杉の巨木で、目通りの直径が約三㍍あります。樹齢は判っていませんが、七百数十年の寺の歴史で生き残ったと伝えられ、この杉と対比するように傍の巨木と二本が仲良く天を摩しています。

同じ位の樹齢と考えられるのが、石鳥谷町長谷寺（208頁）の杉で、この周辺には九世紀創建伝説のお寺が多く、かつて安倍道と呼ばれた奥羽の山裾の街道沿いに建てられています。杉の巨木が殆ど失われている中で、「開伽井」

㊦金明寺の裏にあった神社境内の杉の切株。

と呼ぶ湧水が根元から湧いている杉の巨木は唯一当時をしのばせます。

山門前の杉は、お寺の風格を考えてか伐採を免れたものが多く、石鳥谷町広済寺（228頁）の杉は、一本だけですが樹齢四百年と伝えます。また沢内村玉泉寺（頁）の山門前に並ぶ杉並木も、二七七年前の開山当時のものと伝えて「門蔵杉」と呼んでいます。大正の初め、お寺は困窮をきわめ総代会議の結果杉並木を伐採することになりました。このとき湯田町川尻の門蔵家の主人高橋友治氏が巨木を残すよう資金を拠出しました。それ以来門蔵杉と呼ばれ大切に守られています。また、隣接する碧祥寺（142頁）にも開山以来の巨木並木が残されています。

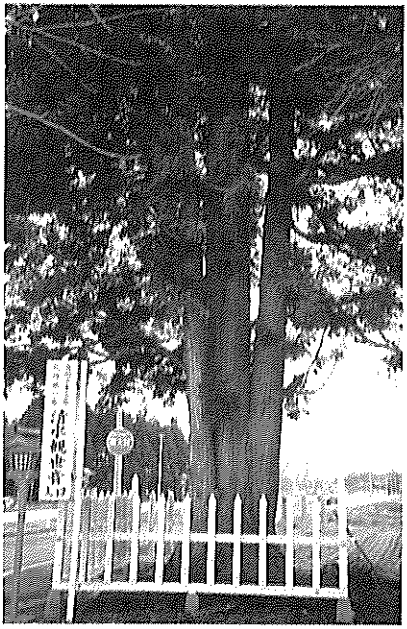
北上山地内では、戦時中の供木が多く、樹齢五・六十年の杉林が殆どですが、東和町瀧沢寺には境内の一角にある守護神稲荷大明神の前に、一本だけ巨木が残されています。

また神木として守られてきた花巻市清水寺（146頁）に子持杉があります。幹が四つに分かれ、根元の苔を煎じて飲むと子宝に恵まれるといいます。同じ花巻市の延命寺（148頁）にも子持杉があって信仰を集めているほかに、宮沢賢治が遊んだ寺として知られ、その杉の巨木を詩にまとめ、詩集『春と修羅』に発表しています。

巨木の切株が、歴史の古いお寺には残されています。北上市の全明寺（108頁）には、かつて住職が別当を務めた寺院裏手にあった杉の切株を本堂に祀り、神仏混交時代をしのばせます。

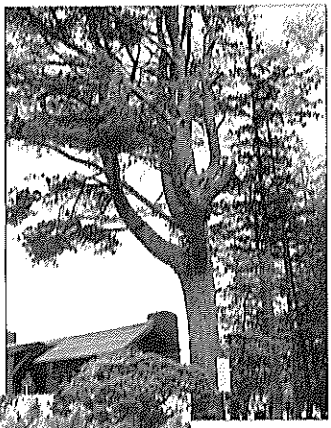
㊺玉泉寺創建当時植栽され、僧者により伐採危機を逃れた杉は門蔵杉と呼ばれる。

㊻根元の苔を煎じて飲むと子宝に恵まれるという、伝説のある清水寺の子持杉。



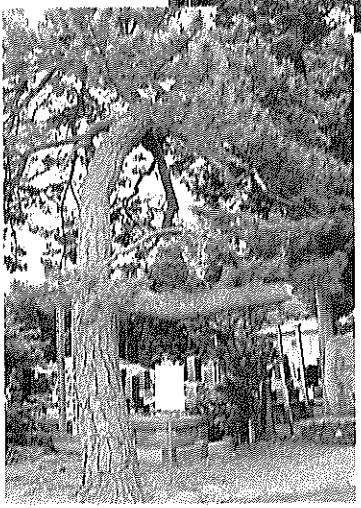
# 松（まつ）

㈤北上山地内の宗賢寺境内には天にそびえるばかりのアカマツの巨木がある。



㈣正覚寺境内に植栽のチョウセンアカマツは樹齢四五〇年で非常に珍しい。

㈢参詣者を招くかのように山門前に植栽されている傘松状のクロマツは、樹齢約四百年、二本とも北上市保存樹木。



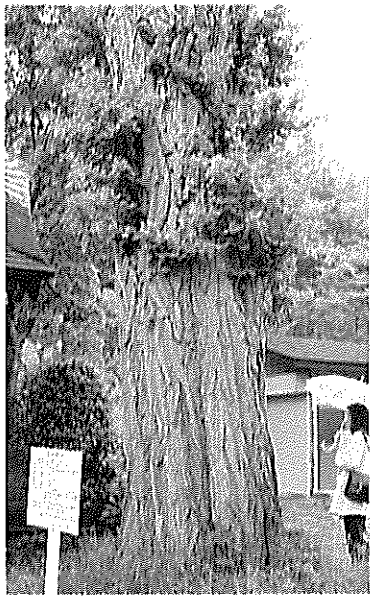
杉と共に日本を代表する針葉樹である松は、古来から神聖な木、節操・長寿を象徴する樹木として尊ばれてきました。正月には門松の風習があり、また松は日出度い樹木の「松竹梅」の筆頭とされてきました。

品種も多く、生息する環境によって違ってきますが、一般に低地の内陸部にはアカマツが生息しています。この松の巨木はお寺には意外に数多くありませんでした。そのなかでアカマツは北上山地内に自生樹木が多く、北上市の宗賢寺（82頁）境内にある巨木は、自生か植栽か判りませんが、日通りの直径が一・五mほどあって、真直ぐに天高くそびえています。

境内に植栽したものでは、北上市の正覚寺（90頁）境内に、品種の異なる二本の松があっていずれも樹齢が四百年を超える名木です。一本はチョウセンマツ、他の一本はクロマツでこの地方では珍しい品種です。いずれも北上市の保存樹木に指定されています。

松はどちらかといえばお寺よりも神社の方に数多く植えられています。

# 銀杏（いちょう）



㈲北上市では巨木保存に文化財とは別に保存樹木制度を設けている。西念寺の銀杏は市街地に生息する巨木の一つで、幹周りが5.3㍍、高さが26㍍という大きさ。㈱洞泉寺は旧伊達領内の寺院だが、かつて和賀氏の支配下にあって、その影響を受け銀杏の巨木が伝わる。

旧和賀郡内の殆どのお寺には、イチョウの樹木が植えられています。その中で樹齢百年を超す巨木が九ヵ所のお寺や寺院跡にありました。

イチョウは一般に銀杏と書きますがこのほかに公孫樹や鴨脚樹とも書きます。中国の原産で葉が扇形で切れ込みになっているのが鴨の足に似ていることからついた文字といわれます。またイチョウという発音は、鴨脚を明代にヤーチャオと発音したことからその言葉が転化したものでした。

この銀杏の木が何故旧和賀郡内に多いのか、それは中世の豪族和賀氏との関わりがあると考えられています。和賀氏の一族や家臣は、村々に土着して普段は農業に携わっていました。そして領内の要地に銀杏を植えて、非常時に対処したというわけです。

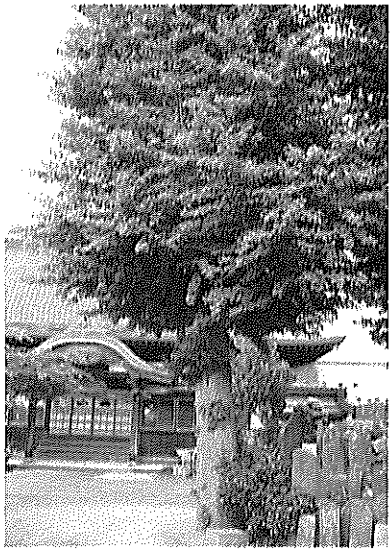
現在旧和賀郡内に、樹齢五～六百年と見られる銀杏の巨木が五本ありますが、そのうちの二本が和賀氏との関わ

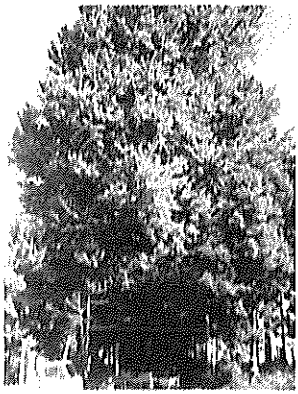
り深い寺院跡、北上市の毛正行寺跡と旧正雲寺跡に残されています。いずれも雌雄同株という珍しい巨木で、毎年豊かに銀杏の実をつけています。

そのほか、北上・花巻地方の銀杏の巨木は、花巻市の天然記念物に指定されている広隆寺の銀杏が樹齢六百年といわれます。また北上市の西念寺（74頁）の銀杏は、樹齢は不明ですが幹周り五・二㍍、高さ二六㍍は、少なくとも二百年をはるかに超えていると考えられています。同じく北上市の洞泉寺（80頁）の銀杏は、樹齢約二五〇年以上で、火難防止のために植栽されたと伝えられています。

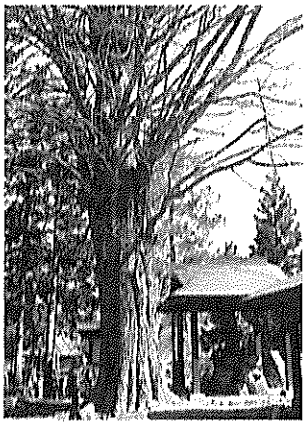
この銀杏の巨木とほぼ同じ太さのものが北上市の染黒寺（96頁）や沢内村の浄円寺（140頁）。また、旧和賀郡に含まれていた花巻市の延妙寺（166頁）にも残っています。樹齢の判るものに北上市永明寺の銀杏は、一〇〇年を超えるといい、同様の太さのものが北上市光林寺（72頁）にも生育しています。

銀杏はその実が食用として珍重されており、また材料は木目が密で加工しやすく、建築や彫刻に用いたり、また器具や葬儀製作にも珍重されている誠に重宝な樹木なのです。





(4)旧正雲寺跡に残っている銀杏は目通り樹周が七・五㍍、巨大な樹木で最も古い。
(5)明治の大火を逃れ生育する染黒寺銀杏。



(3)浄円寺が現在地に移転してから二六八年、その頃の植栽と考えられている銀杏の巨木。
(6)和賀氏の菩提寺正行寺跡に残る銀杏巨木。

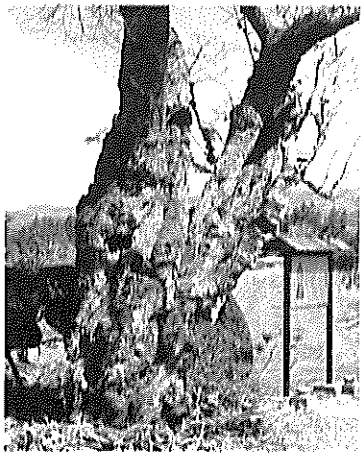
# 桜（さくら）

㊤満開の桜を遠望できる高台に建つ長善寺。㊦根元径1.3㍍高さ20㍍堂々たる風格の桜。

日本人にとって桜は、花を愛でるだけでなく、花の散りぎわが日本人のいさぎよさの精神性とタイアップして珍重され、昔から数多くの歌に詠まれ、文学にも書かれてきました。桜は日本の国の花であり、花といえば桜をさすほどなじみの深いものでした。

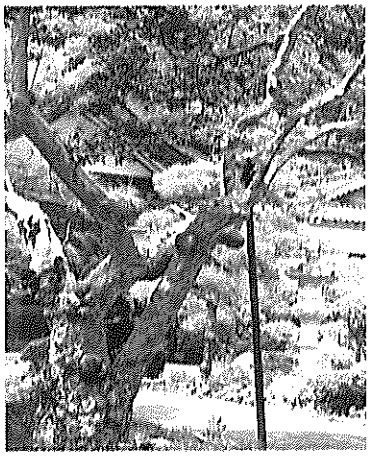
従って全国各地にいろんな品種の桜が植栽され、お花見は春一番の大きなイベントです。その桜の主役は平地に育つソメイヨシノの群落なのです。しかしお寺の境内では、本の古木鑑賞が多く、その代表的な桜は石鳥谷町長善寺（216頁）のエドヒガンです。日通り周囲が三・二㍍の日本で個体二五〇年、北上・花巻地方の寺院では最大です。

寿命の短いソメイヨシノと違って、エドヒガンは長い歴史を伝えるお寺にふさわしい品種といえます。花巻市の身照寺（201頁）にはその群落が、大迫町の中興寺（216頁）には古木が山門入口を飾っています。

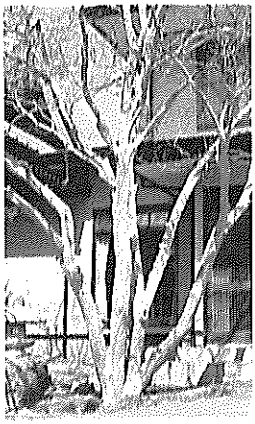


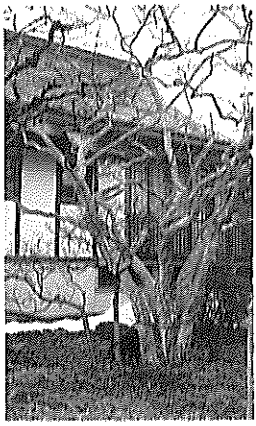
㊧丘陵中腹に建つ中興寺は桜が季節を伝える。

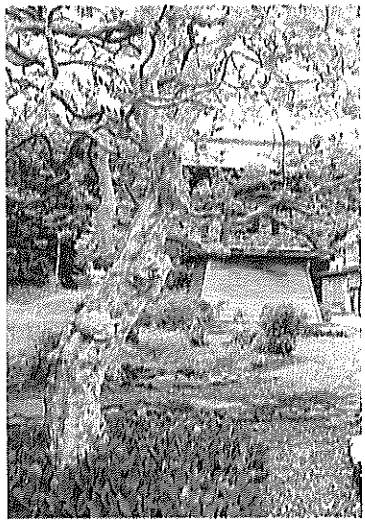
# さるすべり 百日紅



(a)古木を思わせる幹のコブが見事な常楽寺の百日紅は本堂と庫裡を分けて植えられて、境内の王者の風格を持つ。淡紫色の可憐な花を付ける。(b)(c)長久寺裏手に本堂を覆うように植えている。(b)(c)長善寺では本堂前の桜に続いて花を付ける。







(b)本堂に至る参道がL字型の泉徳寺はその道しるべに立つ百日紅の古木。

地域の人々が集まるお寺の場合、つねに境内は美しく整備されていなければなりません。針葉樹を核として境内全体を造園計画する場合、花木をいかに配置するかが問題です。特にお盆の時期に花を付ける樹木が大切で、その役割を果すのがサルスベリです。

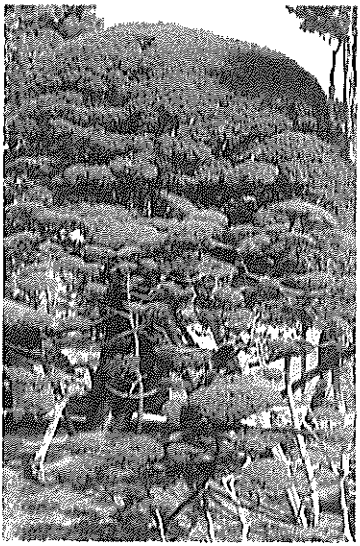
夏に紅や白、淡紫色などの花をつけるこの樹木は、花の期間が長く、そのために、百日紅という漢字が付けられています。また樹肌がすべすべして美しく猿もすべって落ちるほどだとその名がつきました。

北上・花巻地方ではこの百日紅の古木が数ヵ寺から見つかりました。いずれも樹齢は不明ですが、北上市の泉徳寺（104頁）は一本立ち、そのほか花巻市の常楽寺（176頁）と長久寺（178頁）は、いずれも多行に枝が分かれて、見事な広がりを見せています。

花木の少ない夏の花の王者というところでしょう。

# 伽羅（きゃら）

㊤昌観寺中庭に杉林を背景に植栽されている伽羅古木。



㊦伽羅一本だけで造園の東光寺中庭。
㊥さながら龍が臥すよう本堂前にどっしりと植生している遍照寺の伽羅。

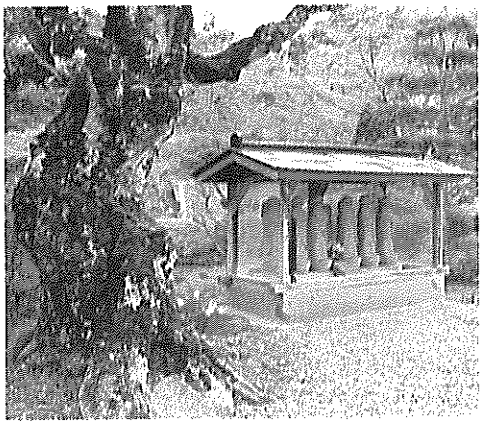
伽羅は正式には伽羅木と書き、イナイ科の常緑の低木です。この地方では一般に山地内にあって高めの樹木をイチイと呼び、庭園内に低木として使用する樹木をオンコと呼んでいます。

宮沢賢治の詩や斎藤茂吉の短歌にも取り上げられ、短歌雑誌「あららぎ」の名称は実はイチイの古名なのです。

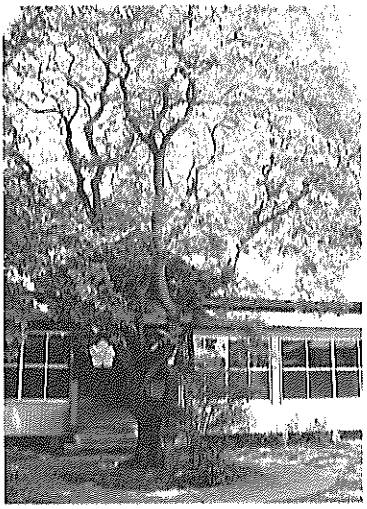
インド原産の植物で、古来から香木として知られています。峯から出る樹脂を火に入れると芳香が出て、これを沈香と呼んでいますが、正倉院御物の香木がよく知られています。

伽羅はお寺の中庭に植栽されていて、その巨木を二ヵ寺で発見しました。いずれも花巻市内で東光寺（182頁）と昌欲寺（184頁）です。また北上市の遍照寺（68頁）本堂前の伽羅は、和賀氏と豊臣方との戦火の際に、本堂が焼失したのに本尊がこの樹木の上に立ち戦火を免れたという伝説があります。

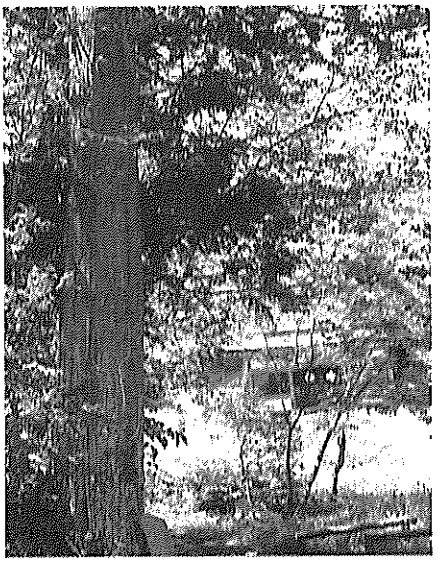
# 各種樹木



㊤凌雲寺地蔵尊近くに樹齢数百年のカエデ。



㊤安楽寺の前に仏の教えを導く菩提樹。
㊦北上山地内に植栽の極楽寺の高野槇。



お寺の境内にはこのほかに各種の巨木や名木が植えられていて、信仰にあるいは寺院の景観に役立てています。

北上市の安楽寺（64頁）本堂の前に、屋根を覆うように菩提樹の花が咲き乱れています。お釈迦様がこの木の下で悟りを開いたといわれ、仏教寺院にとってゆかりの深い樹木です。夏に淡黄色の小花を一面に散りばめます。

岩手県内最古の寺院として知られている北上市の極楽寺（66頁）は、信仰と共に福祉事業を行ったと伝え、境内には各種樹木や薬草などが自生しています。その中でひときわ高くそびえる高野槇は、この地方では庭園以外は見ることのない珍しい樹木です。

東和町凌雲寺（128頁）の地蔵尊近くに樹齢・・・百年と思われるカエデ。また花巻市松山寺（200頁）本堂前にはカツラの大木。北上市永昌寺（98頁）のシダレカツラは樹齢は百年に満たないが保存樹木に指定されています。

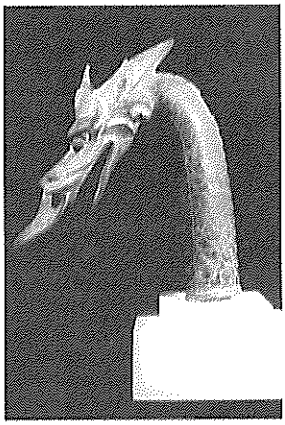
# 寺院に伝承の有形文化財

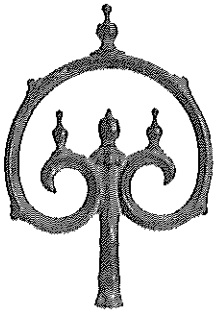
庶民の信仰の中心地として長年守られてきた寺院は、度重なる戦火や失火による焼失によって、北上・花巻地方には江戸時代以前の建造物は殆ど残っていません。しかし寺院の本尊や多くの仏像、あるいは絵画や工芸品、考古資料などには、風雪や戦火に耐えて現在まで保存されてきているものも数多くあります。これらはその芸術的価値や歴史遺産としての価値によって、国や岩手県の指定、あるいは市町村指定の文化財として保存されています。

それら有形の文化財は、各寺院開山の歴史や寺が果した役割などの貴重な証言者でもあり、歴史を正しく後世に伝えるために保存伝承していくことが大切です。

㈱高さ四・七二㍍の巨大な兜跋毘沙門天像は一木造りの仏像としては日本一の巨像である。圧倒する迫力で、当時の人々が求めた北方守護神にふさわしい。

くにしてい
# 国指定





㋐極楽寺に伝世の仏具で幡を吊した青銅龍頭。㋑僧侶の杖青銅錫杖頭。

㋑増長天。㋒持国天。いずれも12世紀。

## 蝦夷地統治の宗教拠点
## 北上川東岸に古代寺院

北上・花巻地方は、かつて蝦夷と呼ばれた人々が住んでいた中心地域でしたが、大和朝廷が戦いによって自らの領土としました。いわば大和朝廷にとってこの地方は国の最北端でした。

北の守りとして延暦二一年（八〇二）永沢市佐倉河に胆沢城を造営、六年後の大同三年（八〇八）には鎮守府を多賀城から胆沢城へ移し、行政や軍事の中心地としました。そして民心安定のために数多くの寺院を建てています。

古代の国道東海道が走る北上川流域東岸の丘陵地帯には、古代からの寺院が続いています。南から黒石寺（奥沢市）、藤里毘沙門堂（江刺市）、万福寺毘沙門堂（56頁）、薬蔵寺（86頁）、白山寺（現白山神社）、成島の毘沙門堂（112頁）と続き、九世紀から一二世紀にかけての仏像が現在に伝えられています。北上市稲瀬町の極楽寺（66頁）は、天安元年（八五七）に国営に準ずる寺院定額寺として、これらの寺院を統括する役割を担ったと考えられています

が、明治の大火で壊滅しました。

発掘調査が進み数多くの寺院礎石や遺物が発見されていますが、伝世品として残っているのは、仏具の龍頭四点と錫杖頭一点のみで国の指定文化財です。また万福寺毘沙門堂は、極楽寺全盛期には極楽寺の塔頭として毘沙門天を祀り、北の守りを固めたと伝えています。ここには、一〇世紀の毘沙門天と一一世紀初頭の二天王が伝えられ、いずれも国の指定文化財です。

㈠成島毘沙門堂では、最も古い仏像である木造伝吉祥天立像。吉祥天は毘沙門天の妃ともいわれる。一・八一㍍。㈡二つの像とも毘沙門天の従者仏像㈠尼藍婆、㈡毘藍婆。

## 数多い古代の毘沙門天 国の文化財で今に残る

北上盆地には古代の毘沙門天が比較的多く祀られているのが特徴です。これは大和朝廷が辺境の地としてこの地方を支配する際の守り神として信仰されたためと考えられています。

その中で一木造りでは日本一の巨像が東和町毘沙門堂（112頁）の兜跋毘沙門天立像で、四・八㍍もあります。毘沙門天には二種類あって、萬福寺の毘沙門天のように邪鬼という悪神を踏みつけている仏像とここのように地天の掌の上に立っている仏像です。

この毘沙門天像には右側に尼藍婆、左側に毘藍婆と呼ぶ高さ九一㌢の小像を従えています。これら二体は平安中期作とされますが、左側の奥に安置されている伝吉祥天像の場合は、それをさらに遡って平安前期と考えられ、いずれも国の指定文化財です。またこれらの仏像を祀っていた毘沙門堂の建物自体も国指定文化財です。

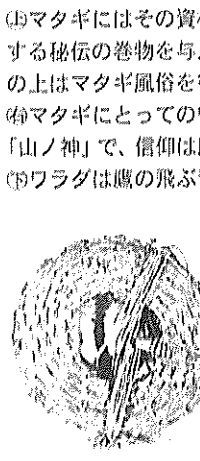
これら堂宇や仏像は、江戸時代には真言宗成島寺が別当寺として祀っていましたが、明治の廃仏毀釈によって成島寺は廃され、その寺の遺産の殆どは時宗成沢寺（118頁）に移されました。そのときの引継ぎ文書には毘沙門堂と仏像も含まれていましたが、現在では独立した真言宗醍醐派寺院として堂宇や仏像を守っています。

## 花巻唯一の鎌倉期仏像
## 沢内は民俗資料の宝庫

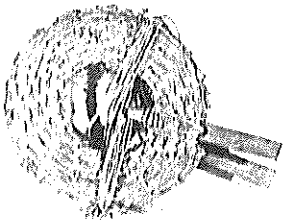
国指定文化財は古代寺院が営まれた北上地方に特に集中していますが、花巻市内には唯一、勝行院（160頁）の本尊阿弥陀如来坐像が指定されています。この仏像は鎌倉時代作で、江戸時代の豪商清水善兵衛が寄進した仏像です。

このほかに国指定の文化財としてユニークなのは沢内村碧祥寺（182頁）に収蔵されている民俗資料の数々です。昭和三九年（一九六四）に指定されたのが川舟として使用した丸木舟で、杉材をくりぬいたもので、全国的にも珍しいといわれます。沢内村所有ですが碧祥寺で管理しています。

沢内村は豪雪地帯でマタギの里でもありました。碧祥寺の現太田祖電住職が中心に村内や周辺の自治体から収集したマタギ資料四八六点と積雪期用具一七九点が、いずれも国の重要民俗文化財として指定されています。

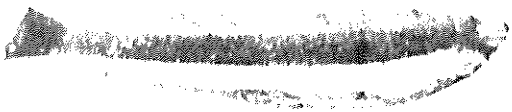


(b)マタギにはその資格を証明する秘伝の巻物を与えた。その上はマタギ風俗を復元した。(a)マタギにとっての守り神は「山ノ神」で、信仰は厚かった。(b)ワラダは鳥の飛ぶ音を出す。



(b)積雪期用具で今も使うカンジキ。

(b)杉の大木をくり抜き作った川舟である丸木舟は、和賀川での川仕事で使った民俗資料。川舟としては非常に珍しいので、国の重要民俗文化財として昭和39年に早くも指定されている。



# けんしてい 県指定

㊤説法釈迦如来を中心に右に文殊菩薩左は普賢菩薩。

㊤中国宋時代の美術の影響が見られる釈迦如来像。㊦慈しみ深れむ心を司る普賢菩薩は白い象に乗る。

㊦智恵を司る文殊菩薩像は獅子に乗る。東北地方でも稀な秀作という。

## 今は県指定の極楽寺跡 全盛期をしのぶ仏像群

平安時代、国営に準ずる定額寺として繁栄を誇った極楽寺（66頁）には、別当坊・北之坊・東之坊・大井坊・学頭坊など二十六の塔頭があったと伝えられています。この極楽寺繁栄当時の堂塔の発掘調査が、現在も行われており、すでに方七間堂跡をはじめ、方二間堂経蔵跡・塔跡・伝釈迦堂跡などの礎石が国見山中から発掘され、極楽寺の規模の大きさが次第に明らかにされています。この発掘の跡が国見山廃寺跡として県指定史跡になっていますが、国指定も間近かといわれています。

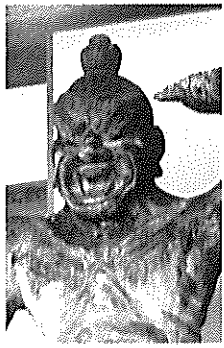
この極楽寺塔頭の坊舎の中心をなしたのが中畑坊で、そこに江戸時代に如意輪寺（62頁）が建てられました。本尊は室町時代の如意輪観音ですが、この寺の東にある釈迦堂跡から移された釈迦三尊像が県指定文化財です。釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩ともに鎌倉時代初期の作で宋様式をもち、仁阿運慶作とも伝え、国見山文化の終末期を飾った遺産として貴重です。

## 和賀一族崇敬の丹内社
## 東和に伝承の中世仏像

中世の豪族和賀氏の四天王と称された安俵小原氏は、現在の東和町内を領地とし丹内権現堂（現丹内山神社）の大旦那として崇敬していました。そして近世に入った後も南部氏によって守られ、堂内には数多くの仏像が祀られていました。ところが明治の神仏分離によって、主な仏像七体が安俵の凌雲寺（128頁）に移されています。

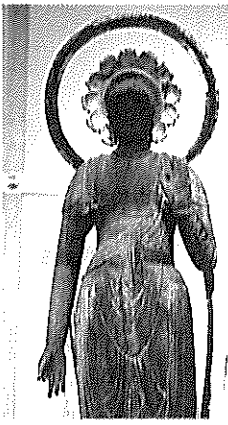
その後、十一面観音像と不動明王像の二体は、丹内山神社に戻されましたが、五体の仏像は凌雲寺で守られています。そのうち仁王像は新装の山門の左右に祀られています。左側の吽形像には応永二九年（一四二九）の墨書があり、記年銘をもつ仁王像としては、県内最古といわれ、右側阿形像は室町初期以前と考えられています。ほかに十一面観音立像が二体あって、四体ともに県指定の文化財です。

また見沙門堂には承徳二年（一〇九八）銘の木造伝阿弥陀如来立像があって後補のために県指定文化財です。



㈠阿形像、㈡年号のある吽形像。

㈢仁王像と共に丹内山神社から移された十一面観音像。



㈣後補がある一一世紀作の伝阿弥陀如来像。

## 仏教文化の花開く和賀
## 県指定仏像の殆ど伝承

岩手県指定の文化財も国指定文化財と同様に、その殆どが北上和賀地方の寺院に伝えられています。

この地方にはかつての天台宗寺院でその後改宗した歴史の古い寺院が多く、なかでも曹洞宗萬歳寺（86頁）は、旧台にあって歴史の荒波から逃れ、また火災にも遭わずに現在まで数多くの仏像を伝えてきました。

慈覚大師の開基と伝え、本尊薬師如来坐像をはじめ数多くの平安時代作の

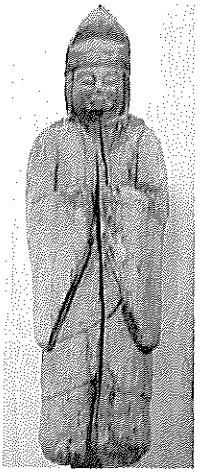
仏像が伝えられています。薬師如来像は、全面に細かい丸ノミの跡が残る繊細なナタ彫りの仏像で素晴らしく、下半身部分に後補があるために国の指定からはずされ岩手県指定文化財です。

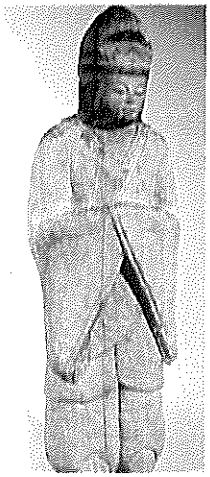
このほかに県指定文化財が八体あります。木造十一面観音像が一体、それに木造男神像一体と木造女神像一体です。

神像は、もともと形のない神様が仏教の影響を受けて形を持つようになったもので、神仏は対立することなく神仏融合の思想が広まった奈良時代から平安時代に多く作られました。このように古代の神像は数少なく、非常に貴重であるといわれます。男神像の三体は青年相・壮年相・老年相と分かれ、また女神像には平安時代の女性が外出のときの被り物をつけています。

花巻市内で唯一の県指定文化財の仏像は、延妙寺（166頁）の阿弥陀如来像です。寛元元年（一二四三）鎌倉時代前期に仏師幸賢が作りました。なおこの寺院も元は和賀郡内でした。

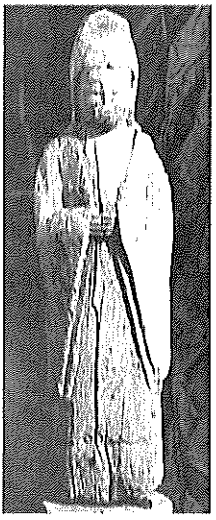
㈠冠に十一の顔がある十一面観音像は一m八〇という等身大の仏像である。二体のうち一体には両腕がない。





㈡㈢貴人の姿をした神像の秀作。烏帽子状の冠に大袖の衣、くつを履き前で手を組む、若くて端正な青年相。㈣㈤青年像の顔立ちに比べて、頬から口にかけて厳しさを感じる壮年相。㈥肩が落ち細身の姿の神像で老年相。一・五五mと最大だが風化も著しい。

㈣平安時代の風俗を知る小像の女神像。



## 城下町に残る中世遺産
## 板碑や経典仏画なども

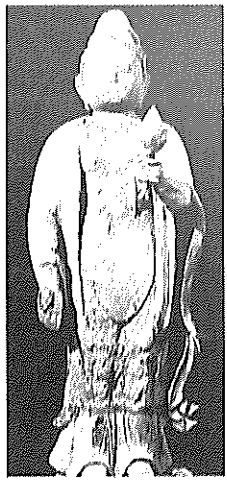
仏像以外の県指定文化財で代表的な遺物は、考古資料に分類される北上市極楽寺（66頁）の石塔婆八基です。

石塔婆は板碑とも呼ばれ、五輪塔や山伏の碑伝に系統をもつとされる石製の追善供養塔です。浄土教、密教、時宗関係と信仰内容もさまざまですが、鎌倉時代から室町時代にかけて、地頭層や僧侶達によって盛んに建てられました。極楽寺には、一基ありますが、そのうち八基が県指定文化財です。

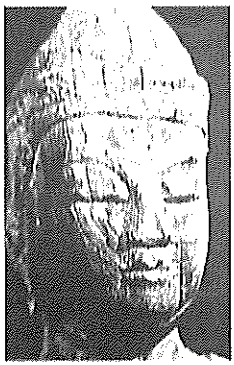
ユニークな指定文化財に、花巻市雄山寺（196頁）に保存されている北松斎の甲冑があります。雄山寺は初代花巻郡代の北松斎が開基した寺院で、それ以外の遺品も伝えられています。

甲冑は正式には「伽羅縅二枚胴具足」といい、兜が阿吉陀形四十八間筋兜、胴は鉄錆地横矧伽羅縅二枚胴です。安土桃山時代に作られたいわゆる当世具足と呼ばれるもので、実用的な作りが特徴です。唯一の工芸品文化財です。

このほか北上市の薬黒寺（96頁）には春日版法華経全八巻、洞泉寺（80頁）には聖徳太子請讃図一幅が指定されています。また東和町興禅院（130頁）境内にかつてあった薬師堂は、その内陣には極彩色の仏画などが描かれていて、貴重な指定文化財です。

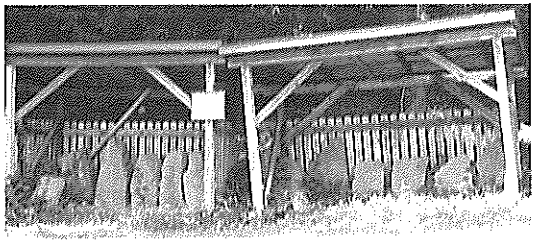


㊤㊦二体ある聖観音像。

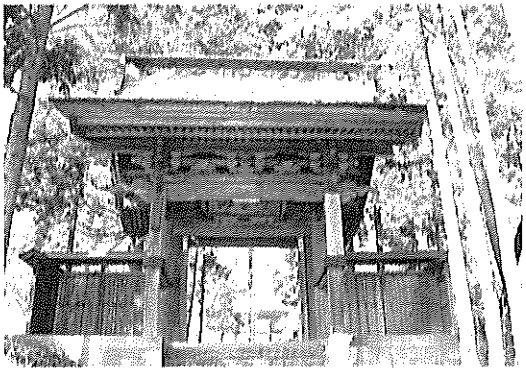


㊧初代の花巻郡代で雄山寺を開基した北松斎が着用したと伝える「伽羅二枚胴具足」。

㊦極楽寺境内には、十三基の石塔婆が伝えられていますが、中でも延慶３年（1310）と同４年に最教が建てた６基は、紀年・忌日・十王と本地仏名、またその種子（有縁仏を表した梵字）、そして意趣と施主が一塔婆ごとにきざまれていて、十仏十王信仰の全国最古例である。岩手県指定文化財は、これらを含めて八基がある。



# 市町村指定



㊤北上・花巻地方で最も古い東和町浄光寺の山門。

㊦石鳥谷町光勝寺の十一面観音像で平安後期の作と考えられている。廃仏毀釈で本山永福寺から運ばれた仏像らしい。

## 市町村に多い指定の差
## 江戸中期の建物も指定

市町村における文化財の指定は、各自治体の業務の進捗状況によって指定の実態は異なっているため、一概に比較することはできませんが、現在北上・花巻地方の寺院には約千六百点の指定文化財があることが判りました。

建造物は二棟で、そのうち本堂は花巻市妙円寺（122頁）が享和元年（一八〇一）の建築で唯一の指定です。山門は一棟で、文化二年（一八〇五）の東和町浄光寺（122頁）山門、文政二年（一八一九）建築の花巻市昌欲寺（184頁）山門がそれぞれ指定されています。

仏像は、六一体指定されていますが、歴史の古い寺で国や県指定からもれた仏像に北上市萬福寺（56頁）の毘沙門天と豊光童子の二体、如意輪寺（62頁）の如意輪観音、萬蔵寺（86頁）の吉祥天があります。更に東和町では毘沙門堂（112頁）の不動明王、凌雲寺（128頁）の薬師如来があります。

花巻市にはここ数年来に指定された仏像が多く、中でも浄土系寺院が祀る阿弥陀如来像は一一体ありました。所蔵する寺院は、妙円寺、松庵寺（156頁）、広隆寺（158頁）、専念寺（161頁）、願覚寺（168頁）が各一体、光徳寺（162頁）が二体です。そのほか沢内村の浄円寺（140頁）本尊も指定されています。

釈迦如来は五体で、花巻市の昌欲寺、円通寺（191頁）、歓喜寺（198頁）、宗清寺（192頁）、大迫町中興寺（246頁）で、

いずれも曹洞宗寺院です。

そのほか花巻市妙円寺に親鸞聖人像、宝台寺（202頁）に馬頭観音と大日如来、延妙寺（166頁）に太子孝養像、遍照院（150頁）と延命寺（148頁）に地蔵菩薩、自性院（154頁）では大日如来と十一面観音、瑞興寺と円城寺（188頁）の弁財天、将軍寺（180頁）の烏枢沙摩明王がそれぞれ指定されています。

また、石鳥谷町光林寺（224頁）では阿弥陀如来など、九体の仏像が指定、松林寺（210頁）でも地蔵菩薩のほかに千体地蔵として……五体の小仏像が指定されています。大迫町では、到岸寺（238頁）の薬師如来と延命地蔵二尊、桂林寺（248頁）の十一面観音と秋葉権現がそれぞれ指定されています。

なお石鳥谷町光勝寺（212頁）には、廃仏毀釈を逃れた仏像など百体ほどの仏像が祀られており、現在それらの仏像の調査が行われているので、文化財指定が行われるものと思われます。

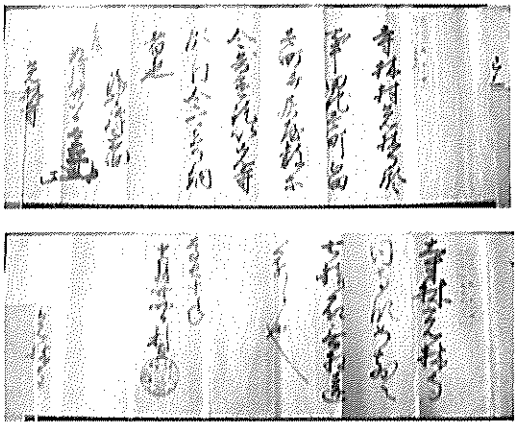
## 多彩で豊富な寺院の宝
## 歴史解明に貴重な資料

考古資料は七点で北上市如意輪寺と全明寺（108頁）に板碑、石鳥谷町光林寺には開山の墓など石塔五基があります。このほか光林寺には絵画が一面・……幅、古文書が四冊・……通、また書跡として光林寺勅額が指定されていて、正に文化財の宝庫の寺院です。

絵画では沢内村玉泉寺（144頁）の頂相の図、花巻市光徳寺の頂如上人真影、大迫町妙琳寺（240頁）の阿弥陀如来絵像各一幅のほか、花巻市妙円寺の花鳥図襖絵八枚は、花巻市立博物館の展示物として寄託されています。

古文書は石鳥谷町に光林寺のほか松林寺にも九〇通があり、花巻市には光徳寺に浅野長吉証文、雄山寺（196頁）には太平記など七通が指定されています。工芸品として北上市光明院（58頁）の懸仏、石鳥谷町松林寺の鰐口、花巻市雄山寺の北松斎の遺品があります。

このほか歴史資料として北上市万福寺の牛王板、石鳥谷町松林寺には絵馬額一〇枚、小絵馬……枚、棟札類……枚などが保存されていて、古代から中世にかけての貴重資料です。



㈱時宗の名刹石鳥谷町の光林寺に、中世の古文書が伝承、町の文化財として四冊・二二通が指定されている。写真上は秀吉の家臣浅野長吉の書状、下は南部利直の書状。

# 北上・花巻地方の観音様巡り

わが身を犠牲にしてまでも人々を救ってくださる仏様に観音様があります。いわば慈善事業家の仏様なわけですが、この仏様に対する信仰が大衆の間に広まり、各地に祀っている観音様を巡回してお参りする観音巡りの風習が今もなお行われています。

観音様には聖観音・千手観音・馬頭観音・十一面観音・准胝観音・如意輪観音の六観音があり、このほか三十三の分身の観音様もあります。

これらを祀っている観音霊場を巡る観音信仰は、全国的には「西国三十三ヵ所」が有名ですが、東北地方や岩手県内にも独自の霊場巡回コースが定められて、それを札所と呼び、その霊場独自のご詠歌があって、信者はそれを唱えながらお参りします。

東北地方で代表的なのは「奥羽三十三番札所」で、江戸時代から巡礼が行われてきましたが、札所は時代によって変わっています。

このほか地域の霊場を巡る札所も数多くあります。「当国三十三所（和賀・稗貫・紫波三十三所）」「江刺三十三所」「稗貫和賀二郡三十四所」などのほか、明治二四年（一八九一）花巻市自性院住職らが設定した「陸中新四国八十八所」というのもあります。

# 「奥羽三十三所」観音霊場（現行）

| 札所名 | 寺院・神社名 | 本尊 | 所在地 |
|---|---|---|---|
| 一番 太田清水寺 | 天台寺門宗 音羽山清水寺 | 十一面観音 | 花巻市太田清水 |
| 二番 円満寺観音 | 大宝山円満寺 | 千手観音 | 花巻市藤立観音山 |
| 三番 延寿寺観音 | 蓬莱山延寿寺 | 十一面観音 | 花巻市仲町 |
| 四番 長谷堂観音 | 宝城山長谷寺 | 十一面観音 | 稗貫郡石鳥谷町長谷堂 |
| 五番 嶋の堂観音 | 八葉山廣泉寺 | 千手観音 | 紫波郡紫波町南日詰 |
| 六番 大和竹観音 | | 聖観音 | 稗貫郡石鳥谷町東中島 |
| 七番 国見山観音 | 真言宗智山派 国見山極楽寺 | 十一面観音 | 北上市稲瀬町字内門岡 |
| 八番 萬蔵寺観音 | 曹洞宗 金峰山萬蔵寺 | 聖観音 | 北上市口内町金峰山 |
| 九番 奈良山観音 | 奈良山寺 | 聖観音 | 北上市相去町梨ノ木 |
| 十番 渋民観音 | 金谷稲荷山東川院 | 十一面観音 | 東磐井郡大東町渋民 |
| 十一番 山屋観音 | 大慈山長福寺 | 千手観音 | 遠野市小友字山谷 |
| 十二番 宮守観音 | 愛宕神社（旧月見山平沢寺） | 聖観音 | 上閉伊郡宮守村上宮守 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 十三番 | 小通観音 | 鶏冠山小通寺 | 聖観音 | 和賀郡東和町小通二区 |
| 十四番 | 泉蔵寺観音 | 産形山泉蔵寺 | 聖観音 | 陸前高田市気仙町荒川 |
| 十五番 | 高木寺観音 | 蓮花山蒼竜寺 | 十一面観音 | 花巻市高木 |
| 十六番 | 伊豆堂観音 | 駒形神社（旧伊豆山常楽寺） | 馬頭観音 | 江刺市稲瀬字小倉沢 |
| 十七番 | 大森観音 | 大森山大林寺 | 聖観音 | 江刺市玉里大森前 |
| 十八番 | 霊桃寺観音 | 臨済宗妙林寺派宝林山霊桃寺 | 十一面観音 | 胆沢郡前沢町山下 |
| 十九番 | 黒田助観音 | 天台宗　黒田山千養寺 | 千手観音 | 水沢市羽田町黒田助 |
| 二十番 | 青谷観音 | 音石神社（旧青谷寺） | 聖観音 | 江刺市広瀬字平 |
| 廿一番 | 岩神寺観音 | 亀翁山岩神寺 | 十一面観音 | 稗貫郡大迫町亀ヶ森 |
| 廿二番 | 臥牛観音 | 天野山願行寺 | 聖観音 | 北上市更木町臥牛 |
| 廿三番 | 小迫観音 | 楽峯山勝大寺 | 十一面観音 | 宮城県栗原郡金成町小迫 |
| 廿四番 | 松島天童庵 | （新札所）臨済妙心寺派　青竜山瑞巌寺 | 聖観音 | 宮城県宮城郡松島町松島 |
| 廿五番 | 金華山 | 黄金山神社（旧真言宗大金寺） | 十一面観音 | 宮城県牡鹿郡牡鹿町金華山 |
| 廿六番 | 清水寺観音 | 真言宗智山派　音羽山清水寺 | 聖観音 | 宮城県栗原郡栗駒町岩ヶ崎 |
| 廿七番 | 岩波観音 | 天台宗　新福山石行寺 | 十一面観音 | 山形県山形市岩波 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 廿八番 | 高寺観音 | 真言宗智山派 | 高寺山高善寺 | 聖　観音 | 秋田県仙北郡協和町峰吉川 |
| 廿九番 | 見大山観音 | 『管理者』 | 春光山円覚寺 | 如意輪観音 | 青森県西津軽郡深浦町追良瀬 |
| 三十番 | 鬼密厳谷観音 | 『管理者』 | 浄土宗如覚山本覚寺 | 聖　観音 | 青森県東津軽郡今別町袋月 |
| 卅一番 | 経堂寺 | 《別格所》 | 黄檗宗宝厳山宝眼寺 | 子安観音 | 青森県黒石市山形町 |
| 卅二番 | 御堂観音 | 天台宗 | 北上山正覚院 | 十一面観音 | 岩手郡岩手町御堂 |
| 卅三番 | 桂泉観音 | 天台宗 | 八葉山天台寺 | 十一面観音 | 二戸郡浄法寺御山 |

# 「当国三十三所」観音霊場

（和賀・稗貫・紫波）

| 札所名 | 寺院・神社名 | 本尊 | 所在地 |
|---|---|---|---|
| 一番 | 清水寺 | 十一面観音 | 花巻市太田清水 |
| 二番 | 円満寺 | 千手　観音 | 花巻市藤立観音山 |
| 三番 | 長谷寺 | 十一面観音 | 石鳥谷町長谷堂 |
| 四番 | 黄金堂 | 十一面観音 | 紫波町片寄 |
| 五番 | 新山堂 | 聖　観音 | 花巻市上似内 |
| 六番 | 島の堂 | 千手　観音 | 紫波町南日詰 |
| 七番 | 高水寺 | 十一面観音 | 紫波町二日町 |
| 八番 | 蟠龍寺 | 十一面観音 | 紫波町高水寺 |
| 九番 | 飯岡寺 | 千手　観音 | 盛岡市上飯岡 |
| 十番 | 大慈寺 | 十一面観音 | 盛岡市大慈寺町 |
| 十一番 | 高　寺 | 十一面観音 | 盛岡市手代森 |
| 十二番 | 大泉院 | 聖　観音 | 盛岡市手代森 |
| 十三番 | 観林寺 | 聖　観音 | 盛岡市黒川 |
| 十四番 | 山祇神社 | 十一面観音 | 紫波町山屋 |
| 十五番 | 常光寺 | 十一面観音 | 紫波町東長岡 |
| 十六番 | 光勝寺 | 千手　観音 | 紫波町彦部 |
| 十七番 | 高松寺 | 十一面観音 | 花巻市高松内高松 |
| 十八番 | 千手堂 | 千手　観音 | 花巻市高松鞍掛 |
| 十九番 | 石鳥谷 | 十一面観音 | 花巻市矢沢観の木 |

# 「江刺三十三所」観音霊場

| 札所 | 寺院・神社名 | 本尊 | 所在地 |
|---|---|---|---|
| 一番 | 極楽寺 | 十一面観音 | 北上市稲瀬町 |
| 二番 | 萬蔵寺 | 聖観音 | 北上市口内町 |
| 三番 | 伊豆堂 | 駒形神社 | 江刺市稲瀬 |
| 四番 | 大森 | 馬頭観音 | 江刺市玉里 |
| 五番 | 青谷 | 十一面観音 | 大森観音 |
| 六番 | 黒田助 | 聖観音 | 江刺市広瀬 |
| 七番 | 黒石寺 | 千手観音 | 永沢市黒石町 |
| 八番 | 内堀 | 十一面観音 | 永沢市黒石町 |
| 九番 | 中袋 | 馬頭観音 | 永沢市羽田町 |
| 十番 | 中清水根 | 如意輪観音 | 永沢市羽田町 |
| 十一番 | 花林院 | 千手観音 | 永沢市羽田町 |
| 十二番 | 板橋 | 馬頭観音 | 永沢市羽田町 |
| 十三番 | 大仏 | 如意輪観音 | 江刺市田原 |
| 十四番 | 興国寺 | 十一面観音 | 江刺市田原 |
| 十五番 | 蔵内 | 馬頭観音 | 江刺市田原 |
| 十六番 | 円通寺 | 聖観音 | 江刺市藤里 |
| 十七番 | 尾山 | 聖観音 | 江刺市伊手 |
| 十八番 | 山ノ上 | 十一面観音 | 江刺市米里 |
| 十九番 | 渡 | 十一面観音 | 江刺市梁川 |
| 二十番 | 角川原 | 十一面観音 | 江刺市梁川 |
| 廿一番 | 岩山 | 十一面観音 | 江刺市梁川 |
| 廿二番 | 上青谷 | 馬頭観音 | 江刺市広瀬 |
| 廿三番 | 江越 | 聖観音 | 江刺市広瀬 |
| 廿四番 | 岩ノ目 | 聖観音 | 江刺市広瀬 |
| 廿五番 | 南宮 | 千手観音 | 江刺市広瀬 |
| 廿六番 | 宮内 | 十一面観音 | 江刺市広瀬 |
| 廿七番 | 小池 | 聖観音 | 北上市口内町 |
| 廿八番 | 如意輪寺 | 如意輪観音 | 北上市稲瀬町 |
| 廿九番 | 安楽寺 | 十一面観音 | 北上市稲瀬町 |
| 三十番 | 鳥ノ木 | 十一面観音 | 江刺市稲瀬 |
| 卅一番 | 観音寺 | 千手観音 | 江刺市愛宕 |
| 卅二番 | 松岩寺 | 聖観音 | 江刺市田原町 |
| 卅三番 | 玉崎 | 駒形神社 | 江刺市玉里 |
| 番外 | 奈良山 | 十一面観音 | 北上市相去町 |

# 編集を終えて

――よく「みほとけ」とか「ほとけさま」といっているが、お釈迦さまの生まれた天竺（ネパール地方）の言葉の「仏陀」を略して「仏」といい、「仏」を和語（日本語）に訓じ読みなおして「ほとけ」といったのである。では仏陀とは、どういう意味かといえば「覚りを開いた人」というのである。覚りとは「迷い、悩み」の反対語で、人間の常の生活は迷っていて迷いと気がつかず、悩み苦しんでいる。それを乗り越えると、そこに心の平和安楽がある。乗り越えることを聞くといった。――

長文の引用となりましたが、この文章は真言宗智山派の大僧正司東真雄師が著わした『仏心を学ぶ』の中の一節です。今は亡い司東先生は、歴史家でもあり、生前に私は先生から数多くのことを学びました。

この冊子を編集するに当たって、私は生活の中で気軽に「仏」を口にするけれども、一体、仏様とは何か。私のように仏教界に縁のない者にとって、その意味することは殆ど判かりませんでした。それを知らずに、編集することはできません。私は必死に仏書と首っ引きしましたが、難解でとても理解にはほど遠いものでした。そのとき先生の平易な記述に出会ったのです。

北上・花巻地方には、約百ヵ寺の寺院があって、そのすべてを取材しまとめることができました。取材に当たっては、住職様には多大のご協力を頂き、改めて御礼申し上げます。

この取材によって、寺院は物心両面で人間の心の拠り所として大切であるばかりでなく、万物を育てそれを後世に伝えていく大切な役割を担っていることも知りました。また、寺院は地域における歴史の貴重な証言者であることも知ったわけです。

そのように大切に守っていかねばならない寺院なのに、火災によって被災した寺院が予想以上に多かったことには驚きました。従って口伝での伝承は残っているものの、文書類を失った寺院が多かったのです。

そのような状況の中で『寺院の歴史』を集約しました。聞き取り調査に加えて、多くの資料を参考に記述しましたが、疑問が残る記述があったことも事実です。その課題の解決は、後世の研究に委ねたいと思います。

また、寺院に関わる『伝説・文芸』『芸能・人材』『工本・名木』については、聞き取りを主体にまとめました。

『有形文化財』は、公の資料に基づいて記述しました。

この冊子の記述および編集のすべては、㈱テレビ岩手の指導のもとに、㈱みちのく民芸企画代表取締役加藤俊夫が行いました。

私にとって今回の調査と編集における最大の収穫は、仏教は南から次第に北へ伝播していった事実を知りえたことであり、そして何よりも、「仏とは何か」、司東先生の教えの意味することが、かすかながらも理解することができたことです。

（加藤俊夫）

# 参考図書


花巻の文化を高めた人　佐藤昭孝
第二花巻の文化を高めた人　佐藤昭孝
花巻の二画人　花巻市教育委員会
花巻の文人たち　新渡戸記念館
八重樫豊澤　新渡戸記念館
小野寺周徳　新渡戸記念館
聞書民探訪　聞書民八百年記念実行委員会
清水寺研究・1・2集　清水寺研究会
花巻の歴史（上）　及川雅滋
廃仏毀釈を免れた仏たち　柳原一廉
花巻市文化財報告書No.22　花巻市教育委員会
花巻市文化財報告書No.25　花巻市教育委員会
矢沢地区文化財報告書　花巻市教育委員会
ふるさとミュージアム　花巻市教育委員会
機一番　花巻市教育研究所
こぼれ話宮沢賢治　白藤慈秀
写真帖きたかみの今昔　みちのく民芸企画
写真帖きたかみの風土　みちのく民芸企画
ダ・ダ・スコNo.49・53・57　みちのく民芸企画
江戸相撲をたづねて　北上観光協会
漂泊の俳人・草川昌三　柴田善三郎
阿部正五郎　阿部正五郎
きたかみの古仏　北上市立博物館
国見山薬師寺　北上市立博物館
北上の修験道資料展図録　北上市立博物館
甦る一軸　北上川舟運遺跡復元期成同盟会
マタギ狩猟具　司東真雄編
岩手県時宗略史　司東真雄
仏心を学ぶ　司東真雄
和賀の修験・・・　和賀町教育委員会
東和町史（上）　東和町
東和町の文化財　東和町教育委員会
光勝寺文化財報告書　石鳥谷町教育委員会
金明寺と奥寺堰　金明寺
宝鏡山桂林寺誌　桂林寺
月浦山凌雲寺　凌雲寺
天蔵山宗清寺史　宗清寺
金峰山萬蔵寺千年誌　伊藤誠・
師老の森物語　亀山英・
決音山昌猷寺開創六百年誌　昌猷寺
・点山長泉寺物語　吉澤寛
僧伽　真言宗智山派岩手教区
岩手百科事典　岩手放送
岩手県史（二）（五）　岩手県
南部叢書（第二冊）　南部叢書刊行会
日本仏教十二宗ここが違う　大法輪閣
仏様の百科調べ　醍醐嘉瑞
観世音　小原藤雄
江刺二十三観音へのいざない　江刺市観光協会

# いわてのお寺さん

## [北上・花巻とその周辺]

平成15年3月21日発行

企　画／株式会社　テレビ岩手開発センター

編　集／有限会社　みちのく民芸企画

〒024-0051 岩手県北上市相去町旧館沢43-6

TEL.(0197) 67－1131㈹

印　刷／株式会社　熊谷印刷

発行所／株式会社　テレビ岩手

〒020-8650 盛岡市内丸2番10号

TEL.(019) 624-1166

定価（本体1,714円＋税）